ソーシャルワーカーの "声" プロジェクト 平成 25 年度事業報告書

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

平成 26 年 3 月 31 日

福祉系大学経営者協議会

はじめに



福祉系大学経営者協議会 会 長 島 田 燁 子

現在、ソーシャルワーカー(社会福祉専門職)の社会的重要性は増大の一途でありますが、 その社会的な認知度は十分ではなく、育成にかかわるものとして強い危機感をもっております。 そこで、2009 年 6 月に社会福祉系大学の経営に携わる責任者が集まり、社会的地位および認知 度の向上とともに、教育内容の充実をはかるべく当協議会を発足させて、以来、活発な活動を 行っております。

2011年の東日本大震災に際しては、各大学は一般ボランティアとして学生と教職員を派遣しました。同時に協議会として独自の視点に立った支援のあり方を模索いたしました。協議会の中に「復興支援委員会」を設置し、「支援」のあり方について、関西福祉科学大学の遠藤洋二准教授を委員長にお願いをしました。委員会で活動内容を検討し、理事会、総会の賛同を得て「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」「学生の"語り部"プロジェクト」が考案されました。東北の災害時にソーシャルワーカーがどのように活躍されたのかを直接ソーシャルワーカーにスポットを当て、インタビューを行い、記録に残し、また発表をしていくというプロジェクトです。協議会に加盟する大学の教員の協力も得て、学生と指導教員がチームを組み、被災地で活躍するソーシャルワーカーの活動内容をインタビューするところから始まりました。

現地のソーシャルワーカーのご紹介には、日本社会福祉士会の東北3県の事務局に大変お世話になりました。とりわけ最初の地、宮城県での社会福祉士会事務局長の高橋達男氏のご尽力に心からの御礼を申し上げます。各地でのプロジェクトは報告にある通り、それぞれのご支援があってのことで、感謝でいっぱいです。派遣も第5次となりました。派遣費用の捻出に苦労いたしてまいりましたが、今年度は独立行政法人福祉医療機構の社会福祉振興助成事業の助成をいただき、充実した活動ができ、ソーシャルワーカーの献身的な活動を認知し、3回の報告会を開催し、記録を残すことができましたことは感謝に堪えません。

シンポジウムは2月に東京と名古屋で行われました。報告者の学生たちからは「ソーシャルワーカーが災害時に、人が人としての尊厳が成り立つように必死に寄り添い、援助技術を発揮して生活を支えた姿に"かっこいい"と感じ、ソーシャルワークへの決意を深めた」ことが語られ、現地のソーシャルワーカーからは「自分たちの仕事を再認識でき、感謝している」と「ソーシャルワーカー」の存在とあり方を再認識することができたことが語られました。また、「忘れないでほしい」と「伝えていってほしい」という被災地からの願いが届けられました。当協議会としては、この声をしっかり受け止めて、来年度も復興支援を続けてまいります。

末筆ながら、インタビューに応じていただいたソーシャルワーカーの皆様、福島県の社会福祉会の皆様、ご講義をいただいた先生方、ご引率いただいた指導者の皆様、ご協力いただいた全ての関係者の皆様に紙面をお借りして心より厚く御礼を申し上げます。また、独立行政法人福祉医療機構(WAM)の助成金を得て幅広い活動ができましたことに感謝申し上げます。

もくじ

はじめに	福祉系大学経営者協	協議会 会長	島田	燁 子	• •	• • 3
1 - 1. プロジェクトの	erich der eine der der eine d E 義	HARAKAKAKAKAKAKAKA	(804 + 804 + 804 + 804 + 804 + 804 + 804 +	39 1 30 1 30 1 30 1 30 1 30 1 30 1 30 1	• •	• • 8
1ー2. プロジェクトの	概要				• •	••11
2-1. 災害時のソーシ	ャルワークの役割	Haid haid haid haid haid haid haid haid h	1861 1862 1864 1862 1863 1864 1863 1	(dii diik diik diik diik diik diik	• •	• • 20
		文京学院大学	鳥羽	美 香		
2-2. 災害時における			NA 11	V	• •	• • 22
		双徳大学	米村	美 余		
3-1. ソーシャルワー:	カーへの後方支援(ぽ	<i>『</i> 義・効果・貢	献)		• •	• • 26
	E	日本福祉大学	原 田	正樹		
3-2. ソーシャルワー:					• •	• • 28
	B	本社会事業大学	菱沼	幹男		
4-1. 学生の教育効果	www.www.www.www.www 被災地においてソーシ ^ュ	ャルワーカーの	"声"を聴	《意味	• •	• • 32
	Ħ	中部学院大学	大 藪	元 康		
4-2. ソーシャルワー:	カーの"声"プロジュ	こクトにおける	教育効果	<u>Į</u>	• •	• • 34
]西福祉科学大学	家 髙	将 明		
5-1-1. シンポジウ.	ム報告(東京)	U.H.S.L.S.L.S.L.S.L.S.L.S.L.S.L.S.L.S.L.S	1 mil 1	160 160 160 160 160 160 160 160	1871 1871 1871 1871 1871 1	• • 39
5-1-2. シンポジウ.	ム報告(東京)逐語釒	录				• • 41
5 - 2 - 1. シンポジウ.	ム報告(名古屋)					• • 69
5-2-2. シンポジウ.		生) 中部学院大学	石 川	智也	• •	• • 71
5-2-3. シンポジウ.					• •	• • 72
6-1. 意見交換会報告	(岩手)	H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.H.	1 168 1 168 1 168 1 168 1 168 1 168 1	160 160 160 160 160 160 160 160 1		• • 114
6-2. 意見交換会報告	(宮城)					• • 124
6-3. 意見交換会報告	(福島)					• • 134

7-1. 社会福祉士会によるプロジェク	7ト評価(岩手)					• • • 144
	岩手県社会福祉士会	菅	原	隆	浩	
7-2. 社会福祉士会によるプロジェク	フト評価(宮城)					• • • 146
	宮城県社会福祉士会	高	橋	達	男	
7-3. 社会福祉士会によるプロジェク	フト評価(福島)					• • • 148
	福島県社会福祉士会	島	野	光	正	
				!/ <i>##!/#</i> #!/##//		8 188 188 188 188 188 188 188 188 188 188 188 188 188 188 188 188 188 188
8 一 1. 外部評価委員報告						• • • • 152
	外部評価委員	上里	予谷	加作	弋子	
8 - 2. 外部評価委員報告						• • • • 154
	外部評価委員	池	埜		聡	
9 - 1. 卒業生レポート				!/##/##!/##/#		• • • • 158
5 1. T ************************************	文京学院大学	松	木	歩	未	100
9 - 2. 卒業生レポート)(X(1)	124	71.	9	//	• • • • 160
	文京学院大学	望	月	麻	結	100
9-3. 卒業生レポート	24,4,4,1,00,4,1		/ *	711	71 🖽	• • • • 161
	関西福祉科学大学	畑	中	美	里	
	p4		•			
************************************	コジェクト 第 4 次泳	/////////////////////////////////////	報令	*/#*/#*/#*/ - - - 集		• • • • 164
	2000		110	1		101
11. 参加メンバー一覧				!/ <i>##!/##!/#</i> #!/		• • • • 220
・・・ シルインハ ・ 見						220

プロジェクトの意義と概要

1-1. プロジェクトの意義

本プロジェクトの目的は、主体的な学生の取り組みを教員が支援しながら、災害時における ソーシャルワーカーの支援活動を学生の「感性」と「気づき」を通して浮き彫りにして、それ を広く社会に発信しようとするものである。

福祉系大学経営者協議会では、東日本大震災で災害支援活動に従事した社会福祉士を中心としたソーシャルワーカーにインタビューを行い、その中から「臨床の知」を発見し、大規模災害におけるソーシャルワーカーの機能や役割を整理し、報告会、出版物などを通じて広めていく活動を続けている。この活動を通じて、学生たちは、困難な状況にありながら専門職としての誇りを持って支援をしているソーシャルワーカーに心を動かされ、災害支援におけるソーシャルワーカーの必要性を的確に伝えることの重要性を強く意識した。

災害支援において、医療従事者やレスキューがメディアに登場する機会は多いが、ソーシャルワーカーの姿をメディアを通して知ることはほとんどない。メディアに登場することが目的ではないが、インタビューの中でも明らかになったことは、避難所や仮設住宅においても膨大な要援護者が存在しながら、ソーシャルワーカーの存在が認知されていないため、要援護者にアクセスするために多くの時間と労力が必要であったことを考えれば、「災害支援におけるソーシャルワーカーの機能と役割」を明らかにし、可視化した上で、市民の認知度を高めていくことは、再び起こるであろう大災害の備えとしても意義深いものであろう。

また、関西福祉科学大学では、既に、数 10 回にわたる「語り部」活動を大学・地方自治体・ 高等学校・専門職の研究会・市民講座などで行い、プロジェクトで得た成果をできるだけ多く の人々に伝えていく活動も行っている。

(詳しくは、本プロジェクトのHP http://www.swvoice-fuksi-kagk-u.com/ を参照)

「学生"語り部"プロジェクト」参加者の感想より

【高校生】

1年が経った今でも、まだまだ苦しんでいる人がたくさんいて、その中でソーシャルワーカーという人たちが被災者の方の為にできることをたくさんやっていてすごいな、と思った。私にも何か出来ることがあるはすだから、考えて、やるべきだなと思った。

【 福祉行政職 】

皆さんのお話を聞いて、率直にいいなあと思いました。私は東日本大震災が起こった時、何もできなかったし、ましてや被災地のソーシャルワーカーに話を聞きに行こうなんて思いもしませんでした。災害時ソーシャルワーカーは何をしているんだろうと疑問を持ち、それを実際に確かめるために現地に行くという行動力!すごいです。私も学生の時、福祉の勉強をしていたので、ソーシャルワーカーとは何か、ソーシャルワーカーの価値、専門性などよく考えていました。でも、社会人になると、そういうことを考える余裕がなくなり、自分が学生のころに思い描いていたようにケースワークできてないなーと悩むばかりです。きっと被災地のソーシャルワーカーさんたちも自分たちの価値とか専門性などあまり考えたことなかったのではないかなと思います。それを学生の皆さんにインタビューされることで考えるきっかけになったのではないでしょうか?私自身も皆さんのお話を聞いて、福祉職としてのあり方、存在意義などを考えていくきっかけになりました。ありがとうございます。皆さんの経験、そして、それを伝えていこうという取り組み、本当に素晴らしいです。これからもぜひ続けていってください。

本プロジェクトは学術的な調査研究や学生の教育を目的としたものではないが、両者においても一定の意義があるものであると考えている。

ひとつは、「災害ソーシャルワーク」の体系化である。

関西福祉科学大学の学生は、災害支援におけるソーシャルワークの際立った特徴を以下の4点に集約した。

①初期的なアセスメントと気づき

ソーシャルワーカーは現場(被災地)に出向き、「何が必要か」、「何ができるか」をイメージしながら 調査を行い、限られた情報に基づき短時間で初期的なアセスメントを行う。その上で、要援護者のニーズ に適したサービス情報を提供することで、一人ひとりが主体的に生活を築いていくことが出来る。そのた めには、平時から地域の社会資源について把握しておき、ネットワークを作っておくことが求められる。 ②介入時に"道具"を活用

ソーシャルワーカーの認知が必ずしも十分でないで現状において介入時の「きっかけ作りとして、情報の提供、物資の補給などに代表されるように何らかの"道具"を使っている。そのプロセスを通じて対象者のリスクを把握し援助の要否を判断すると同時に、ソーシャルワーカーの身元を明確にすることで相手に安心感を与え、これからの支援を円滑に進められるような関係を築くようアプローチしている。

③アウトリーチによってニーズを見つける

対象者が定まらない災害時には、ソーシャルワーカーが積極的に被災地に出向き潜在的ニーズを探し出している。また、ニーズを表出できない、あるいは自らのニーズを認識していない場合、ソーシャルワーカーが積極的アプローチすることでニーズを意識化することができる。

④支援対象と資源とつなぐ

単にニーズとサービスをリンクすることにとどまらず、被災者の置かれている状況と生活上の困難を理解した上で、被災者のその生活を予測し、必要な支援を展開している。

本プロジェクトに参加した学生や教員は、それぞれの立場で、「災害ソーシャルワークとは何か」を模索することになった。その分析結果が客観的エビデンスに基づいて導き出されたものではなく、それを持って、一般的、普遍的な災害ソーシャルワークと言えるものではないが、今後、学会あるいは研究者が災害ソーシャルワークを検証するにあたって、東日本大震災において、苦しみながらも支援活動を実施してきたソーシャルワーカーの「生の姿」を提供する意味はあるものと考えている。

次に、教育的効果である。

昨今、「学修に対して消極的な学生が目立つ」といった論調を耳にすることが多いが、本プロジェクトに参加した学生は、熱心かつ真摯な態度で、事前、事後の学修に取り組んでいた。彼らは、大震災の被害を肌で感じ、そこで支援活動を実施したソーシャルワーカーの生の声を聴き取った上で、グループ討議、教員によるスーパービジョン等を通して振り返りを行うことにより、高いモティベーションを維持しながら活動を継続し、結果、災害支援におけるソーシャルワーカーの価値を体感するとともに、将来のキャリアとしてソーシャルワークを選択しようとしており、アクティブラーニングの一方法としても意義あるものであると考えている。

参加学生の感想より

<災害に向き合う>

今回の活動は自分にとって価値観が変わる出来事だった。これから福祉を勉強するものとして、一人の人間としてどう震災と向き合っていくのかを考えたい。

<私たちに出来ること>

私は被災地で活動したソーシャルワーカーの声を聴き、震災の中で何が起こったのかという事実と同時にどのような想いで支援を行ったのか伝えていくことが、学生の私に出来る被災地支援だと考えている。

<ソーシャルワーカーの"想い">

「平時も災害時もワーカーの姿がテレビ等で見えない」と不思議に感じた。しかし現地では、よりその人ら しい生活へとワーカー自身も喜びや困難を感じながらも向き合っている姿を伺った。現場の方とともにソー シャルワーカーの存在、役割、おもいを伝え、広めていきたい。

最後に、デブリーフィング効果があげられる。

インタビューの協力者である現地ソーシャルワーカーは、自らの体験の言語化あるいは可視 化することに意味を見い出し、積極的に関与する姿勢を示すとともに、言語化が「震災以降の 実践活動の振り返り」、「心理的負担の軽減」に効果的である可能性も示唆された。

これは、学生のアプローチそのものがデブリーフィング効果を生み出すわけではなく、ソーシャルワーカーと学生が共有の時間を持つことで、ソーシャルワーカーが自らをディブリーフしたとも考えられる。

宮城県、福島県、岩手県社会福祉士会との意見交換会アンケートより

- ・当事者として、あるいは支援が進行中であることも含め、自分自身の振り返りやまとめもがまだまだできない状況にありましたので、本日皆様のご意見をお聞きしたり、学生さんの発表をお聞きすることは大変良い時間でした。気付きをたくさんいただきました。ありがとうございました。
- ・インタビューを受ける時、最初は面倒だと思いました。でも実際、ピュアな学生さんの姿に触れ、涙が出るぐらい嬉しかったです。自分自身の震災後の活動を振り返る貴重な体験だったと思います。
- ・ソーシャルワーカーが"かっこいい"と思ってもらえて素直にうれしく思います。今回の震災で何があったのかを全国の仲間たちが見て聞いて、何を考えてくれるかが楽しみでもあります。学生の皆さんが考えて行っていくということの意味の大きさ 私も受け止めて"かっこいい"と言ってもらえるようなSWを目指していきたいと思いました。皆さんと話ができた、皆さんから元気をもらえた仲間がここにいることも忘れないでくださいね。

東日本大震災以降、被災地の大学を中心に、全国の大学生がボランティア活動に従事し、その取り組みは今も続いている。本プロジェクトは、被災者に直接触れ合うことを敢えてせず、 支援者であるソーシャルワーカーに焦点を当てたものである。

このプロジェクトの意義につては、外部の評価委員に委ねているが、このような間接支援、 後方支援の方法もあって良いのではないだろうか。

1-2. プロジェクトの概要

1. 福祉系大学経営者協議会「東日本大震災復興支援プロジェクト」について

福祉系大学経営者協議会は、福祉系大学の経営に携わる責任者が一堂に会し、社会福祉専門職の社会的地位の向上、社会福祉についての社会的認知の向上、日本の社会を支える社会福祉人材育成教育の発展等を推進することを目的として、平成21年6月に設立され、全国の福祉教育を実施する20大学が加盟している。

福祉系大学経営者協議会においても、東日本大震災に対する取り組みを行うべく、「復興支援委員会」を立ち上げ、「復興支援に関して何ができるか」を協議することとした。

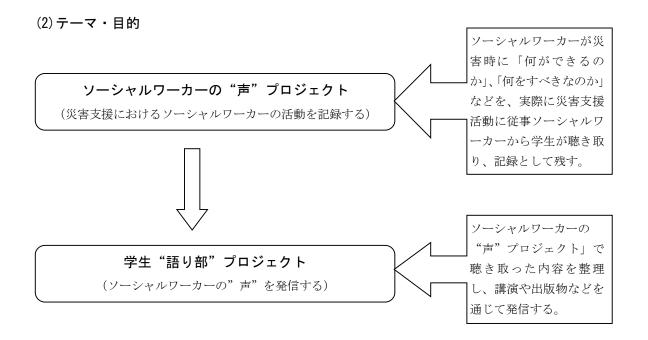
(1) コンセプト(基本的な考え方)

- ①将来の社会福祉を担う「人材育成」という福祉系大学のミッション
- ②福祉系大学が持つ「社会福祉に関する専門知識」
- ③「全国各地の大学」が参加する全国的発信力

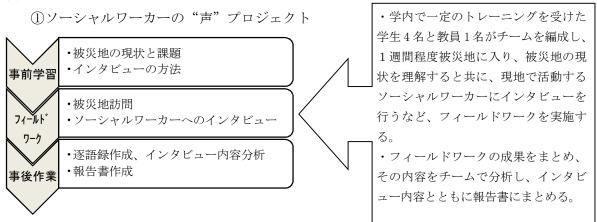
等、福祉系大学経営者協議会の設立理念、団体の特徴を生かしたプロジェクトとする。

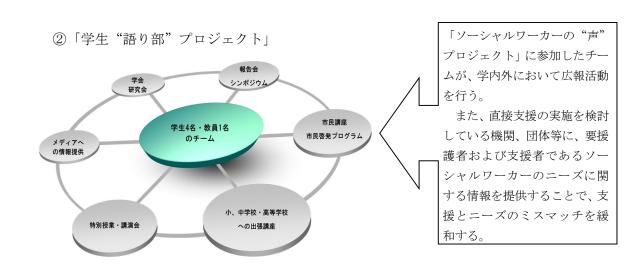


災害支援における社会福祉専門職 (ソーシャルワーカー) に焦点をあてたプロジェクト



(3) プログラム





(4) 本プロジェクトを起点とした展開

本プロジェクトはソーシャルワーカーの声を記録し、発信することを目的としているが、 参加した学生や教員が中心となり、以下のような展開が考えられる。

①要保護者への直接支援

ソーシャルワーカーの視点から被災者の生活(生活再建)課題を明らかにし、「学生 "語り部"プロジェクト」により広く地域社会に伝えることで、学生、教員など大学関係 者をはじめ、外部の機関、団体による直接支援に結びつける。

②ソーシャルワーカーへの後方支援

ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」での聴き取り内容を分析し、災害支援活動における問題点や課題を整理し、ソーシャルワーカーへの後方支援策を模索する。

③次代のソーシャルワーカーの育成

ソーシャルワーカーとして災害支援を行う際に必要な知識や技術について理解し、講座 やワークショップを通じて、大規模災害・事故等で機能するソーシャルワーカーを育成す る。

2. これまでの取り組み

(1) ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト

平成24年3月に実施したパイロット事業(第1次)派遣を皮切りに、学生の春休み・ 夏休みを利用して、5回にわたりフィールドワークを行った。(下図参照)

派遣区分	期間	活動場所	参加大学	学生	教職員	インタ ビュー数
第1次	0010 /5 0 15 10 15 17 15		文京学院大学	4	2	2
第1次	2012年3月12日~17日	宮城県	関西福祉科学大学	8	3	6
	2012年8月21日~25日	岩手県	淑徳大学	4	1	2
			日本社会事業大学	4	3	2
第2次			中部学院大学	4	1	2
第 2 负			関西福祉科学大学	4	3	2
	2012年9月3日~7日	宮城県	文京学院大学	4	3	2
	2012 平 9 月 3 日 1 7 日	呂城宗	日本福祉大学	4	3	2
	2013年3月3日~7日	宮城県	淑徳大学	4	2	2
第3次			中部学院大学	4	1	2
			関西福祉科学大学	4	2	2
	2013年8月20日~24日	福島県	淑徳大学	4	2	2
第4次			文京学院大学	3	3	2
			関西福祉科学大学	4	3	2
	第 5 次 2014年3月4日~8日	岩手県	日本福祉大学	4	1	2
			関西福祉科学大学	4	4	2
第5次		福島県	中部学院大学	4	1	2
			淑徳大学	4	1	2
			日本社会事業大学	4	1	2
	合計				40	44

(2)学生"語り部"プロジェクト

"語り部"プロジェクトは、各大学がそれぞれの地域において実施している。

以下は、関西福祉科学大学実施分の概要と参加した学生の感想である。

①2013年2月8日(金)「大阪府社会福祉士会」

堺市総合福祉会館において、大阪府社会福祉士会会員 30 名に災害ソーシャルワークの役割 や機能について発表しました。会員の中には、実際に被災地の社会福祉士の後方支援を行った 方も含まれており、質疑応答が活発に行われました。

②2013年2月14日(木)/18日(月)「大阪府立西成高等学校」

2012 年 8 月 21 日 (火) \sim 25 日 (土)、岩手県にフィールドワークに出かけた第二次派遣メンバーが初めて報告会を行いました。高等学校教諭との事前打ち合わせを行い、特に被災地の状況を詳しく発表したり、フィールドワークで行ったインタビュー

の内容や社会福祉士の機能について高校生たちに熱く語りかけました。

③2013年6月4日(火)「大阪市立大学」

2013年3月3日(日)~7日(木)、宮城県に第三次派遣メンバーがフィールドワークに出かけましたが、そのメンバーが初めて報告会を行いました。対象は、社会福祉を専攻していない大阪市立大学の学生20名だったので、まず、ソーシャルワーカーの基本的な説明が必要でした。"声"プロジェクトの紹介と活動内容についても話しましたが、ソーシャルワーカー業務が平時と災害時でどう違うのか、発表する側もしっかりと議論し説明ができるようにしないといけないと思いました。

④2013年6月25日(火)「龍谷大学」

龍谷大学で社会福祉を専攻している学生 12 名に発表を行いました。以前からソーシャルワーカーのことや被災地の様子を学んでいたため、比較的発表はしやすかったものの、前回の大阪市立大学で宿題をもらっていた「平時と災害時のソーシャルワーカーは何が違うのか」についてここでも質問が挙げられたため、説明の必要性を迫られました。

⑤ 2013 年 7 月 16 日 (火)「柏原市社会福祉協議会・健康福祉センター」

柏原市市役所、柏原市社会福祉協議会の職員 12 名に発表しました。DVD を真剣に見てもらえ、「もっとソーシャルワーカーに支援を受けた被災者の声も伝えてほしい」という要望がだされたため、支援された被災者の声も集めることも必要かもしれないと思いました。今後は、柏原市と連携しながら柏原市民向けの講座などでもこのような"語り部"の活動をしていきたいと感じました。

⑥2013年9月2日(月)「大阪府立みどり清朋高等学校」

社会福祉士・理学療法士・看護師・医療事務などを目指す高校生に対して、被災地の状況・ ソーシャルワーカーの仕事・ソーシャルワーカーの声プロジェクトの内容を説明し、「もしも 災害が起きたら、どんなことに困るか」についてディスカッションを行い、発表してもらいま した。生徒たちは被災状況について DVD を真剣に見て考えたり、グループワークでは、自分の 生活をもとに、災害が起きて困ることを積極的に挙げていました。

⑦2013年9月21日(土)「日本社会福祉学会(北星学園大学)」

社会福祉学会参加者に対して、プロジェクトの概要とプロジェクトを通して学んだことについて話をしました。その中で、「被災者支援におけるソーシャルワーカーの専門性」、「支援者の後方支援の重要性」、「ソーシャルワーカーという職業の魅力」を中心に自分たちの思いを自分たちの言葉で伝えるということを意識的に行うようにしました。

⑧ 2013 年 9 月 26 日 (木)「大阪府立金剛高等学校」

金剛高等学校は、秋の修学旅行で岩手県大槌町を訪問することになっており、その

2年生に対しての事前学習という位置づけとして語り部を行いました。「東日本大震 災の救援活動を知る中で、高校生の自分たちだからできることを考えてもらう」とい うテーマで、できるだけ具体的なエピソードに沿って、高校生にイメージしてもらい やすいように意識をして話をしました。

⑨2013年10月23日(水)「大阪府立伯太高等学校」

選択科目で福祉を学ぶ高校生を対象に語り部活動を行いました。まず、DVD を通じて災害直後の津波の様子を知ってもらいながら、その中でソーシャルワーカーの働きについて伝えました。また、高校生に「災害」という特別な状況だけではなく、生活困難は自分たちにも起こりうる事態であることを考えられるよう意識して進めました。しかし、ソーシャルワーカーについてわかりやすく伝えることは難しく、自分の言葉でソーシャルワーカーとは何かを伝えられていない事に気づかされた。

⑩2013年10月26日(土)「大学コンソーシアム大阪」

福祉事務所や児童相談所などでソーシャルワーカーとして働いている本学卒業生の勉強会で語り部を行いました。被災地でのソーシャルワーカーの活動を伝えると、「災害時に備えて、今できることについて何か被災地のワーカーから聞いたことがあれば教えてほしい」という意見を受けました。卒業生や語り部の学生も、「自分なら何ができるかを考え、行動することが大事だ」と学びました。

①2013年10月28日(月)/11月1日(金)「大阪府立八尾北高等学校」

八尾北高校には福祉コースがあるため、ソーシャルワーカーの姿がより具体的に感じることが出来るように配慮しました。まず、事例を挙げてソーシャルワーカーの紹介を行い、DVD を使って被災地の様子や被災時の支援について語るという形を取りました。八尾北高校の教諭よりもっと被災地に行って感じたことを聞かせてほしいという要望があり、自分たちが感じたことを伝えられるように意識をして、語り部を行いました。

⑩2013年11月9日(土)/10日(日)「美葉祭」(関西福祉科学大学・学園祭)

関西福祉科学大学の学祭で、今回は模造紙とDVDという形で一般の方や学生に発表しました。 津波のDVDには何組かの親子連れが関心を持ってくださり、家族で震災について考える場の提供が出来て良かったと思います。模造紙発表では、一般の方から被災地の被災前後の両方の写真を展示するとなお良いのではないかという意見が挙がったり、ソーシャルワーカーについて理解が得にくかったりしたので、発表に関してはまだまだ改善すべき点があるのかもしれないと思いました。また、同時に東北の駄菓子やオクトパスくんの販売も行いました。

[3]2013年12月16日(月)「大阪市立大学」

初めにDVDを見てもらい、学生さんの関心を集めることができました。対象がソーシャルワークを学んでいる3回生の学生だったので真剣に聞いてもらえました。フィールドワークや事例の内容でパワーポイントに入れていない説明やエピソードを話している時はメモを取って

いる人が多く、災害ソーシャルワークについて興味を持ってもらえたと思います。

3. 意見交換会(報告会)およびシンポジウム

これまでの成果を報告することを目的に、東北3県の社会福祉士会との意見交換会を実施するとともに、東京、大阪において一般対象のシンポジウムを開催した。(詳細は、各報告を参照)

<意見交換会>

2013年12月1日 岩手県社会福祉士会 (淑徳大学・関西福祉科学大学が参加)

2013年12月8日 福島県社会福祉士会(文京学院大学・関西福祉科学大学が参加)

2013年12月28日宮城県社会福祉士会(中部学院大学・関西福祉科学大学が参加)

<シンポジウム>

2014年2月8日 東京地区シンポジウム(文京学院大学本郷キャンパス)

2014年2月17日 名古屋地区シンポジウム (日本福祉大学名古屋キャンパス)

4. ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト 第5次派遣

本報告書には報告できていないが、以下の要領で第5次派遣を実施した。

<期間>

事前学習 : 平成 26 年 1 月~2 月

フィールドワーク: 平成26年3月4日(火)~3月8日(土)

<参加校(各大学1チーム)>

岩手 日本福祉大学·関西福祉科学大学

福島 淑徳大学・日本社会事業大学・中部学院大学

<プログラム>

- (1) 事前学習(各校が独自に実施)
- (2) フィールドワーク

日 程		内 容	実施単位	
	14:00	現地集合(宿舎) ※1	各チーム	
14:00~15:00 3月4日 (火) 16:00~18:00		オリエンテーション	合同	
		講義:岩手県、福島県社会福祉士会 「社会福祉士会の取り組み」	合同	
	18:00~20:00 夕食、休憩等			
	20:00~22:00	交流会	合同	
	~08:00	朝食等	各チーム	
0 8 5 8	08:00~18:00	激甚被災地訪問	合同	
3月5日 (水)	18:00	宿舎 帰着		
	18:00~20:00	夕食、休憩等	各チーム	
	20:00~22:00	ミーティング (グループ討議・インタビュー方法の確認)	合同	

3月6日	~08:00	朝食等	
	午前・午後	被害状況視察・インタビュー ※2	夕工)
	18:00	宿舎 帰着	各チーム
(木)	18:00~20:00	夕食、休憩等	
	20:00~22:00	ミーティング	合同
	~08:00	朝食等	
3月7日	午前・午後	被害状況視察・インタビュー	各チーム
(金)	18:00 宿坐 侵差		
(18:00~20:00	夕食、休憩等	
	20:00~22:00	ミーティング・反省会	合同
2 月 9 日	~09:00	朝食等	各チーム
3月8日 (土)	09:00~12:00	グループ討議・事後作業の確認	合同
(1.)	12:00	解散	디베

- ※1 集合時間は各チームの経路によって調整する
- ※2 インタビューに関して
 - ・インタビューは各チームあたり2名のソーシャルワーカーに対して、インタビューガイドに沿って実施する。
 - ・学生2名がインタビューを行い、残り2名がインタビュー内容を記録(録音および筆記)する。
 - ・インタビュー時間は、趣旨説明・同意の確認を含め、2時間程度を想定している。

<拠点>

【岩手】

3/4~5 ホテルブライトイン盛岡

岩手県盛岡市中ノ橋通 1-1-21 TEL019-652-7300

3/5~8休暇村陸中宮古

岩手県宮古市崎鍬ヶ崎 18-25-3 TEL0193-62-9911

【福島】

磐梯熱海温泉 清稜山倶楽部

福島県郡山市熱海町熱海 5-18 TEL024-984-2811

災害時におけるソーシャルワークの役割

2-1. 災害時のソーシャルワークの役割

文京学院大学 鳥羽 美香

今回「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト in 福島」に参加させて頂いた。今回は プロジェクト全体では第4次派遣であるが、私自身は昨年の第2次派遣の宮城県に続き2回目 の参加となった。

東日本大震災から2年半が経っているが今回の福島では、津波被害に加え原発事故により、 まだ先の見えない生活を強いられている現地の被災者の方々の様子を少しでも知ることが出 来、貴重な経験であった。

今回文京学院大学がインタビューさせて頂いたのは、楢葉ときわ苑の施設長渡辺幸雄氏と、 福島県社会福祉士会事務局和田由紀子氏であった。

インタビューに同席させて頂いた中で印象に残ったエピソードを紹介しながら、災害時におけるソーシャルワークの役割について若干の考察を試みたい。

楢葉ときわ苑では、2011年3月12日に双葉郡楢葉町から避難指示が出て、88名のお年寄りと37名の職員がいわき市内の小学校へ避難した時から、床に段ボールと毛布を敷き、足の踏み場もない状況の中でお年寄りの世話をしていたという。職員も被災者・被害者であり、また、家族の安否もわからない状況の中、お年寄りのお世話をしていた。支給される食糧も限られた極限状態の中、「何もない中で、専門職といっても力を発揮出来ない」と渡辺施設長は感じたという。

介護職、ソーシャルワーカー、看護職、そういった職種を超えて助け合いながらお年寄りを守っていったという。渡辺施設長は、極限状態の中では、専門職の力というよりは人間力、応用力というものが試された、と語られた。避難所生活をしながら常に先々のことを考え、次の行動に移していった。2次避難先の確保、交渉。その時には、お年寄りは77名、職員に関しては一緒に行く職員を募り、他の職員は自宅待機をしてもらったという。その後いわき市内の他の老健施設に間借りをして一部事業再開。常に利用者の利益優先、アドボカシーを心掛け、「声なき声を代弁」していったと振り返られた。

社会福祉施設等災害復旧費補助金の対象となり、2013年3月に仮設老健としていわき市内に 楢葉ときわ苑を再開することが出来た。

渡辺施設長がおっしゃっていたのは、「ただ黙って行政の施策を待っていて復興できるのだろうか?」「一人一人が社会資源となりソーシャルアクションを展開していくことが地域の復興につながる」という言葉であり、これはまさにソーシャルワークであると思う。

いわき市内の施設はあくまで「仮設」であり、双葉郡に戻りたいというお年寄りの希望の灯を消してはならない、また双葉郡の住民のストレングスを信じてそれを支援すると語られた。 利用者の個別化、アドボカシー、ソーシャルアクション、ストレングス等、これらはソーシャルワーク実践の真髄であり、災害時に限定されるものではないが、極限状態で実践されたことに大きな意味があると思う。

もう一人のインタビューは、福島県社会福祉士会の事務局の和田さんであった。

和田さんは、事務局として、施設や事業所で物資不足の中、必要なものを必要な場所へ届ける調整を中心に活動されていた。

また、県の社会福祉士会と介護支援専門員協会の会長が中心となって県内の職能団体が集ま

り、福島県相談支援専門職チームを4月の初旬に立ち上げ、4月半ばには県の委託が決まって、 全県内に活動が広がっていった。

和田さんをはじめ支援者が避難所や事業所を回って情報を集めそれを支援に活かす。ネットワークが作られていった。福島県社会福祉士会はそのコーディネート役であった。

和田さんは「それぞれバラバラに動いていると、ひとりの人に『何か手伝うことがありますか?』と1日に8回も同じ質問を別々の支援者がすることになる。それでは利用者支援にはならない」と語る。和田さんの活動は「一言でいえば交通整理をしていた」と振り返られた。これは施設ではない「事務局」だから出来たことである、と語られた。

また、日頃から培った専門職を始めとする人間関係が役にたったという。ビッグパレットふくしまにも和田さんの案内で行くことが出来た。ここは福島県内最大の避難所だった場所で、一時期は2500名が避難していたという。そこで相談支援チームはまず避難所のどこでどのようなニーズが発生しているのかを把握し、ニーズを支援につなげる活動を行ったという。多くの人がいまだ仮設住宅に住み、その先が見えない状況の中で、「震災は終わっていない」という思いが強いという。

ソーシャルワーカーは、医師や看護師のように「目にみえやすい」支援方法を持たない為、その重要性が一般に周知し難いという側面もある。今回お二人の貴重な実践をお聞きし、改めて災害・緊急時におけるソーシャルワークの重要性が理解出来たと思う。

アドボカシーやソーシャルアクション、ネットワーク等、日ごろの実践の積み重ねが災害時に 活かされたということを改めて知ることが出来た。

特にソーシャルアクションやネットワーク等は、緊急時に実践しようと思ってもその基盤形成がなされていないと難しいと思われる。和田さんがおっしゃっていたように日頃の実践、積み重ねた人間関係がものをいうのである。また、福島県社会福祉士会がコーディネート役となって、調整が出来たことも大きな成果であったと思われる。

さらに、渡辺施設長が老健施設再建を成し遂げたように、その推進力は、諦めずに信念を持ち続け、それを実践に移す実践者の強い思いであったこと思われる。

災害時にソーシャルワーカーがこれだけの活躍をしたという事実は学生にとっても、また私自 身にとっても非常に感銘深いものであった。

この貴重なソーシャルワーカーの声を語り継いで次世代に伝えていくことがこの場に立ち会 えた我々の使命(ミッション)なのだと思う。

2-2. 災害時におけるソーシャルワークの機能と役割

淑徳大学 米村 美奈

災害は、予期せぬところで発生する。特に自然災害は、地震でも大雪・大雨、大噴火にしても同地域で同時に発生するために家族や同地区の住民間での共同体内では、具体的な支援がなされにくい状況である。ましてやこの度の東日本大震災においては、広範囲の地域で発生し、被害の大きさと深刻さを考えると支援対象の大きさは甚大であり、人々の暮らしを根こそぎ奪うものであった。こうしたことからも相互扶助的な支援の限界をはるかに超え、第3者や他所からの支援の必要性が大きくなる。

人々の暮らし、生活を支援するソーシャルワークは、災害における人々の暮らしを災害時直 後から支援することが求められていく。生活を支援していく機能と役割は、平時のソーシャル ワークに求められている機能や役割と本質的に変わるものではない。しかし、平時に求められ る支援対象者のニーズと災害時における支援対象者のニーズには、違いがある。一施設の入所 者全員を退所させて他所に移すなどということ、避難所でのプライバシーの問題は、平時のソ ーシャルワークニーズでは惹起しない。また、誰がどこにいるのかさえもわからず、地域全体 が寝食に困り切るような地域全体が支援対象となるような大きさは、平時とは全く異なる。こ うして考えると対象者のニーズの内容のみならず、支援対象の量とその大きさや求められる緊 急性は、平時とは大きく異なる。特に支援対象の量と大きさが異なれば、支援の方法にも工夫 が必要となるのである。被災者の生活の場を軸に時系列にみていくと「被災直後」から「避難 生活」そして、「仮設住宅での生活」、「転居による新しい生活拠点」や「復興住宅や自宅再建」 と経過が考えられる。その場面、場面で起こりうる生活課題は、今までソーシャルワークと同 様な課題も存在するが心理社会的な事項が重篤化して出現している。これらの経過の中で今ま で体験したことがほとんどない状況でソーシャルワーカーは、アセスメントを行い、ソーシャ ルワークにおける支援の判断をしていかなければならない。そこでは、ソーシャルワーカーの 緊急性への対処能力と判断力、決断力が求められ、未知への生活を切り開く意志と希望への想 いが重ねて求められている。

そしてさらに災害から時間が経過していくと災害経験前に直面していた生活上の個別的な課題にも並行して支援していくことがさらに求められる。これまでの生活課題に並行してのソーシャルワーク支援とも考えられるが現実には、被災時には、重層化した生活課題として現れ、その課題へのアプローチも同時に行っていくということになる。これは、平時のソーシャルワークと同じ支援展開であるが例えば、もともと家族関係における課題を持っている人が疾病を有すると更なる生活課題が生まれるのと変わりはない。こうした重複する生活課題の複雑化や重篤化に被災地でソーシャルワークを展開してこられたソーシャルワーカーは、災害前にも数多く支援を提供してきた実績がある。しかし、今回の被災地では、ソーシャルワーカーご自身も家族や住まいを失った被災者でありながらの支援者ということにその支援の厳しさがある。そこでは、自らを個人としてのあり方ではなく、社会的使命を担うソーシャルワーカーとして社会的役割を強調し、自らを業務の中に埋没させて支援を展開する姿が多く存在した。これは、この度の災害時のソーシャルワークの大きな特徴と言えるであろう。

そして、特筆すべきソーシャルワーカーの役割と機能に「被災者の生きる意味に対する支援」 があるという点がある。被災者は、数多くの喪失を一度に体験している。家族を失い、住居を はじめとする財産を失い、仕事を失い、住み慣れた地域を失った。この喪失体験から更に体調不良を引き起こし、生きる希望と生きる意味を失った人々が存在した。そこでソーシャルワークは、生活再建への為の物質・経済的支援や情報を提供しただけではなく、「人間としての存在」を支える支援を行った。喪失した物への支援は、例えば、喪失した住宅は、避難所や仮設住宅などとして、代替によって提供するしかない。しかし、それぞれの人の「生きる意味」を何かの代替によって埋めるというはできない。その人が「生きる意味」をどこかで感じなければ生きられないという壁にぶつかるのである。「人間としての存在」を支える支援は、心理的アプローチとして単独に展開されているだけではない。足しげく被災者のところへ通い、被災者の喪失体験で閉ざされた心に耳を傾け、被災者の心の開きを待ち続け、声を聴くことができるまで共に居続ける。その経過の中では、生活の立て直しの具体的な支援を展開し続けることや傍で見守ることが続けられるのである。こうした「人間としての存在」を支える支援が被災者の生活の土台を支え、喪失体験から生き続ける可能性を見出すことになるのである。これは、ソーシャルワーカー自身が被災者となりつつも支援を展開し続けた結果からより深い共感性が生まれ、鋭い感性から成し得た支援なのかもしれないと考える。

ソーシャルワーカーへの後方支援

3-1. ソーシャルワーカーへの後方支援(意義・効果・貢献)

日本福祉大学 原田 正樹

本プロジェクトは参加した学生たちの学びや成長だけではなく、ヒアリング対象になったソーシャルワーカーや職能団体(各県社会福祉士会)にとっても、広く意義のある活動であったとの感想をいただいている。そうした内容を踏まえて、本プロジェクトのソーシャルワーカーへの後方支援的な意味づけとして整理すると、以下の4点に集約できる。

1.「学生に語る」という意味

被災地では 3.11 以降、多くの研究者や関係者がヒアリングや調査を行ってきた。なかには 調査目的が曖昧で、過剰な調査により被災地の関係者に負担を強いるだけのものも散見され、 調査のあり方についても多くの問題が指摘されてきた。今回のプロジェクトでも、当初は「学 生が聞く」という手法について、現場に迷惑をかけるのではないかという心配があったことは 事実である。

しかしながら、実際に実施した後に、対象になったソーシャルワーカーたちからの感想には、「学生たちだから、ありのままに語ることができた」、あるいは「学生たちだからこそ、伝えておかなければならないと感じた」という意見が寄せられた。

このことは、被災地での学生ボランティアにも共通している。被災した人たちが常に援助を 受けるだけの関係性に固定化されてしまうのではなく、「学生」という可能性の存在に対して 関わることで、自らの経験を伝えやすくなり、その意味を肯定的に位置づけることができると いう。かつ本プロジェクトは、単なる学生ではなく、将来、ソーシャルワーカーを目指すとい う学生たちである。

つまりヒアリング対象者であるソーシャルワーカーにとって、後進となる学生たちである。 そうした自らの後輩になっていくであろう学生たちに「語っておきたいこと」には、経験した 事実だけではなく、そこに同職をめざす者たちへの期待を含めた意味が込められている。学生 たちもそこに語り手との「共感」が生じる。この共感が振幅することで、語りの内容が広がっ ていく。多くのインタビューで、最初は緊張していて、話が聞けるかどうか心配していた学生 たち。あるいは何を聞かれるか不安だった対象者も、結果として多くの場合、当初の予定時間 を越えて自然に話が長くなったという事実は、この「学生に語る」という手法が有効だったこ とを示しているのではないだろうか。

2. リフレクション(省察)する過程として

この学生に語る過程のなかで、ソーシャルワーカーは「改めて 3.11 からの経験を整理できた」という。またなかには「悶々としていた気持ちが、整理できた」、あるいは「これから何をしなければいけないかを考える機会になった」という意見もあった。

つまりインタビューを受けることで、これまでの経過を自ら客観し、第三者に説明するという行為のなかで、主観的な経験を再整理することができている。これこそが、ひとつのリフレクションといえる。

優れた対人援助職は、そもそもセルフ・リフレクション(省察的行為)を丁寧に行う傾向が あると言われるが、本プロジェクトはインタビューを受けるという行為を通して、ソーシャル ワーカーとしてのリフレクションを行っている。すなわち、ワーカー自身が、3.11 の当日から、今日に至る過程をふりかえり、そのなかで新たな気づきを発見し、さらにそれを教訓化(経験を普遍化)することで、近未来にむけた取り組みを指向しようとするエンパワメントにつながる。この一連のリフレクションが促されていることがわかる。

3. 個人の記憶を後進に伝承すること

こうした過程を経ることで、それは単なる活動(実績)報告ではない、生きた経験知として の意味をもち、後進に語り継がれていくことになる。

記録とは明示的な情報であり、記録媒体によって蓄積することが出来るのに対して、記憶は自分自身の一次的体験をもとにして、身体的、感情的な暗黙的なものとして「心に」記憶されていく。それを外化して第三者に伝えるためには、直接的な会話を通して、聞き手に対して疑似体験的な世界を共感させることで、記憶が伝承されていくわけであるが、本プロジェクトはまさにソーシャルワーカーが体験した記憶を、暗黙知も含めて受け止めていくことにある。

3.11 以降、多くの「記録」が出版されている。あるいは組織も記録を残すために、実績をデータベースにして「報告書」が相次いで出版されている。もちろんこうした記録は、極めて重要であるし、専門職としてそれを残す義務もあると言われている。

しかしながら、報告書を読むだけでは、なかなか伝わらないこともある。それはソーシャルワーカーとしての個人の経験であり、悩みや葛藤、想いである。そうしたものこそ、まさに「記憶」であり、それを直接、聴き取ることが極めて重要である。ここでいう暗黙知とは、そのときにソーシャルワーカーとして判断した価値が含まれる。参加した学生たちは、この記憶を伝承されることになる。これは繰り返しになるが、直接聞き取ることで生じる行為が無ければ成立しない。換言すれば、ソーシャルワーカーによっては、それを伝承できる貴重な機会である。彼らが必死になって乗り越えてきた経験から得た知見を、後進たちが受け止めていくことは、専門性の伝承として大きな意義がある。

4. 災害時ソーシャルワークの構築にむけて

さらに本プロジェクトは、岩手・宮城・福島の各県社会福祉士会の協力を経て実施しているが、結果としてインタビューに応じてくださった「個人の記憶」が蓄積されることで、ソーシャルワーカーやその職能団体としての経験知が集約されていくことになる。

もちろんそれだけで、災害ソーシャルワークの要素が構築されるわけではないが、今まで開発が遅れてきた「災害ソーシャルワーク」を内実的に構築していくための基礎的資料になっていくことが期待される。

本プロジェクトでは、災害時、ソーシャルワーカーが「何をしたか」を明らかにするだけではなく、そのとき、ワーカーとして「どう思ったのか」を学生たちは関心をもって聞き出している。これこそが、暗黙知と記したが、災害時ソーシャルワークを構築していくための価値や倫理の礎になろう。

つまり本プロジェクトによって、集められたソーシャルワーカーたちの「声」は、研究的にも大変意義のあるデータとして位置づけられるものであり、将来のソーシャルワークにむけて、 多いに貢献する可能性のある取り組みであるといえる。

3-2. ソーシャルワーカーへの後方支援

日本社会事業大学 菱沼 幹男

〇福祉系大学だからできること

2011年3月11日以降、多くの人々が心を痛め、自分にできる何かを探し、行動を始める中で、本学の学生達も有志を募り被災地支援に動き始めた。大学としてこうした学生達の活動を支えるために災害支援ボランティアセンターを立ち上げ、被災地支援に関する情報を集約するとともに学生達のボランティア活動を支援する体制を整えていった。

現地社会福祉協議会の協力を得ながら大学としてボランティアバスの運行を始めたのは2011年6月からであったが、当初マッチングして頂いた活動は汚泥等の撤去や片付けが中心であった。こうした活動に対して、しばしば学内外から「福祉を学ぶ学生ならではの活動をすべきだ」との声が寄せられ、学生達はとても悩んでいた。「自分達はたしかに福祉を学んでいるが、まだ実習にも行っておらず、専門職のような支援はできない。自分達にできることはなんだろう。」多くの学生が戸惑いながらも、まずは紹介された活動をしっかりと行い、被災地で求められていることをしようという思いを支えに活動を続けてきた。こうした悩みは、大学の災害支援ボランティアセンターの担当者としても同様であり、活動が単発的にならないように一つの地域へ継続的に訪れるようにし、現地の専門職との関係形成にも努めてきたが、一度の訪問でできる活動には限界があり、「福祉系大学だからできる支援とは何か」を絶えず悩み続けていた。

そのような中で、ソーシャルワーカーの"声"プロジェクトが立ち上がり、そのコンセプトに触れた時、まさに福祉系大学だからこそできる活動、福祉系大学にしかできない活動であることを感じた。しかし、こうした活動が後方支援になるのか、被災地のソーシャルワーカー達に受け入れられるものなのか、不安がなかったわけではない。多忙な専門職の貴重な時間を頂くことについて、実際に参加するまで学生も教員もためらいの気持ちが少なからずあったが、それでもこのプロジェクトの主旨が間違っていないことを信じ、インタビューをさせて頂く中で、私達の不安は払拭され、強くプロジェクトの重要性を意識することとなった。

〇ソーシャルワーカーのまなざしと歩みの記録化を通した相互エンパワメント

このプロジェクトの心髄は、被災地に暮らす一人ひとりの生活を支えてきたソーシャルワーカーが自らの支援を語ること。そして語る相手がソーシャルワークを学ぶ学生であることにある。この相互の関わりがソーシャルワーカーと学生双方のエンパワメントをもたらしている。被災地のソーシャルワーカー達は、私達の想像が及ばない程に様々なものを背負いながら日々の仕事を行っていた。絶えず目の前にいる人々の生活をどう支えていくか、行動し続けなければならない状況の中で、一方では自分達の活動を記録に残しておく必要性を感じていたことが、インタビューを通して浮かびあがってきた。そうした思いに対して、被災地のソーシャルワーカーに代わって、彼等の「視点と行動」、言い替えれば「まなざしと歩み」を記録していくことの重要性。そして将来ソーシャルワーカーを目指す学生達が話を聞かせて頂き記録に残していくプロセスが、専門職と学生双方のエンパワメントにもつながっていくことの意義。プロジェクトへの参加を通してこれらのことを強く感じた。

プロジェクトに参加する学生達は、自分達が専門職の後方支援に行くとは考えおらず、真摯

に被災地のこれまでと現状、そしてそこに向き合ってきたソーシャルワーカーの思いを学ばせてほしいとの思いで参加していた。しかし、インタビューを行う中で、被災地のソーシャルワーカーから感謝の言葉を頂き、自分達の活動が自らの学びだけでなく、社会的意義と社会的責任のある活動であることを認識していった。そして被災地の一人ひとりの声とその生活に向け合ってきたソーシャルワーカーから大きな刺激を受け、自らの将来に向けてエンパワメントされていった。

記録化の重要性とともに、このプロジェクトで核となるのは、記録のプロセスにおけるソーシャルワーカーの語りが教育的な役割を持つことである。ソーシャルワーカーとして何を思い、何をしてきたか、何に悩み、何に喜びを感じてきたか。インタビュアーがソーシャルワークを学ぶ学生であるからこそ、後進の育成という社会的役割として、これまで感じてきた多様な思いを表出できる機会となっている。このプロジェクトはソーシャルワーカー自身が語ることによって、自らの支援を客観的に見つめ、その時の思いを振り返り、今後につなげようとする省察の場となり、教育的役割が付加されることによって、語り手のエンパワメントにもつながっている。

このプロジェクトを通した省察は、職場や専門職同士の事例検討とは異なったものである。 学生達はソーシャルワーカーに対して決して助言は行わないし、そうしたことを行うために訪問していない。インタビューを通してソーシャルワーカーの思いを言語化していく営みがソーシャルワーカー自身の省察へとつながっている。ソーシャルワーカーは学生達からの質問を通して、ソーシャルワークの視点で自らの実践を振り返っていく。

またこのプロジェクトにおける教育的役割は社会福祉士の現場実習とは異なったものである。学生達は与えられたカリキュラムや枠組みの中で学ぶのでなく、インタビューを通してソーシャルワーカーが向き合うニーズ、専門職としての視点、具体的な支援の方法を学び、ソーシャルワークの本質を見つけようと必死に語られる言葉に耳を傾ける。このプロジェクトは社会福祉士実習の枠組みに縛られないソーシャルワーカー養成のための伝承の機会ともなっている。

○ソーシャルワーカーの職能団体と養成機関の連携

このプロジェクトでは、各地の社会福祉士会というソーシャルワーカー職能団体と福祉系大学というソーシャルワーカー養成機関の連携によるものであり、組織間連携による後方支援であることも重要な点である。一つの大学の卒業生や教職員の個人的人脈でなく、ソーシャルワーカーに関わる連続的な位置付けの2つの組織が結びついたことは、被災地支援だけでなく、今後のソーシャルワークの教育や実践の全体において貴重な関係となっている。

震災後、様々な場において社会福祉研究者達から「ソーシャルワークが見えない」という声があった。しかし、この「ソーシャルワーカーの声プロジェクト」を通して、まぎれもまく現地のソーシャルワーカーは、人々の命を守り、その命をつなぎ、生活を支えてきたことを学んだ。被災直後からソーシャルワークはたしかに存在していたことを学生達はしっかりと受け止めてきた。「ソーシャルワークが見えない」ではなくソーシャルワーク教育に関わる者が「ソーシャルワークを見ていない」と言っても言い過ぎではないだろう。

このプロジェクトにおける後方支援は、福祉系大学から被災地の専門職へというベクトルだ

けでなく、実は被災地の専門職から福祉系大学へというベクトルも存在している。被災地の 人々を一方的な支援の受け手にしないことが被災地の復興において重要なことであり、このプロジェクトは長期継続していくべきプログラムであると強く思う。

学生への教育効果

4-1. 学生の教育効果 被災地においてソーシャルワーカーの"声"を聴く意味

中部学院大学 大藪 元康

ソーシャルワーカーの "声" プロジェクトにおける学生の学び

大規模災害が発生した時、ソーシャルワーカーは、どのように判断し、行動をしたのか。こまでのソーシャルワーク教育において触れられることはなかった。これは、大規模災害が起きたとき、被災者の方がどのような問題に直面し、どのような支援が必要なのかを記録し、整理することが行われていなかったということを意味するといえる。

ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト(以下、「本プロジェクト」と呼ぶ)において、被災地のソーシャルワーカーの方から学生が直接お話しを伺うことに大きな意味がある。ソーシャルワークを学ぶ学生は、実習を中心に、ソーシャルワーカーから直接学ぶ機会がある。それは、現在行われている援助実践を学ぶということになる。演習の授業では事例を用いて学ぶこともある。

しかし、大規模災害の発生という事態は、いま実践をしているソーシャルワーカー自身がどのような状況になるのか想定できないでいる。実習の折などに、学生に避難マニュアルや緊急時の連絡体制などを伝えることはあっても、それを使ってどうだったのか、という評価や改善点などが伝えられることはない。このことから、学生が被災地の赴き、ソーシャルワーカーが大規模災害の発生したその時、その場所で即座に判断し、全力で行った援助とその援助ができた背景を伺うことは学生の貴重な学びになるといえる。

また、被災地に身を置き、インタビューを行うことは、学生にとって貴重な体験になるといえる。例えば、仮設住宅の一室でソーシャルワーカー室を開いている方からお話を伺うとき、その部屋でお話を伺うことで、仮設住宅の状況、各戸のつくり、相談をする場の作り方を見ることができる。また、被災状況を見た上お話を伺うことで、言葉で聴く以上に発災時の現場を想像しながらお話を伺うことができる。被災地ソーシャルワーカーをお迎えし、講演等を行うことも可能ではあるが、学生自身が被災地に身を置くことによって学ぶことは多いといえる。さらに、学生自身がインタビューを行うということにも大きな意味がある。社会福祉士養成課程において、「社会調査」という授業は開講されており、質的調査、量的調査について学ぶ。しかし、その調査を実施する機会は限られている。本プロジェクトにおいて、学生がインタビ

しかし、その調査を実施する機会は限られている。本プロジェクトにおいて、学生がインタビューを行うにあたり、事前に被災地について調べ、インタビューの技術について確認をし、どのような事柄をインタビューで伺うかを考えることは、授業の枠を超え、学生が能動的に取り組んでいくことになる。この事前の取り組みもまた、学生の学びの柱として挙げることができる。

大規模災害時のソーシャルワークも今後、事例として整理され、学ぶことができるようになるかもしれない。しかし、事例集として発刊することになれば、実際の事例を、モデルやアプローチと関連付けて教えられるように加工される。広く学生が学ぶことが可能となる。しかし、抽象的な「事例」ではなく、一人ひとりのソーシャルワーカーの置かれた状況、実際に行われた実践、その実践を行った根拠をソーシャルワーカーの言葉によって語られることも重要である。学生自身の言葉でソーシャルワーカーの思いや悩みを含めて伺い、ソーシャルワーカーの言葉によって伝えられる、そのやりとりによって、学生は、ソーシャルワークとその実践を行うソーシャルワーカーを魅力に気づくのである。

語り部プロジェクトへのつながり

本プロジェクトにおいて、学生が聴いたソーシャルワーカーの"声"は、学生による「語り部プロジェクト」へとつながっていく。本プロジェクトで伺ったお話をまとめるだけではなく、捉えなおし、自らの言葉として語ることは、学生にとっては大きな課題になるといえる。一方、インタビューに主体的に取り組むことによって、それを「伝えたい」という気持ちも高まる。聞き手に合わせて内容を変える、分かりやすい表現を工夫するという改善を積み上げながら、プレゼンテーションの技術を向上させようとするのも、本プロジェクトで学生自身が能動的にインタビューを実施したことによる意欲の高まりであるといえる。

複数の大学の連携による取り組み

また、本プロジェクトは、複数の大学で取り組まれているところに特徴がある。大学が連携をして事業に取り組むことは難しい面がある中で、復興支援委員長校の関西福祉科学大学、そして復興支援委員長の遠藤洋二先生のご尽力によるところ大きい。被災地におけるボランティア活動などは大学ごとに取り組まれていることが多い。本プロジェクトの参加している大学においても、被災地での活動を積極的に取り組まれている。その活動に加えて本プロジェクトに参加することは、教職員の負担が増大することとなる。しかし、学生の視点で捉えてみると、学生が被災地について知る機会が増えるともいえる。

さらに、複数の大学が連携して行うという特徴がある。この結果、学生は、普段の教員、学 友の枠を超え、全国にいるソーシャルワークを学ぶ学生と交流する機会ができる。自らの大学 での学びを振り返り、他の大学での取り組みに刺激を受け、学ぼうとする意欲が高まるという 側面がある。

ソーシャルワーカーの"声"プロジェクトにおける教員の関わり

次に、本プロジェクトに対する教員の関わりについて、学生の学びの視点から考える。本プロジェクトでは授業という枠組みを超え、学生は数年にわたり、自由に活動ができる。授業においては、前期・後期という授業期間と開講回数が決められている。授業として取り組むならば、学生もこの枠組みにおいて取り組むことを期待することになる。しかし、このプロジェクトはそのような枠組みを超えた取り組みである。学期も年度も関係なく学生は取り組むことができる。場合によっては、「後輩」がプロジェクトにおいては「先輩」になるということも起こりうる。そのおもしろさが、このプロジェクトには含まれている。このプロジェクトに関わる教員は、学年、学期という時間の区切りに関係なく、継続的に取り組む必要があるといえる。そのことが学生の継続的な活動を支援することにつながり、活動の幅の広さと深まりにつがっていくであろうと思う。

また、評価がない点も特徴として挙げられる。授業で調査を実施した場合、教員は評価者となり、学生は評価されるということを意識して取り組むこととなる。しかし、授業ではなく、評価がないということは、学生自身が取り組みたいという気持ちをもって参加することが大切である。そして、このような自由度の高い取り組みにおいて、教員は学生の意欲をどのように維持し、高めていくか課題であるといえる。そして学生が活動を展開できるよう体制を作りが必要であるといえる。

4-2. ソーシャルワーカーの"声"プロジェクトにおける教育効果

関西福祉科学大学 家髙 将明

1. 調査方法

本調査は、ソーシャルワーカーの"声"プロジェクトに参加した A 大学(大阪府)の学生 6 名、B 大学(愛知県)の学生 4 名、C 大学(埼玉県)の学生 4 名の計 3 大学、学生 14 名、を対象としている。調査方法は、本プロジェクトの教育効果を縦断的にとらえるため、事前学習実施前に 1 回目の調査を実施し、現地プロジェクト開始直前に 2 回目を実施、現地プロジェクト修了直後に 3 回目を実施した。それぞれの調査は、自記式によって回答を得た。倫理綱領については、各大学のプロジェクトに参加した教員及び学生に対して研究目的、方法、個人情報の徹底管理の約束、データを研究目的以外で使用しない旨を書面にて説明し、同意を得た上で実施した。

2. 調査項目

本調査は、「学習意欲」、「協調性」、「ソーシャルワーカーに対するイメージ」などを尋ねた。 なお、第1回目及び第3回目の調査はこれらすべてを尋ね、第2回目は「ソーシャルワーカー に対するイメージ」以外を尋ねた。

そして「学習意欲」の測定は、坂元が作成した学習意欲尺度を一部修正したものを使用した。 この尺度は、「自己管理」「社会的積極性」「認識への追及」の3つの下位尺度からなり、得点 範囲は「自己管理」が8~40点、「社会的積極性」が6~30点、「認識への追及」が7~35点で あり、得点が高いほど学習意欲が高いことを示すよう設定した。

次に「協調性」については、高田らの「相互独立的 - 相互協調的自己観」尺度の下位尺度である「相互協調性」尺度を用いて測定した。この尺度の得点範囲は 10~70 点であり、得点が高いほど協調性が高いことを示す。

「ソーシャルワーカーに対するイメージ」については、先行研究等を参考にソーシャルワーカーの役割及び機能を抽出し、10項目の設問を設定した。この尺度の得点範囲は10~40点であり、得点が低いほどソーシャルワーカーのイメージができていることを示すよう設定した。

3. 調査結果・考察

調査対象者の性別は、14名の参加者全てが女性であった。また調査対象者の学年は、1年生0.0%、2年生64.3%、3年生14.3%、4年生14.31%となっており、2年生の参加が最も多かった。次に「学習意欲」、「協調性」、「ソーシャルワーカーに対するイメージ」の得点の変化をみると、表1に示すように「学習意欲」及び「協調性」については有意な差が認められなかったが、「ソーシャルワーカーに対するイメージ」のイメージについては、有意差が認められた(P<.05)。

今回の調査により学生における本プロジェクトの教育効果をみた結果は、「ソーシャルワーカーに対するイメージ」の具体化が図られた点以外は認められなかった。しかしこれまでプロジェクトに参加してきた学生たち及び教員の声としては、本プロジェクトに参加することにより学習意欲や協調性が高まったという意見が数多くみられた。このことから、本調査において「学習意欲」及び「協調性」得点に差が認められなかった結果は、測定尺度の適切性の問題による可能性が高いと考えられる。よって本プロジェクトの教育効果について、今回の調査で設

定した項目以外の側面から検討することが今後の課題であると考える。

表 1 調査対象者の得点変化

	1回目	2回目	3回目	
学習意欲(自己管理)1)	30.46	29.30	30.20	_
学習意欲(社会的積極性) ²⁾	23.54	22.10	23.30	=
学習意欲(認識への追求)3)	25.77	24.90	26.00	_
協調性 4)	52.08	52.80	52.80	_
ソーシャルワーク理解 5)	23.91		20.00	

Friedman 検定 1)~4) t 検定 5) **: P<.01 *: P<.05

坂元昻「大学生における学習技能と学習意欲」『大学における教授と学習』54 号 1981 年 高田利武・大本美千恵ほか「相互独立的 - 相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成」『奈良大学紀要』24 号 1995 年

復興支援プロジェクトシンポジウム 2014

復興への"声"を伝える

―ソーシャルワーカーのまなざしと歩みの継承―

東京会場 2014/02/08 名古屋会場 2014/02/17



現在でも乗日本大震災の被災地の復興に向けてソーシャルワーカーは活動しています。そのソーシャルワーカーの声を記録し、 内容を分析して災害支援活動における問題点や課題を整理することで、今後の大規模災害等で機能するソーシャルワーカーを 育成することが、今求められています。 福祉系大学経営者協議会 会長 島田 燁子

開催概要

参加無料

復興への"声"を伝える ~ソーシャルワーカーのまなざしと歩みの継承へ~

東京会場

2014年2月8日生 13:00~16:30

本郷キャンバスD館6階スカイホール

名古屋会場

2014年2月17日月 13:00~16:30 日本福祉大学

名古屋キャンパス北館8階

当日プログラム (予定)

①"声"プロジェクトの概要説明 (20分)

災害支援活動に従事したソーシャルワーカーから学生が聞き取った"想い"を記録として残す、 本プロジェクトの概要を説明致します。

東京·名古屋:関西福祉科学大学 准教授 遠藤洋二

②ソーシャルワーカーの講演 (60分)

被災地でソーシャルワーカーとして活動される講師をお招きします。

東 京:宮城県社会福祉士会事務局 常務理事 高橋達男様 名古屋:社団法人岩手県社会福祉士会和談役 社会福祉法人岩手和歌会理事 佐々木裕彦様

被災地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを行った 学生が発表します。

④パネルディスカッション (75分)

本プロジェクトに関わった引率教員、参加学生などによるパネルディスカッションを行います。

東 京:コーディネーター 文京学院大学 教授 鳥羽美香 名古壁:コーディネーター 中部学院大学 准教授 大野元康

この事業は 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業 の助成を受けています。

主催:福祉系大学経営者協議会 後援:日本社会福祉士会

5-1-1. シンポジウム報告(東京)

シンポジウム 2014 東京会場 報告

日時:2014年2月8日(土)13:00~15:45

場所:文京学院大学 本郷キャンパス

司会:菱沼幹男氏(日本社会事業大学 講師)

【開会あいさつ】

福祉系大学経営者協議会会長

島田 燁子氏(文京学院大学 理事長)

【ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト概要説明】

福祉系大学経営者協議会復興支援委員長 遠藤 洋二氏(関西福祉科学大学 准教授)

【講演】

宮城県社会福祉士会 事務局長(常務理事) 高橋 達男氏

ソーシャルワーカー "声" プロジェクトが始まったきっかけについてお話をされた。本プロジェクトが高橋氏と関西福祉科学大学の遠藤氏の出会いから始まったことが紹介された。震災直後、地域のソーシャルワーカーは、実は外部からボランティアと称して押し寄せる善意の波に疲れ果てていたこと、そんな中で"声"プロジェクトの提案を受け、まさにソーシャルワークの本質と感じたと話されたことが印象的であった。

そして、災害発生後、宮城県社会福祉士会は被災地の地域包括支援センターにいる社会福祉士を被災地でないところにいる社会福祉士が社会福祉士として応援をする、支援者の支援をするという災害対応を行っていた。そのため、インタビューでは被災地の地域包括支援センターで応援をもらいながらも活動をしている社会福祉士、それから被災地の地域包括支援センターの社会福祉士に応援に行く社会福祉士、その両者の話を聞いてもらえるようにした。「汗まみれ、泥まみれで活動している現場のソーシャルワーカーを、"声"プロジェクトに参加した学生がかっこいいと言ってくれた、それが感動だった」と語られた。

これからの復興の担い手である若い学生たちの良い経験になればと協力したプロジェクトだったが、インタビューを受けた先輩ソーシャルワーカーも大きな力をもらった、これからのソーシャルワーカーと現場のソーシャルワーカーに強い絆ができたことも今回のプロジェクトの意義だったのではないかとお話いただいた。

【学生発表】

文京学院大学人間学部

小野 綾子さん

淑徳大学総合福祉学部

大藤 未来さん

日本社会事業大学社会福祉学部卒業生

野澤 千明さん

各大学での、インタビューのまとめと取り組みについて紹介された。

これまで知らなかった現地でのソーシャルワーカーの方の活動を聞いたことで、改めてソーシャルワークということがどういったことなのかを考えさせられ、インタビューという形で被災地に入れたことはとても大きな経験になった。今後大きな災害が起きたときにソーシャルワーカーとしてどういう支援ができるのか、まだまだ考えていかなければならないと、今回の経験を活かせていけるように頑張っていきたいと報告された。

【パネルディスカッション】

宮城県社会福祉士会事務局長(常務理事)高橋 達男氏文京学院大学人間学部小野 綾子さん淑徳大学総合福祉学部大藤 未来さん日本社会事業大学社会福祉学部卒業生野澤 千明さんコーディネーター文京学院大学教授鳥羽 美香氏

学生の報告を踏まえて、フロアからの質問に答える形で進められた。

【閉会】

5-1-2. シンポジウム報告(東京)逐語録

【開会のあいさつ】

菱沼: それでは、開会に当たりまして、このプロジェクトを福祉系大学経営者協議会で主催しておりますので、会長の島田先生からごあいさつをいただきたいと思います。

島田:皆さま、こんにちは。大雪の中を本当にようこそお越しくださいました。東京にとっては 10 センチの雪は災害に入りますが、まあ今日降ったのも東北の方のご苦労をしのべということかなというふうに受け止めております。で、今ご紹介ありましたように、本日の主催は福祉系大学経営者協議会という、全国で福祉系の大学が 20 校加盟しております協会で、2009 年に設立され、以来大変活発な活動をしております。それが少しでも皆さんの社会福祉士というこのお仕事を社会に知らしめ、そして地位を向上させ、国家試験の合格率を向上させるという本当に切なる願いに基づいて積極的なお仕事をしております。その中で、やはり災害時におけるソーシャルワーカーの働きというものをもっときちんと調べて、そしてこれからソーシャルワーカーになる学生の皆さんにもかかわっていただいてという発案がございまして、関西福祉科学大学の遠藤洋二准教授を委員長に指名しまして、この復興支援の委員会がもうけられ、先生方も加わっていただいて学生の皆さんが、現地に赴いて、そしてこのように報告をするという非常に素晴らしい活動をしております。本日この条件の中で多くの大学のご関係の皆さん、学生の皆さんに集まってきてくださったことを大変喜んで、そして充実した一時が持てますようお祈りしてごあいさつといたします。どうもありがとうございました。

【ソーシャルワーカーの"声"プロジェクトの概要】

菱沼: それでは、プログラムのほうを進めてまいりたいと思います。この「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」の生みの親であります、関西福祉科学大学の遠藤先生から、このプロジェクトをどのような思いで進めているのか、プロジェクトの概要についてお話をいただきたいと思います。先生、よろしくお願いいたします。

遠藤:ただ今ご紹介いただきました関西福祉科学大学の遠藤でございます。今日はこの雪の中でお集まりいただきまして、ありがとうございました。実は先週、福島、岩手に第5次派遣のための下見に行ってきたんですが、岩手は久しぶりの大雪と言ってました。私が悪いのかなって考えたんですが、あ、待てよと。実はうちの学生も連れていったんですが、彼もそこに来てますから彼の責任だということにして今日は進めさせていただきたいと思います。このプロジェクト、「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」ということで始めていきました。あのこういうことなんですね。詳しいことはまたレジュメを見ていただいたらありがたいんですが、要は災害直後にソーシャルワーカーは一体何ができたんだろうかということが、いろんなとこで疑問、議題に挙がりました。そこでいろんな人がいろんなことを言ったんですが、実は私、阪神淡路大震災のときに、当時は神戸市の児童相談所にいまして、真っただ中で災害支援活動をしたんですが、ちょっと違うよねというような思いを抱きました。どうしようというふうに思ったときに、せっかくソーシャルワークを勉強する学生が、あるいはソーシャルワークを教

えるわれわれがいるわけですから、被災地に行って実際のワーカーに話を聞こう。そしてそれ を伝えていこうという発想が生まれました。

これは直接支援じゃないですから、ボランティア活動が本当に必要なときにこんなことして いていいのかという声もなかったわけではないです。そこで、まずは東北に行ってみようとい うことで私が 1 人で東北に行って、出会ったのが今日おいでいただいている高橋さんですね。 先ほど、このプロジェクトの生みの親と言われましたが、実は私は生みの親の片方の父でござ いまして、その母が後で出てくる高橋さんなんですね。その辺はまた高橋さんからお話してい ただけるかも分かりませんが、そういうことでこのプロジェクトを始めました。このプロジェ クトのキーは1つだけです。これは学生が主体的に取り組む活動です。先生に言われて、大学 に言われてやるものではない。彼らの主体的な気付きとか感性に基づいて、災害においてソー シャルワーカーは何ができるか考えてみようというプロジェクトです。そしてそれを多くの人 たちに知っていただくということは、最大の目的というふうに思っています。ですから、私ど もの学生なんかには、これは教育活動じゃないよ、ソーシャルワークの卵たちとソーシャルワ ークを教える私たちが一緒にやっていくミッションだよという言い方を常々しています。幸い、 ここに参加してくれる多くの大学の学生さんたちは、その思いを1つにしながら東北に入って、 本当に熱心に真摯にあの活動してくれてます。で、今日はいろんな説明をしようと思ったんで すが、それは後の学生の皆さんに委ねます。ここでは、私どもの大学の学生が作ったムービー があります。それを見ていただいてこのプロジェクトは一体何なのかということを少し皆さま 方にご理解いただきたいと思っています。約10分間のムービーです。どうぞご覧ください。

(ムービー上映)

遠藤:多分このムービーの中に、彼らの言いたいことは全て詰まってるかなというふうに思っ ています。このプロジェクト、2 年半続けています。その中で多くの学生がたくさんのワーカ ーさんにインタビューをして、そしていろんな思いを持って地元に帰って、多くの人たちに東 北のワーカーさんの思いを伝えて、そしてそこで自分たちが感じたことを伝えているってこと を続けていますし、これは今後も続けていきたいと思っています。やっぱりこのプロジェクト を進めるに当たって、現地の東北3県のワーカーさんたちの協力なしにできないと思っていま す。去年の暮れに、あの東北3県の福祉士さんの、福祉士会の方との意見交換会をしたんです ね。12月28日には宮城県としました。宮城県のワーカーさんが言ったんですね。われわれが 「お世話になってます」って言うと、「いや、お世話になってるのはわれわれのほうや」って、 「ほうや、ほうや」って関西弁で言いませんよね、東北ですから。まああの「ほうです」って、 「本当にありがとう」って言っていただきました。で、さらに「このプロジェクトを応援して いる仲間が仙台にいることも忘れないでね」っていう、声もいただきました。そういう声に励 まされながらプロジェクトは続いていくと思っています。さらにですね、今日は島田会長、理 事長においでいただいてますが、本当にこのプロジェクトについては文京学院大学さんをはじ め多くの大学の職員の方々が力を尽くしていただいています。何となくあのプロジェクトに行 くと、先生たちが前面に出て学生と一緒にやってると思いますが、そのバックには本当に大き な力を職員の方がやっていただいてることにも感謝申し上げたいと思っています。そして、何 といっても、学生さんたちが真摯にこのプロジェクトに向き合っていただいたことにも感謝を申し上げたいと思います。ある学生が言いました。「先生、このプロジェクトいつまで続くんでしょう」って言うから「いやあ、なかなか終わんないよね」。多分、10年後か20年後、もっと早いかも分からないし、もっと遅いかも分からないですが、日本はまた大きな震災に見舞われると思われます。そのときにこのプロジェクトに参加した、もう既に50名近くの学生が関わっていますが、その学生がその災害地点の現場でプロとして支援をする。機能する。そのときがこのプロジェクトの終わりですから、それまでみんな卒業してさまざまな現場で働きながら、東北のワーカーさんと心を1つにしながら、いろんな方の支援に向かっていきたい。いってほしいというふうに思っています。

最後に、私どもの学生が言った言葉があります。これはね、大阪の社会福祉士会の方々の語り部の活動の中で大阪府の社会福祉士会の誰かが言ったんですね。「そんなに社会福祉士、ソーシャルワーカーを美化してもらっては困る」。それに応えて学生が言ったんですよ。「私たちは美化してません。被災者の中で苦しみながら、泥まみれになりながら、悩みながら、支援をしてる姿をかっこいいと思った。そのかっこいいワーカーさんに私たちがなりたいと思っただけです」とピシっといったことを今だに覚えています。その思いは、多分ここにいる、参加してる学生の多くが持ってるのかなと思っております。なかなか一言では言い尽くせませんが、それぞれの学生、あるいは教員の思いですね、そして何はともあれ今日仙台からわざわざ来ていただいた高橋さんから、災害支援をするワーカーさんの思いを今日共有できればありがたいかなと思っております。甚だ簡単ですが、これで私の概要説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【講演】

菱沼:ありがとうございました。遠藤先生のお話にもありましたけれども、ソーシャルワーカーの思いをですね、私たちはどうこれから継承していくのか、今回のシンポジウムのテーマですね。「ソーシャルワーカーのまなざしと歩みの継承」というふうにさせていただいております。これから皆さん方にとってですね、何かしら感じるものあるかと思いますけれども、ぜひ、これをどう継承していくかということも含めて考えていただきたいなと思っております。で、このプロジェクトは、ひとえに現地の社会福祉士会の協力あってのものになっております。今回はお忙しい中、宮城県社会福祉士会から、高橋さんにお越しいただいております。お話いろいろ聞かせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

高橋:こんにちは。今、遠藤洋二先生から本当に、なんでしょう、もったいないお言葉で紹介をしていただいた感じですけども、はい。文字どおり皆さんの、今日以降も続けての、なんですかね、このプロジェクトの継続を文字通り励ましにやってきましたので。いいですか。そんなわけで、あの宮城県社会福祉士会高橋ですけども、ご紹介のとおり、まあこのプロジェクトの生みの親の片割れだという紹介がございましたけども、まあそう言えばそうなのかなとも思います。

というのは、被災後半年を過ぎたところですかね、2011年の10月だったと思いますが、遠藤洋二先生とお会いしました。その前の10月までに至る間に私ども被災地では、結構大変な

思いをしていたわけなんです。というのは、われわれワーカーは、やっぱりワーカーとしてじゃあ何を被災者に応援しようか、どんなやり方をしようかって悩みつつも、実は外部からの支援の申し出を切り盛りする、コーディネートすることに必死になっていたわけです。悪口的に言えば、善意の押し売り、セールス、そういったセールスマンを振り分けなきゃいけないわけですね。人、それから物、もうみんなそうでした。それが集中して被災地にやってくるもんですから、マネジメント、コーディネートをする者が不在のところでは本当に大変なことだったわけですね。で、その中でもそうですね、福祉系大学経営者協議会ではないところの養成校からいろんな申し出がありました。というのは、大体は、多くはボランティアの橋渡しをしてくれないか。これから社会福祉士になっていく者たちに、どうぞ活動の場を与えてくれないかっていうような申し出がありました。

で、僕はしんどかったですね、はっきり言って。もう大変でした。で、大変な中でも、やはり次代を担う後輩養成に関わる者としては何とかしたいと思って、そうですね、遠くからやってくるグループをまあ夜遅くあるいは朝早く迎え入れつつ、食事の心配をし、あとは寝るところの心配もし、活動のエリアを開拓し、というようなことをやっていたわけですけども、率直に言って、本当に疲れ果ててましたから。直接援助のこともあるし、それからそういうなんていうね、コーディネートのこともあるしということで疲れてました。

で、そんなときに、遠藤洋二先生からの連絡があったわけです。ですから、「えー、またか」とやっぱり思うわけですよね。まあそれでも人のいい高橋ですので、じゃあ会ってお話は伺いましょうということでお会いしました。私の事務所に来ていただいたわけですね。そこがあの出会いであり、誕生前夜だったと思うんですけども、遠藤洋二先生は、今は教育者、研究者としておられますけども、その前は本当に根っからのソーシャルワーカーだったということが、話をしてすぐ分かりましたね。というのは、やはりあの神戸の、神戸での経験、それから、神戸市児童相談所でのお仕事の経験、そういったものを話す中で、本当のソーシャルワーカーだなと。実は私もあの本物のソーシャルワーカーであると自認してるんですよ。ですから、本物でない人はすぐ見分けがつくんです。そしたら本物でした。その出会いだったですね。

そこで熱く語る中で、実はそのボランティアの受け入れをお願いしてるのではないということが分かったわけです。それならばということで話をどんどん聞くにつけ、現場の、被災地の現場で働いてるソーシャルワーカーの、なんていうんですかね、活動、あるいは活動姿勢などについて、その人から学生たちが話を聞いて、そして学生たちの感性でそれを受け取って、そしてそれをまとめて記録として残す。そのアーカイブがやがて災害対応のマニュアルに活かしてもらえばいいと、そんなことでしたね、はい。ですから、なんつうかな、その基盤となるフィールドワークのところの被災地で働く、あるいは被災地を支援しているソーシャルワーカーの、ま、学生さんからすれば先輩たちの、活動の姿、内容について話を聞く。フィールドワークのそのいわゆるインタビューですね、インタビュー。それを提供してくれないかということだったわけですよね。それで、では、ま、やりましょうということに合体したというか、受胎した瞬間だったと思います。それが誕生前夜の話だったと思うんです。ですからもう一度繰り返しますけども、いろんな申し出がある中で、とてもとても、津波のごとく押し寄せる善意の波に僕らは飲み込まれてしんどい思いをしていたときに、そうではないんだと、もっともっと本質のところをね、探りたいんだということだったので、オーケーしたということですね。そ

うだったと思います。はい。

歴史は夜つくられるわけですからね。そして、それを受けるに当たって、私どもの、私が担 っている宮城県社会福祉士会ではその受け入れについてどういう前さばきをしたかというと、 こうです。そのフィールドワークのなんでしょうかね、ビビッドなラーニングっていうんです か、それを社会福祉現場実習の一環として僕らは捉えよう、取り組もうというふうに位置付け たんです。ですから、皆さん、受験資格を得るためにも現場に実習に行くわけですね。そして 単位を取って受験をするわけですけども、その受験、その単位にはならないけども、僕らとし ては後輩養成のためにはとてもいいチャンスだという受け止め方をして、実習の一環として受 けようということを会としては整理をしたわけです、はい。ですから、それからすれば、その プロジェクトというかフィールドワークが終わったときに、学生さん方にとてもいい体験をし た、あるいは実習をした、それで自分はこういうふうに成長できた、いろんな気付きが促され たというふうに言ってもらえば最高だなという思いで取り組みを始めたわけです。これは、災 害対策本部イコール理事会ですけども、理事会の中でかなり激論を戦わしながら、そういう位 置付けで受けるということにしたわけです。遠藤先生からの申し出は、個人的だというよりも、 その協議会の先兵としてやってきたわけですから、協議会の意向とわが社会福祉士会という組 織の意向のすり合わせのために、そういう目的、目標というのを掲げたということなんです。 だから、災害対応というのをまあ、実習指導の一環にしようということですね。そういうこと でございました。それが目的設定だったわけです。

そして第1次、第2次、第3次と宮城に派遣していただきました。レジュメにはきちっと派遣の内容が書いてますけども、そのとおりで10月に、先ほどの話に戻りますね、10月にその話を受けてから私どもも12月の理事会でそういうふうに決定をし、そして第1次派遣。翌年の3月ですね、3月に第1次派遣が始まったということですね。そして半年後の2012年の3月に第1班、そして第2次派遣が半年後の9月でございました。そして、第3次はまた半年後の翌年3月ですから、なんですか、去年の3月ですかね。そうですね。

そういうふうに派遣していただいたんですけども、資料というか、レジュメに書いてあるとおり、宮城県では、私の計算では、3 班にわたって合計 18 名のソーシャルワーカーとつないでいただいて、ですからインタビューのチャンスというかコマは18 回あったということですね。その18 名は全部違う人です、はい。しかも、どうでしょう、あ、その前に言っとかなきゃいけないのは、私どもの会の活動として、あの発災後、1 週間後から取り組みを始めたんですけども、それはどういうことかというと、被災地の地域包括支援センターにいる社会福祉士を後方に、被災地でないところにいる社会福祉士が社会福祉士として応援をすると。ですから、支援者の支援をするというのが災害対応のやり方でした。それをしてたわけですので、私どもがインタビュイーとして紹介したのは、被災地で、被災地の地域包括支援センターで応援をもらいながらも活動をしている社会福祉士、それから被災地の地域包括支援センターの社会福祉士に応援に行く社会福祉士、その両者を紹介したわけです。……だったと思いますね。ですか、学生さん。そういうことなんですね。ですから、応援をもらいつつやっている社会福祉士と、それから応援に行っている社会福祉士というのを合わせて18名を紹介したということです。それでやっていただきました。

で、そのときにもお願いするに当たってはね、先ほど言ったように、大したことできてない

かもしれないけども、先輩ソーシャルワーカーとしては、後輩のために自習の機会をつくって やらなければならないのだ。無様でもかっこ悪くても至らなくても、現任のソーシャルワーカーであれば後輩に伝える責任はあるのだということを言って、そのインタビュイーなんつうかですね、選任して、お願いして、結びつけていったということです。ですから、そのような人たちでしたので、そのインタビューが終わった直後、すぐ私のところへ連絡がもうそれぞれあったんですけども、ほとんど一様に言ってたのは「なんか大したことできませんでした」「申し訳ありませんでした」、「なんかかっこいいとこ見せられませんでした」。まあ大体、口々にそう言っていたわけです。まあ、「ですが、真剣に、真面目にお伝えはしました。なぜならばインタビューする学生さんたちが本当に真剣に、真面目にいろいろ質問をしてきたのですから、それに誠実にお答えをしました」ということでした。ですから、まあ中身はともかく、そうですね、やっぱり実習生を迎えた実習指導者的なやり方はできていたのかなというふうに思います。そうしていたところ、そうですね、ちょっと話挿入しますけども、第1次派遣が終わった後の6月でした。遠藤先生と、あと松宮先生でしたか、が仙台に参りまして、そのときまたお会いをしたんですけども、そのときに先ほど、先ほど上映された何ていうんですか、これは。

遠藤:ムービーです。

高橋:ムービーですか。未完成版ですかね。

遠藤:原型版です。

高橋:原型版。完成版じゃなかったですけども、途中の、中間のムービーを私、食事をしなが ら、お酒を飲みながら、あれを見せてもらったわけですけども、もう途端大変でしたね。僕は もう涙を禁じえなかった。感動しました。これまでの完成度はなかったですけども、エッセン スはあったわけで、とても感動しました。一度やっただけで、こんなものを学生さん方が感じ とってくれたのかなというように思いました。で、先ほど遠藤先生のお話があったように 12 月 28 日に、宮城で意見交換会とおっしゃいますけども、わが社会福祉士会では会員の皆さん に周知したのは、成果報告会というタイトルにしてました。学生さん方がこういう成果があっ たよということでの報告会を催すのでみんな集まれという、そういうチラシを出したんです。 ですから、意見交換会というよりも、なんて言うんですかね、フィードバックの会ですね。フ ィードバックの会に位置付けたわけです。それで、そのとき学生さん方、それから先生方にも いらしていただいたんですけども、そのときもザ・ムービーの上映はあったわけです。それで、 私はそのとき2度目拝見したんですけども、そこに集まった者たちはほとんど初めて拝見した わけで、やはりわれわれ先輩ソーシャルワーカーとしては感激、感動そのものでしたね。それ が報告会での様子です。ですから、報告会の中身もですね、意見交換の中身も、やっぱりそう ですね、こんなふうにまとめていただいて、こんなふうに感じとっていただいて、ありがとう、 ありがとうでした、はい。ですから、私は今日馳せ参じたのは、やはり重ねてありがとうを言 うために参ったのですけども、本当に感謝感激でございました。で、そのムービーにもありま したけども、私なりの捉え方。ちょっと復唱したいんですけども、4つのキーワードがレジュ メの中にもあると思うんですけども、皆さんがよく、やっぱり感じて学習されたと思う点につ いて、わたし、先輩から申し上げたいんですけども、というのは、何もできなかった、なんだ か言いながら、静かに、静かに、実は徹底して、クライアントの話を徹底して聞くんだとか、 それから、支援のネットにつないでいくんだとか、あるいはそれをコーディネート、マネジメ

ントするんだとか、そういったことはごくごく自然に、静かにやってましたよっていうまとめ が学生さん方にありました。

ですから、先ほど申し上げた私どもが汗まみれ、泥まみれ、何とかまみれでかっこ悪いと思ってたのが、実はそれがかっこいいっていうふうに言ってもらってたわけですよ。本当にこんな感動はないですね。本当に僕らは十分なことができてない。本当に振り返るとですね、茫然自失状態ですからね。一体何ができるんだろう、何しよう。分かんないけども、目の前のことを片付けていこう。そんな感じですからね。とてもじゃないけどもソーシャルワークをやってるとは誰も思ってないわけですよ。そんな中でも「ソーシャルワークの手法を取り入れてやってましたよ」と、そういうふうになんていうかな、リフレームしてもらうと、本当にああそうなんだなって改めて思う瞬間。むしろなんですかね、実習指導者がむしろどうでしょう、学生さんにスーパービジョンしてもらった感じ。そんな感じがするわけです。とてもしました。

それで4つのキーワードにちょっと戻りますけども、すごいですよね。これは現場ならでは だと思いますよ。

まず最初に、初期アセスメント、気付きですよね。現場を見て何が必要か、何ができるのかをきちっとイメージしてくんだっていうことですね。そういうことが災害ソーシャルワークの上では必要だっていうことを現場を見て、現場のワーカーに話を聞きながらそこを受け取ってくれたということは、とても、やっぱり現場ならではのことなんじゃないかなというふうに思いました。

2 つ目に道具を使うというのはね、これも驚きましたね、こういう表現ね。私ども社会福祉士は、あるいはソーシャルワーカーはある意味でツールを持たない、道具を使わないものだというふうに思ってたところ、きちんと道具を引っ張ってきて、関わりのきっかけづくりをするのだということを学生さん方がきちっとまとめてくれた。いきなり「ソーシャルワーカーです」あるいは「社会福祉士です」あるいは「福祉援助です」って言っても相手は面食らうだけですので、やはりそこに医療とか保健だとかそういったところの切り口を引き出しながら、そこで福祉の中に入っていく。あるいは福祉の場を展開していくっていうことができるのだっていうことは、本当に学生さん方の受け止めから僕らは教えてもらいました。本当にそうなんだなと思うんです。ですからあれですね、ソーシャルワークの、なんですかね、発災のときの一番、第1次救急的にはソーシャルワークではないんだということにもなるかもしれませんけども、そのすぐ後釜にソーシャルワークは展開できるんだよというようなことも、皆さんにやっぱり教えてもらったんだというふうに思います。

それから3つ目です。やはり援助者、支援者も茫然自失状態でしたので、当然被災者は茫然自失です。そのときに自らのニーズに誰も気が付かない。ですから、相談に来るのを待ってるっていうことではないわけですね、特に災害時は。そのときにアウトリーチを、先輩方アウトリーチしてましたよっていうことをちゃんと見てもらった。そこは本当にすごいエンパワーメントでしたね。はい、本当にそう見てもらったんだなっていう気がします。それから、そのアウトリーチすることが、2次災害の予防になるんだよと。アウトリーチしながら福祉支援を展開していくことは災害防止、2次災害防止になるんだよということも学生さん方に教えていただいたっていう気がします。まあ僕らは意識化しないでそういうことをやってるわけですけども、それをちゃんと意識化してもらったという、本当にありがたかったです。それから4つ目

ですね。

キーワードの4つ目は支援、資源につなげることってありましたけども、これは将来に向けてつなぐことっていうことを中身としては学生さん方は言ってるわけで、つまり、将来の予測をしながら、予測を立てながら、見立てをしながら、先に向かってつないでくんだよっていうことです。それがワーカーにはできるんだよっていうことをまとめてもらいました。

本当にぐじゃぐじゃ訳分かんなくやってるときにですね、このようにすっきりと整理していただいた。もう本当にそれはありがたかったです。こういったことが報告会を経て、あるいはムービーを見せていただいて、それから報告書を読ませていただいて先輩ワーカーとしてはすごくありがたかったなというふうに思うところです。ありがとうございました。

それでは、いよいよ話は終わっていくわけですけども、学生さん方なりにこのように成果を報告してもらったんですけども、その成果を今度はそうですね、こちらなりというか先輩たちなりの評価を付け加えたいと思います。

今回のプロジェクトは要するに大成功だった。まだ終結は迎えてませんけども、ここまでのところフィールドワークとしては、私は大成功だったというふうに思ってます。で、なぜ大成功だったかっていうことですね。そこを整理してみたいと思うんですけども。1つは先ほど来申し上げてるとおり、私たちのやってることをきちっと聞き取っていただいて、まとめていただいたということです。そして、その言葉によるインタビューだけじゃなくて、私どもの、いわゆるノンバーバルコミュニケーションというんでしょうか、姿形も見ていただいて、あるいは活動のエリアとかも見ていただいて、いろんなことを感じ取っていただきました。そしてそれをまとめていただきました。これがわれわれにとっては最大のエンパワーメントなんです、はい。本当にね、本当にさっきも言いましたように学生さんにスーパービジョンしてもらったっていう感じですよ、本当に。そこは本当にありがとう。感謝感激ですね。それが1つです。



もう1つは、私どもが組織としてこの受け入れに当たって設計したもの。それは、社会福祉 現場実習として一貫してやろうということでした。その切り口で見ると、どうですか。このプロジェクトに参加した学生さん。あるいは語り部とかこういうシンポジウムとか聞いた学生さんが十分に育ってると思うんですね。短期間に急成長してるというふうに、実習指導者側から見ると思います。だってスーパービジョンしてくれるんですから。そこまで成長してるんです から。ですから実習としても大成功だったというふうに私はまとめたいと思います。ですから 私どもがエンパワーメントしてもらった。そして学生さんたちも育てもらったということです。 この2点を、今回のプロジェクトの大成功のまとめにしたいと思います、はい。

これからは励ましの部分かもしれないんですけども、これから先、このプロジェクトを第4 次、第5次とか、何次まで続くか分かんないですけども、それをまあ適宜あるいは最後に総括 的にまとめて、そのアーカイブとしての記録を残し、社会に発信し、そして来たるべき災害時 の対応マニュアル、そこへのソーシャルワーカーの参画というあたりをですね、そういった大 きな地図をちゃんと書いてくれるんだなというふうにご期待するところであります。私は仙台 市におりまして自治体の職員でもあります。ですからそちらでの災害対応というのもありまし た。で、私、あるいは私どもの自治体での復興に向けての、最優先目標を何にしてるかという と、これご紹介しながら申し上げますと、いろんな復興があります。復興住宅を作るとかそう いったこともあります。でも、そんなことじゃないです。そういう喫緊なというか、目の前の ことじゃなくて本当の復興は、子どもたちあるいは若者をちゃんとした大人に育てていくこと っていうことに目標を掲げています。なぜならば本当の復興の担い手は若い人たちだからです。 次の世代の人たちだということです。その上においても今回学生さんたちに育っていただいた ことは、本当に、本当に、積み上げになっていくんだなということでございます。私、児童福 祉に今身を置いているものですから、再度申し上げますと、この復興あるいはこの支援の輪と いうのが絆とすれば、今回プロジェクトの皆さんと、それからわれわれ現場の社会福祉士、ソ ーシャルワーカーとは本当に絆ができたと思いました。本当に思いました。実感しました。涙 が出るぐらい実感したわけです。

で、話戻りますけども、この絆、やっぱ絆というね、支援のいわゆるネットですね。ネットができたかどうか、絆ができてるかどうかっていうのが、子どもたち、若者たちの置かれた現状を見れば分かるわけです。と言ってもピンとこない。なぜならば、子どもたちの現状がどうか。子どもたちは今。「キッズ ナウ (=絆)」というわけです。どうですか。ウケませんか。以上、終わります。

菱沼:高橋さん、どうもありがとうございました。今このプロジェクトの学生たちをどんな思いで受け入れをしてきたのかという思いについてお話をいただきました。これまでですね、プロジェクトは第4次まで行っておりまして、遠藤先生からご用意いただいた資料でいきますと、皆さんのお手元の資料 7 ページ、8 ページにですね、これまでのものが掲載されています。学生たちがどんなことをですね、現地のソーシャルワーカーの方から学んだのか、それをですね、この後、登壇いただいてご報告をいただきたいと思います。そうしましたらここでいったん休憩を挟ませていただきまして、2 時 15 分から再開をさせていただきますのでご休憩ください。なお、文京学院大学さんのほうから飲み物をご用意いただいておりますので、どうぞ召し上がっていただければと思います。

【学生発表】

菱沼: 再開をさせていただきたいと思います。大変申し遅れましたけれども、今さらですけど、 本日、司会を務めさせていただいております日本社会事業大学の菱沼です。よろしくお願いい たします。この事業なんですけれども、これにつきましては福祉医療機構から多大なご支援をいただいて開催させていただいていることをお知らせさせていただきます。また、日本社会福祉士会からもご後援いただいておりますので、ここで感謝申し上げたいと思います。ありがとうございます。それでは、ここからはパネルディスカッションということで進めてまいりたいと思います。これまで参加をした学生たち、それから卒業生も含まれていますけれども、3大学のほうからそれぞれご報告をいただくことになっております。ここからの進行は、文京学院大学の鳥羽先生にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

*

鳥羽:よろしくお願いいたします。これよりパネルディスカッションを開始いたします。コーディネーターを務めさせていただきます文京学院大学の鳥羽と申します。よろしくお願いいたします。パネルディスカッションのメンバーは、講師の宮城県社会福祉士会事務局長、先ほどお話しいただきました高橋達男先生、そして、学生3名ということで進めていきたいと思います。まず、学生の方の発表を先に進めたいと思います。ご紹介いたします。文京学院大学人間学部4年小野綾子さん。そして、2番目に発表いたしますのが淑徳大学総合福祉学部3年大藤未来さん。そして3番目に発表していただくのが、日本社会事業大学社会福祉学部平成24年度卒の野澤千明さんです。よろしくお願いいたします。それでは、まず最初に文京学院大学の小野綾子さんから発表をお願いいたします。

小野:文京学院大学人間学部人間福祉学科4年小野綾子です。これから発表を始めます。

私は、「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」第 4 次派遣に参加し、福島県に行ってきました。参加概要はスライドのとおりです。私たちはまず事前学習として夏休みに入ってからプロジェクトの概要やインタビュー対象者、インタビュー方法などを学び、また、被災地の状況の一例として東松島市で働く保健師の方たちの取り組みについて、ビデオ等を中心に学習しました。また、災害時のソーシャルワーク実習に関して、過去の"声"プロジェクトの取り組みの資料を中心に学びました。それに加えて各自で福島県のおかれている状況やインタビュー先のいわき市、郡山市について調べました。

プロジェクト初日には、オリエンテーションで、災害支援における社会福祉専門職ソーシャルワーカーに声を当て、ソーシャルワーカーに焦点を当てたプロジェクトということを基本的な考え方として、参加者全員の共通認識としました。さらに災害時にソーシャルワーカーがどのようにして災害支援を行っていたか、その経験を聞きとり、分析し、記録として残すこと。その後に学生自らが語り部となり、発信していくという目標を再確認しました。

また、初日には福島県社会福祉士会会長島野さんのお話を伺いました。島野さんは、郡山市 医療介護病院の企画調整課長兼保健福祉等事業推進室長でソーシャルワーカーです。島野さん から福島県の現状とソーシャルワーカーについての講義をしていただき、まず放射線について 学びました。福島県が震災により受けた被害は、他県と同じように津波のこともありましたが、テレビなどでも伝えられているように、放射線の被害がとても大きかったことが分かりました。 放射線は目に見えないために、その見えない恐怖から震災発生後に支援物資などが届かなくな

ってしまったそうです。また、福島県内は津波の被害は少なかったため、家屋等は多数残っていますが、線量の高い地域では立ち入りが制限されています。そのため家があっても帰れないという状況で、支援は被災した場所ではなく避難先となっていました。避難先も県の内外とかなり点々としており、支援方法もさまざまとなりましたが、島野さんは避難先で当たり前の普通の生活ができるように支援してほしいと、県内の社会福祉士にメッセージを出したそうです。後ほども触れますが、福島県社会福祉士会の取り組みとしては、福島県相談支援専門職チームを立ち上げ、介護支援専門員協会、医療ソーシャルワーカー協会などとともにチームで動き出したことが大きな取り組みとして挙げられます。こうした取り組みは時間との勝負といった側面もあり、対応の速さが求められたそうですが、福島県社会福祉士会の会長という立場でさまざまな指示も求められ、そして予測も支援も同時に行っていくという、とても易しいことではないと感じました。また、日ごろからの関係づくりが迅速な対応の土台となっていたことが分かりました。

次に、2 日目に被災地の訪問を行いました。まず宮城県まで足を伸ばし、名取市閖上地区の 閖上中学校周辺に行きました。名取市は津波の被害で約900人の人が犠牲になり、そのほとん どがこの閖上地区に集中していました。閖上中学校では生徒14名が犠牲になり、震災から2 年半たっても周りは荒涼としたままで、中学校や近くの寺院に線香や花を手向ける人が絶えず いました。また、次のスライドですが、次に訪問したのは福島県双葉郡富岡町です。こちらは 津波被害とともに福島第一原発の事故の影響で警戒区域となり、全町民が避難しました。現在 では、警戒区域は解除されましたが、居住制限区域、帰還困難区域、避難指示解除準備区域と いうことで、住民の仮設住宅はいわき市や郡山市にあります。家屋等が破壊されていてもその ままの状態でおかれている現状でした。

次のスライドですが、同じく双葉郡で福島第二原発の近くです。これらのように、宮城県の 被災状況と比べても、福島県内の被災状況は大きく異なっていることが、実際に現地に行って みて初めて分かりました。

続いて、介護老人保健施設の楢葉ときわ苑施設長、渡辺さんへのインタビューについてです。 楢葉ときわ苑は、現在いわき市にて仮設の老健として運営されています。建物はとても立派で 一見仮設というイメージではなかったので、なぜ「仮設」と表記されているのか疑問に思いま した。その理由はインタビューでお聞きすることができました。まず、震災発生後、3月12 日に双葉郡楢葉町から避難指示が出て、88名のお年寄りと37名の職員が取る物も取りあえず いわき市の小学校へ避難したときから、床に段ボールと毛布をひき、足の踏み場もない状況下 で、食べ物もカップラーメンなど嚥下困難な高齢者にとっては摂取困難なものが支給されたり、 困難の連続だったといいます。そんな状況の中、お年寄りの健康被害が出てきて、施設長は決 断を迫られたそうです。職員も被災者であり、家族とも連絡が取れない中、しかし、目の前の 利用者さんの命を明日につなぐという使命感で、職種は関係なく利用者さんのお世話をしてい たそうです。

そんな中、原発で水素爆発が起こったという状況がやっと情報として伝わり、2次避難先確保のために動いたといいます。いくら専門職だといっても環境が何も整っていなければ素人と同じ。あとは気持ちだけあるのみという状況の中、職員も専門職といっても個人として戻ったときには、避難先の家族のもとに行きたいという気持ちもあり、もし死ぬようなことになって

も同じ死であれば家族と死にたいという職員の気持ちも受け止めつつ、残った職員とともに施設長はとにかく行政にかけあって集団避難を要請したそうですが、「困っているのはお宅だけではない」と言われたそうで、そのとき個別化の原則について考えさせられたそうです。そして、食べ物もなく十分なケアを受けられない状態というのは権利侵害であると感じ、ある病院に交渉して2次避難先として受け入れてもらいました。そのときお年寄りは77名、職員に関しては一緒に行く職員を募り、ほかの職員は自宅待機してもらったそうです。また、「あんたたちと一緒にいたい、必ず迎えに来てね」というお年寄りの言葉を胸に、その後2012年から始まった社会福祉施設等災害復旧費補助金の対象となり、2013年3月に仮設老健としていわき市にて事業再開することができたそうです。渡辺施設長がおっしゃっていたのは、ただ黙って行政の施策を待っていて復興できるのだろうか。一人一人が社会資源となり、ソーシャルアクションを展開していくことが地域の復興につながるという言葉であり、これはまさにソーシャルワークであると思いました。いわき市内の施設はあくまで仮設であり、双葉郡に戻りたいというお年寄りの希望の灯を消してはならないという渡辺さんの強い意志と実行力を感じました。

次に、福島県社会福祉士会事務局和田さんへのインタビューを行いました。和田さんは事務 局として施設や事業所で物資不足の中、必要な物を必要な場所へ届ける調整を中心に活動され ていました。また、先ほど述べたように県内の職能団体が集まり、福島県相談支援専門職チー ムができましたが、その活動においても和田さんは積極的に関わったそうです。和田さんをは じめ、支援者が避難所や事業所を回って情報を集め、それを支援に活かすネットワークがつく られていったそうです。福島県社会福祉士会は、そのコーディネート役であったそうです。和 田さんは、それぞればらばらに動いていると、1人の人に「何か困っていることがありますか」 と1日に8回も同じ質問を別々の支援者がすることとなり、それでは利用者支援にはならない と語られました。和田さんの活動は、一言で言えば交通整理をしていたことだと振り返られま した。これは施設ではない、事務局だからできたことであるとも語られました。ビッグパレッ トふくしまにも和田さんの案内で行くことができました。ここは福島県内最大の避難所だった 場所で一時期は 2,500 名が避難していたそうです。そこで相談支援チームはまず、避難所のど こでどのようなニーズが発生しているのかを把握し、ニーズを支援につなげる活動を行ったそ うです。また、さらに郡山市内の富岡町仮設住宅にも足を運び、その地域福祉の拠点であるお 互いさまセンターの見学もしました。少しずつですが、復興に向けた取り組みがなされている ことを感じました。最終日にグループディスカッションを行い、全体の振り返りを行いました。 福島県はほかの被災地と異なり、原発の事故の影響を受けてしまったこと、そのために見えな い放射線というものの恐怖により、いわれなき偏見を持たれてしまった現実があることを確認 しました。また、「復興は始まっていない」という言葉も多く聞かれました。こうした困難な 状況の中でも、復興に向けてソーシャルワーカーによる粘り強い取り組みがなされていたこと に深い感銘を受けました。

最後に、災害時のソーシャルワーカーの役割について、被災者の表明されないニーズをいか にくみ取るか。声なき声の代弁の重要性、また被災者に対し共感する力、受け止める力などの ソーシャルワーカーの専門性が必要とされていたと感じました。震災時、困難な中でもソーシャルワーカーの専門性は生かされていたとインタビューを通して実感しました。私は4月から 都内の特別養護老人ホームで働きますが、どのような現場、場面においても目に見えないニーズをくみ取っていくこと。それを代弁し、何もないのであれば自らがつくり出すこと、さらに東北の方々のように日ごろからの関係づくりに努めていきたいと思います。以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

鳥羽:はい。小野さん、ありがとうございました。皆さん方に質問用紙をお配りしておりますので、発表の学生さんたちに、感想でもいいですし、何か質問がありましたらぜひお書きください。それでは、続きまして、淑徳大学大藤さん、お願いいたします。

大藤: 淑徳大学総合福祉学部社会福祉学科3年の大藤未来と申します。発表を始める前にパワーポイントに少し訂正を加えたため、お手元の資料と異なる箇所があります。ご了承ください。早速ですが、発表を始めさせていただきたいと思います。私は、「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」の第3次派遣に参加し、平成25年の3月3日から3月7日まで宮城県に行かせていただきました。プログラムとしては、ソーシャルワーカーへのインタビューを中心として、宮城県社会福祉士会の方の講義を聞いたり、被災地訪問や他大学との合同グループ討議なども行われました。私はこの"声"プロジェクトに参加する前は、正直、学生である私ができることが本当にあるのか、また自分に務まるのかという不安な気持ちをすごく持っていました。けれども、同時に被災地のソーシャルワーカーが自分も被災しながらどんな活動をしたのかということを純粋に知りたいという気持ちも持っていました。

では、まず被災地訪問についての話をさせていただきたいと思います。私たち淑徳大学の学生は、松島市、石巻市雄勝町、名取市の閖上地区を訪問しました。ここからは訪問時に撮った数枚の写真とともに私の感じた思いを述べさせていただきたいと思います。

これは石巻市の雄勝総合市役所の屋上から見た景色です。このように市役所の目の前に海があり、津波により3階まで水が来たそうです。市役所では、この写真のようにほかの部屋も書類や津波で流されてきた物が散乱していました。今だに津波の爪跡が生々しく残されたままであり、震災のときから時が止まってしまっているように感じました。ここで私たちは津波で流されてきたであろう卒業証書を拾いました。その卒業証書の日にちは3月11日でした。それを見た私たちは、言葉にできないやるせなさを感じました。

これは閖上中学校の写真です。津波から逃れるため、大勢の人たちがこの閖上中学校を目指し走りました。この中学校は海から約2キロ離れていましたが、2階あたりまで水が来たようでした。学校前には献花台があり、私たちも献花をさせていただきました。そしてこの閖上中学校から少し離れたところにこの閖上神社があり、ここら辺の高いところというと、閖上中学校かこの神社だったそうです。そのため、津波が来た際にここに避難した方もいたけれど、ここも津波に飲み込まれてしまい、結果として多くの方が亡くなられてしまったそうです。閖上では大津波によって900人近い住民が亡くなり、90パーセント以上の家屋が破壊されてしまいました。初めてここを訪れた私たちには以前の町並みを想像することが難しいほどの更地が広がっていました。全てを一瞬で奪ってしまう津波の脅威を嫌というほど感じました。かつて数千人が住んでたこの場所に今はほとんど誰も暮らしていないと聞き、「復興」という言葉の重みを感じました。

では、ここからソーシャルワーカーへのインタビュー内容について発表させていただきたい と思います。私たち淑徳大学の学生は、2人のソーシャルワーカーの方にインタビューをさせ ていただきました。

1人目は地域包括支援センターのIさんです。Iさんは震災当時、利用者の方の家へ訪問中でした。揺れが落ち着くまで利用者の方としばらく一緒におり、その後いったん職場に戻りました。それからすぐに自転車を使い、独居高齢者宅へ安否確認に向かいました。その際、近所の方や民生委員、ヘルパーも安否確認を行ってくれており、地域のネットワークの構築ができていたと話してくださいました。そして、安否確認の際、常日ごろから接しているからこそ、その人に何が、今何が必要か、何が危険かといったその人の状況が分かるとおっしゃっていました。避難所への訪問などを行った際、最初のころはみんな食べ物や着る物の相談事が多かったけれど、時がたつと人間関係のことについてなどが多くなってきたということでした。そのような中でソーシャルワーカーだからこそできた支援を聞いたところ、「話を聞くこと」と答えてくださいました。「その人の話をじっくり聞くことで今この人がなぜこういう状況になっているのか背景を知り、必要な支援につなげることができる」ということでした。

2人目は宮城県スキップケアプランセンターのAさんです。Aさんは、震災当時車で仙台市におり、自分や家族のことよりもまず利用者の安全が心配になり、取りあえず職場に行くことを決めたとおっしゃっていました。しかし、地割れや渋滞の影響でなかなか車が進まなく、そんなときに職場の仲間からAさんの担当高齢者の安否確認を終えたと連絡が来たそうです。ここでチームの大切さを感じたそうです。また、Aさんは「普段から地域の方々とコミュニケーションを取っていたことがよかった」と話してくださいました。震災後、認知症高齢者の方の異変に気付いたら連絡をくれるようにという近隣の方々の協力もスムーズに仰げたそうです。なので、Aさんは「被災地の支援も通常の支援の延長という意識で行っていた」とおっしゃっていました。

では、次にこのインタビューを通して学んだことを発表していきたいと思います。「災害時のソーシャルワークの視点と価値、役割の本質とは何か」を特に学ぶことができました。ここでは4つ挙げたいと思います。

1 つ目は情報の統合です。機能しなくなってしまった元のネットワークや社会資源に必要な情報を収集し、統合して、その場に合わせて臨機応変に使っていくことがソーシャルワーカーには求められると分かりました。

2 つ目は、福祉も命を守る仕事であるということです。テレビなどでは生死の問題ばかりが 取り上げられ、自衛隊や医療の活躍が多く報じられていました。医療などは命を直接救い、守 る仕事であるけれども、福祉は命を直接救えないのではないかと考えていました。けれども、 福祉も命を守る仕事であり、医療によって救われた命を継続的に守っていくものであると学び ました。

3つ目は、存在の次元を支えていくということです。たとえ命が救われた人の中にも、「死んでもいい」と考えてしまう人もいます。例えば子どもに自分の生きる価値を見出している人が子どもを亡くしたとき、「自分単体では生きる意味がない」と思ってしまう。そのような人に対して継続的な訪問などの支援を通じて、「私を気にかけてくれてる人がいる、私にも生きる価値がある」と感じてもらえるようにすることがソーシャルワーカーの役割だと感じました。

4 つ目は、平時からの取り組みです。 I さんやA さんのお話から、普段やっていないことが 緊急時だからといって急にできるものではないと分かりました。平時から地域の方々とのコミ ュニケーションを大切にし、つながりをつくっていくことが重要だと学びました。

次にグループ討議について発表していきたいと思います。最終日には、インタビューや現地 視察など全てのプログラムを踏まえて、「災害時ソーシャルワーカーだからできたことは何か」 をテーマに、ただい、他大学合同のグループ討議を行いました。そこでは、平時からいろいろ なネットワークを持っているソーシャルワーカーだからこそいろいろな場所に赴き、住民同士 や医療と福祉などさまざまな分野をつなぐことができた。また、日常から地域と関わっている ソーシャルワーカーだからこそ、人の潜在的ニーズに気付き、対象者の心といった見えないと ころの支援を果たすことができたのではないかという意見が出ました。

プロジェクト中はこのグループ討議だけではなく、1日の終わりに毎回他大学とのミーティングが行われていました。そこで自分と同じソーシャルワーカーを目指す人と話をすることで刺激を受けることができました。そして、自分自身の勉強不足の面や意識の甘さを知り、成長していかなければいけないと強く思いました。

最後に、このプロジェクトに参加しての感想を述べたいと思います。「1、インタビューによ って引き出されるもの」は、発表の最初のほうに、このプロジェクトに参加する前は、学生で ある私にできることが本当にあるのかという気持ちを持っていたと話をさせていただきまし た。けれども、実際インタビューを行い、学生という立場の私たちがインタビューをすること によって、ソーシャルワーカー本人が意識していないことや当たり前だと思っていた働きを引 き出すことができ、ありのままに話してもらえたのではないかと感じました。2 番目は「日常 で見えにくいものが見えた」。被災地のソーシャルワーカーが行ったことは決して特別なもの ではなく、日常から行っていたことの延長でした。それが震災で社会資源が限られた中で行わ れたことではっきりと見えたと思いました。「3、非日常の中で日常が鮮明になる機会」。これ は少し2番ともかぶっているのですが、このプロジェクトの中で宮城県社会福祉士会の方が講 義で、「普段形づけられていたように感じていたものができていなかったことが浮き彫りにな った」とおっしゃっていました。この震災は、自分たちの日常の働きを鮮明にする機会にもな ったのだと感じました。「4、私はこのプロジェクトに参加し、この震災のことを忘れてはいけ ない」とあらためて思いました。ソーシャルワーカーや被災者の声を伝えていくという自分自 身の役割を、しっかり果たしていきたいと思います。以上で発表を終わらせていただきたいと 思います。ご清聴ありがとうございました。

鳥羽:はい。大藤さん、ありがとうございました。それでは、続きまして日本社会事業大学卒業生の野澤さん、ご発表をお願いいたします。

野澤: 改めまして、日本社会事業大学社会福祉学部平成 24 年度卒の野澤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私がこのプロジェクトに参加した理由は、まず1つ目としては震災をきっかけに被災地支援 に興味を持ったということです。私が震災を経験したのは大学2年生から3年生になるときの 春休みでした。そのときに実際に震災に遭って、寮の入寮……大学のとき寮に入っていたんで すけれども、入寮とかにも関してその震災がかなり関わったということで、その後もまたその 被災地の支援を続けていきたいというふうに思いました。もう1つはソーシャルワークを学ぶ 学生として、災害時におけるソーシャルワークを学びたいと思ったからです。このプロジェク トの前にも何度か宮城県の気仙沼のほうだったりとか、岩手県の大槌町のあたりだったりとか の災害支援ということでボランティアに行かせていただいたんですけれども、多くが学習支援 だったりとか、がれきの撤去だったりとか、そういう、どんな学生でもできるようなボランティアでした。もともとソーシャルワーカーになるために学んでいる学生として、そういう単発 のボランティアだけでいいのか。ソーシャルワーカーらしく被災地を学ぶことはできないかと いうふうに思ったのが大きなきっかけです。

私は第 2 次派遣の岩手県のほうに参加をさせていただきました。行ったのは平成 22 年の 8 月です。5 日間の日程で行われて、以下のとおりとなっております。

1 日目に講義として岩手県社会福祉士会の取り組みを事務局長の佐々木さんよりお伺いしま した。まず最初に佐々木さんが現在の理事、施設長を務めているという社会福祉法人岩手和敬 会での取り組みを、お話をお伺いしました。和敬会では医療と福祉の連携を深めており、被災 時にもその連携が生きたということでした。また、佐々木さんは「挑戦すること」をとても大 切にされていて、「挑戦の先には成功しかない。大きな挑戦の先には大きな成功しかない。失 敗とは何もしないこと、行動しないこと」という言葉がとても心に残りました。また、今回の 震災時に行われた支援のシステムについてもお話を伺い、県外からソーシャルワーカーが何人 も支援に来たということだったんですけれども、県外から来たワーカーが事務仕事に回って現 地のソーシャルワーカーが地域を回るというシステムをつくって支援に当たっていたという ことです。しかし、現地のソーシャルワーカーは自分も被災者であるということもあるので、 ソーシャルワーカーへの支援ということも必要だというふうにお話しされていました。また、 あと今後のことについてですけれども、震災直後は目の前の命のことで精いっぱいだったとい うことで、専門職が専門職として仕事ができなかったのではないかというふうに感じられてい たそうです。現地の、また、その現地のソーシャルワーカーが、被災者であったということも あって、中には同僚とか家族を亡くしてしまった方もいたそうなんですけれども、そういう方 がより自分がやらなければいけないというふうな強い思いを持っていたということで、寝ずに 仕事を続けていた方もいたそうです。そういう方に対してどういう支援をしていくのかという ことも今後の課題になるのではないかということでした。で、災害時の医療のシステムとして DMAT、災害派遣医療チームというものがございますが、今後は災害派遣福祉チーム、DWAT とい うものの構築の重要性もあるのではないかということをお話ししていただきました。

その後、被災地の視察に回らせていただきました。日本社会事業大学から一緒に参加した方の中に、もともと岩手県にお住まいで震災をきっかけに東京のほうに引っ越していらっしゃった方がいまして、その方と一緒に回ることで被災前の様子を伺いながら、勉強になりました。この写真は住民の避難場所としてあったホールです。避難室と書いてあるんですけれども、天井のほうまで津波が来てしまって、ここは結果として避難室としては機能しなかったということです。同じ建物の屋根の上の部分なんですけれども、ここも津波が来て、これよりもう1つ上にはしごで上れる屋上があって、そこまで上がらないと津波からは逃れられなかったということでした。この時点ではまだ流れてきた物がここに残っているような状態です。ちょっと

遠いのですが、こちら骨組みだけとなってしまった保育園です。こちらも高校です。建物自体 は3階建てなんですけれども3階まで波が来ていたそうです。同じ高校の玄関と、前に高校の 中にあった机とかそういった物が散乱しているような状態でした。こちらは体育館です。近く にあった市役所です。右側の奥のほうにちょっと木の枠みたい物が見えると思うんですけれど も、あのあたりに献花台があって千羽鶴がたくさん掛けられていました。こちらは海の様子で す。漁港にあった看板なんですけれども、こちらは流されて足のところがぐにゃりと曲がって しまっています。その向こうの海の中にぽつぽつとコンクリートのような物が見えると思うん ですけれども、これはもともと防波堤だったものです。今回の津波で全て防波堤は流されてし まっていて、その海岸の形すらも変わってしまったということです。海の近くにあった石碑な んですけれども、チリ地震のときにも津波の被害を受けていて、その教訓でこれより上に逃げ なきゃいけないというような言い伝えがあったそうなんですけれども、その言い伝えが今回の 地震のときまで、覚えている方がいてもなかなかその教訓が生かされず、逃げることが遅くな ってしまったというふうに現地の方からお話を伺いました。なので、このように大きな石碑を 残して、これより上には逃げなきゃいけないということを後世まで伝えていきたいということ でした。これは、釜石駅の前にある復興の鐘です。4 つの言葉が周りにしるされていて、希望 とか記憶っていうところは、希望というところは現地の方の希望だと思うんですけれども、記 憶っていうのは誰にとっても忘れてはいけない、風化させてはいけないっていうような思いを 強く残りました。

続いてインタビューの内容に入らせていただきます。まずお一人目は、就労継続支援新潟事業所のサービス管理者をやっている菅野さんのお話を伺いました。と、震災が起きた3月11日、作業所のほうではいつもどおりの作業が行われており、震災が発生した当時は、利用者の方が皆さん集まっていたため、その後避難等はスムーズに行えたということです。しかし、作業所まで波が来てしまったため、その日の避難場所を確保するために、2カ所、3カ所と施設、近くの施設を渡り歩いたということです。いろいろとお話を伺う中でボランティアについて伺いました。私自身も単発で1日だけのがれき撤去等のボランティアに参加したこともあって、そういう形でのボランティアについてどういうふうに思うのかということをお伺いしたんですけれども、菅野さんご自身としては、1日でも来ていただける、来てもらえることはありがたいというお言葉を伺いました。

ただ、中には何をお願いすればいいのか分からないようなボランティアの方もいらっしゃって、そういうミスマッチがどれだけ少なくできるのかということは問題になるのではないかなとおっしゃっておりました。また、専門職への援助についてですけれども、佐々木さんのお話と同じように、やはり専門職の中にも、中でもその被害を受けた方であったりとか、家族の方を震災で亡くした方はいて、そういう専門職への援助というものもこれから必要になっていくのではないかというお話でした。ただ、専門職への援助という面では、精神保健福祉士とかに相談をするということよりも、一緒に働いている仲間同士でその経験を分かち合うことっていうほうが、実際に被災した方々にも心のケアにはつながったということでした。今回の経験から、緊急事態が起きた場合のマニュアルがあればよかったなということをお話しされていました。また、盲ろう者の利用者への支援が少なかったことが課題だったということです。最後に、これからソーシャルワーカーを目指す私たちに、今回の震災をきっかけに人と人とのつながり

が増えたと感じて、福祉に関係していないつながりであっても、いろいろ強く支援につながる こともあると教えてくださいました。学生のうちにいろんなことに触れて免疫をつけていって ほしいというふうに伝えてもらいました。

次に、大槌町の地域包括支援センターの元持さんのお話です。被災当時、元持さんは大槌町にはいらっしゃらなかったそうです。4月から働くことになっていたそうで、被災してすぐに異動の希望を出したということでした。最初は本当に支援物資とかそういう物に関する援助が主だったということで、そういった物が落ち着いてから実際アウトリーチをして、地域の高齢者の方への支援を行ったということです。震災から、私たちがインタビューを行った時点では1年半を経過していたんですけれども、その時点での課題としては仮設で生活していると、人と在宅で生活している人の間に生じてしまった距離を改善していくことだとお話ししてくださいました。

最後に合同ミーティングがありました。学生それぞれから感じたことをお話をして、被災以前の私たちは視察のときにもともと住んでいた方から写真を見せていただいたりしながら、視察をさせていただいたので、被災以前の状況を知ったことで今回改めて被災が、被害の大きさが分かったということ。また、これまで知らなかった現地でのソーシャルワーカーの方の活動を聞いたことで、改めてソーシャルワークということがどういったことなのかを考えさせられたというような思いをさせていただきました。今回を通じて学んだことです。視察を通して、これまでも被災地に行ったことがあったので、被災地の状況がどういうものなのか知っていたと、知っているつもりではいましたが、やはりまだ知らないことはたくさんあるんだなということを感じました。また、緊急時のマニュアルがあればよかったというふうなお話をよく聞き、備えるということの難しさを感じました。どんなつながりでも、小さなつながりでも支援に活かせることができるかもしれないということを知って、日々のつながりをどれだけ多く持つかということの大切さを知りました。また、お会いした現地の方から、これからは福祉の力が必要になるというような言葉をたくさんかけていただき、私自身の励みにもなりました。

全体を通して、今回、インタビューという形で被災地に入れたことはとても私にとって大きな経験になりました。現在、赤十字病院でソーシャルワーカーとして働かせていただいております。赤十字というところにいることもあり、今後大きな災害が起きたときにどういう、ソーシャルワーカーとしてどういう支援ができるのか。まだまだ考えていかなければなんないなと、また、今回の経験を活かせていけるように頑張っていきたいというふうに思っております。ありがとうございました。

【討議】

鳥羽:はい、野澤さん、ありがとうございました。それではここで3名の発表が終わりまして、パネルディスカッションのほうに入っていきたいと思います。それでは、高橋先生、どうぞこちらのほうにお願いいたします。質問用紙のほうはお書きいただき、菱沼先生のほうにお渡しいただければと思いますのでよろしくお願いします。パネルディスカッションの討議の中で、お答えいただきたいと思っておりますので、ぜひ、この機会ですので書いていただけたらと思います。よろしくお願いします。

それでは、先ほどの発表では淑徳大学の方が宮城県、そして日本社会事業大学の方が岩手県、文京学院が福島県というように、被災地の3県にそれぞれ出向いてインタビューを実施したというご報告があったわけでございます。高橋先生、そして3名の方から先ほどの発表を踏まえて、議論を深めていこうというふうに思っております。それではよろしくお願いいたします。実はパネルディスカッションのテーマ設定を少ししたほうがよいのではということで、ちょっと参加者で話をしまして、幾つか討議の柱を考えてみました。まず第1番目として、先ほどの学生の発表からもあったんですが、学生の皆さんが実際に現地の視察もしてインタビューに参加して、ソーシャルワーカーの先輩の姿を見てどのような思いを抱いたのか。何を学んだのか。そして、今後の自分にどのように生かしていきたいと思ったのか。そんなようなことを話していただけたらというふうに思います。まず第1番目の柱としては、今の話した内容で進めていきたいと思います。それでは手前のほうからということで、文京学院の小野さんから順々に話した1番目の討議の内容について話してみてください。

小野:ソーシャルワーカーの先輩の姿を見てということで、私はやっぱり医療者とかとはまた違って、ソーシャルワーカーだからこそできることっていうのがあるんだなっていうのが、実際お話を伺って感じました。お二人の発表とかでもあったんですけれども、やっぱりソーシャルワーカーにはほかの職種とは違う、そういう道具があるっていうのが感じて、注射器だったりとか、医師だったらすごく分かりやすいと思うんですけど、ソーシャルワーカーはそういう物がなくても、そういう、いろんな相談技法だったりそういう技術があるっていうのが、また、それが自分自身が常に持っていられるものなので、どういう場面でも、たとえなんか流されちゃったとかそういうことがあっても、いつもその技術を自分が持ってるっていうことがソーシャルワーカーの強みだなっていうことも思いました。

鳥羽:はい。じゃあ、続いて大藤さん、お願いいたします。

大藤: ソーシャルワーカーの先輩の姿を見て、被災地のソーシャルワーカーの方々の活動は安 否確認から始まって、家庭や仮設住宅への訪問で話を聞いたりだとか、支援物資の手配を行っ たりっていう本当に多岐に及ぶものでした。これは、相手一人一人に合わせて支援を行ってい るからであり、ソーシャルワーカーの活動っていうのは相手が必要としてることだったり、求 めていることを臨機応変に行っていくものだと分かりました。なので、本当に幅広い支援を行 うことが必要となり、本当に非常に難しいと思ったんですけども、人が安心して生活していけ るような心だったり、こう、環境の準備をしていくソーシャルワーカーの働きっていうものは、 本当に非常に素敵なものだなと心から思いました。

鳥羽:はい、ありがとうございます。じゃ、野澤さん、お願いします。

野澤: 私がすごく影響を受けたのは、インタビューを1人目にさせていただいた菅野さんの姿でした。発災時に作業所で利用者の方の避難をしていた方なので、発災後すぐに自分のご家族と連絡が取れたのかということが私はとても気になって、インタビューのときに質問をさせていただきました。やはり、発災当時メールも電話もつながらないような状態だったということだったので、すぐに連絡は取れなかったそうなんですけれども、まず自分の家族は大丈夫だということを言い聞かせて菅野さんは利用者さんの避難にあたったということでした。結果として、ご家族は皆さん無事だったということを伺ったんですけれども、この話を聞いて自分に置き換えたときに、私にこういうことができるのかなというふうに思ったのが本心で、そのとき

に菅野さんをワーカーとしてかっこいいなというふうに感じました。私が実際どういう行動を とれるかどうかというのはそのときにならないと分からないことだと思いますし、菅野さんが 今回こういうふうに思われたのが正しいことなのかそうじゃないのかということも、なかなか 答えが出ないことだとは思うんですけれども、純粋に菅野さんのこの行動はかっこいいなとい うふうに思ったし、私もそういうふうになれたらなというふうに感じました。

鳥羽:はい。ありがとうございました。お三方から今どのような思いを抱いたのか、何を学んだのかということでお話しいただきましたが、幾つか出てきたと思うんですけれども、高橋先生のほうからちょっとコメントをいただけたらと思います。いかがでしょうか。小野さんのほうからは、注射器などの医療関係者と違ってツールもなくても、ソーシャルワークの技術があると。それを災害時でも活かすことができるということを学んだという話がありましたけれども、そのあたりはご自身のご経験などからどのようにお感じになりますか。

高橋:結構、最初から難問ですね。そうですね、ソーシャルワークの真髄というか、本質にやっぱ迫ってるような話ですね。ええ。どうでしょう、僕らは外科医が持ってるメスとかそういうのは持ってないにしても、じゃ、どんな技術あるいはどんな知識っていうんでしょうか、なのかなっていうことをぐっと追求していくとですね、人が人として尊厳され、それで成り立つところにずっとそっとっていうか、寄り添っていく、そんな術を身に付けてるってことなんですよね、多分。なので、なんか形には表しにくいっていうことなんですよね、多分ね。なので、どうでしょう、道具はいらないし、あるいは、さっきほかの方がおっしゃったように、臨機応変にとか、それから、実は支援者もソーシャルワーカーも人間であって、家族もあり、住民である一員であるとか、そういう立場もあるわけですよね。そういうものが、こう、寄り添っていける、あるいは本音を引き出していく、そんな術を持っているというのがソーシャルワーカーだと思うわけですね。どうですか、こういう言い方では。受ける?受けない?言いたいことはそういうことでしょう?ね。

鳥羽:はい。ありがとうございます。なかなかソーシャルワーク実践というのは、医師や看護師などと比べて、目に見えやすい支援方法を持たないというところで、なかなか一般社会にも周知しづらい側面があるということにもつながるのかなというふうにも思うんですけれども、今おっしゃってくださった人が人として成り立つための支援であるということなんだと思うんですね。そのための援助技術というものがあるわけですが、なかなかそれが外から見えにくいという側面があるということなんですが。学生の皆さんは、実際に被災地に行かれてそのあたり、目に見えにくいものだけれど、確かになんかそれはあるというふうに感じられたわけですよね。そうですね。はい、ありがとうございます。また、先ほど大藤さんのほうからも言われたんですが、臨機応変という言葉。また多岐にわたる活動ということを言われまして、非常に幅広いという内容だと思うんですが、そのあたり、実際宮城県で活動してらっしゃって、被災地の中で活動していらっしゃる中での幅広さというようなものは、どのような幅の広がりというものを感じていらっしゃるか、ちょっと教えていただけたらと思います。

高橋:鳥羽先生、なんか次々来ますね(笑)。もともとソーシャルワーカー、どうですか。同じ人間同士として尊厳し合ってお互いの自立性を高めながらやっていこうというものですから、人の生活全般に関わるわけですよね。ですから、これはもう多岐にわたるというか広範囲にわたることでありまして。ですから、逆に僕が言いたいのは、これぞソーシャルワークだと

言えるのが、じゃああるのかということですよね。これぞソーシャルワークの専門家だという ふうに形として見えなくても、本当に生活全般にわたって障害となる事象が起きたところに、その解決のために寄り添っていくならば、それは本物のソーシャルワーカーですから。時として、まあいろいろあるわけですよね。私、児相にいるんですけれども、児相のワーカーは一時保護した子どもの検便を、便を持って、診療所に、検査してもらうところに持っていきます。ですから、便運びがソーシャルワーク、ケースワークかって言われるわけですよね。僕は平気でそれもソーシャルワークだと言ってます。こういうことだと思うんですよね。ですから多岐にわたるのは当たり前のことっていうか、その人が生活していくために、成り立つために支障となってる問題は、ソーシャルワークの解決すべき対象ですから。多岐にわたるのは当然かな。被災地でもそうです、もちろん。石巻で夏場にハエが大発生したんですね。がれきの山から発生するわけですよね。そんなことも、これは保健衛生の問題かとは思うんですけども、やっぱりソーシャルワークでも対応しなければ、福祉的にも対応しなければならないということに、人々の生活を脅かすことですからね。伝染病とかになってしまうから。そういう課題も取り上げつつやっていくというのが、やっぱりソーシャルワーカーなんだなっていうふうに思いました。

鳥羽:ありがとうございました。それと、今、学生さんのほうからあったんですが、ソーシャルワーカーも被災者だったという側面ですね。そして、家族のことが心配だったけれども、取りあえず、取りあえずと言うとあれですけども、目の前の利用者さんの支援を優先させたという。そのことがよかったのかどうか答えが出ない。答えがまだ見つからないけれどもというところですが、そのあたりは。連続してお聞きするようで申し訳ないですけど。

高橋:ソーシャルワーカーもいろんなところに所属して、その所属の価値観というか目的、あるいは使命みたいなところに置かれてるわけですけども、それを果たしていくかっていうことと、自分の身あるいは家族の状況ということに問題があったときに、そうですね、簡単に言えばどちらを優先するかっていうかということになってくるんですけどね。ここは、それぞれのやっぱり所属するボスの考え方によって決定的に変わりますね。今回はまざまざとそれを見てきました。はい。ちなみに僕はソーシャルワーカーですけども、児童相談所の所長をやってます。で、当日、3.11の当日午後4時、揺れが来たのが2時45分ですかね、それで津波が来たとかっていうのが3時半前後とかそんなときだったですけども、午後4時に僕は係長クラス以上はここに残れ、で、ほかの者は全部うちへ帰れと指令しました。というのは、さっき言ったことの半々に分担したっていうことですよ。まず、多くの人はおうちのこと、家族のこと、連絡取れないのですから、何とか自助努力で安否確認に行くようにということをしましたし、そして、ある役職以上の者については、自治体の使命というかミッションをやるようにということで。ずるいんですけどね、そういうふうに分けてやらせていただいたということです。ちなみに僕自身はそれから何日も泊まり込みでしたね。ですから、何でしょうね、ちょっとうまく言えないです。はい。

鳥羽:本当に答えが出ない問題だなというふうに思いますが、福島県でも先ほど小野さんのほうからも発表がありましたけれども、楢葉ときわ苑の施設長さんが 12 日に集団避難を楢葉町からして、いわき市の小学校に集団避難をしたときに、職員も家族の安否が全く分からない中でお年寄りと一緒にずっと集団避難ということになり、だんだんと不安が生じてきたわけです

けれども、その中でもやっぱり目の前の利用者さんのことを考え、家族に会えなくてもという中で、支援をせざるをえなかったという部分もあるとは思うんですけれども、そういった、ほんとに極限状態のお話を伺って、私たちも本当にお話を伺ったときには涙が出たというね、そういった経験をいたしましたけれども、本当に答えが出ない課題だなというふうに思いました。ありがとうございます。それでは続いて、ディスカッションの2番目の項目として、災害時のソーシャルワーカーの必要性というところで、学生さんの発表の中にも出てきたと思うんですけれども、改めて各自でまとめて災害時のソーシャルワーカーの必要性とはどんなものだろうかというところを小野さんのほうから順番にお話しいただければと思います。

小野: 災害時の必要性として、やっぱりこれも発表の中で皆さんおっしゃってたかと思うんですけど、今そこで目に見えてるニーズだけではなくて、後になんか小さなことが積み重なって大きな不安だったり問題になるっていうこともきっとあると思うので、災害時ってなると平時とは違って、何がニーズかも分からないって、今日そういう言葉があったと思うんですけど、漠然とした不安というのがやっぱりあると思うので、そういうところにやっぱり寄り添えるのがソーシャルワーカーのそういう、災害時の必要性っていうふうに思っているので、災害直後もそうですし、今後、何年たったりとかしてもずっとそういう部分に必要かなっていうふうに思います。

大藤: 災害時のソーシャルワークの必要性として、災害時において被災者の方が必要とするのは医療的な援助だけではなくて、身体的に傷を負ってなくても家族が亡くなられたりだとか、家が倒壊して生活の場が亡くなってしまったっていう方が大勢いて、そのような方々が生きていくためにそばに寄り添って一緒にどう解決していこうって悩んでいくっていうソーシャルワークっていうのは、そういう点で必要不可欠であるんではないかなと感じました。

野澤:災害時のソーシャルワーカーですが、今回のプロジェクトで出会ったワーカーさんたちは、皆さん発災時から何ができるのかというのを考えて、それぞれの立場でできることから始めていたように感じました。報道では全く映らなかった姿だと思うんですけれども、だからといってその時にその行動がなかったら、今きっといろいろと困っている方がもっと増えていたのではないかなというふうに思います。非日常的なことが起きたときには、こういう呼び方が適切かどうか分からないんですけれども、必ず弱者というものが存在すると思います。そういう方たちをより弱者にしていかないために、ソーシャルワーカーが必要なのではないかなと思うのと、その弱者を生まないために日々備えていかなければいけないのではないかなと思います。

鳥羽: ありがとうございました。皆さんの中では、まずは平時からの取り組みが非常に重要であるというお話もあったかと思うんですけれども、それが災害時に非常に活かされたっていう印象は強く持ちましたか。じゃ、文京学院の小野さん、どうですか。具体的に何かありますか。活かされたなっていうことは。平時からの取り組みが災害時に活かされたというようなのは、インタビューの中からは話として聞くことができましたか。

小野: 私がインタビューをさせていただいた和田さんだったり、講義をしていただいた島野さんが専門職で、職能団体が集まってそういうチームを立ち上げたというのも、日ごろからすごく仲が良くて、だからこそできたっていうのをお二人ともおっしゃっていて、あと渡辺さん、老健の渡辺さんのほうとは職員同士の関係づくりもすごくできていたし、利用者の方とも関係

づくりができていたからやってこれたっていうふうにおっしゃっていたことはとても印象的です。

鳥羽:それが、相談支援専門職チームにつながったっていうことですね。

小野:はい。

鳥羽:はい。ありがとうございます。じゃあ、大藤さん、いかがですか。

大藤: 私がインタビューさせていただいたAさんって方は、普段から地域の方々と、利用者の 方以外にもその近隣の方々とよくコミュニケーションを取っていて、認知症の方がいて、その 方にちょっと異変があったら自分にすぐ連絡してほしいっていうのを、協力を震災前から頼ん でいたりだとか、あと職場の方々との関係づくりも普段から行っていたので、どうしても自分 が車で渋滞に巻き込まれて職場に戻れないってときに、その職場の方が自分の担当高齢者の方、 安否確認に行ってくれたりだとか、そういう人とのつながりっていうのが普段からつくってい くことが大切だという話をしてくださいました。

鳥羽:じゃ、野澤さん、いかがですか。

野澤: 平時から同じ地区の中だったりとか、同じ法人の中での施設とのやりとりが盛んでよく知っていたからこそ、これは菅野さんのお話だったんですけれども、利用者さんの避難場所としてそういうほかの施設さんに協力を仰ぐことができたというお話を伺いました。あとは、ちょっと今回のプロジェクトとは関係がないところにはなってしまうんですけれども、石巻赤十字の方、ワーカーさんから聞いた話で、石巻赤十字病院も被災をした後に医療を提供する場を確保するために、転院とかをお願いしなくてはいけない患者さんがいて、転院先を探す役目をワーカーさんが担っていたそうなんですけれども、震災前からつながりのあった病院とかに直談判で行けるような、仲のいい病院さんにお願いをすることで医療機能ということを保つことができたというふうに伺ったので、平時のつながりというものの大きさを感じました。

鳥羽: ありがとうございました。このあたりについて、高橋先生いかがでしょうか。先ほども情報が全く入ってこない状況の中、ネットワークを再構築していく中で、やはり平時からの取り組みや連携が非常に生きていたんだというお話があったんですけれども、そのあたりは実感としていかがでしょうか。

高橋:はい。私も皆さんと同じ実感を持ってるんですけども、やはりいざとっていうときには 普段やってないことはできないです。もうはっきりしました。はい。そのときこそ本物の力を 発揮しようなんてそれは嘘ですね。そのときこそ、本物の力を発揮しようなんて、それは嘘で すね。ですからできません、普段やってないことは。特に個人の力ではなくて、連携とか共同 とかつながりとか、あと、絆とかが求められることはできませんね、急には。ですから、普段 から、災害の備えをしておくというあれは、普段やってることが、それが備えになるんだって いうことを意識化しながらやっていくことだと思いますね。そういう意味でさっき、僕、「キ ッズ ナウ (=絆)」と言ったんですけども、絆っていうのは、普段から対等の関係でつくって いくものです。絆の字の成り立ち。いとへんに半分ですよね。これは何で半分かっていうと対 等だっていう意味です。対等の関係でないといい絆はできないのです。どっちかの糸が太かっ たり、細かったり。それから長かったり、短かったりしたらどうですか。いい絆はできません ね。ですから対等です。従って、その絆をつくったメンバー同士というのは責任制も対等です。 ですからこれは非支援者と支援者も同じです。責任制は対等です。これを一方的にしちゃうと 本当に意味の絆、あるいは共同作業というのはできないということになってしまう。ですから、 石巻の各病院とああいう拠点病院が普段から連携、対等の関係でうまくやれてたからできたん だんなというふうに思いますね。

関連してですけどね、ソーシャルワークの、この、野澤さんが言ってるように災害時のソーシャルワークというのはどっちかっていうと2次被害防止ではないでしょうか。僕が思うには。1次災害、災害の発生は、これは誰も食い止められません。ですから。予防しようがないっていうか。科学的にはあるのかもしれませんけども、あるいは、人工的な被害は防げるのかもしれませんが、自然災害はなかなか防げない。となれば、その影響を受けた2次被害をどうするかです。ですから、野澤さんが言っている弱者がより弱者にならないように食い止めるというのは、僕から言えば2次被害防止ということだと思います。ですから2次被害の防止のところでソーシャルワーカー、あるいはソーシャルワークは活躍すべきだというふうに思うわけなんですね。

で、それからもう1つ、マニュアルがあればいいってお話の中で言ってましたよね。1人じ ゃなくて何人かから出てたんですけど、これはどうでしょう。普段からマニュアルを作っとけ ばいざっていうときオーケーかっていう話ですね。これもさっき言ったように、それはいきな りは無理です。マニュアル作ってても。マニュアルがあっても失敗するっていうのは今回はっ きり証明されました。ある保育所、保育園なんかは親が迎えに来たからってすぐ帰してやりま した。これマニュアルどおりなんですよ。マニュアルどおりにやったんですよ。そしたら波に 飲まれたわけですよね。ですからマニュアルどおりやってはいけない。マニュアルじゃないん だ。そのときの総合的な判断。時間のない中での判断を、そこのボス、管理者がどういうふう にするかっていうことが問われてくるんです。ですから、そこはソーシャルワークでも、それ からほかの分野でも基盤にしながらも、とっさの判断力っていうことが出てくるので、どちら かというと備えとすれば、こういうことがあったら、想定外のこういうことあったらどうす る?っていうことを普段からトレーニングしとくとかいうことのほうが、ずっとマニュアル化 するよりもいいということになると思います。マニュアルでは失敗します、必ず。はい。この 次にはもっと大変な災害が起きたとすれば、今作ったマニュアルなんか全然活きませんからね。 むしろそのマニュアルが足を引っ張るっていうことになってしまうわけです。ですから、マニ ュアルを求めるのはいかがなものかなと。それよりも人と人とのつながり、連携、共同、絆づ くりということを普段からし、そこで、とっさの判断ができるような力を養っていくほうがず っといいと思います。これはソーシャルワークの上でもそうだなっていうふうに、すごく今回 痛感したんです。

鳥羽:貴重なお話ありがとうございました。とっさの判断力っていうのは本当に命を左右するような局面だった、今回はそういった局面だったと思うんですけれども、非常に難しいということもあったかと思います。それでは、ちょっと会場のほうから随分、感想とか質問とかが来ておりまして、全部にはお答えできないんですけれども、その中で幾つかお答えいただければと思います。先ほど、野澤さんの発表の中にも聴覚障害の方に対する被災地での支援について課題が残ったというようなお話がありましたが、聴覚障害者、あるいは視覚障害者への支援について、どのような支援を受けてきたのか。また、その課題について教えてくださいという質問が来ました。そのあたりいかがでしょうか。野澤さんのほうで何か、インタビューを通して

お知りになったことがあればちょっと教えていただきたいと思います。

野澤: すみません、ちょっと具体的にどういうことで困ったのかとか、その後どういうふうに対応したかという詳しいところまではちょっと覚えていないんですけれども、やはり、コミュニケーション面だったりとか、現状の状況の把握ができないっていうところの情報不足っていうのが障害があることで大きく関わってくるのかなというふうにおっしゃっていました。なので、その状況をいかに伝えるのか。どのようにコミュニケーションを取って不安を取り除くかっていうところに対する支援の必要性があるのではないかなということでした。

鳥羽: 視覚障害、聴覚障害の人への情報が伝わらないという問題が1つあったということですが、これは宮城県ではどのような状況がございましたか。

高橋:宮城での報告会のときに学生さん方が作ってくれたものなんですけども、ここにはっきり事例が出てまして、宮城の涌谷町にいる社会福祉士のインタビューの中で、やっぱり聴覚障害者が住宅説明会に行きたいけれど、通訳がいなくて困っているという、そういうニーズを聞き出して、被災聴覚障害者情報支援センターにつなげて、そちらから通訳派遣等とかそんなことをしたと。ですから、あれですね。そういう資源があるという情報をキャッチしておくと、それをすぐ紹介できるという資源活用ですね。それができたという好事例もありましたね。はい。

鳥羽:ご質問の方いかがですか。宮城県での状況についてお話しいただきました。それでは続いてですね、高橋さんへのご質問なんですが、3名の学生の発表をお聞きになってソーシャルワーカーの高橋さんはどのように感じられたか、感想をお伺いしたいとのことです。

高橋:何度も言わしてもらいますけど、要するに涙はちょちょぎれです。今日のね、3人の方だけじゃなくて今まで何回も僕聞かせてもらってるんで、そのたびに感動……感動というよりもなんでしょうね、とても心地いいというか、よくここまでわれわれの一番伝えたいところ、一番言いたいところを受け取ってもらえたなっていうことと、受け取ってもらったっていうよりも吸い取られたっていう感じですかね。吸い取ってくれたなっていうことと、吸い取ってその分、大きくなってもらったなっていう本当にそういう喜びですね。

鳥羽: ありがとうございました。それぞれで被災地に出向く以外に今私たちのできることは何だと思いますか。これ学生さんですね。学生である私たちに、被災地に出向く以外に何かできることはないでしょうか。これ、どうでしょう。学生の方、どのように思いますか。じゃ、野澤さんのほうからどうぞ。

野澤:出向く以外にだと、まず一番は忘れないことかなというふうには感じています。私自身は被災地の状況を見ているので、まあ、もしかしたら見てない方よりかはその気持ちが大きいのかもしれないんですけれども、小さいながらも忘れないことが一番かなというふうに思います。あと気分的な問題ではあるんですけれども、例えばお店とかで東北の物を見たりとかすると、あの辺でできた物なんだなとか、あのあたりの会社の人が作った物なんだなというふうにちょっと身近に感じて買ってみようという気になるのも、これも忘れないことの1つなのかなというふうに思っています。

鳥羽:風化させないっていうか、忘れないっていうことが重要だってことですよね。じゃ、大藤さん、ありますか。

大藤: 私も一緒になってしまうんですけども、本当に忘れないでいてほしいっていうのが大き

くて、あとはこういう場に皆さん来ていただいて、ここで聞いたこととか思ったことを、身近な人、家族だったり、友達だったりに少し話してみてくれたりするだけでも、広がっていくと思うので、そうやって周りの方にも伝えてってほしいなって思います。

小野:まずやっぱり興味、興味って言うとなんか違う気もするんですけど、そういう関心を持つことっていうのも、誰ももししなくなってしまったら情報を発信する人もきっと減ってしまうと思うので、そういう関心を持つことだったり、やっぱり私も忘れないことは大事だと思っていて、現地の人たちはこういう「自分たちが今も復興してるとかっていうことを忘れられるのが怖い」っておっしゃってる方もいたので、私たちにできるのは今も復興をしている人がいるっていうことを忘れないのも大事だなって思います。

鳥羽:ありがとうございました。やはり忘れないというのが、一つ重要なことだということだと思いますが、それではまだまだ感想とか質問もいただいたんですけれども、残りあと5分ぐらいということで少しまとめに入らせていただきます。学生の皆さんは、このプロジェクトに参加して、今後の自分にどのように活かしていきたいかという、その辺をもう少し詳しくお伺いできればと思います。それでは、野澤さんのほうからでもよろしいですか。もう社会人になってらっしゃるので今のお仕事のことも踏まえて教えていただけたらと思います。

野澤:私は昨年の4月から都内の病院でソーシャルワーカーとして働いています。たまたまなのかご縁なのか分からないんですけれども、赤十字病院ということで国内でも災害の支援とかということに力を入れている団体の病院に就職ができたので、病院のワーカーとして災害が発生したときに何ができるのかということを、これからも考えていきたいなとは思っています。ただ、まだ1年目で目の前のことでいっぱい、いっぱいな状況ではあるので、これからキャリアを重ねる上で私のほうから今回のこのソーシャルワーカーのこういうプロジェクトで学んだことを含めて、ほかの赤十字病院のワーカーだったりとか赤十字のほかの職員に、ソーシャルワーカーが行う災害支援の大切さとか必要性というのをどんどん発信していけるようになっていけたらと思っています。

鳥羽:ありがとうございます。じゃ、大藤さん、お願いします。

大藤: 私がこのプロジェクトでインタビューしたワーカーさんが、ソーシャルワークは心の支援であり、分野に関わらず対象は人なので、今から人と話すことだったり接しておくことに慣れておくといいとおっしゃっていたので、これからこう、多くの人と関わっていって、多くの経験をして、将来につなげていけたらいいなと感じました。

小野:私はさっきもちょっとお話ししたんですけど、特別養護老人ホームで最初介護職として働くんですけれども、どういう現場であってもニーズをくみ取ることっていうのを日ごろからできるようにしたいなって思うことと、あと今回、3つの県でいろいろな被害があったように、県ごとによっても違うし、すぐ隣りに住んでる人であっても、困ったこととか違うと思うので、そういう偏った見方をしないようにしたいな、偏ったっていうか、人それぞれ違う問題を抱えているんだろうっていうことを考え続けたいと思うし、それぞれに対策を考えなくてはなっていうことを、自分自身が忘れないようにしたいと思います。

鳥羽:はい。それぞれソーシャルワーカーの先輩の姿を見て、インタビューで話を聞いて、ぼっぽっそのソーシャルワーカーとしての目標ができたというふうにも思うんですね。大変貴重なことだったというふうに思います。それでは高橋さん、一言何か最後に。

高橋:はい。自らの言われたとおりの期待を私もさせていただきます。恐らくこれだけ育った のですから、置かれた立場で、あるいは地域の住民としての立場でも、このことをしっかりね、 活かしていってくれると思います、それは。ですからそういう意味では特別なミッションでは ないんですけども、もう1つ特別なミッションとしてあるのは、皆さんあれですよね、このプ ロジェクトで語り部活動をなさっているように、あるいはさっき質問があった、被災地に行け なくてもどうすればいいのかってありましたよね。ここで聞いてらっしゃる方も被災地は、知 らない、見たことないっていう人はいるわけですから、やっぱり今回のシンポジウムでもそう ですけども、いつもそういう人たちにこう、伝達していくっていうか、そういうミッションは あると思います。知ったからにはそれは伝えていく。それがみんなで忘れないっていうことに なるわけですよね。だから、忘れないための語り部、伝達者、伝道師、それをやっていただけ れば。これはずっと続くことです。はい。かつてはそういう語り部がいて、特に東北の沿岸部 なんかはそうやってやってきたんですけども、今回はあまりにも広範囲でね、そういう伝統と か歴史とかを感じないところで災害がますます大きくなってしまったっていうのはあったん ですけども、これはやっぱり、そうですね、後世に伝えていくためには、どんどん語り伝えて いく。もちろんアーカイブ、記録で伝えていくっていうのはありますけども、それぞれのやっ ぱりつながり、絆をつくっていくためには、直接思いを語り継いでいくっていうのかな、つな いでいくっていうのかな、一番いいやり方だと思いますので。ですからぜひ語り部になってい ただいてと思います。忘れないでっていうのが、やっぱり皆さんおっしゃったように一番大事 なことだと思います。はい。私自身はね、やっぱり忘れないっていうか、思い出すのつらいで す。もうあのときのことを思い出したくないですよね。あのときの、ですからさっきのムービ 一見てもあのような波を見ると駄目です、もう。はっきり言って。ですからそういうことは忘 れるわけじゃないけども、忘れられないから思い出したくないんですけども、そうでなくて、 亡くなられた、志半ばで亡くなられた方の残した思いを忘れないということです。ですから、 きっと亡くなられた方はこういうふうに思って逝ったんだろうなと思うと、それを、その遺志 を引き継がなければいけないと思うわけです。はい。そんなことに思い直して今私はやってる。 被災地のソーシャルワーカーたちはやってるということなんですね。そんな、こういう思いも ね、やっぱりみんなで共有していただいて、つないでいってほしい、いただければと思います。 **鳥羽**:はい、ありがとうございました。災害という極限状態で、各地でこのようなソーシャル ワーク実践が行われたということをやはり記録し、伝えていかなくちゃいけないというふうに 改めて私自身も、それがミッションだなというふうに思いました。本日は大変ありがとうござ いました。それでは、これでパネルディスカッションを終わらせていただきます。

*

菱沼: はい。ありがとうございました。実は私自身も第2次派遣で参加をさせていただいて、本当に感じたんですけれども、震災後ですね、ソーシャルワーカーが見えないということがよくいろんなところで言われたんですね。しかし、私はこのプロジェクト参加をさせていただいて、まぎれもなくソーシャルワーカーの人たちが頑張っていたわけですね。そこで命を支えてるということをですね、目の当たりにしました。学生たちにですね、本当にそこをしっかり受

け止めて、学生たち自身で考えてくれて、またそれをですね、伝えてくださってるということがこのプロジェクトの意義として本当に大事なことだなって思っております。あらためて、今日ご登壇してくださいました方々にですね、大きな拍手をお願いいたします。遠藤先生からごあいさついただきたいと思います。

遠藤:長い間、本日はありがとうございました。素晴らしい会になったと思います。この会を企画していただいた日本社会事業大学、それから淑徳大学、文京学院大学の先生方皆さんに御礼申し上げたいと思います。1つクレームがあるんですね。最初から超エース級の学生出してくるのなしにしません?来週、日福と中部学院とうちが学生出すんですね。ちょっとやばいなと思いながら、本当によく頑張ってくださいました。高橋さん、ありがとうございました。本当に大事な仲間です。これから一緒に支えていただいてやっていければありがたいと思います。今日、本当にいいお話たくさんありました。

このプロジェクトを通じて分かったことが2つあります。ソーシャルワーカーはこの震災の発生直後から、本当に直後から、静かに命を守る活動を続けてきました。それは今も続いています。いろんな言い方されますよね。いろんな言い方されます、ソーシャルワーカーに関しては。世の中が専門分化されていくと、本当に細かい部分の専門職が増えてくるんですよね。ソーシャルワークは違うんですよね。今回で分かりました。これは高橋さんの言葉なんですが、ソーシャルワークは丸ごと支援なんですね。発災直後からワーカーさんたちはいろんな方々を丸ごと支援しながら、今も続いています。だからこそ面白いんですね。ここにたくさん、ソーシャルワークを目指す学生さんが来ています。その丸ごと支援、自分の想像力と自分の力を生かしながら支援をするソーシャルワーカー、面白い仕事です。皆さんが将来なってもいい、魅力的な仕事なんですね。ということを少しでもご理解いただければありがたいかなと思っていいます。このプロジェクト、あるいは今日の会議を、このシンポジウムを開催するに当たっては、今年度福祉医療機構のほうから大きな助成金も頂いています。そういう意味では、国の税金を使わせていただいてこのプロジェクトも続けられるということなんで、それはやはり社会にも還元していきたい。そういうミッションをですね、私たち教員も学生も一緒になって果たしていければありがたいかなと思っております。本日はどうもありがとうございました。

菱沼: ありがとうございました。以上をもちまして今日のシンポジウム、終了させていただきます。ありがとうございました。

5-1-1. シンポジウム報告(名古屋)

シンポジウム 2014 名古屋会場 報告

日時:2014年2月17日(月)13:00~16:40

場所:日本福祉大学名古屋キャンパス司会:目黒達哉氏(同朋大学 教授)

【開会あいさつ】

福祉系大学経営者協議会副会長 丸山 悟 氏(日本福祉大学 理事長)

シンポジウム名古屋会場 代表 浅野 玄誠氏(同朋大学 学長)

【ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト概要説明】

福祉系大学経営者協議会復興支援委員長 遠藤 洋二氏(関西福祉科学大学 准教授)

【講演】

社団法人岩手県社会福祉士会 相談役·社会福祉法人岩手和敬会 理事 佐々木 裕彦氏

岩手県社会福祉士会の取り組みについて紹介された。発災時、沿岸部の被害の大きかった地域の社会福祉士について「あいつらなら絶対大丈夫だ」という確信をもっていらっしゃったというところが印象的であった。

そして、災害発生後すぐに、岩手県社会福祉協議会が 職能団体を集め「ターゲットシステム」がつくられた



こと、そして、地域包括支援センターを支援することとなったことが紹介された。そこでの専門性は、「システム理論」と「エコロジカル理論」であることが示された。また、支援をするための財源についても考慮したことが紹介された。

ターゲットシステムについては、評価も行われ事例分析もされており、岩手県では、福祉専門職の「災害派遣福祉チーム」をつくるため、研修がはじまったということであった。

本プロジェクトにおける学生のインタビューについて、ナラティブアプローチの視点から、「私たちが抱える問題をコミュニケーションによって生み出された『意味』として考えることができる。」とお話いただいた。

【学生発表】

日本福祉大学社会福祉学部

上野 莉恵さん・鈴木 秀明さん・星野 真希さん

中部学院大学人間福祉学部

石川 智也さん・小川 侑希さん・廣野 美月さん・古田 陽亮さん

関西福祉科学大学社会福祉学部

泉 綾子さん

各大学での、インタビューのまとめと「語り部プロジェクト」の取り組みについて紹介された。

日本福祉大学の報告では、被災地の視察の紹介のあと、 インタビュー内容が紹介された。そして、「ふ・く・し」 という言葉にあてはめ、

- ① ふだん 生活からの防災・減災意識
- ② くせんした ソーシャルワーカーの専門性
- ③ しんらい 人付き合いの大切さ

としてまとめを行っていた。



中部学院大学の報告では、インタビュー内容を「発災当日からの取り組み」と「連携」を柱に報告し、災害時の対策として「日々のつながりと対策」、「ライフラインの確保」、「データの管理方法」をポイントとして挙げた。また、今後の課題として「環境整備」、「震災に関する意識の変化」、「今後の見通し」という3点を示した。

関西福祉科学大学の報告では、災害時のソーシャルワーカーの専門性を「初期的なアセスメントと気付き」、「介入時に道具を活用」、「アウトリーチによってニーズを見つける」、「支援・資源とつなぐ」という4つのキーワードで示し、この専門知識、技術を生かして静かに寄り添い、命を守るという支援をしていた、と報告があった。また。「語り部」活動について詳しく報告された。



【パネルディスカッション】

社団法人岩手県社会福祉士会 相談役·社会福祉法人岩手和敬会 理事 佐々木 裕彦氏

関西学院大学人間福祉学部 教授 池埜 聡氏 関西福祉科学大学社会福祉学部 泉 綾子さん 中部学院大学人間福祉学部 石川 智也さん 日本福祉大学社会福祉学部 鈴木 秀明さん

コーディネーター 中部学院大学人間福祉学部 准教授 大藪 元康

学生の報告を踏まえて、フロアからの質問に答える形で進められた。また、同朋大学の被災者支援の取り組みについて紹介していただいた。

【閉会挨拶】

中部学院大学 副学長 葛谷 昌之 関西福祉科学大学 理事長・学長 江端 源治



5-2-2. シンポジウム報告(名古屋) (学生)

中部学院大学 人間福祉学部 石川智也

はじめてこのプロジェクトに参加したのは「第2次派遣」として2012年8月に岩手県でのインタビュー調査が行われたときであった。その時から1年半が経つが、被災地を訪れたときの印象はまだ薄れることはない。また、2013年3月の「第3次派遣」では宮城県のインタビューに引き続き参加させていただいた。また、これら"声"プロジェクトを通して聴いてきたソーシャルワーカーの方の"声"を、これまで定期的に"語り部"プロジェクトとして活動してきた。大学のオープンキャンパスや大学祭で被災地の写真を掲示し、被災地におけるソーシャルワーカーの方の活動や思いを伝えてきた。今回のシンポジウムでは、これらの取り組みをまとめ、報告することを目標とした。

シンポジウムという形式は今回が初めてであるが、参加したメンバーでよりよいものにしておこうと準備に取り組むことができた。最初の15分の発表の中では、特に自分たちの言葉を伝えることに重点を置いた。岩手・宮城の2回の"声"プロジェクトを通して聴いた、ソーシャルワーカーの言葉や想いを、私たちが大学で学んだ知識とすり合わせ、できる限り文字では無く、私たちの言葉で伝えた。プレゼンテーションの画面の文字は最小限にし、自分たちの語りに集中してもらうよう心掛けた。これが私たちのできる最大限の「語り部」活動ではないかと思う。

これまで「語り部」として取り組んでいたにも関わらず、パネルディスカッションでは緊張した。伝えたいことがあるにもかかわらず、自分からは発言できなかったことが少し悔やまれる。しかし、終わってみると、パネルディスカッションの時間は短く感じた。大学間でのやりとりもあったことから、もう少し時間が長くても良かったのではないかと思う。

シンポジウムのような意見交換の場というのは大変よいものだと感じた。これまで「語り部」 活動は大学ごとで取り組んでいたため、他の大学の考え方や取り組みが十分に分からずにいた。 しかし、今回のシンポジウムのように大学間の協働活動という形でも定期的に行なっていくこ とで自分たちが進めてきた視点とは異なる視点を学ぶことができた。また、学生主体の視線か ら考え、共有することで次の新しい取り組みへとつなげていけるのではないかと感じた。

自分の感じたことを言葉で不特定多数の人に伝えるというのは難しい。これまでの「語り部」活動でも感じたことであるが、一度の多くの方が聞いていらっしゃる場では、どのように受け止められるかがわかりにくい。一般のソーシャルワーカーを知らない方にはどのように伝えたらよいか、自分と同じソーシャルワークを学ぶ学生にはどのように伝えていったらよいか、その都度、悩みながら行ってきた。悩みながらやるからこそ、またこの震災等について深く考えることができると感じた。また、被災地視察やインタビューなどの自分の体験を想起することができた。

被災地の復興が進む中、被災地の状況も日々変化をしている。このような状況の中で、被災地のソーシャルワーカーの方の活躍や想いというものを伝えていく必要がある。大学を卒業してからも、何らかの形で関わっていきたいと思う。

5-2-3. シンポジウム報告(名古屋)逐語録

司会: ただ今より、復興支援プロジェクトシンポジウム 2014 名古屋会場を開催いたします。 私、司会・進行を進めさせていただきます同朋大学の社会福祉学部の目黒と申します。よろし くお願いいたします。

【開会あいさつ】

司会:本シンポジウムは、日本社会福祉士会の後援、独立行政法人福祉医療機構、社会福祉士振興助成事業の助成を受け、福祉系大学経営者協議会の主催により開催させていただきます。また、本シンポジウムは東京会場、名古屋会場の2会場で開催いたしております。それでは、まず始めに、主催団体を代表いたしまして、福祉系大学経営者協議会副会長、日本福祉大学、丸山悟理事長よりご挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

丸山: ただいま、ご紹介いただきました、福祉系大学経営者協議会副会長の丸山でございます。 本日は、私どもが主催いたします、東日本大震災に関する「復興支援プロジェクトシンポジウ ム 2014」にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。主催者を代表して、一言ご挨 拶申し上げます。私どもの福祉系大学経営者協議会「福経協」は、社会福祉の学部や学科を持 つ福祉系の大学の理事長・学長などの経営や管理・運営に責任を負うトップが中心となって、 2009 年 6 月に設立された協議組織であります。現在全国で 20 の大学がこの組織に加入してお ります。社会福祉士系の、この職能団体や福祉人材の養成、社会福祉教育の在り方について研 究検討し、相互の親睦を深めております。協働行動する組織は、社会福祉士会をはじめ、いく つか存在しておりますけれども、1 つは社会福祉士専門職、すなわち、ソーシャルワーカーの 社会的地位の向上。2 つ目は、ソーシャルワークについての社会的認知の向上。3 つ目は、日 本の社会を支えるソーシャルワーカーの育成と能力向上にかかる教育の質的発展といったよ うな課題について総合的な取り組みを行うトップの協働組織であるという点が、この「福経協」 という組織の大きな特徴であります。「福経協」には現在6つの常置委員会を置いていますが、 その1つに復興支援委員会があります。ちなみに専門家が集まって国家試験問題について検討 し、試験センターや厚労省の社会・援護局長や福祉人材確保対策室長などとお会いして、いち 早く意見具申するような提言の活動も行っています。また、研究活動、教育向上委員会といっ た委員会も置いておりますし、もう一つ、就職学生募集委員会といったような学生の権利問題 や経営の戦略課題に関わることを直接取り扱う委員会を置いているというところが「福経協」 の持ち味であると思っております。

本日は、本年2月8日東京会場において行われた復興委員会の企画部を通じて行うシンポジウムでありますけれども、震災から3年がたとうとしている中、被災地では生活再建復興がままならない状況にあって、これからがソーシャルワーカーの腕の見せ所というか、支援時という状況にあります。東北3県では被災した子どもの心の闇を解きほぐし、家庭の課題と一体で問題解決していくスクールソーシャルワーカーに対する需要が高まって、人材不足に悩んでいるという報道が新聞などで一斉に流れたということも、そのことを端的に物語っています。医師や、看護師や心理カウンセラー、あるいはリハビリ関係の医療技術者などと比べて、ソーシ

ャルワーカーの仕事の内容や特徴が分かりにくい、震災直後の救済・接護活動の中でも、その存在感があまり伝わってこないなどと言われたりしたことがありますけれども、本日の報告を聞いていただいてはっきりすると思いますが、全然そんなことはありません。3.11で東北の太平洋側の人たちは、ほとんど全てが被災者であり要接護者であると。しかも、悲しみの中で完全に意気消沈し、当惑した状況にある人たち。その中でも社会的弱者と言われるような人たちは置き去りにされる形勢がある中、社会的な制度や資源に欠陥や欠損があっても脆弱なる個人の要因を見据えて、ミッションに燃えて、要援護者の中に介入し、人と人のつながりや持てる環境の活用によって、災害の援護・救済を実現していく。そうした福祉版 DMAT と言われるようなプログラムを実施した素晴らしいソーシャルワーカーの活動が各地にあったということを確認したいと思っております。本日のこれからの報告と討論で、ぜひその一端をつかんでいただきたい。ソーシャルワーカーの社会的地位向上に対する私たちのアプローチは、形式や形態での見栄えというより、幅広いしっかりとした理論の下支えによって豊かになっていく行動。そしてそれを伝える語り部も、朴訥とした説明によって、ソーシャルワーカーがつくり出す新しい価値を知っていただきたいと思います。では皆さんとご一緒に社会福祉ソーシャルワーカーの新しいアプローチを体験しましょう。

【名古屋会場あいさつ】

司会:丸山理事長、ありがとうございました。それでは続きまして、シンポジウム名古屋会場を代表いたしまして、同朋大学浅野玄誠学長先生よりご挨拶いただきます。よろしくお願いいたします。

浅野:どうも、皆さん、ようこそお越しくださいました。名古屋会場の代表ということで、今 日のシンポジウムが催されることにつきまして、皆さまにご協力いただきましたことについて、 深く感謝を申し上げたいと思うところでございます。私、実は、専門がインド哲学とか仏教と かという、いわゆる実学からはほど遠いところにある学問をやっておりました。ただ同朋大学 におきましては社会福祉学部というのは要の学部でございますので、今、司会をしてもらって る目黒先生とか、下山先生も来てやられておりますが。こういう先生方に教えをいただいて、 一生懸命ついていきながら、私も学ばしていただいておる途中でございます。幸いなことにこ ういう仕事をさしていただきましたんで、一昨年ですね、石巻の医療団とのプロジェクトとい うのがありまして、下山先生も行ってくださったんですが、学生がボランティアに、行ってく れました。そのときに私も視察に1日行きました。そしたら学生がずいぶん悩んでおりまして ね。要するに学生がやっていたことは、その地域で被害に遭った方々の、現在の満足度とか、 要求したいものとかっていうような資料を調査して歩くんだけれども、疑問を持っている人、 疑いを持っている人、怒りを持っている人、そして感謝を持っている人で、被害の状況もさま ざまです。一人一人に状況が違って、一人一人が違うものを求めていて、一人一人が違う疑い を持っているということに、学生自身も非常に悩んでいて、そして無力さを感じているような 雰囲気も見ることができました。今日は幸いボランティアなんかに参加しておられる、ソーシ ャルワークをやっておられる学生諸君の経験談もお聞きできると思いますが、その経験はとっ ても貴重だなと思うんでございます。で、実は昨年の夏ですかね、ある大学で開催された復興

の状況報告会に行ってきたんですが、私は正直言って、あんまり面白くなかった。なんでかっ て言いますと、本当に現場の一人一人の声が聞けない。組織としてこういう立派なことをやり ました、これだけの効果が上がりましたって話は、結構あったの。中にはひどい話で、外国か らのボランティアの希望があって、それを私の大学で引き受けましたとか。おかげさまで、う ちの学生が一生懸命、その支援をしたおかげで英語の能力が高まりましたってことね。その結 果国際交流を結ぶことになって、良かった良かったって。これはちょっと、私、そのシンポジ ウムの場で話すことではないんじゃないかっていう気がいたしました。実は今回も支援という 言葉を使っておりますが。支援というのは、支援する者が支援される者に対して一方的に行う ものではないだろうと思ってます。で、おそらく支援というのは支援する者とされる者が、相 互に関係性を持って、相互に全的な関係の中で、依存的な関係の中で、いわゆる支援というひ とつの社会的環境をつくっていくということでなければいけない。そしてソーシャルワーカー のかたち、仕事とはおそらく、素人考えで言いますと、行政が一方的に行うこと、それから、 企業がやってくれる力、それから、ボランティア。こういうものを、必要なところに必要なも のを与えることができるように一生懸命つながりをつくってやっていくことだろうというこ とだろうと思うんですね。で、そういうひとつの固まりのようなもの。相互依存的な固まりの ようなものの中で、一人一人に最適な支援が行われるような、支援環境をつくっていけるとい うことが期待されてるんじゃないかなというのを、2 年間、学長をやらしていただき考えさせ ていただくことが少しだけできました。素人考えでございますが。今日は、学生諸君が話をし てくださるそうでございますから、現場で感じたこと、そしてその感じたことによって、学ば れたことをお聞きするのは大変大きな意味があると思っております。どうかひとつ、皆さん、 今日はよろしくお願い申し上げます。

【ソーシャルワーカーの"声"プロジェクトの概要】

司会: 浅野学長、ありがとうございました。それでは、プログラムに入っていきたいと思います。ソーシャルワーカーの"声"プロジェクトの概要を、福祉系大学経営者協議会復興支援委員長、関西福祉科学大学社会福祉学部の遠藤洋二准教授よりご説明いただきます。遠藤先生、よろしくお願いいたします。

遠藤:ただいまご紹介にあずかりました、福祉系大学経営者協議会の復興支援委員長をさせていただいてます、関西福祉科学大学の遠藤でございます。本日はこのような素晴らしいシンポジウムを開催していただきましてありがとうございました。日本福祉大学の教職員の皆さま方をはじめとして、中部学院大学、同朋大学の先生方、本当にありがとうございました。今日は、私たちが、2年半ほどですね、続いております、ソーシャルワーカーの"声"プロジェクトというものの学生からの発表でございます。私はそれの前座としまして、このプロジェクトの概要を、ほんの短い時間ですがお話をさせていただきたいと思います。そもそもですね、あの震災が発生して、半年ちょっとたったころでしょうか。たまたま私が、総務部という部があるんですけどね。その前を歩いていると、学長、今来てますが、学長・理事長から呼び止められて。たまたま通ったんが運の尽きでしょう。復興支援委員会という委員会立ち上げたから「やれ」とか言われて。まあ、言われたからにはやらなあかんやろうと思ってやって。何をするんだと

言ったら、何も決まっていない。考えてくれと言うんで考え出したものが、このプロジェクトでした。東日本大震災が発生した後ですね、いろんなシンポジウムと学会で、ソーシャルワーカーの姿が見えないというような声が聞こえました。発災直後はですね、救急救命が主体であって、ソーシャルワーカー出る幕ないよ、みたいな議論もございました。

私は、1995年の阪神淡路大震災のときですね、神戸市の職員で児童相談所のワーカーとして勤めてました。で、1995年1月17日以降はですね、3カ月あまりですね、児童相談所に寝泊まりしながらいわゆる災害支援活動をしてきました。その経験とかその思いから考えると、この学会とかで言われた言葉がですね、とても引っ掛かったという覚えがあります。では、実際、今回の東日本大震災の中でですね、現地のワーカーさんたちは一体何をされていたんだろうかと。私はそれを学生に教えることができなかったんですね。そういうことも踏まえて、私たちは現地のソーシャルワーカーに焦点を当てたプロジェクトをしていこうと。ただ、これはですね、研究者が研究をするってことじゃなくて、ソーシャルワーカーを目指す学生たちが自ら足を運んで、そして感じて、彼らの感性を通してソーシャルワーカーの機能、役割、災害現場における彼らの働きを見ていこうていうのが、このプロジェクトの中核です。

プロジェクトは大きく分けて、次の2つに分けられています。まず、ソーシャルワーカーが 災害時にするべきことは何かということをですね、学生のチームが教員1人のスーパーバイズ を受けながら、実際に災害支援を行ったワーカーさんたちの話を聞いていく。そして、それを きちっと記録に残していこう。残念ながら、阪神淡路大震災の中で断片的にはあります。でも ソーシャルワーカーが何をしたかっていうのが、全く記録としては残っていないという現実が あります。今回はそれをしてはいけない。きっちり残していこうというのが、まず第1です。 そして、そこで聞き取ったことをですね、学生なりの分析をして、そしていろんな人に伝えて いこう。そういう"語り部"プロジェクトという、この2本立てでやっていこうというふうに 思い立ちました。

いろんな議論を重ねてですね、もちろん、われわれが丸腰で行くわけにはいかない。今日来 ていただいておりますが、3 県の社会福祉会の方とお話をする中で、やっていこうという声を いただきました。あとで、当時の社会福祉士会のトップをされていた方々にお話いただいてい ますが、私も相談しました。そうすると、私がお願いしますと言うと「いや、一緒にやってい こうよ」という言葉をいただきました。3 県の福祉士会の方はみんなそうおっしゃっていただ いて、われわれはどれほど勇気づけられたかということを、今、ここでも感じます。そういう 中で、震災が終わって約1年たったとき、パイロット事業としてスタートしたこのプロジェク トも5回目を迎えます。この3月4日から3月8日まで、岩手県と福島県で同じ仕組みで、5 つの大学がまた、今の東北を見ていこう、そして今のワーカーの姿を浮き彫りにしようという 活動に入ります。中身については多分これから学生が、3 つに分けてお話をしてくれます。私 がいろいろ言うよりも、それを聞いていただくことが大事だと思いますが。このプロジェクト の一番大きな夢はですね、彼らは単に被災地でフィールドワークをするだけではなくて、帰っ てきて一生懸命考えて、そして語り部のためにですね、本当に毎日のように私の部屋に来て議 論を重ね、そしてプレゼン資料をつくってきます。そのひとつの集大成がこのムービーです。 多分、その中に彼らの思いとか全て凝集してると思います。ちょっと長いムービーになります が、今から流しますので、ご覧いただけますでしょうか。

(ムービー上映)

遠藤:ありがとうございました。多分、このムービーつくるのに彼らは何十時間っていう時間をかけながら言葉をつむいでました。このプロジェクトに参加した多くの大学生はですね、本当にこのプロジェクトに真摯に向き合いました。それは被災地で出会ったワーカーさんの刺激が大きかったというふうに思います。彼らは言うんですね。「何もできなかった。私たちは、目の前の人を支援しただけ」っていうワーカーさんの言葉をじっくり聞いて分析すると、被災地3県のワーカーさんはですね、災害直後から静かに専門性を発揮して、静かに命を守っていったということに気が付きました。そして、泥だらけになりながらプロとしての誇りを持ったワーカーがかっこいい、そしてそういうワーカーになりたい、なってみせるっていう強い意志を示しました。そういう意味で、私たちは東北のワーカーさんたちから得たこの刺激というか、



これは、一緒にこの活動をしている私たち教員がですね、先頭に立って旗を振るプロジェクトでありません。学生が自ら考え、自ら行動するプロジェクトです。そういう意味で、私たちは一緒にやっています。彼らの過ごした時間であるとか、彼らと語り合った日々っていうのは、私は誇りに思っています。そういう意味ではこれから東北のワーカーさんのように静かに、そして地道にこのプロジェクトを続けていきたいというふうに思っています。

最後になりますが、今日ここにはソーシャルワーカーを目指す多くの学生の方がいらっしゃると思います。もういっぺん言います。災害においてもワーカーは素晴らしい働きをしてきました。私も現場で25年以上ワーカーとして働いてきました。ソーシャルワーカーっていう仕事は魅力的ですよ。皆さんの一生のキャリアとしてやって、決して後悔はしないというふうに思っています。ある東北のワーカーさんがおっしゃいました。意見交換会をしたときに「皆さん、皆さんの活動こそが、私たちの支えです。東北の地に皆さんの仲間がいることを忘れないでください」というメッセージをいただきました。こういうふうなワーカーさんの思い、そしてこれからソーシャルワーカーとして現場で力を出してくれるであろう学生の皆さんととも

に、もう一度災害で私たちに何ができるんだろうっていうことを考える機会になれば、ありがたいかなと思っております。本日は本当に学生さんたちが自分たちの思いをぶつけると思います。どうぞ、それを起点に議論が進んでくれればありがたいかなと思います。ご清聴ありがとうございました。

【講演】

司会:遠藤先生、ありがとうございました。続きまして、"声"プロジェクト参加学生が大変お世話になり、現地にてソーシャルワーカーとして活躍されている講師の先生による講演に入りたいと思います。社団法人岩手県社会福祉会相談役、社会福祉法人岩手和敬会理事佐々木裕彦さま、よろしくお願いいたします。

佐々木:岩手は四国4県に匹敵するとんでもない広い県でございます。学生さんたちの支援も、 片道 100 キロを越える、往復 300 キロ近くにもなるような大変な道のりを、被災地に通ってい ただいて支援をしていただきました。本当に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

私、岩手県社会福祉士会を立ち上げて、事務局長として 20 年になります。で、ここの最後の仕事、事務局長として最後の仕事が今回の震災の支援なりました。去年の 3 月で丸 20 周年ということで、相談役に降りたところでございます。現在、会員数 552 名でございます。組織率は全国 2 位の会でございます。こちらの地域活動委員会が最近の地域の問題を取り組む委員会になってまして、新しい課題に取り組む委員会でございます。ここに災害対策委員会を置いて、そして事務局、僕のところに災害対策本部を置いて、連携を取り合ったところでございます。4 つのブロックは、内陸と沿岸というふうに分かれてますので、その内陸と沿岸のブロックで横軸で、それぞれ連携して支援を考えてきたいということです。

これは、私の施設でございます。岩手和敬会 48 周年なります。岩手第 1 号の特養を立ち上 げまして、やってきた施設でございます。この法人の中に岩手県社会福祉会の事務局を置いて おります。創始者は岩手医科大学の理事長さんがつくった、県内第1号の特養で、東北で2番 目の、特養になります。系列には看護学校とか、高等学校、病院、精神科、それからリハビリ 学院、看護短大があります。これが第1号の特養です。これが第2和敬荘でございます。今こ ちらのほうにいます。これが第3和敬荘です。被災地を歩いていただくと分かると思いますが、 このような石碑が、もう何十個とございまして。これより下にうちを建てるなという注意です ね。諸先輩の注意を忘れてしまうのも、また人間でございます。グラッときて、みんな何かを したり、すぐ行かなきゃ。もう頭の中では、もうすぐ行きたい、すぐ行きたい、すぐ行きたい。 みんなそう思います。盛岡にありましても3日間停電がございまして。メールとか携帯でどん どん、連絡をよこせというやつを流したんですが、3日間全く音信不通でした。そして4日目、 月曜の夕方から、連絡が入るようになりまして。「大丈夫だよ、無事だよ、無事だよ」ってい う連絡が入ってきました。そんな中で、お二方ほど事業活動支援センターの仲間が犠牲になり まして。特に、もう陸前高田の社会福祉士さんは神戸で震災されて、高田に嫁いだのね。そし て、また高田で被災してお亡くなりになりました。お父さんがお世話になった高田のためにと いうことで、高田に通って来てくださっております。もうお一方大槌の社会福祉士も犠牲にな りました。

そんなとき、すぐ行ってなんかしなきゃって思った反面、僕にはひとつの確信がありました。 それは「あいつらなら絶対大丈夫だ」っていう確信です。というのは普段からお付き合いをしていて、一人一人のご家庭の、あるいは障害を持った方々の、これはいわゆる災害でございます。個人的な家庭の災害、個人の災害。これと向き合って涙したり、笑ったり、そういう経験を乗り越えてきた社会福祉士たちは絶対大丈夫だ。そういう自信が僕にはありました。そして「すぐいけないけど待ってろ。体勢を立て直してから必ず行くぞ、全国のやつらを連れて行くぞ」という思いを持って、この取り組みをしてきたところでございます。まず、本部と日本社会福祉士会と連絡を取りまして、国のほうに働きかけるということを本部のほうでやっていただきました。そして、国のほうから岩手県に文書が流れまして、福祉士会からこういう支援の準備があるという文書が来たよということで、それと同時に、本部と一緒に検討、県社協、県知事さん等にお会いして、支援の申し入れを行ったところでございます。そして県社協に職能団体が集められたんですが、職能団体がなぜ集まったかといいますと、県社協の中に事務局を置いている職能団体があります。それが介護福祉士会とケアマネ協会と、あとは地域包括在宅介護支援センター協議会、ここが県社協に事務局を置いてますので、その3人が会長が集められて「どうしよう、どうしよう」という話し合いをしていました。

そこに、いい案が出なくて僕に電話がありまして。僕も行って、ここの相談に入ったわけです。で、そのときに僕が描いた図が、佐々木モデルといいまして、ターゲットシステムつくろういうことで、それには職能団体全部集めようという話をしました。で、ご案内の通り県社協、社会福祉協議会は医療畑との連携が苦手な団体でもあります。で、そういうこともありまして、MSW の協会の会長にすぐ電話をしまして、一緒に混ざれと。PSW 協会の会長にも電話をしてすぐ混ざれというふうにして、即決をしていただいて、そして職能団体を立ち上げて、支援に入ったものでございます。

そして現地の、地域包括支援センターをターゲットにしよう。これは法律で社会福祉士が必知というふうに、出ているのが、地域包括支援センターということがありまして。実は地域包括支援センターが立ち上がったころ、どういう社会福祉士が職員として配置になったかを全国調査しました。そうしましたら、1,100万から1,600万の委託費の中で人件費3人分をまかなうには、新卒の方しか採用できなかったんですね。そういうこともありまして、地域包括支援センターに若い社会福祉士さんたちが配置になっていたということがございまして、これでは不安だと。つぶれる可能性があると。それでは全国の社会福祉士会が、組織をあげて地域包括支援センターの社会福祉士を支援しようという活動をずっと展開してまいりました。それはこれまで培ってきました弁護士会とか司法書士会との連携を、そのまんま地域包括支援センターの支援に持っていくぞという取り組みでもあったわけでございます。そういうこともありまして、地域包括支援センターにターゲットを絞って支援しよういうかたちを取りました。そして、4月27日、大槌の支援開始、そして5月1日山田町の支援開始。そして陸前高田はかなり支援がたくさん入ってましたので、少し遅れて支援開始というかたちで流れてきました。

一方自分の施設はといいますと、このように当日は 20 人を越える方々が、施設のほうに身を寄せまして。これは近所の方々も含めてなんですが、やがて時間がたつと、被災地から来るぞ、その準備をしろいうことで、その準備を整えながら 2 つの施設で、準備をしたものでございます。そのとき県から出された大量の図がこれでございます。県の長寿社会課のほうからガ

ソリンがない、その場合の動き方、避難所から事業所、ショートステイを使って、それでもだめだったら市町村の地域包括支援センターが、県が空きベッド情報を持っているので、そこにお願いすると、県のほうで入所する施設を探してくれると、こういう連携図でございます。こ



れは非常に助かったな、という ふうに今も思っております。で、 われわれは常日頃から、このよ うなジェネラリストという言葉 を最近は使うわけでございます が、実はこれは新しくもなんと もない言葉でございまして。ま さしく、私たちの専門性は何か というと、システム理論とエコ ロジカル理論を使って見てきた わけでございます。

そうすると、学生さんが勤め て間もなくは、まず1対1の個

別援助の技術が求めれますが、3年5年たつと問題解決が上手にできるような力が求められます。そして今度5年10年たって役職をもらうと運営管理の部分の技術が求められていく。これはハインズ先生のソーシャルワークの特質でもございます。そうすると、僕のように社会福祉士会の中で事業を組み立てるとか、施設の中で事業を組み立てるときには、まさしくシステム理論の考え方ですね。そしてその中で、システムとシステムが、どのような適用、不適用、交互作用、相互作用を持っているか。こういうのを見ながら事業を組み立てていきます。これが事務局長としての僕の仕事でもあったわけです。で、これが一番最初、県社協との打ち合わせのときに僕が紙に書き出した図でございます。これが大橋謙策先生のとこに流れて、それから白澤先生のとこに流れて、そして学術会議の提言まで結び付いたわけでございます。一緒にやろうということで動いたところでございます。

で、先ほど言いましたようにシステムですから、事業を取るということは県の予算がどこに流れていて、県の人材がどこに流れているか。人とお金の流れを追いかけないと事業を取れません。これは施設としてもそうですし、社会福祉士会としてもそうでした。そうすると、見ていただくと分かるとおり、県が予算を持っているのが長寿財団と県社協に流れているわけで、委託費として流れています。そして、県の優秀な人材も流れているわけです。そうすると、何かしたいと言ったときにお金を付けてもらいたい場合には人の流れとお金の流れをどう組み立てるかっていうことが、まず一番目にありました。そういうことで、まずこのターゲットをここに絞ると。さらに現地のほうは機能が半分残っている市町村、全く崩壊した市町村があったわけです。機能が残っているモデルと崩壊したモデル。この両方にどうアプローチするのかっていう課題がありました。そういうことも考えながら動かなければなりませんでした。そのために、岩手県社会福祉士会の中に事務局を置くのと、コーディネータを僕がやるのと、被災地の地域包括支援センターに、あとは社協のボランティアセンターにコーディネータを置く必要がありました。ところが市町村の地域包括支援センターを調べたら、岩手県50カ所ある地

域包括支援センターのうちの半分が市町村直営でございます。その意味は分かりますか、皆さん?直営ということは県の地域包括支援センター・在宅介護支援センター協議会に入ってないんです。なぜか分かりますか?年会費1万円が予算化できないと市町村が言うんです。そんなことないですよね。それで入ってないんです。半分がそうです。そういうことがありまして、岩手県社会福祉会では全国と足並みを揃えながら、福祉士会と足並みを揃えながら、県の会費を払って、県の協会に入れない福祉士さんや保健師さんたち、市町村の直営の人たちの研修会もやらなきゃならないということで、人間関係をつくってきました。この人間関係があったので、被災地の直営の支援センターに入り込むことができたと、そういうことがひとつ言えるかなというふうに思ってます。僕の描いた図は、こちらの市町村の隣には、だいたい社会福祉協議会があります。そして両方共市町村から委託もしくは直営、ボランティアセンター、社協も補助金が出ています。そうすると、包括支援センターに全国の支援者を入れるのと、同時に社協さんにも全国の支援者を入れるとどういうことが起こるか。ここで連携が自然になされるだろう。専門職同士の連携が自然になされるだろう。それはもう、現地での運営会議なり協議会なり連絡会、こういうふうなものが自然にできるだろうということを目論んで、両方に送り込んだものでございます。ま、こんなことを考えながら仕組みをつくりました。

そしてそのときに描いたのが、職能団体全部集めるんだから、DWAT だよね。この W、ワットはウエルフェアだっていう単語が、僕が提唱して、今この DWAT は使ってません。災害派遣福祉チームというのが岩手で12日から研修が行われて、今月中に200人の養成者が誕生いたします。

災害派遣福祉チームというふうに、日本語で岩手では言っております。もう、これが僕が描いた図ですけども、DMAT あるいは保健師チームが先なんだとか後なんだっていう、実は現地ではありました。避難所に、われわれ介護の仲間たちが入ったときに保健師のチームから「何しに来たんだ、邪魔だ」って言われたんですよ。それはないだろうっていう話なんですね。で、これから、僕たちの現地でのまとめをちょっと見ていただきますが。やはり、発災と同時に DMAT 保健師チームだけじゃなくて、やはり必要なんですね、ソーシャルワークの部分が。もう、これは皆さんご存知の通りだと思います。その報告書もありますので、あとで見ていただきます。で、その中で、マズローの欲求ピラミッドじゃないですけども、上に行くに先細りになってますが、この下を切り取って上にパタンパタンとつないで、両方これを長方形にしてですね、支援していく必要があると思います。そのときに、どんな生活だったのか、どんな家族歴か、どんな地域だったのかを考えながら、例えば避難所あるいは仮設を運営する。そういうことを考えていかなければならなかったんですが。神戸の教訓を生かせませんでした。仮設にしても、抽選、その地域ごとに移るということが結局はできなかったわけですね。ま、こういう反省がなんで生かされなかったのか。この辺りをしっかりと検証していく必要があるんだろうと思います。

そういうことがありまして、さらに、岩手県社会福祉士会では地域包括支援センターの他に、スクールソーシャルワークの問題が出てきまして。被災した小学校・中学校で、子どもたちの不登校が顕著になったとか、そういうことはありまして。教育委員会と一緒に考えまして、学校ソーシャルワーカー、スクールソーシャルワーカーということで、この年5人誕生しており被災地に入っています。現在、文科省と直接契約で、20カ所に、今スクールソーシャルワーカ

ーを送り込んでいるところでございます。先ほど見ていただいたように、内陸の JR 東北本線沿いのブロックが沿岸の横軸にして、それぞれ二戸という地区から宮古、盛岡から、山田。それから水沢から横軸にいって釜石。そして一関から陸前高田という横軸に担当を決めまして、それぞれ連絡を取り合ったり、行って顔見てきて、そして本部のほうに情報を集約して対策を練る。そのようなかたちを取ったものでございます。これがそのとき県の教育委員会と議論に使った、国から出た資料でございます。県社協に職能団体を集めて活動するときに、アセスメント表がやっぱり必要でした。そのとき僕が使ったのは、何せソーシャルワーカーですので、ご案内のとおり、フェルトニーズとか、こういう昔習った僕たちの知識を使ったアセスメント表をつくったんです。そして解説をしました。介護福祉士会とかケアマネ協会とかいろんな協会集めて、この解説もしましたが、これが機能しませんでした。意味が良く分かんない、ていうことだったんですね。それで、途中からもっと簡単なものに替えてやったんですが、やはり、ソーシャルワーカーたちだったら分かることも専門職が集まると分かんなくなるんだという経験をしたわけでございます。

そして、このようにボランティアを募って、申し込んできた人たちの名前をジクザクにダブ らせて、ダブらせて、そして申し送りの期間を置いてつないでいくって。これが日本社会福祉 会のやり方でございます。これを県社協に提供して使いました。そうこうしている間に、被災 地を医療福祉モデルで復興させろという地域包括ケアを考えて町をつくれという国の文書が 流れたんですが、後ろのほうに新聞の切り抜きも入れておりますが、なかなか土地の確保が進 まなくて、この前も国のほうに岩手弁護士会と、県のほうでお願いをしたところでございます が。個人財産法があるので難しいっていう回答で。要は土地といっても誰の土地か分からない 土地がまばらにあるんですね。それを処理できなくて、困っています。で、そういう中間の、 何か基金を持てるような団体をつくって、そこを買い取ってもらって、高台移転を進めないと だめだという提案をしたんですが、財産法が邪魔をすると。これは無理だというふうに国のほ うから言われて、また暗礁になっております。壁になっております。ま、このような復興計画 なんかが出ましたが、そのように土地の確保がままならないという、高台移転がままならない ということと、公営住宅をつくったんですが、当初手を挙げた人たちの半分しか申し込みがな いとかですね、もう待っている間に内陸のほうにうちを建てて引っ越したとか、そういう、心 も揺れ動いていますので、そういうふうな、なかなか、調査とこの住宅とのマッチングができ ていないというところも出てきております。さらにこれは途中から入ってきた国民生活センタ 一が中心になって、職能団体等全国協会に号令をかけて、職能団体等全国協会で支援に入ると いうシステムでございます。これらもひとつの仕組みとして使えるかないうことで、われわれ も参加して、やりました。災害派遣福祉チーム岩手県の組織化ということで、まず、23 年 3 月11日に発生したわけですが。23年の5月から職能団体の災害支援、これを実施しておりま す。そして、翌年24年の3月23日に、職能団体から県に対して要望書を提出したところでご ざいます。で、24年6月から、災害派遣、チームの検討、ワーキングチームの開催、そういう ふうなことは始まっております。そして、県から国に対して、制度化するように要望してくれ ということでお願いして、県知事さんもいろんな会議でこの要望書を取り上げていただきまし た。そして、24年の8月20日には、国のほうから災害広域支援のネットワークをつくれとい うことで、通知が回ったわけでございます。これがわれわれ職能団体から県知事にお願いした

内容でございます。

避難所や福祉避難所において、良好な避難環境を設定する。コーディネートを行って、避難所運営の円滑化を図ることを担う、災害派遣福祉チーム DWAT の福祉版をイメージ、これを創設すること。2 つ目。当該チームを派遣するシステムを全国組織として構築するため、県から国に働きかけてくれいうことを、県知事に要望したわけでございます。で、この下のほうには私たちが現場で支援に入ったときのいろんな壁とかそういうことを、その事例を入れまして提言をしたところでございます。で、その後、12 年の8月20日に国のほうからそれらを受けまして、各都道府県はそれぞれ事務局をつくって、そしてさらに県ごとにつくった上に他の県と連携するような仕組みを、広域支援の仕組みをつくれという国からの通知でございます。これを受けまして、まずこの一番左側にありますのが、われわれが差し上げた職能団体の支援でございます。で、ここの下に福祉チーム組織化会議ということで、これに県立大学の先生方に入っていただいて、われわれが現場でアセスメントしてきたものの分析をお願いをしたところでございます。そしてそれを広域支援有識者会議につなげる。そしてこれを広域支援ネットワーク県本部というものを立ち上げて、そして福祉チームの検討部会をさらに立ち上げたということで検討してまいりました。

結論から言いますと、今月の12日から、今年度60人の研修、福祉チームを養成するという 予定でしたが、ふたを開けてみましたら申込者が 300 人近く申し込みがありまして。で、60 人を 200 人に増やして、先週の 12 日から研修が始まったところでございます。今月中に 5 人 一組 40 チームが誕生いたします。このターゲットシステムについて、僕たちが現場で、感じ たこと、県立大の先生たちにお願いしまして。県立大の先生たちは福祉系学会連合会のほうと 合同して、これを分析していただきまして。何を言っているかと言うと、避難所で、学校等で いることで、地域で暮らす障害者の多さが知られていなかったいうことです。避難所をふたを 開けてみたら「えー、こんなにも障害要介護者がいたの?」っていうぐらいびっくりするぐら いの人が来たっていうんですね。で、それを、やっぱり、町の人たちも気付かなかった。市町 村も気付かなかったっていうことです。ここで、じゃ地域で暮らす、地域生活移行だって言い ながら、本当に地域に帰したはいいが、本当に地域の一員として暮らしていたのかっていう疑 問が出てくる。ただ帰しただけじゃないか?という反省があるわけです。さらに福祉施設の福 祉避難所でございますが、先ほど見ていただいたように、一般住民も当然逃げてきますので、 その後の対応に余裕がなくなるということがございます。じゃ、福祉避難所の役割ってなんな のかという課題が出ました。さらに、在宅の要援護者の避難場所が不足しているということで、 避難所で不穏になって居場所を求めて家族が避難所から連れ出して、車の中で1カ月暮らした とかっていう事例なんかが、当然出てくるわけでございます。さらに障害者が種別の違う施設 をやむなく利用せざるを得なかったとかですね。在宅障害者への速やかな支援者は一体誰なの か。振り分けの仕組みはどうするのか。この辺りの課題があったわけです。

そして 4 番目としまして、在宅要援護者への支援不足、支援の遅れはどのようにするのか。 避難所や仮設住宅の支援が優先で、在宅支援に遅れがあった。地域生活移行だっていうんで施 設から退所して自宅で頑張ってきたんだけども、限界が来て、もう一度入所申込をしました、 と言ってお母さんが泣いていたそうです。ま、こんな事例もあるわけでございます。災害救助 法は在宅障害者を想定しているのか、とかですね、ま、こういうことなんかも、われわれの現 場の事例で整理をしていただいたところでございます。そういうことと同時に、国のほうから 出された、この広域支援の仕組みをどうやってつくるかっていうことで、いろいろと検討を重 ねまして、こういう仕組みをつくってまいりました。こちらの講習が先週の 12 日から始まっ ております。200 人ですので、修了生が3月までに誕生いたします。ま、4~6 名ぐらいのチー ムを想定しています。大体、発災後3日から5日程度を想定していますが、その後3週間4週 間というふうに、中・長期に移行していくつなぎの役もやろうということで、検討されていま す。これにつきまして、われわれが現場で経験したのは、避難所を廃止にすると。もうみんな 出ていってくれということで、みんな仮設とかに移ったわけですが、ある家族、おじいちゃん、 おばあちゃん、そしてお父さん、お母さん、子どもさんがなんとしてもそこを動かないという 人たちが、1家族いまして。で、これを無理くり連れて行くわけにいかなくて、介護が必要な おじいさん、おばあさんだったんですが。そこにわれわれ福祉専門職チームに依頼が来まして、 誰と誰と誰を組み合わせて、1 週間程度送ってくれないかっていう依頼が来るわけですね。そ うすると、そういうオーダーに対して職種を組み合わせて、柔軟に届けれるっていうことがで きるのは、われわれのチームだけだったんですね。それで1週間避難所を立ち退くのが遅れま したけども、支援が可能になりました。ま、そんな事例もございました。この中・長期に結び つけていくいうことでございます。じゃ、この派遣チームはいうことで説明がありますが。

大規模災害発生時おおむね災害救助法適用の程度の災害の場合に、福祉の専門職チーム、これが初期に入って5日間程度、先遣隊、応急支援、中・長期の支援に引き継ぐという役割を担うんだいうことを考えました。で、チーム編成は社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員、地域包括支援センター、4~6名程度を目安にしてというふうになっております。で、これについては実は、あとになってから専門職チームのできる限界というのもあるということがあるのと、専門職も必ずどっかの事業所に所属しているという問題がありまして。全ての高齢者団体、障害者団体、そういう団体の全部一緒に混ぜて、この専門職チームをつくるというふうに途中から方向転換をしたところでございます。で、①要援護者のスクリーニングそれからニーズ把握、諸相談に応じる。それから②介護等の支援の他に避難所の環境調整の整備、福祉的視点での助言。③連絡調整・情報収集、中長期支援の橋渡し。それから派遣の流れということで、派遣調整を行う本部組織を設置して、基本的には市町村の要請で派遣する。要するに、市町村がなんの職種となんの職種をオーダーするというふうに言ったものを、こっちが見繕ってお届けするという考え方でございます。ま、このようなことを考えて、このチームをつくってきたものでございます。

ここで、どんな課題があるかっていう問題になったことがありまして。解決しているものもありますが、まだ継続していかなければならないものもあります。まず1つ目は、当然のことながら支援をする方々、受ける方々が多岐にわたりますので、災害規模とか市町村の状況で支援過程の、その基準というのが非常に難しいなっていうこと。いろんな人たちがいて、その基準というのが難しいなというのがあります。で、ワーキング会議でこれは検討して、マニュアルや研修会等で一定の対応をしようというふうになってますが、まだ明確にはなっておりません。2番目が派遣調整を主体に担う「本部」はどのような組織か、ということで、ワーキングとは別に、医療保険を含めた有識者懇談会を設置して、これは検討しようと。先ほど見ていった図でございます。それから3番目が市町村や関係団体にチームを認知してもらい、活動しや

すい環境をつくるにはどうしたらいいか。そして4番目が、派遣人材の確保と所属長の理解はどうやって取り付けるのか。研修や訓練の方法をどうするのか。講師はどうやって確保するのか。災害派遣福祉チームの活動費の確保はどうするのか。災害派遣福祉チームを定着させる方法はどうしたらいいのか。このようなことなんかを考えながらこんにちに至っております。解決しているもの、いないもの、ございます。

で、これにつきまして先ほどムービーにも出てまいりましたが。2013 年 12 月 1 日岩手の報告会に学生さんたちがお出でいただきまして、遠藤先生のまとめの論文を頂戴しまして、先ほどのムービーにも入っていた、こういうことを実際、ソーシャルワーカー、現場でやってたよね。これがこれから学生さんたちの生の言葉として、聞くことができると思います。さらに遠藤先生は参考にということで、こういう資料もあるよということで、その論文の中で紹介をしていたやつでございます。

ここで、この学生さんたちにお出でいただいた 12 月 1 日の盛岡会場、ホテル東日本の会場で、独り言のようにメモを取っていた、学生さんたちの発表を聞きながらメモを取っていた私のメモでございます。新たな仕組みづくりは人や金の流れが頭に思い浮かぶもんだなと、さっきお話ししたとおりです。そして新たな関係性をつくるっていうのは、危機と一緒にあるんだないうのも勉強になりました。また目途としては、組織・機関・人を構造化するターゲットシステムの特定が必要になった。そして予測できないニーズに対応する柔軟性の仕組みはどっかに準備されていないと無理だった。ターゲットの中に答えを見出すんではなく、見出すアセスメントが必要というふうに書いていますが、頭っから決めつけていくのではなくて、相手の言葉の中に、思いの中に何をしたらいいかを見つけていくという、そういうアセスメントが必要になったなというふうに感じております。またミクロでは、社会システム自体が崩壊しているときには、それを構築してきた人間関係を思い出したな。そしてソーシャルワーカーの日常的視点での相互作用・交互作用・関係性というものを思い出して援助していたなというふうに、学生の方たちの発表を聞きながら感じました。

人間は緊急時には、友だち・仲間・知り合いの顔を思い出すもんだ。安否確認したい、声を聞きたい、困り事の力になりたいと思う。そのために、自分の経験と知識を総動員しながら、近くにいる人に相談を持ちかけるもんだ。同時に何が使えるか、それを一生懸命考えていた自分がいたな、仲間がいたな。その資源をどうやって使っていくかっていうふうに、図にまとめて見るいうことを私はやっておりました。そしてその連携図に、人と金をどのように配置したらいいかっていうことを考えました。柔軟な連絡調整の仕組みや様式や手順をそこに配置する役割分担を考えました。寄り添いを実感できるフォローアップの体制も準備しなければならない。ま、こんなことを考えながら、取り組んできたものでございます。

その学生さんたちの現場での発表を聞いて、もう一つ思ったのは、まさしくナラティブの支援をしていただいたものだというふうに思っております。PTSD なんかで使う精神療法の1つでございますが、まさしく聞いて「おお、ナラティブ支援をしてくれたな、この学生さんたち」というふうに思いました。で、既存の優位な枠組みに対して、そこに、おぶさらないものを見い出して、そして新しい枠組みを生み出そうとする語り直しでございます。ただし、皆さんはもしかしたら語り直しを聞けなかったのではないか。そこにひとつ不安があったんじゃないかなというふうに、あの時、12月に思いました。その後、私は被災地の講演会に呼ばれて、皆さ

んが面接をした会員さんたちとお会いしました。そのとき、語り直しが学生さんに本来は伝えてほしかったんですが、僕のほうにありました。話をしているうちに自分の考えってまとまるもんだねって。理屈では分かってたけども学生さんたちのおかげで、自分の考えも整理ついたよという人たちがいました。まさしくこれはナラティブだろうなというふうに思います。で、会話の参加者は恊働して、これをつくりあげていく、セラピストは自分の考えを押し付けない、ま、これがですね、まさしく皆さんがやってきたことなのかなというふうに思いました。

基本的な考え方ということで、これ、もしかしたらこの後の私の助言の内容になると思いま すが。私たちは人生を生きるとき、自分たちの経験を解釈しながら生きているが、なんらかの 枠組みがないと自分の経験を見つけることができない。その枠組みが自分についてのナラティ ブである。従ってナラティブが変化すると、経験が変化して、行動も変わることになる。その ナラティブは他者とのコミュニケーションを通じて生まれ育てられると。私たちが抱える問題 をコミュニケーションによって生み出された意味として考えることができる。ナラティブはそ こに働きかけるって。まさしく学生さんたちにこれをやっていただいたというふうに思ってお ります。そしてそれは、被災を受けたソーシャルワーカーたちの、そして、地域の皆さんの自 立支援だったというふうに思ってます。これが自立支援に結び付くっていう支援、自立支援で なければならないというふうに、僕は思ってます。当然のことながら、この自立支援というの は、普段のソーシャルワークにも同じことが言えますので、災害時の特殊な例を除けば、これ は基本的な考え方でございます。できないところを自分でできるようにする。自分でできるん だけどもしてない人もいるよね。自分でできるようにしたら、しているようにしてあげなさい。 でも、自己効力感の向上がないと、なかなかやる気が出ないよね。だから、成功反復体験が必 要になるよね。とはいえ、人間は怠けものだから、怠けものだから長続きするの難しいよね。 だから明確な目標が必要だよね。明確な目標というのを律する自律と言うんですよ。ところが 最近は、認知症や終末ケアで、自分のことをなかなか言えない人たちが増えている。それは認 知症や終末ケアは家族介護者のケアだと呼ばれている。家族介護者のケア計画をつくるソーシ



ャルワークが、これから主流になってくるだろう。そして、 生活支援いうものの再定義が必要になってくるだろうとい うふうに僕は思っております。実用性の5つの条件でござ います。

最後に、皆さんは自分たちが面接をしたことを言葉にして、文字にして、後世に伝えようとしています。学生さんたち、本当にありがとうございます。それは実践と理論を行ったり来たり、結びつける作業であるということで、これは卒業してからも常に求められる私たちの視点でございます。そのために、エコシステム、システム理論とエコロジカル理論、そういう理論と行ったり来たりして、確認を

していっていただきたいいうふうに思います。今皆さんは、カウンセリングとケアマネジメントの両方に足を置くとした場合、真ん中にソーシャルワークを置いたとする場合にケアマネジメントのサービスが全くない被災地での支援を面接しました。そして、被災を受けた人たちのカウンセリングサイドに、右側に少しウエイトをかけました。これはトリートメントアプロー

チ、治療的アプローチだったないうふうに私は思っております。最後に、これを皆さんと一緒に考えていければなというふうに思っております。僕が壁にぶつかったり困ったときに、いつも先ほど見ていただいた岩手山という富士山のような山があるんですが。そこに向かっていつも困ったとき手を合わせます。山岳宗教ではありませんが。この言葉を、ひとつ学生さんたちにご紹介して終わりにしたいと思います。ニーバーの言葉です。「変えられないものを受け入れる心の静けさと、変えられるものを変える勇気を、そしてその両者を見分ける英知」が私にあればいいな、というふうにいつも、困ったり悩んだりしたとき、お祈りをしています。どうか、皆さん、現場に出て、この実践と理論の行ったり来たりの融合を目指して頑張っていただければと思います。岩手県へのご支援、ありがとうございました。報告に代えさせていただきます。

司会: 佐々木先生、どうもありがとうございました。では、ただいまの講演につきまして、何かご質問ございますでしょうか。じゃ、特にないようなので。また、後ほどにでもしようかと思います。はい。それでは、ここでいったんですね、10分間の休憩に入りたいと思います。休憩後の、学生さんの発表終了後にですね、お配りいたしました資料にあります、質問カードを回収させていただきたいと思います。この時間を利用していただきまして、ご記入いただければありがたく思います。それでは休憩に入りたいと思います。

【学生発表】

司会:皆さま、それでは、後半戦をはじめさせていただきたいと思います。"声"プロジェクトに参加をいたしました学生の皆さんによる発表を行いたいと思います。はじめに、日本福祉大学の学生より発表いたします。発表学生の皆さんをご紹介いたします。上野莉恵さん。鈴木秀明さん。星野真希さんの3名でございます。では、よろしくお願いいたします。

鈴木:はい。これから日本福祉大学の報告をさせていただきたいと思います。報告者は上野、 鈴木、星野となります。本日はよろしくお願いいたします。

まず、東北を襲いました東北地方太平洋沖地震についてまとめたスライドとなっております。今回、インタビューをした地区は震度6弱のですね、仙台市青葉区と泉区のインタビュー先となっております。後ほどインタビューについては、詳しく報告していきたいと思ってます。活動日程は以下の通りになります。インタビューまでには事前に学習を深め、自分たちの中で被災地のイメージや困難なことを形成していきました。そして現地に着き、被災地を目の当たりにし、自分たちの中で生まれてきた疑問、現状を捉えた上でインタビューを行いました。こちらは初日にインタビューを行い、インタビューの留意点や引率教員と参加学生の初めての顔合わせの場面です。ここからは被災地の視察のスライドとなります。このようにですね、家の土台がない状態や、水が引かなくなりですね、大きな水溜まりができている状況が伺えるかと思います。またですね、たとえ家が残ってたとしてもですね、中の家具や生活用品が散乱していて、とても住めるような状態ではありませんでした。また、こちらはですね、右上のスライドになるんですけれども。撤去命令の張り紙が貼られていたんですね。で、こちら動かなくなった自動車に貼り付けてありました。以前は使われていたと思うんですが、所有者の方にですね、

撤去したい、もらいたいという紙が貼られてありました。こちらは道路が陥没してしまい普段の道が閉ざされてしまう状況でした。また、たとえ道があったとしても潮が満ちてですね、その場には入られなくなるなど、交通手段の遮断を感じました。こちらは津波被害があった名取市の閖上小学校です。真ん中のほうにですね、白い時計があるかと思うんですけれども。それを遙かに越えてですね、津波が襲ってきました。私たちは、被災地を回るにあたってですね、全てが、失ったものばかりではないなということに、感じました。こちらが、南三陸のさんさん商店街という場所なんですけれども。そこにはですね、食事処、呉服店、理髪店など住民が集まるスペースとして力強くですね、こちら立っていたんですね。このように現地を視察したことで、事前学習にはなかった疑問や聞きたいことなどが多く浮かんできました。このことを含めて次にインタビュー内容に移らさせていただきたいと思います。

星野:1日目のインタビューでは社会福祉法人東北福祉会「せんだんの里」副施設長の千脇さんにお話を聞きました。せんだんの里の概要はスライドのとおりになります。インタビューを聞き、大きく3つのことにまとめてみました。

まず1つ目の状況の確認についてです。震災が起きて、まず最初に行ったこととして、千脇 さんは状況の確認を行ったそうです。建物はどこがどれぐらい壊れていて、どこが大丈夫なの か。そのまま中にいてもいいのか、外に行ったほうがいいのか、ということの確認。ガスや電 気、水道などといったライフラインが止まっていないかということの確認。また地震が起きた



時間帯は、デイサービスやショートステイなどの利用者の方が帰宅するはずだった時間なのですが、地震が起まったことによって、とによって、ったいるので、そういう人にあがどれぐらるのかというないできるのかとができるのかとができるのかというはいりとができるのかというはない。また、せんだんの里は内陸部にあり、津波の心配はよりなかったために地域の人

を受け入れることが予測されていました。なので、そういった地域の人をどれだけ受け入れられ、受け入れることができるかということを、自分たちができることの確認をしていったそうです。

2 つ目は「知っている」と「できる」の違いについてです。せんだんの里では、最低限の防 災訓練は行っており、防災マニュアルも震災の前から存在していました。しかし、震災が起き た後に千脇さんが職員の方にお話を聞くと、防災マニュアルに沿って対応をしていたという職 員の方もいれば、防災マニュアルがその場になくて分からなかったという方、または防災マニュアル自体あるのを知らなかったという方がいたそうです。またインタビューをした当時で、 震災から約1年半が経過していたのですが、千脇さんは今もだんだん防災に対する意識が薄れてきているという話をしてくださいました。施設というのは、利用者の方の命を守るために防災マニュアルがあるというのを知っておくのは当然のことではあるのですが、知っている、知っているつもりというだけではなく、それをできるということにしていかなければならないと話してくださいました。

3つ目は震災を忘れないということについてです。インタビューの中で、この震災に対して、どのような思いがあるのかということを、千脇さんに質問させていただきました。千脇さんは地震だけで見ても日本は一番多い国で、いつどこで起きるか分からない状況にある中で、決して年月ではないと思っているという話をしてくださいました。そういう意味では地震は経験していても、津波は経験していないし、いろいろな苦しい思いを持っている人もいるかもしれないけれど、何よりも震災を忘れないようにしたいという話をしてくださいました。また、被害の状況は地域によってさまざまではあると思うのですが、そんな地域とこれからもつながりを持っていきたいともおっしゃってくださいました。また、震災を忘れないようにしたいということは、逆に言えば、いろいろな人にこの震災のことを知ってほしいということでもあると語ってくださいました。千脇さんのお話を聞いて、この震災を忘れてはならないということは当然ではあると思ったのですが、この震災から学んでいくこと、そしてこの話を聞いたことをこれからに生かしていくということが大切になるのではないかなと感じました。

上野:2日目は仙台市泉区中央地域包括支援センターの西澤さんにインタビューをしました。 仙台市泉区中央地域包括支援センターの概要はスライドのとおりになります。このインタビューについて3つのことについてまとめました。

1つ目は泉区の災害時の状況についてです。スライドの訂正があります。スライドでは震度6強と書いてありますが、正しくは震度6弱になります。当時震度6弱の地震があり、家にある家具が落ちるなどの被害がありました。また、地震の影響で水道やガス、電気などのライフラインが停止されました。そのため、電気が途絶えられていることにより連絡が取れない状況になったり、生活を維持するための水や食料不足、ガソリンの不足により移動手段が困難な状況があったとのことです。これらの状況から、今まで暮らしてきた環境が大きく変わり、住民にとって、不安や困難があったと思われます。

2 つ目に被害時に取った行動についてです。西澤さんに民生委員と一緒に、泉区内の安否確認を行いました。民生委員と協力していきながら個別訪問をし、生活での悩みや相談などをされました。安否確認をする際に安否確認リストを利用して行ったと西澤さんは語っていました。安否確認リストは、震災が起こる前から作成されており、支援の緊急性が高いと予測されるところから順に相談をしていく仕組みを、事前に備えていたと言っています。住民が思う生活での悩みや相談について解決していくために、行政との連絡、連携を取ったり、インフォーマルな部分として住民との連携を取りながら支援をされていました。

3つ目に西澤さんの声についてです。西澤さんは災害時にどのような支援が必要なのかについてお聞きしました。西澤さんは強く思っていたのが、2次災害を出さない支援をするということ。自分の地域に死者を出したくないと言いました。起きてしまったことを考えるより、これからのことを考えていく視点を持ち、それを意識しながら素早く対応を行われていました。

その対応について、普段の生活の中の業務がしっかりしていれば活動はできると語ってくださいました。

最後に西澤さんは高齢者や障害者の権利について、深刻な被災状況のときにこそ権利を主張できない人の権利を擁護していくことが求められていると語ってくださいました。西澤さんにインタビューをして自分が住む地域が大きな被害に遭った場合にソーシャルワーカーはどのような支援、どのような行動を取るべきかを常に予測していきながら、考えていくことがとても大切などと感じました。

鈴木:それでですね、私たちは、プロジェクトを経験してですね、以上の3つのことを強く感 じることができました。まずは、生活からの防災・減災意識。そして2つ目にはソーシャルワ ーカーの専門性。そして3つ目には人付き合いの大切さになります。まず生活からの防災・減 災意識はですね、普段からの意識が大切だと感じました。で、もちろん、意識していても限界 はあります。しかし、一人一人がですね、意識が今回、減災につながった例も、確かにあった ことも事実になります。そして、2 つ目にはソーシャルワーカーの専門性です。今回インタビ ューを聞いていく中で、ソーシャルワーカーは何をしてくれるんだという言葉を言われたこと を伝えてくれました。私もですね、当初は、医師や看護師など目に見える支援が必要かと思っ ていたんですけれども、度々ですね、ソーシャルワーカーの方に寄り添うというキーワードが 出てきたんですね。そのため、制度だけではない複雑な距離をソーシャルワーカーだからこそ ですね、対応できるのかなと、私自身、私たち自身感じました。そして人とのつながりの大切 さです。しかし、ここで言いたいのはですね、普段の中での人付き合いも大切なのですが、被 災してからのですね、人付き合いももっと大切なのではないかなと感じました。今回の事例に、 被災時に食料不足に悩んでいた1人の高齢の方がいました。その方の対して全く知り合いでは なかったラーメン屋の店主が食事支援を行っていたという例がありました。つながりを見せて いったんですね。このようなつなぐ力、このことがソーシャルワーカーの専門性が発揮された 瞬間なのではないかなと感じます。そして私たちはそれぞれですね、今回プロジェクトを経験 して、将来、ソーシャルワーカーとして大切にしていきたいことを、一文で記しました。今後 ですね、今回関わったソーシャルワーカーの方々、地元の住民の温かさですね、力強さを、忘 れないように日々立派なソーシャルワーカーを目指していきたいと思っております。以上で日 本福祉大学の報告を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

司会: それでは次にまいりたいと思います。次は、中部学院大学の学生さんより発表していただきます。発表していただきます学生さんはですね、石川智也さん、小川侑季さん、廣野美月さん、古田陽亮さんの4名でございます。よろしくお願いいたします。

古田:これから中部学院大学の発表を始めます。私たちは2012年8月に岩手県、2013年3月に宮城県の被災地を訪問して、社会福祉士の方にインタビューを行いました。岩手県では、相談支援専門員の近江さん、地域包括支援センターに勤務している千菅さん、宮城県では介護サービス介護事業所部長の鈴木さん、特別養護老人ホームに勤務している篠原さんにインタビューをさせていただきました。

4人の方にインタビューをさせていただいた内容を大きく、災害当日の活動、仮設住宅、連携、災害時の対策という4つの項目に分けました。まず始めにインタビューをしたソーシャルワーカーの方の災害当日の活動についてお話しします。震災当日は被災地に住んでいる人全てが混乱の中にいました。その中で、安否確認、物資の調達・配分、人々のニーズへの対応が重要でした。安否確認では、宮城・岩手ともに、地震・津波の被害でライフラインの麻痺や、利用者のデータが流されるなどの被害により、利用者の情報収集が困難になったため、福祉関係者が避難所や利用者の家を訪れて安否確認を行ったり、顔見知りの地域住民の方からの情報を基に、新たに利用者のデータをつくる作業を行いました。物資の調達・配分では、ガソリンや食料の不足と資源が、平等に行き渡らない状況や妊婦や高齢者といった方々に対し、衣服やおむつなどの必要な物資や薬が届きにくいという問題が発生していたため、物資が届くよう行政やボランティアの方々などと連絡・連携を図りながら、少しでも多くの物が人々に行き届くよう調整を行いました。

宮城でのインタビューを行った施設では、電気・水道などのライフラインの確保に努め、他 団体とも連携を図りながら入浴サービスを行ったり、他職種、他地域の支援にあたりました。

また、法テラスでの活動を行っており、弁護士といった事門職への法的な、法的・福祉 的な相談事に対して、ソーシャルワーカーが介入し、出り、代弁することで相談者の思した。そのため、社会福祉士は本来ある役割と併用して、利用者のデータの確保や物資連携しながら活動をしてい活動でしながら活動をしての活動で、次に仮設住宅での活動で



す。仮設住宅では個々の支援、孤立化、仮設住宅の場所、利用者の精神不安、精神的不安などの問題が挙げられました。個々の支援では、一律につくられた仮設住宅の構造により普段の作業が行いにくい、負担がかかるといった細かな問題が多く挙げられました。そのため、社会福祉士は規制された構造の中で、より生活しやすい環境をつくるための相談支援にあたり、他職種との連携をしながら問題解決に向けて工夫を行いました。また、仮設住宅は行政の指定された場所への入居だったため、今までつくりあげてきた個々のネットワークが崩れるといった問題が起こりました。岩手でのインタビューでは、誰がどこの仮設住宅に移ったのかが、県との情報共有不足のために分からなくなってしまった部分もあったそうです。ネットワークが崩れてしまったために、誰とも関わりを持たず生活する高齢者の孤立化・孤独死という問題が明るみになり、これらの問題を解決する仮設住宅への訪問を中心とした地域とのふれあいも積極的に行いました。しかし、社会福祉士だけで解決できる問題ばかりではありません。仮設住宅の設置する場所がないため、山の瓦礫や交通に不便な場所につくられたため、外部の交流がほと

んどない仮設住宅もありました。また、先の見えない状況や現在直面している問題に対する不 安感などを持つ方々も多く見えたため、相談を中心にボランティアや行政、他の職種の方々と 調整や関係を持ち、人々の生活を支援していました。

小川:以上のことを中心に社会福祉士の活動を見ると、キーワードの1つに連携が挙げられま す。連携といっても、ただ、関わりを持つことだけではなく、相手に対してそのグループ、機 関が持てるそれぞれの能力、持ち味を発揮できるような関係が大切になってきます。行政との 関わりでは、生活、福祉に対する制度やサービスの提供に関する情報の共有が大切になります。 ボランティアや他職種との連携調整の橋渡し的な存在と並ぶこともできます。他職種との関わ りでは、それぞれの役割を把握しながら、利用者に対してどのような支援を提供できるかとい った情報の共有を基に、他職種の活動を把握することで、より柔軟な対応が可能となり、タイ ムラインの差もなくすことができます。地域・ボランティアの関わりでは、そういう人たちが 提供することができる支援を把握するとともに、岩手県では応援に駆けつけてくれた職員が、 自分の意思で行動することによって、地域ごとでのコミュニティ形成を素早く行い、地域住民 が行っていくべきことを理解していたため、スムーズに地域との連携が図られていました。ど んな場所、人に必要なのか。また普段から関わりを持つことによって、今回のような緊急事態 に直面した際にも、お互いに情報を交換できる信頼関係をつくることが、連携をつくるにあた って重要な要素であり大切なことであります。連携を的確に行えるようにするには、普段から 関わりが大切だとお話ししましたが、これらの内容は今回のような災害時の対策の1つにもな ります。普段から地域住民の方や行政、行政との関わりを持つことによって、利用者個人だけ ではなく、地域とのつながりができ、その地域の特徴を知ることができます。これは災害時な どを想定したとき、何が使えて何が使えなくなるか、避難時の状況なども大まかに確認するこ とができると思います。

この他にも今回問題で取り上げられたデータですが、電子データではなく、ノート等のアナログ管理を行うことで電子機能が使えなくなった場合に、地震や津波などの被害で紛失した場合にも対応が可能というメリットがあります。人・物など社会資源を把握し、コーディネートしていくことが社会福祉士として大切なことであり、地域・行政・他職種と利用者のネットワークをつくることが、支援を行われる事に当たって、重要な要素です。

廣野:今回の震災では、社会福祉士としてさまざまな資源の活用が大切ですが、まだ解決していない課題も多く残っています。1つ目は環境の整備です。現在津波対策による住民の意見対立や、震災前の地域に住むという不安や抵抗感、隣人同士の関係に対する関わりについての問題があります。また、被災地だけではなく、他県民である私たちの被災地との関わり方も大きな問題の1つです。被災地の社会福祉士の方々は、皆、この震災のことを忘れずにいてほしいと話していましたが、実際私たちの震災に対する意識が薄れてきています。私たちが募金を行っているときに「一度募金したから大丈夫」という認識を持っている人も少なからず見られ、またニュースなどで取り上げられている回数も減る中で、さらなる震災被害情報が出ると、ほとんどの人が新しい情報を意識してしまい、東日本大震災を過去の出来事と認識してしまいがちです。被災地では、まだまだボランティアの支援が必要な地域も少なくありません。ボラン

ティアの支援が少なくなるということは、被災地に住む人々の支援に支障が出ると同時に回復 しきっていない行政などには大きな負担となります。このような意識の変化についても変えて いけるような取り組みを行うことが重要になってきます。そして被災地の人々の中での問題と しては今後の見通しが不透明であることが挙げられます。震災から約3年がたちますが、宮城 県の一部の地域では、ついこの間瓦礫の撤去作業が終了見込みの報道がありました。しかし、 これはほんの一部で、宮城以外の県でも、今なお瓦礫の撤去作業が行われており、処分場所も まだ決まっていないのが現状です。また、多くの人は住む場所、帰る場所が見つからず、仮設 住宅で生活しており、先の見えない状況に苦しんでいます。現段階でも難題が多くあり、行き 届いた支援が困難な状況であることも事実です。このような人々に対して、社会福祉士は寄り 添い、支援を行っており、福祉関係者が話し合う場で、どこでどのようにまとめられているか を情報共有、情報を共有し、地域に伝えていく必要があります。私たちは他県に住んでおり、 できることがないと考える方もいるかもしれませんが、現在の状況を知るということもひとつ の関わり方です。震災は過去にあったものと受け止めるのではなく、そこから学んだこと、見 つけたことなどは、他県に住んでいる私たちにも感じること、知ることがあったと思います。 そのような気持を忘れずに意識していくことも、私たちにできる支援の 1 つだと思いました。 最後にこのプロジェクトに参加した感想を一人ずつ話していきたいと思います。

古田:今回のプロジェクトに参加して、改めて被災、震災に向き合うことができたし、このソーシャルワーカーの"声"プロジェクトということで、専門職から見た震災という新たな視点から見つめ直すことができたので、とても勉強になりました。

小川:はい。今回のプロジェクトを通して、その後に学祭とかでどういう活動をしたのか、どういうことを聞いたのかってことを、いろんな人たちに伝えていったんですけども。やはり、時がたつと、やっぱり、そういう意識が薄れてしまうってことが自分の中ですごい感じて。そして、ソーシャルワーカーの方がやはりこういうことを忘れないでほしいという言葉を添えるときに思い出して、震災はもう3年近くたっているんですけれども、やっぱり、そういう大きなことを忘れずにしていくってことが、やっぱり、大切なんだなということを今回のこのプロジェクトと、その後にした活動で学びました。

石川:この"声"プロジェクトを通して、学生の皆さんもいろいろな思いを持ってこれたと思いますけども、その思いを持って、次の"語り部"プロジェクトに、今日もそうですけども、これまでもいろいろと参加してきました。でもその中で、うまく自分の思いとか、ワーカーさんの声を伝えることができるときもあれば、できないときも、なかなかうまく伝わらないなと思うときもありました。でも、こういった活動を、僕たち学生の形として伝えていくことがこれから、今後継続してやっていくことが大切だと思いますし、これから次のプロジェクトに参加する学生の方々にも、つなげていければなと思っております。以上で中部学院大学の発表を終わります。ありがとうございました。

司会:はい。それでは、最後になりましたけども、関西福祉科学大学の学生さんからも発表していただきます。発表者の学生さんは泉綾子さんでございます。では、よろしくお願いいたします。

泉:紹介をいただきました関西福祉科学大学チームの泉綾子と申します。大学 4 年生です。よろしくお願いします。私からはソーシャルワーカーの"声"プロジェクトを通じて、インタビュー活動の中で、ワーカーの方から聞いた声、それを分析してどんな専門性があったのか、ソーシャルワーカーってどんなふうに災害時に活動していたのかという分析を、私たちはしてきました。その発表をします。そして、学生"語り部"プロジェクト分析の中で分かったこと、インタビューを通じて印象に残ったこと、これは伝えていきたいなということを伝えるプロジェクトについて報告します。そして最後に、私は 2 年間このプロジェクトに携わってきたんですけれども、その中で得たこと、感じたことを発表したいと思います。

私たちのチームが2年間かけてインタビューをさせてもらったのが、前のような13名のソーシャルワーカー、社会福祉士の方です。現地の社会福祉士会の方にコーディネートいただきました。DVDを見ていただいたんですけれども、その中で私たちが考えるソーシャルワーカーの災害時の専門性を4つのキーワードにまとめました。

まず1つ目は初期的なアセスメントと気付きです。現場を見て何が必要か、何ができるのかをワーカーはイメージしていました。雄勝地域包括支援センターの、ソーシャルワーカーの事例を紹介します。震災から1年がたち、お茶会や介護予防教室などのコミュニティの場を提供



することが改めて重要だと思いました。しかし、この場に参加できない人、参加しない人もいます。特に男性の参加が少なく、震災によって仕事をなくし、役割を見失った人、妻を亡くして家事ができずにいる人の存在に気が付きました。ワーカーは女性が集会所に集まって、ものづくりをして支え合う関係性をつくったり、生きがいを見出したりしているように、男性向けのコミュニティの場の提供が必要だと考えま

した。ワーカーは、その状況で限られた情報を基に短時間に初期的なアセスメントを行っています。一人一人に適した支援を行うとともに、さっきのワーカーの例のように、状況・環境へのニーズの支援も行っています。

キーワードの2つ目。介入時に道具を活用。要援護者への介入時、関わり始めるためのきっかけづくりとして、道具を活用するなどの工夫を行っていました。地域包括支援センターワーカーの方の事例を紹介します。地域包括支援センターの認知度が低かったため、仮設住宅へのワーカーの訪問を拒否される場合がありました。「地域包括支援センターです」と言って訪問するのではなく「先日保健師が健康調査で伺いましたが、その後はお変わりありませんか」など、事前に行われた健康調査とつなげることで、対象者がソーシャルワーカーの訪問を受け入れやすくなるように工夫をしました。ワーカーの認知度が必ずしも十分ではない現状があります。関わり始めるときに、健康調査、あるいはお茶会の情報を持って「お茶会がありますよ、

参加してみませんか」というふうに入っていったり、「水を持ってきましたよ」などの物資の 提供など、なんらかの道具を使うことによって、今後の支援を円滑に進められるような関係を 築くよう、アプローチをしていました。

キーワードの3つ目。アウトリーチによってニーズを見つける。ニーズ、自分のニーズを表出できない人のニーズをアウトリーチによって明らかにし、社会資源につないでいました。内陸部の登米市中田石越地域包括支援センターのワーカーの事例です。震災から3日後。ある一人暮らしの高齢者宅へ安否確認に向かいました。しかしそこは無人で、家も半壊状態でした。気になったので、次の日も他の人の安否確認をしながら、もう一度そのお宅へ伺いました。その方は、きかくし、帰宅していました。昨日は親せきの家に泊まりましたが、今晩からは自宅にいると言ったそうです。ワーカーは半壊状態の家がいつ倒壊するか分からず、最悪の場合命を落とす危険性もあると考えました。そこで、その方に、今この家に住むことは危ない、命を落とす危険性があるという説明をして避難所への移動を促しました。大規模な災害時には災害が起こっていない平時の支援の対象者だけではなく、多くの人がニーズを、多くの人が支援を必要とします。しかし、その中でも自分のニーズに気付いて、気付くことができなかったり、自分のニーズを訴えられない人もいます。対象者自身に気付いてもらえるように、ソーシャルワーカーがアプローチすることで2次災害を防ぐことができると考えました。

キーワード、最後 4 つ目は支援・資源とつなぐです。対象者にとって必要な支援を工夫し、資源を、とつなぐことで、困難な状況の改善を試みていました。気仙沼市地域包括支援センターのワーカーの事例です。市民会館での避難所生活が続く中、精神障害を抱える方などが薬を飲み続けられず、大勢の人との暮らしの中で不安定になる人が出てきました。他の避難者もイライラしてきて、両者ともに生活がしづらい状況になっていました。そこでワーカーは、市民会館内にある楽屋や廊下などを利用し、大勢の人と一緒に生活するのが難しい人のために少人数で暮らせるように支援をしました。ワーカーには専門知識だけではなく、先を予測する力が求められていました。現状を把握し、障害の特性を踏まえた上で今後の生活を予測する。その予測を基に次の支援を展開していることができると考えました。避難者の将来を見立て、必要な社会資源とつなぎ、生活の質の向上を図っていることが分かりました。

私たちがこれらの4つのキーワードにまとめようと思ったのは、インタビューをしている中でワーカーの方が災害時、ソーシャルワーカーとして何ができま、何をされていましたかという質問をすると「ワーカーとしてできたことか。何もない。まずは人としてできることをやっていた。目の前にいる人の支援をしていただけ」。こう、何々だけとか、こういうふうに答えてくださるワーカーの方が印象に残っていました。でも、何かできたことも必ずあったと、私たちがインタビューをしていて、私たちはそう思っていました。じゃ、それをどうやったら伝えられるのかっていうので、じゃ、災害時におけるソーシャルワーカーの専門性役割を、何かキーワードにしていこうよということで、この4つのキーワードをつくりました。この結論2については時間の都合上、割愛させていただきます。私たちが活動するとき、いつも、ミッションというか合い言葉のようにしているのが「災害時にソーシャルワーカーだからこそできた支援があったのか?」ということです。4つのキーワードで事例も紹介しましたが、ソーシャルワーカーは、専門性、これが専門性だって強く言ったりとか、そんなことはしないけれど、静かに、そのソーシャルワークの専門知識とか技術を生かして支援をして、寄り添ったり、命

を守るというか、そういう支援をしていたということが、私たちは言えます。

次に、このソーシャルワーカーの"声"プロジェクトの次に"語り部"プロジェクトをしています。ワーカーの方にインタビューしただけで終わらない。というのは、ワーカーの方がみな、涙ながらに話してくださったり、いろいろ思い返しながら話してくださっている、それを私たちの中だけでとめるのではなくって、多くの人に知ってもらいたいと思って、今活動をしています。対象は、現在もソーシャルワーカーとして働いている福祉専門職の方、一般の市民の方、高校生、大学生、東日本大震災復興支援に携わる団体のイベントで、語り部をしています。または報告書の作成やホームページ、新聞、マスメディアを通じた発信をしています。

現任のソーシャルワーカーの勉強会では、主にテーマを被災地で活動するソーシャルワーカーの声を伝えるというふうに設定をしています。参加者の方の感想では、災害時ソーシャルワーカーがどう動いたのか、どのような葛藤があったのか知ることができました。ソーシャルワーカーとして災害が起きたときに、何ができるのか考えようと思いました、という感想がありました。学生の私が現場のソーシャルワーカーの方の前で「ソーシャルワーカーの専門性は?」っていうの、かなり勇気が要りまして。「ソ」の字も、本当は言えない。ですけれども、そんな思いで活動していると、「改めて自分はソーシャルワーカーなんだって気付かされました」っていう声とか、「今町では、防災マニュアルをつくろうとしているけれども、ソーシャルワーカーとして何をすべきなのかっていうのを考えたことがなかったから、これから考えていきたいと思いました」っていう声を、現場の方からいただいたときに、あ、私たちにもできることってあるんだなっていうのを強く感じました。

大学生対象の講義では、普段社会福祉を勉強している学生なんですけれども、災害時のソーシャルワーカーの活動とか、その葛藤とか、どんな思いを持って支援をしてきたのかっていうのを伝えるようにしています。その学生の感想には、「ソーシャルワーカーは人と人とをつなぐパイプ役であり、それが被災者にとってとても重要な役割を果たしていることがよく分かりました」、「ソーシャルワーカーを本気で目指そうと思いました」、という感想がありました。日ごろは社会福祉士を目指して勉強していても、福祉を漠然と捉えてしまって、ソーシャルワーカーというところに視点を持つのが難しいというのは、私も感じていたんですけれども。私たちの語り部で、学生と一緒になってソーシャルワーカーについて考えられるというのは、うーん、考えられる機会になっているんだなというのを感じています。

次に一般の人向けに地域の祭りや学園祭などで語り部をしています。このときの主なテーマは「ソーシャルワーカーってどんな人?」認知度を高められたらなっていうことで「ソーシャルワーカーってどんな人? 災害時のソーシャルワーカーの活動」、この 2 つを伝えるようにしています。ある地域のお祭りで、私の印象に残っている来場者の方がいました。「私は東北で被災をしました。そのとき、自分だけじゃなくて、いろんな人が困っていって、自分だけが支援を求めてもいいのかとか、誰に何を相談していいのかというのが分からなくって、非常に不安な毎日を過ごしていました。けれどもおばあちゃんがお世話になっている施設のワーカーさんが、私たちの相談にも乗ってくれて、家族の調整もしてくれました。おかげで今は関西に引っ越しをしてきて、そこでまた生活をし始めることができています。本当に助かりました」っていう声をかけてくださいました。被災者として誰に何を相談していいのかっていうのが分からなかったから、これからも、このワーカーの存在を広めていってほしいという、その方の

声というのは、今の私のこの活動の原動力にもなっています。そしてこの声をワーカーの方に も伝えたいなと、いつも考えています。

次に高校生の授業の中でも発表しています。まず、高校生の反応は「ソーシャルワーカーって何?」っていうような感じで。ソーシャルワーカーって聞いたことあるけど、とか、実はお母さんがお世話になっていますとか、そういう言葉がアンケートの中で見受けられます。私たちが、この写真では、なんか、こう、グループワークをしているんですけれども。災害時のソーシャルワーカーっていうと難しいので、災害時もしも自分たちが生活をしていて災害が起きたら、どんなことに困るのかっていうのを考えてみようというグループワークをしました。「意外といろんなことに困るんやな」って言いながらも、たくさん困り事を出していました。で、この写真に写っている高校生たちは看護、介護福祉士、医学療法士等、対人援助職を目指している、高校生で。自分たちも将来きっと、連携することがあるんだろうなという声を教室から出ていくときにかけてくれました。

これらの活動を通して、私たちがミッションだと考えていることは3つあります。1つ目に 災害支援におけるソーシャルワーカーの役割を現任のワーカーの方と一緒に考えていくこと。 2つ目に、ソーシャルワーカーを広く知ってもらうこと。3つ目に「助かりました」という支 援を受けた人々の声を何もできなかったと感じているワーカーに伝えること。これらが私たち 学生にできる後方支援じゃないか。いや、後方支援だとして、私たちは活動をしています。特 にこの3つ目のところでは、11月12月に東北の宮城・岩手・福島で意見交換会をさせてもら いました。社会福祉士会の方、インタビューさせてもらったワーカーの方と意見を交換しまし た。自分たち、ワーカーの方の声で印象に残っているのが、自分たちが記録をしたりとか伝え ていったりとか、振り返ったりとかしないといけないと思っているけれども、そこまで今でき ないんだっていうような、涙ぐんだ声、すごく印象に残っています。そして、それを学生が一 緒にやってくれていることは、本当にうれしいと思っているとか、自分たちにもできる、でき ていたことがあったんだというような声を聞いたときに、あ、これからもこの活動を続けてい きたいなというふうに感じました。

最後にこのプロジェクトを通して、私が感じたこと、学んだことを発表します。まず、全く考えたこともなかった被災者支援におけるソーシャルワーカーの専門性を知ることができました。次にインタビューを通して、ワーカーの方が葛藤を抱えながら支援をされていたり、ワーカー自身も被災をしている。その上で支援をしていく。その葛藤とかしんどい状況の中でも活動を続けている。それも生活という途切れることのない生活を支援しているワーカーだからこそ、後方支援って大事なんだなというのを感じています。そしてソーシャルワーカーという職業の魅力です。私は、今大学4年生で就職活動をついこの間までしていたのですが、福祉の専門職受験しました。そのときに、面接官に言われたのが「対人援助専門職者としてやって、一生やっていく覚悟はありますか」と言われたので、「はい、あります」って言ったけれども、また同じ質問をされました。「覚悟はありますか」。何を聞かれているのか、そのときは、ちょっと分からなかったんですけれども。私は対人援助専門職者になりたかったんです。なんでかっていうと、インタビューをしていたときに、支援ができるワーカーがかっこいいとかそういうのではなくって、何ができるのか、これで本当に良かったのかって考えながら、悩みながらも考えながらも、支援を続けているそのワーカーの姿にあこがれて。誠実さを感じたから、私

は対人援助専門職者になりたいというふうに思いましたって、面接の時に答えました。受かりました。私が働く職場は同僚が 15 人ほど、一緒に働く予定なんですけれども。どんな分野が好き?っていう話題がよくあるんです。障害者分野とか児童とかいう話があるんですが、私、好きとかじゃなくて、何を今までやってきたかとかいう話の中で「私、災害時のソーシャルワーカーの専門性っていうか、災害時にソーシャルワーカーさんがどんなふうに活動してきたか考えてる」みたいなことを言うと、振り返ってくれる、関心を示してくれたことがありました。これはきっと、私、大学は卒業するんですけれども、プロジェクトは卒業しないというか、インタビューさせてもらったからには、いろんな話を聞かせてもらったからには、それを発信し続けたりとか、自分の将来、ソーシャルワーカーとして働くときに、そのワーカーの方の言葉とか思いっていうのを大事にしていくのが、私の今後のミッションじゃないかというふうに感じています。私たちのチームで、ホームページをつくっています。ここには、今発表していないワーカーの方の声を載せた報告書や語り部の報告も載っているので、ぜひご覧になっていただければなと思います。貴重なお時間いただき、ありがとうございました。

司会:はい。どうもありがとうございました。じゃ、ただいまのご発表に何かご質問、ございますかね。よろしいですか。はい。どうも、泉さん、ありがとうございました。合格して良かったですね。このプロジェクトが大学生活で非常に大きかったんだなっていうふうに感じました。ご苦労さまでした。

【討議】

司会:はい。それでは再開したいと思いますので、よろしくお願いいたします。それでは、パネルディスカッションに入りたいと思います。パネルディスカッションには、先ほどご講演いただきました佐々木裕彦先生、発表していただきました各大学の代表学生3名の方、お願いいたします。コーディネーターといたしまして、中部学院大学人間福祉学部大藪元康准教授。シンポジウム審査員といたしまして、関西学院大学人間福祉学部池埜聡教授にお願いしたいと思います。それではここで、進行をコーディネーターの大藪先生にお願いしたいと思います。どうぞ、大藪先生、よろしくお願いいたします。

大藪:はい。よろしくお願いします。冒頭に関西福祉科学大学の遠藤先生よりプロジェクト全体の説明がありましたけれども、学生が行ったインタビュー先の全体像が、少し捉えにくいんじゃないかなというふうに感じましたので、少し遠藤先生の資料の4ページを見ていただきたいというふうに思います。フィールドワークの概要と書いていただいてます。第1次から第4次までですね。4ページになりますけども。第1次が宮城県、第2次が岩手県、宮城県。第3次が宮城県というふうに書いてありまして。で、今回、シンポジウムには日本福祉大、関西福祉科学大、そして中部学院大が出ておりますけども。関東のほうの大学としましてはね、文京学院大、淑徳大、日本社会事業大学も関わっております。そして、先ほどの発表につきましては、このフィールドワークに行ったところで、聞いた話を学生がまとめたというふうなところになっております。でまた、インタビュー先につきましては、7ページから8ページ。このですね、遠藤先生の資料を拝借するわけですけども、7ページから8ページにインタビュー先が、

集約してあります。こちらのほうにインタビューをしてきた内容を踏まえて学生の報告がありました。そして、このプロジェクトは、ソーシャルワーカーの"声"プロジェクトと"語り部"プロジェクトの二本立てということになっております。関西福祉科学大の学生の報告には、語り部のほうの報告もあったわけですけれども。他の学校で"語り部"プロジェクト報告がありましたらお聞きしたいと思うんですけれども。石川君、どうですか。

石川:中部学院大学の石川です。中部学院大学の語り部活動としては、さまざまなことをやってきました。例えばですね2012年の10月の終わりからですね、岐阜県の柳ヶ瀬商店街の近くにある神田町のところに中部学院大学のサロンが3週間ぐらいありまして。そこで今回の、"声"プロジェクトの資料ですとか、感想文ですっていうのを掲載させていただきました。なかなか、そこに関しては、一般の方々が興味を示すような反応は薄かったなって思いはあります。で、そのサロンの活動に際して、地元のFMラジオ局のFMワッチという局で宣伝をさせてもらったんですけども。そこでも反応はなかなか取れないのかな。大藪先生最終的にどのぐらい来ましたか、サロンのほうに?

大藪: サロンのほうは、少しですが来ていただけました。

一同:(笑)

大藪:活動したということで、まずは大学を出て商店街の空き店舗を使った活動というふうなことで、地域に発信してみたというふうなことなんですけども。なかなか、商店に入り込んでいくっていうのは、入ってくるというのはなかったんですよね。

石川:なかなか、ちょっと入りづらい雰囲気ではあったかなとは思うんですけど。

大藪: 関西福祉科学大のほうは、"語り部" プロジェクトをされてて何か感想はありますか。 来ていただいた方の反応とか、どうでしたか?

泉:そうですね。さっき紹介したお祭りでの、一般の方を対象にした語り部の中では、ソーシャルワーカーがどこにいるか、何をしているかっていうのをイラストを使って展示をしたんですけれども。そのときにはベビーカーを押した親子3人がやって来て、パネルを見て「何かあったらここに行ったらいいのかな」っていうような反応だったり「最近、うち、おじいちゃん、ちょっと様子おかしいんやけど、こういうときにも相談していいんかな?」っていうように、こう、生活のことを考えながら見ていただいている、その反応というか、そういうのを感じました。

大藪: そのような発信をしていくというのが、まさにこの"語り部"プロジェクトのテーマということになっているわけです。ソーシャルワーカーが見えないというふうなことから、このプロジェクトが立ち上がったということなんですけれども。関西福祉科学大の報告ですね。泉さんの報告の中で、結論2のところですね。平時と災害直後の違い。これソーシャルワーカーの活動の違いということになると思いますが。この違いですね、これが、この被災地での、ソーシャルワーカーについて知るという点ではポイントなるんじゃないかなというふうに思うんですけれども。泉さん、この21枚目のスライドについて補足はしていただけますか。

泉:はい。私たちのスライドでは21ページなんですけれども、平時と災害時、災害直後の違いについてまとめています。まず、対象者。平時ではこの利用者さんとか相談に来ている人、こう、特定をされている、対象者が特定されています。災害直後にはみんなが困っている状態。不特定多数の人が支援の対象になってきます。次に、介入先。平時では個人、地域、システム、

関係性、成り立ちというか、そういうものに介入をしていくんですけれども。災害発生直後では、例えば、避難所、混乱した人たちがいる。その混乱している状況の中に入っていって、ニーズを探るというか、見つけたり、その状況に介入をしていっている。次、支援のシステムでは。システム。平時では、こう、所属、ワーカーには所属があって、組織を主体にして動いています。災害直後では、もちろん組織もあるけれども、機能していない場合、平時の状況とは違った、状況にあったときに、個人の、経験とか、気付き、判断っていうのも重要になってきます。支援方法では、日ごろ介護とか医療とかいろんな社会資源、人との関係性を使って支援したり、多様な方法があるのですが、災害直後にはサービスを提供する事業所が麻痺していたり、行政が麻痺していたり、日ごろ助けてくれていた支援関係にある人も被災をして、支援ができない状況になっていたり。ということで、支援の方法も特定されてくる。その中でワーカーが支援の方法をつくったり、資源をつくったり、代用、新しくつくる。そういったことが求められているっていうふうに、私たちはまとめました。

大藪: ありがとうございます。災害発生直後のところ、特に支援システムのところが、個人主体というのは、ワーカーさん個人ということでしょうか。ワーカーさんが個人で活動するということをさしているのかなというふうに思うんですけども。これは、佐々木先生のお話の中にあった、ソーシャルワーカーの人を信じてるというふうなことがですね、こういったところに表れてくるのではないかというふうに思って聞いていたわけですけども。佐々木先生、どうですか。学生の報告を聞いていて、何かコメントいただければと思うんですけども。

佐々木:岩手でも、報告会のときにも感じたんですけども。学生さんたち、すんごい自信持って報告されてて。すごい成長したなっていう、前は知りませんが(笑)。成長したなっていう感じがしますし、今、彼がね、「どうでしょう?」って、触れる勇気が出ましたですね。素晴らしい成長ぶりじゃないかなというふうに思います。いつも僕はシステムで考えたときに、ミクロとメゾとマクロ、そしてそれを今度は2次元を3次元にして関係の奥行きっていうふうに見ろっていうふうにいつも言ってるんですけども。この平時じゃない、非常事態のときに、じゃあ、これがもしミクロだとしたら、これがメゾやマクロにどうつなげていくかっていう中期とか長期の視点とかっていうふうなものの仕掛けが、実は並行して動いているんですよね。この、並行して動いていく、はい、ミクロ終わり、はい、だから次、じゃメゾに行きましょう、メゾ終わり。はい、じゃ、マクロに行きましょうっていうふうには動いてないんですね。ですから、もう、この3つが同時進行で動いていくっていうのが重層的な支援になってくるかなと、僕は思ってます。

大藪:ありがとうございました。参加いただいている方からも質問カードを、いただいております。ちょっと、時間の関係で、全ては答えられないんですけれども、いくつか学生、そして佐々木先生に、聞いていきたいというふうに思うんですけども。学生の方ですね、3名共通だと思うんですけども。"声"プロジェクトに参加する際、どんな心持ちでした?という質問。ま、特に被災してなかったというふうなところがですね、被災地行く時につらくなかったですかというような質問をいただいているんですけども、どうですか。"声"プロジェクトに参加するときの気持。ま、する前、どうだったかということですけども。じゃ、泉さん。

泉:はい。する前の気持。きっかけというか、このプロジェクトの、こう、これが、これとい うか、こういうプロジェクトがありますよとお知らせを受けたときに、私の頭にあったのが、 あ、私そう言えば、昔神戸に住んでて、近所に大きな仮設住宅の、こう、タウンみたいなものができて、いろんな人が、こう、なんかこう、お酒を飲んでいる雰囲気とか、もう、お酒だけとか何とかじゃないんですけど。こう、住民同士がちょっとうまくいってない感じの雰囲気。なんか、いつもと違うなっていう雰囲気とか、なんか、水与え合ったるなみたいな感じ、そういう雰囲気っていうのを覚えていて。あ、私、今こんなに大きくなっているけれども、当時誰かが何か支援というか、見守ってくれたり支援をしてくれたから、今まで、こう、続いているというか、今ここにあるんだなというのを、そんとき、ふと思って。で、私もソーシャルワーカーになりたいと思ってるんだから、行ってみたいなっていうので、で参加をしました。で、被災地に行くのが怖くないかっていう話があったんですけれども、確かに、な、怖いというか、どうお話を受け止めたらいいんかなとか、そういうのは考えた、考えましたけども。大学の先生が、思ったことをなかったことにするんじゃなくて、気付きはシェアしていこうねとか、何かあったときにいつでも、こう、先生に相談したらいいとか、そういうふうに言ってくれたので、思い切って参加することができました。

大藪:石川さん、どうですか。

石川: 僕がこのプロジェクトに初めて参加したのが3年生の夏に岩手県に行ったときでして。そのときは、先生に声をかけていただいて、プロジェクトがあるので参加してみないかということで。そのとき、僕自身も社会福祉士を目指していて、で、実際に、社会福祉士の方から生の声が聞けるというならばいい経験になるなという思いでして。普通、そこまでためらう気持とか、そういうのがなくて。自分の気持を確かめながら行きました。そんなに、現地に入ることに対して、恐怖心とかそういうのはなかったんですけども。やはり、当時のお話を聞くということに関して、学生の自分がどのように聞いていったらいいのかなとか、そういうのを入る前に悩んだりとかしました。しかし当時話し合いだとか、いろいろと語り合いをしながらそういったものでクリアしていって、いい方向には進めたと思っておりますね。

大藪:はい。ありがとうございます。では、鈴木さん、お願いします。

鈴木:そうですね。あ、私自身、大学のゼミでこのお話を初めて聞いたんですね。で、正直、1年たった後にインタビューをするっていうお話を聞いたんですね、ただ単に。で、学生自身、先ほども言ってたんですけど。学生が何も知らない自分がただ単に現地に行ってインタビューをしてっていう、どういう立場で振る舞えばいいのかっていうことに、ちょっとためらいがありまして。ちょっと参加を、ちょっと拒んでた時期もあったんですね。でも、ニュースとかでもあったんですけれども。そういう話の人が、こう、声が届いてこないということ聞きまして、立場っていうよりも、聞いてみたいという自分の、ま、自己勝手な気持かもしれないんですけど、そういう気持のほうが上回って、今回参加させていただいたと思っております。

大藪: はい。ありがとうございます。さて、報告に関しまして、ちょっと、具体的なご質問も、ありましたので、少し確認していきたいというふうに思いますけれども。日本福祉大学の報告、鈴木さんがね、出てきてもらってますけれども。安否確認リストを利用して、安否確認したというふうに、聞いたということなんですけれども。高齢者のみなのか、障害のある人などの、リストもあったのか、教えてくださいということ。あとですね、住民との連携ということが、レジメの65ページにあるということなんですが。住民との連携、具体的に聞いていたら教えてもらいたい。そして、寄り添うっていうことはどういうことだと思いますかという質問、い

ただいてますが、どうでしょうか。答えられるところでお願いします。

鈴木:分かりました。障害で、リストをつくっていったのかという質問があったと思うんですけれども。こちらのほうはですね、高齢・障害・児童までは話を伺うことはできなかったんですけれども。特に、定めはなくですね、困っている人を中心に、Sからですね、Cまでの、ラ



ンク付けをしてですね、確認作業をしていたというお話を伺いました。この、住民との連携、インフォーマルな社会資源と書いてるあるんですけれども。こちらのほうですね、被災時当時、民生委員のですね、講演会を行っている最中に被災された地域包括支援センターの方なんですね。その際に、民生委員に、住民たちと連携を取っていたという、お話を伺うことができました。それで、寄り添うという質問なんですけれども、も、本当に、うーん、そうですね。寄り添う。ま、ただ単にこの言葉で片付けるっていうのも難しいと思うんですけれども。話すだけでも寄り添ってることになるっていうのは、力強く言ってくれたんですね。なので、そういう意味も含まれた寄り添うなのかなと思っております。

大藪:はい。ありがとうございます。この、寄り添うっていうのは、キーワードになるかなと思うんですけども。泉さん、石川君、どうですか。その点では。何か意見はないですか。はい。石川:そうです、僕らが宮城県のほうでインタビューをさせてもらったときに、ちょうどそのときのお話されていたのが、顔と顔との付き合いが大切だということで。実際に、その場に行って、その人と顔、顔と顔突き合わせて付き合うには、その人の信頼関係を高めるため、すごく大切なことだってこと、この、震災のときにでも同じであるとおっしゃっていました。そういった意味でも、そういった方たちに寄り添っていくというかたちにもなるんではないかなと思います。

大藪:はい。ありがとうございます。あとですね、関西福祉科学大学の報告にも質問がありまして。男性向けコミュニティっていう言葉があったんですけども、例えば何があるんですかという質問なんですが。どんな話がありました?

泉:はい。妻を亡くした男性が、いつもは奥さんにご飯をつくってもらったり、洗濯をしてもらっていたり、ずっとしてきた中で、突然奥さんを亡くすとご飯をつくれなかったり、つくる意欲が湧かなかったり。あと、女性が多くいる集まりに入っていきにくかったり。やっぱり、女性と男性では楽しみ方が違ったり、人とのつながりのつくり方が違ったり、ていうところに焦点を当てて、男性が集まりやすいような。なんだったかな。料理つくるとか、おじさんたちが集まって、一杯やりながらお話ができるようなとか、そういうお話でした。

大藪: そうですね。一般的にもなかなか男性が地域へ出て行きにくいという中で、きっかけづくりという点で、男性向けのグループをつくるという話があったのかなというふうに思います。

ありがとうございました。

さて、次はですね、佐々木先生への質問になると思いますけども、DMAT に邪魔扱いされた際の対応というお話あったと思いますけども、どういうふうにまず動かれたのかということで、DMAT のほうが上にされがちだというふうなことなんですけども、どのように、こう、福祉の専門職の必要性や存在感を示して介入していったのか、教えていただきたいということですけども、いかがでしょうか。

佐々木:はい。専門職チームの中にも、ともかく現場に行くっていうことを優先にした会がございまして。それが介護福祉士会なんですね。ヘルパー協議会なんですよ。ここは、もう、ともかく避難所に行って何かしなきゃということで、すぐに現場に行ったんですね。それで、避難所で保健師チームとかDMATと会ったときに、何しに来てるんだっていう。どこの者だと。要は素性が知れないわけですので、その辺で邪険にされたというふうなことなんですね。で、実際には、医療のトリアージまではいかなくても、福祉トリアージは必要ですし。この避難所にいるべき人なのか、いてもいいんだったら、どこに場所を確保しなきゃなんないのかって他に、どっかの施設に送らなければならないんじゃないかとかっていうトリアージはしなきゃなんないはずなんですが。その辺あたりがすっぽり邪険にされてだめだったっていう話でございます。

大藪:トリアージ、誰がしてんですか。

佐々木:はい?

大藪:トリアージは誰が?

佐々木: 実際に、本当は市町村の職員がやらなければならないんですが。岩手の場合は、包括 支援センターというのが直営でしたので、包括本来の仕事ができなくて、要は役場の職員とし ての仕事が優先されたっていうことなんですね。従って、本来動くべき人たちが動けなかった っていうのが、包括の直営のちょっとつらかったことのようです。はい。

大藪: 直営の包括の場合、そうですね。公務員って立場っていうことだということ踏まえて、聞いていただければいいかと思うんですけども。あと、今、介護福祉士は避難所にという話だったんですけども。避難所や、仮設住宅での支援の中で、ソーシャルワーカーの役割、どのような介入をしていくべきだと考えるのかというふうなことなんです。そこも少し教えていただければと思います。

佐々木:はい。今申し上げたように、ミクロの部分では、まず地域にこれだけ要介護者がいたのかということを役場の職員すら分からなかったっていうことなんですね。あるいは、高齢者の部分はつかんでたけども、障害者がこんなにもいたのかとか、精神障害者こんなに住んでたのかっていうのが、分からない。ところが、全て地域生活移行っていうふうにして、ドンドンドンドン地域に返しているわけですが。その把握が高齢者の課と3障害の課、みんなバラバラになっていて、情報共有ができていなかったっていうことで、実際、要援護者の台帳登録っていうのは、これから進むっていうふうになってますが。

ここで反省。先ほど僕のスライドでもお話しした、地域に返したはいいが、本当に地域住民 として暮らしてたのか?っていう部分を問いかけなきゃなんないんだっていう話なんです。ま、 実際に自分のことを自分の胸に手を当ててみれば、自分が町内会に存在感あるのかって言われ ると、私自身も自信がないのに、障害者はひっそりと人目に触れないで暮らしているんじゃな いか。これをどう取り込んでいくのかっていう課題ですね。

大藪: はい。ありがとうございました。ご質問いただいた方、良かったでしょうか。さらにですね、これも佐々木先生にへの質問かと思いますが、復興っていうのはどういうふうな状態になれば復興したかということで、ご質問いただいています。具体的には神戸の話が出てまして。ティージブロックは不自然だとかですね、歩行者用の信号に音がないとかいうふうなところがあって、そういうふうなところで、まだ復興していないというふうに思われているわけですけども。先生どうでしょうか。

佐々木:個々バラバラだっていうことは、皆さんご存知だと思います。例えば、障害を受けた人にも障害の受容過程というものの長さとか、スパンがあるわけですので。それと同じで、どんな傷を負ったのか、それがどのぐらいのショックを受け、与えたのかっていうことで、スパンは全然違うんであろうと思います。ただ、言えることは、僕のスライドで自立支援というお話をしましたけども、立って行動するっていうことを、まずやりながら、自分自身で決めれる、律するの自律に向かったときが本当の復興ではないかというふうに僕は思ってます。

大藪: はい。ありがとうございました。さて、この会場にはですね報告した3大学の他にも、同朋大学の先生、そして、学生さんが来ていただいてます。同朋大学さんのほうはですね、また独自に取り組みをされてるということなんですけども。下山先生、いらっしゃいますでしょうか。少しそちらの紹介もしていたければと思います。

下山:はい。同朋大学社会福祉学部の下山です。よろしくお願いします。同朋大学では宮城県 石巻市にございます医療保健福祉の連携の事業団がありますね。そちらのほうがボランティア 学生を受け入れてくれるので、そちらのほうへボランティアに行きました。石巻市に仮設住宅 など入っている方ではなく、また、全く被害を受けているわけでもない半壊住宅で、なおご自 宅で生活されている方のところへ、実際今、どういう生活を送られているか、何か困っている ことはないか、といったことを聞き取る調査で石巻市の全てのご家庭に行く。それのお手伝い ということでした。まず、石巻市の事業団の方が学校へ行ってくれて、1 日どういうことをす るのかということと、そのための簡単な演習など行ってくれました。そして、実際現地に行っ て、初日には、簡単にロールプレイなどさせてもらったりと、演習させてくれて、そして、そ の後に実際に各お宅へ行くんですが。最初のときは、専門職の方が必ず学生2人一組のペアに ついてって、聞き取り調査をしてくれて。もう大丈夫だろうと思ったら、専門職の方が外れて、 2人一組でこのおうちをずっと回ってくださいと、地図を渡されて1軒1軒回ってきます。実 際に半壊住宅ではあっても、中にはもっと海よりのところで、ご家族を亡くされた方もいらっ しゃる。きょうだいが亡くなったんだとか、本当にこう、家が壊れてて、お金がないわけじゃ ないけど、今家を直したところで、80近くの方で、ここのうちに誰も戻ってきてくれないんだ と。だから、今建て直しをしたところで、どうなんだろう。そういういろんな方から話を聞か せてもらいました。実際学生たちはですね、現地の市民の方にお話を聞くということで、多分 すごく緊張もあったかと思うんですが、何かお手伝いできないか、ただ学生の体験、勉強のた めだけだったら、とても大きな迷惑になってしまうかもしれないけど、それだけではなくて不 十分ながらも学生たちでもできることはないかとの思いで参加しました。そして、本当に微々 たるお役にしかたってないけれども、その中で、少し体感させてもらったことを必ず1日の活 動が終わった後に、専門職の方たちが振り返りに付き合ってくれました。こんなこと体験した、

無力感感じた、いろんなことを学生が感じたときに、それに対してコメントしてくれて、これで良かったんじゃないかってことと、次こうしてったらどうだろうかとのアドバイスをいただきました。そして、3日間、4日間の活動を終えたときに、きちっと振り返りをしていただきました。本当に、無力感もたくさん感じました。でも、中にはご家庭の中にある方は、学生にどっから来たんですかって。愛知県から来ました。こういう目的で来ました。で、それで石巻市の調査のお手伝いさせてもらってますってことを話をしたら、忘れないで、こうやって自分たちに関心を持って来てくれて「来てくれるだけで、もう、本当にそれは勇気になる」そういったことを喜んでくださって、それが私たちの力になるんだってことをおっしゃってくれた方もいらっしゃいました。不十分ではありますが、いろいろそうやって同朋も独自にボランティア活動を展開してまいりました。

大藪: ありがとうございます。ぜひ、プロジェクトというか、そちらの計画、取り組みに参加 した学生の声も聞かせていただければと思うんですけど。

杉本: 今、同朋大学の大学院の人間福祉研究科の学生です。杉本と申します。2012 年の 8 月 3 日から8日まで行かせていただきました。そのときは、私は実は、文学部の仏教学科に早期退 職して、編入学をしておりまして。全然若くないなと、このおばさんが行ったかということで、 ちょっと疑問に思われた方にはそのように、今説明させていただきました。実は事前研修で、 半日石巻の様子をスライドで見せていただいて、現地のことを生々しく、見せていただいたと きに、もう1年たってたんですけれど。自分の中で、本当にそこに行って何ができるんだろう っていうふうに思いました。で、現地に着きまして、半日。よく、ニュースで流れる石巻の海 岸のとこですね。石ノ森章太郎記念館のあるあの辺りの所に行きまして。そこに立って、あそ この風に吹かれて、何もなくなった、住宅の礎だけ、基礎だけが残って。草が生えて。ここに みんな暮らしてて、いろんな生活があって。人生があって。一気になくなっちゃってるってい うの、まず、着いた夜行で、狭いマイクロバスに乗って見せていただいて。そいでまた、聞き 取りのためのノウハウの研修受けたんですけども。これが、なかなか難しい研修でして。どう 対するかっていうことよりも、私、仏教学科におりまして。その前は現職の小学校の教員して ましたので、社会福祉的なことが全然分からない中で、いろいろ質問しなくちゃいけないあた りで、そっちのほうで頭がいっぱいで行きまして。で、実際にリーダーさんについていって。 リーダーさん、すごく上手にお話されていろいろ聞き出していらっしゃるんですよね。そんな ことできるかしらと思いましたね。結局、学生さんと2人で行くんです。最後は私一人で行け るでしょうってことで、出されまして。傾聴の勉強もできますよっていうことをお聞きしたん です。で、実際に行きましたら、独居の方で足が痛いって。もう、すごく元気がない方が、高 齢者の女性の方なんですけど。その方とずっと2時間ぐらいお話を伺って。その話している間

に、その方が、 なんか、どん どん元気にな っていらっし ゃるんですよ ね。それは、 その方の中に



ある力が、きっと出てきたんでしょうけれど、私にとっては、それはとても大きな経験だった。 それから、夏の暑いときなので、だらだら汗拭きながら、玄関にお邪魔しましたら、冷たい麦茶をね、それも特大のコップに出して、氷をいっぱい入れてねぎらってくださって。そして、1年たって、こんなふうに来て申し分けないみたいなことをお伝えしたら、「来てくれただけで良かった。私たちのこと、忘れないでほしい」いうふうに言われて。私もいろいろ聞かれますので、一応、身の上話ですね。早期退職して仏教学科に入った話とか、そんな話を一生懸命聞いてくださって。それで、頑張ってねっていう声をかけていただいたこともありまして。で、仏教学科、ま、ここに行ったことも、やっぱりきっかけだと思うんですけど。仏教学科に編入したんですけれど、社会福祉のほうの大学院のほうに、今年っていうか今年度ですね、去年進ませていただいて。こうやって、皆さまのお話を伺いながら、今の研究テーマは養護施設のほうの学習支援なんですけども、自分で声をあげられない、そういう方の声にならない言葉を、きちんと聞き取って、それは発信していかなくちゃいけないことなんじゃないかなということを、強く思いました。

大藪:はい。ありがとうございました。まさに忘れないという点ではいろんな関わり方があるかと思いますけれども。同朋大学さんの取り組みは、被災されている方に直接インタビューされている。こちらのプロジェクトのほうは、被災者の方を支援する、ソーシャルワーカーの方へのインタビューというふうなことで、少し切り口は違うわけですけども、どちらも復興支援する、そのために何が必要なのかというのを考える取り組みなのではないかというふうに思います。さて、学生さんにはいろいろな質問をしてきたんですけども。どうですか、お互いに確認し合いたいこととか、質問とか、うちはこうやったけども、そちらどうやったの? みたいなことってありますか。

泉:はい。えと。お互いに?

大藪:お互いにです。はい。

泉:私の大学では、今20、30人近くの学生で活動しているんですけれども、今日見ていただいたDVDの言葉、あれひとつ考えるのにも、なんと言うか、ワーカーの方の声とか、私たちが感じたことっていうのを言葉にして。DVDをつくるにしても、間違えるというとあれだけれども、どういう言葉を使うと、より伝わりやすいのか、とかいうのを議論すると日が暮れてしまう毎日。毎晩日が暮れちゃうようなことを経験してたんですけれども。パワーポイントをつくったりする中で、難しかったこととか、語り部の準備する中で難しかったこととかありましたか。

大藪:どうですか。じゃ、石川君。

石川:はい。そうですね。語り部をするにあたって、そうですね、難しかったなとすごく感じたのが、やはり一般の方とかに向けて、まず、このソーシャルワーカーってのは何かっていうのを分かりやすく説明できるのが、どういう言葉なのかなというのをすごく悩みました。それも専門的な言葉を使わずに、分かりやすく説明するとなると、また言葉が長くなってしまうなと感じることもあったりして。ちょっと、実際、語り部の活動をいろいろとさせていただいたんですけども。こう、一般の人に向けて説明するときに、そうですね。例えばオープンキャンパスですとか、そういうときにもいろいろと語り部活動させてもらったんですけども。後ろ側にあるパネルを展示しながら、いろいろと話させてもらったんですけども。なかなか、ソーシ

ャルワーカーってのが伝わりにくいというか、一体どういう方なのか、どういう活動されてきたのかてのを、一つ一つ説明するのに、時間がかかって、それがまた、なかなか理解できないような雰囲気もあって。そこがまだ、自分たちの言葉不足なのかなっていうのは感じていますね。

大藪:はい。ありがとうございます。じゃ、鈴木さん、どうですか。今回の発表に向けての準備でもいいですけれども。

鈴木:はい。そうですね。インタビューと視察のことを今回取り入れたんですけれども、時間があれば、全部でも紹介したかったぐらいの、インタビューの方々の責任感とか、専門性とかを感じることができましたし。でも、そういうことをまとめていくっていう作業が、やっぱり、難しいなっていうのは感じましたね。

大藪: そうですね。はい。ありがとうございます。で、質問の中にこの学生の発表の内容は、学校の授業の一環なのかという質問があったんですけども。単位として認められるのかと、非常に具体的な質問だったんですけども。どの学校も関係はないですね。あくまでも課外の活動というふうなことで、自主的にやっているということになります。ですので、半期で終わるとかですね、授業の時間内で何かまとめなきゃならないというわけではないのが、このプロジェクトのいいところではないかと思いますし、泉さん卒業してからも関わると宣言してましたので。そのようにつながっていくプロジェクトなのではないかなというふうに、思います。

さて、もう一つね、聞いてみたいと思うんですけども。インタビューに行く前と、行った後で何か自分が変わったっていうふうなことってありますか。行く前の話を今聞いたんですけども。行ってみて変わったこと、考え方とか行動とか。はい。泉さん。

泉:はい。強く変わったこと。さっき、私、このプロジェクトに関わり始める時の話をしたんですけれども。ふと思い出したことがありまして。プロジェクトに入るときに、もう一つきっかけというか、これはちょっと考えなあかんやろっていう自分の課題があって。ソーシャルワーカーになりたいって言ってるくせに、ソーシャルワーカーって何か分からない自分がおりまして。なんと日本福祉士会の会長さんに向かって「ソーシャルワーカーってなんですか」っていう質問をしてしまった。本当に幼かった大学2年生の冬。挫折経験の1つやと思うんですけど。そんなんがありました。ただ、就職試験のことだけじゃないんですが。自分がこれからどういうワーカーになっていきたいのか、目標というか、理想というか。そういうのを持つことができるようになったのは、行く前と行った後での違いだと思います。

大藪:はい。石川君、どうですか。

石川: そうですね。ソーシャルワーカーに対する思いっていうのも、少しは変わってきまして。 今回の"声"プロジェクトで岩手県と宮城県に行かせていただいたんですけども。その前後で どちらとも、社会福祉士の実習っていうのがありまして。その中で、社会福祉士の勉強をして いく中での活動でしたので。実際に社会福祉士の方が活動しているという声を聞いて、よりも っと、なんて言いますか、社会福祉士の専門性といいますか、活動をどういったものであるか というのを勉強したい、知りたいという思いがすごく強くなっていったと思います。

大藪:はい。ありがとうございます。では、鈴木さん、どうですか。

鈴木:そうですね。私自身、今4年生で。今年、社会福祉士の国家資格を受けたんですけれど も。そちらのですね、愛知県の会場に行った際に、1人の方はですね、今、人混みがすごい中 で、今地震が起きたらどうなるんだろうねっていう言葉をかけていた方がいらっしゃったんですね。で、その際に、もしこれを経験してなかったら、ただ単に自分も「ああ、そうだな」っていう感じでさらっと流したと思うんですけれども。今回経験して、体験して、プロジェクト参加してから、本当にそうだな、の先を考えることができたという意味では、本当に大きかったのかなと思っております。

大藪:ありがとうございます。さて、そろそろ、まとめに入っていかなければならない時間が来たんですけども。すごく根本に関わる質問がありまして。「ソーシャルワークの誇りとはなんですか」って質問がありまして。誇りというと難しいところもあるんですけども。やはり、報告の中に、ソーシャルワーカーの専門性、これがやれるからソーシャルワーカーなんだと、ソーシャルワークっていうのは、他の領域と違ってこれがやれるからっていうところを誇りというふうに捉えてみると、どうでしょうか。ちょっと報告と重なる点はあると思いますけれども。鈴木さんからですね、聞いてみたいんですけども。これがソーシャルワーカーだと。もし、良ければ自分もこうなりたいみたいなところをもう一度教えていただければと思います。

鈴木: そうですね。自分自身がそんな立場では絶対ないと思うんですけれども、ソーシャルワーク。そうですね。自分のスライドで発表した際につなぐ力というのを、結構メインに書かせていただいた部分があります。で、本当に人と人とをつないでいくっていうものが、ソーシャルワーカーに求められているのかなというのは、自分の中では大切にしている部分でもあるので。多分最後はまとめられないと思うんですけれども。このつなぐ力。人と人とのっていうのが一番大事かなと思っております。はい。

大藪:分かりました。学生、今学んでいる途中ですので、こっから現場で築いていくというふうに思って聞いていただければと思うんですけれども。では、石川さん、どうですか。

石川:そう。今回インタビューをさせていただいていると感じたのが、そうです、ソーシャルワーカー、社会福祉士というのが、福祉分野における、一番手というわけではないんですけども、復興する人々、地域住民ですとか、そういったものを繋げることができる福祉分野の専門職であるということをすごく感じました。災害支援にあたっても、1次支援といいますか、こう、一番最初に入っているようなかたちではなくとも、やはり、その中で生活ニーズですとか、いろいろな問題を抱えてる中で寄り添って支援していけるのは、社会福祉士、ソーシャルワーカーの強味の1つであるのかなと、インタビュー活動、"声"プロジェクトを通じて、すごく感じました。

大藪:ありがとうございます。では、泉さん、お願いします。

泉:はい。はい。ソーシャルワーカーの。

大藪:質問としては誇りなんですけどね。

泉:誇り。

大藪: うん。ま、誇りっていうのは難しければ、専門性とか。これが社会福祉士って言うような点ですね。

泉:はい(笑)。質問の答えになるか分からないんですけど、2つしゃべります。1つは、私、活動してきた中で、災害時にソーシャルワーカー、直後から必要なのか、とか、何ができるのかっていうのを、現場のソーシャルワーカーの方から聞かれることがありまして、関西で語り部をしていると。いや、必要ですって。必要です。「だって、活動していたもん、ソーシャル

ワーカーさんは」っていう子どもみたいな答えが、自分の中にあって。でもそれを言葉にできなくって、いつも悶々としていたんですが。今日、佐々木先生のお話の中で、例えば、障害っていうのも個人にとっては、個人とか家族にとって災害というか、そういう表現を聞いたときに、こう、何かスーッと入ってくるものがありました。だからこそ、ソーシャルワーカーとか社会福祉っていうのは、こういう大規模な災害、多くの人が支援の対象というか、支援を必要としている状況にあるときに、ソーシャルワーカーが求められるというか、こう、それが、こう、スッと入ってきました。それはソーシャルワーカーの専門性なのか、誇りというのか分からないんですが。うん。スッと降りました。で、えっと、自分がなりたいやつでもいいんですかね。で、繰り返しにはなるんですが、インタビューを通して、自分がこういうワーカーになりたいと思ったのは、悩みながらも、支援を続けていく。これでいいのかとか悩みながらも支援を続けていく、そういった誠実なワーカーに、私はなりたいと思っています。

*

大藪: ありがとうございました。それでは、このプロジェクトの、推進役であり、復興支援委員長の遠藤先生、コメントをいただければと思います。

遠藤: すみません。もう、皆さん、おっしゃっていただいているんで、私はごく簡単に。多分、 3人の皆さんおっしゃられて、これを説明するのに非常に言葉をつむいでくのに苦労しました。 本当に時間かけて、みんな考えてます。私はいらいらしてる学生に「うん、本読めへんから、 絶対言葉ないねん」とか言うて、だから本読めとか言っているんですが。やっぱり、彼らはな んとなく分かっているもの、見えないものをどうにかして見える化しようとしてます。これ、 まさにソーシャルワークですよね。皆さんがやったことは、ソーシャルワークの実践をしてき たというのかも分からないと思います。このプロジェクトは、ソーシャルワークの声を、ソー シャルワーカーの声を聞きながら、ソーシャルワークを学ぶ学生が、ソーシャルワークの手法 を用いて、ソーシャルワークを見える化するという、訳分かんないような話になってしまいま したが、そういうふうなプロジェクトかなというふうには思っています。それともう一点、世 の中、専門分化してきます。で、専門分化すると、非常に狭い範囲で物事を捉えようとしがち ですよね。授業でソーシャルワーカーの役割なんですかって言うたら「サービスと人をつなぐ」 とか言うんですね。「えー、それだけ?」って思います。多分、災害に関わったワーカーさん は、圧倒的無力感の中で自分の体とか、自分の専門性とか、自分の知識とか技術とか周りにあ るありとあらゆるものを使って支援をしようとしたんですね。そこにはサービスもなければ、 ケアマネジメントもないかも分かんない。これ、もしかするとソーシャルワークの原点かもし れないよね。ソーシャルワークが始まったロンドンの街中で、多くの労働者、子どもたちが非 常に悲惨な生活をしていた。そこにワーカーは飛び込んで支援をしていた。まさに、こういう 原点が災害ソーシャルワークにあるのかなと思っています。そこは、やっぱ、ダイナミックな 世界で、自分の想像力、これはイマジネーションとですね、で、もう一つの創造力、クリエー ションのほうですね。こういうものを駆使して、ワーカーって支援をしてきました。だから面 白いんでしょうね、多分。本当に面白い魅力的な仕事だなっていうふうに感じました。多分、 その一端はですね、学生は得てもらったと思います。私たち教員も、すごく大きな勉強になり

ました。わあ、学生ってこんな伸びるんだっていうこと。それともう一つは我慢することですね。学生が私の部屋に入って、毎日、お菓子の食べこぼしが床にあろうが、ミカンの皮が本棚にあろうが、笑って後で片付けるという、この忍耐力をずいぶん味わいました。そういう学生と過ごした時間が、本当に私は宝物だったと思います。本当に、このプロジェクトですね、学生だけではなくて、私たちにとっても、かけがえのないものであるというふうに、今改めて、感じる次第です。ありがとうございました。

大藪: すみません。このプロジェクトの評価委員をやっていただいております、関西学院大学の池埜先生に一言いただいて、終わりにしたいと思います。先生、よろしくお願いします。

池埜:では、お時間ございませんので、一言だけ。学生の皆さん、本当にお疲れさまでした。また、これからも続いていくというようなこともおっしゃっていただきましたので期待したいと思っております。また、私は、少し立場を離れて、このプロジェクト全体を見なさいということで、少し、何か偉そうな立場なんですけれども。実は福島で1回、学生の皆さんと一緒にインタビューにも参加させていただき、また、報告会にも、福島で参加させていただきながら、大変私自身も貴重な経験をさせていただきました。これはまあ、やや地雷を踏むかもしれませんが。本来は、これ全国の大学連盟であったり、あるいは養成校協会であったり、全国組織でやるべきことですね。この経営者協議会の皆さま方に、率先してやっていただいて。大変、貴重なモデルをいただいたんではないかなと思っております。また、細かくは報告書等で私の意見を載せていただきたいと思います。ありがとうございました。

佐々木:最後に、実は私の施設、先ほど見ていただいたように、岩手医科大学の理事長さんがつくったんですけども。困っている人の力になるって、それができる誠の人づくりだっていうのを謳い文句にしてやってきまして。貧乏な方々、お金払えない方々、3割30パーセントから医療費もらわなかったっていう、そういう岩手医大の歴史がありまして。うちの施設もそれを頂戴してやってます。困っている人の力になるためにはそれができる人材をつくるんだと。で、就職試験のときに覚悟はあるかって言われたって、そのとき「はい」と言ったんですね。てことは毎日僕たちが接する人は、家庭なり個人なりの災害に遭った人たちと毎日向かう覚悟があるかって、多分聞かれたんだと思うんですね。先ほど、寄り添うっていうお話をしましたけども。大切なキーワードになりました。体の距離を寄り添うもあるでしょうし、思いを寄り添うもあるでしょうし、時間や経験を寄り添っていくっていうこともあるでしょうし。それこそ、スタンドバイミーじゃありませんが、Someone to stand by youって。あなたの側に私がついていますよ。何か私にできることはありませんかって、May I help youって、そういう寄り添い方もあるんじゃないかなっていうふうに、僕は思ってます。頑張ってください。はい。

大藪: それでは、これで、パネルディスカッションのほう、終わりにしたいというふうに思います。このプロジェクト、これで終わりではなくて、まだ続いて行きます。学生の報告の中にあった一言で、無意識のうちにというふうな言葉があったんですけども。実は、この無意識にやってるってこと、明確化するのが、岩手県の災害派遣福祉チームの取り組みではないかというふうに思います。続いて取り組みを発信していくということが重要になっていくのかというふうに思いますので、今後とも、ご協力よろしくお願いします。ありがとうございました。

司会:どうも、大藪先生、ありがとうございました。先生方、ありがとうございました。学生

の皆さん、ありがとうございました。もう一度拍手をお願いします。

【閉会あいさつ】

司会: 閉会の時間も過ぎております。閉会の挨拶といたしまして、まず、名古屋会場を代表いたしまして、中部学院大学、葛谷昌之副学長よりご挨拶をいただきます。先生、よろしくお願いたします。

葛谷:中部学院大学の葛谷でございます。皆さん、本当、半日間ですけども、お疲れさまでご ざいました。本日のシンポジウムは、「復興支援プロジェクトシンポジウム」と題しまして、 復興への声を伝えるがテーマでございまして。最初に概要説明があり、佐々木先生の講演、そ して学生の発表、ただいまのパネルディスカッションと続いたわけでありますけども。佐々木 先生のご講演は、本当に被災地のソーシャルワーカーとしての実体験に基づいた、まさに生々 しいといいますか、ご苦労話から始まって、各論・総論、佐々木先生のお言葉を使いますと、 マクロとミクロになるかもしれませんけども、いろんな示唆に富むお話をお聞かせいただきま した。特にですね、最後のパワーポイントのビューグラフの最後にありますように、伝統を打 ち破るような話、私の言葉で言いますと、本当に不易流行という言葉で締めくくられておりま して、非常に啓発的なことを含めたご講演で、私も感銘いたしました。で、その後の学生諸君 の体験談といいますか、インタビューの発表でありますけども。現地というか被災地に実際に 行ってのソーシャルワーカーからのお話でですね、これも、実際に当地へ行って初めて理解で きるようなことがたくさんありまして。同時に多面的なといいますか、多岐に渡る課題や問題 も発見されたということで、まさに、これも私の好きな言葉で言いますと、経験は最良の教師 なりというのを改めて思い知らされたところであります。ただいまのパネルディスカッション では、いろいろと経験談といいますか、体験談のお話がありましたけども、学生諸君から。一 番頭に残っている言葉をですね、丸めて言いますと、ソーシャルワーカーの社会的認知が、泉 さんじゃないですけども、本人も2年生まで「なんですか」という質問をしたというぐらいで すから、定義といいますか、ファジーなところが、あるんではないかというように思いました。 そういう観点でですね、ぜひ、このソーシャルワーカーの社会的認知、社会的認知が高まれば、 当然、給料も上がってですね、社会的な地位も上がっていくと思います。そういう意味でです ね、ぜひ、そういう方面の務めも、これからしていかねばならないというように思いました。 で、そういう意味で、私が思いますにはパブコメをもっとやるべきではないかというように、 強く思っております。意味分かりますか。パブリックコメントの略でありますけども。そうい うことでですね、ひとつ、これからもぜひいろんな自助努力もされまして、ソーシャルワーカ 一がいろんなかたちで認められるように、私どもも含めまして、務めていきたいと思っており ます。最後に、本日のシンポジウムをお話された皆さま、関係各位の全ての皆さま方にお礼を 申し上げまして、私からの言葉とさせていただきます。どうも、お疲れさまでした。ありがと うございました。

司会:どうもありがとうございました。それでは最後になりますが、急きょ駆けつけていただきました、福祉系大学経営者協議会理事で、復興支援委員会の委員長校にあたります、関西福

社科学大学の理事長・学長江端源治先生より、ご挨拶いただきます。よろしくお願いします。 江端:失礼いたします。終わりだと思ったら、また出てきましたんで。これで私が最後ですから、どうぞご安心ください。遠藤准教授にですね、何かできることはありませんかとお願いをした江端でございます。本当に皆さん、今日はこのシンポジウムに参加していただきまして、ありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。福祉系大学経営者協議会が主催してるんですが、その狙いは福祉の仕事のやりがい、重要性、魅力を発信していくことなんですね。だから、遠慮せずソーシャルワーカーに焦点をずばりと当てて、このプロジェクトをさせてもらっております。今日も、津波の映像が少し出ましたが、何度見ても胸が詰まります。何か自分でもできることはないだろうか。みんながそう思ったと思います。だけど、一体何ができるんだ?自分になんか。何をすべきか。何ができるのか。現地のソーシャルワーカーの苦労話を学生たちが聞いてきました。そして、その学生たちの話を今日、私たちは聞かせてもらって、学生たちはすごく刺激を受けて、成長のエネルギーにしました。私たちはその学生の話を聞いて、また、いろんなことに気付き、考えさせられたと思います。今日、このシンポジウムに来て、何かに気付いて「よし、また明日から頑張ろう」と、そういう気持になったら大成功だったと思います。本当に今日は、ご参加いただきましてありがとうございました。

司会: 江端先生、ありがとうございました。これをもちまして、復興支援プロジェクト 2014 年名古屋会場を終了させていただきます。本日は本当にありがとうございました。



5. 復興支援プロジェクトシンポジウム 2014 (名古屋)

意見交換会 岩手県/宮城県/福島県

6-1. 意見交換会報告(岩手)

平成 25 年度 岩手県社会福祉士会盛岡ブロック研修会 ~ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト~

期 日:平成25年12月1日(日)

時 間:午前9時00分~12時00分

場 所:ホテル東日本盛岡 2階 末廣の間

1)目的

本研修会は、福祉系大学経営者協議会が実施してきた「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」の成果を社会福祉士等に報告するとともに、今後のプロジェクトに関して意見交換し、効果的な運営を資すること、社会福祉士の質の向上を目的に開催された。

当日の出席者は、岩手県社会福祉士会盛岡ブロックから 20 名、本プロジェクトに参加した 学生3名、教員4名、関係者1名の28名であった。

2) プロジェクトの概要説明と成果報告

第一部として、関西福祉科学大学の学生がDVDを使って、本プロジェクトの概要を説明した。 本プロジェクトは「ソーシャルワーカーだからこそ、できた支援があったのではないか」とい う仮説からスタートしている。あくまで学生が主体となり、現地のソーシャルワーカーから聴 き取った声を記録として残す、さらにその声を社会に発信していくこと等が確認された。

続いて、岩手県でのプロジェクトに参加した淑徳大学の学生から、「現地プロジェクトで学んだこと〜人と人との絆をつなぐ〜」をテーマに報告があった。インタビューを通して、既存の社会資源だけでなく、何もないところから社会資源を創り出していく姿を学んだこと、人という社会資源をつないでいく役割に気付いたこと等が報告された。参加した学生たちには「初めは自分たちに何が出来るのか不安だったが、プロジェクトが進む中で"伝えていきたい"という気持ちに変わっていった」という共通した変化があった。

さらに、関西福祉科学大学の学生から、「語り部活動を通して学んだこと」をテーマに報告があった。一般市民や高校生にソーシャルワーカーの声を伝えていく中で「もっとソーシャルワーカーのことを知ってほしい」と感じたこと、また支援を受けた人からの声をソーシャルワーカーに伝えていくことが自分たちにできる後方支援なのではないかとの報告があった。

3)シンポジウム「災害支援におけるソーシャルワークの機能と役割

第二部のシンポジウムでは、まず、山内二三男氏(岩手県社会福祉士会地域活動委員会)から、「岩手県災害派遣福祉チームの創設」をテーマに報告がなされた。岩手県では全国に先駆けて災害派遣福祉チームが立ち上がり、今年度中に研修が開始される。各チームに必ずソーシャルワーカーが入り、コーディネーターとしての役割が期待されていることや、このチームの受け入れの仕組みを作っていくこと等が確認された。コーディネーターの坂口繁治氏(岩手県社会福祉士会副会長)からも、現地支援者への支援については、「支援が欲しい」と声が出

せるような二重三重の仕組みが必要ではないかと疑問が投げかけられた。

続いて、遠藤洋二氏(関西福祉科学大学)から「災害発生直後におけるソーシャルワーク機能」をテーマに報告がなされた。その中で災害直後のソーシャルワーク機能として、危機介入や関係調整だけでなく「状況への介入」があるのではないかとの投げかけがあった。災害ソーシャルワークでは、平常時におけるソフト・ハード面の準備や関係機関との日頃からの連携が重要視されており、多くのソーシャルワーカーが「非常時の活動は日常活動の延長である」と語っている。確かにソーシャルワーク機能に本質的な違いはないが、その状況は異なる。「状況への介入」という災害発生直後のソーシャルワーク機能にあらためて気付きが生まれたように思う。本シンポジウムの詳細については、次項を参照されたい。

4) 意見交換

最後に全体を通しての意見交換がなされた。学生の報告について、「目頭が熱くなった、このプロジェクトを引き受けてよかった」「頼もしさを感じた、無力感を含めて今の等身大の気持ちを大切にしてほしい」「沿岸部だけでなく、内陸や県外から移り住んだソーシャルワーカーにも調査を行うと新たに見えてくるものがあるのではないか」という意見や「災害派遣福祉チームの受け入れを進めるために市町村にもソーシャルワーカーの声を伝えてほしい」「ソーシャルワーカーの役割を広く伝えていくことの重要性を感じた」等、シンポジウムとも相まった意見も出された。

終了時に、学生たちは多くの参加者から、励ましの声をかけていただいていた。現地プロジェクトへの参加や語り部活動だけでなく、本報告会を通して、さらに「ソーシャルワーカーになりたい」という思いが強くなった様子が見受けられた。この体験が今後いかなる職場においても、学生たちを支えてくれるものになると信じたい。

第1部 プロジェクトの概要説明と成果報告

プロジェクトの概要、語り部活動の内容、プロジェクトを通して学んだことについて報告を行った。実際に現地で支援を行っている、ソーシャルワーカーに対してインタビューを行い、学生なりに分析した結果について報告した。この学生の分析報告では被災地におけるソーシャルワーカーの支援を4つのキーワードをあげて捉えている。そのキーワードとは、「初期的なアセスメントと気付き」「介入時に道具を使用」「アウトリーチによってニーズを見つける」「支援、資源とつなぐ」である。一つ目の「初期的なアセスメントと気付き」では、現場を見て、何が必要か、何が出来るのかをイメージすることを指している。2つ目の、「介入時に道具を使用」では。要援護者への介入時、きっかけ作りとして何らかの道具を使うことを指す。3つ目の、「アウトリーチによってニーズを見つける」自分のニーズを表出できない人のニーズを聞き出し、社会資源につなぐことを指す。4つ目の「支援、資源とつなぐ」は、ボランティアの派遣や、他の施設など必要な支援へ橋渡しをすることを指している。

参加者からは、「災害ソーシャルワークを通して、日頃の実践の重要性を再認識した」「新人ということもあり、本格的に活動していく上で自分がどうすべきなのかというところで参考になった」「自分自身の振り返りやまとめもまだまだ出来ない状況にあったので、発表を聞いて気付きをたくさん得る事が出来た」などの意見をいただいた。さらに、学生たちが本プロジェ

クトを行うにあたり、プロジェクトの行程において事前学習に多くの時間を割くのではなく事前の学びは必要最小限におさえ、先入観のない状態で現地に来てほしいという声もあがった。また、学生としての感性を大切にし、感じた事を形式知と融合していくことで活動を継続してほしいという激励を頂いた。



第2部

シンポジウム「災害支援におけるソーシャルワークの機能と役割」 シンポジスト 山内二三男氏 (イーハトーブ地域包括支援センター)

盛岡市にありますイーハトーブ地域包括支援センターの山内と申します。よろしくお願いします。災害チームの派遣の時期について、避難所に入って落ち着いてからじゃないとだめなんじゃないかという意見が多かったんです。というのは、混乱しているときに一番大事なのは命を守ることであり、DMAT はすぐ入るし、保健所チームもすぐ入る。その後、来るチームは落ち着いてから来たほうがいいんじゃないかという意見の方が多かった。福祉は生活を支えるのが福祉だから、医療が命を支えるから、命あってこその生活だというふうな話の持って行き方なんですが、生活を支えることが命を支えることにつながる。生活を支えるというのは、後からでいいということではないはずだと思います。なので今回、岩手県でこの派遣チームを検討したときに、発災直後に活動ができるよう準備を進めています。

そこで本日は、それまでの動きを簡単に説明させていただきます。震災があっていろんな団体が支援には動いていたんですけれども、今回の震災の特徴は、規模が大きくて通信機能が断たれてしまったというところにあります。今回は岩手についてお話ししますけども、岩手の場合、沿岸と内陸の間に北上高地というのがあります。何本かしか沿岸と内陸をつなぐ道路がありません。沿岸はほんとに海からすぐ山のような状況でして、あちこちが通れなくなっていた。そういう状況もあって、内陸から沿岸に行くこと事態、制限されていました。ですので、個人的なルートとか支援は始まっていたんですけれども、組織的に支援というのはなかなか始まらない状況が続いていました。そういう状況の中で、全国から支援したいという声がそれぞれにあって届いていたんですけれども、なかなか現地のほうから「支援してほしい」という要請がありませんでした。

大船渡のあるワーカーから聞いた話ですが、震災があって、3日間、頑張れば支援が来てくれると思って頑張ったそうです。でも4日たっても、5日たっても支援は来なくて、1週間たって、やっと来てくれたそうです。この方は、1週間自分たちで頑張ってきたわけですが、中にはいままで頑張ってきたから、この先ももう少し頑張れるのではないかという話もあったそうです。この方は、1カ月間ほんとに休まずにずっと働いていたのです。それを頑張れるならもう少し頑張ってねとは言えないですよね。だけど外部の者が勝手に支援に行っても迷惑なだけです。

そういう状況もあって、県内の職能団体、社会福祉士会と介護福祉士会とケアマネ協会と地域包括支援センター協議会が集まって何かできないかといったときに、それぞれの専門性を活かして支援するよりも、まず何が必要なのかを確認しようということになり、職能団体のそれぞれの専門性は一端ふたをして、ボランティアとして活動をすすめました。ボランティアをしながら支援が必要なところをアセスメントする。それがまず最初の目的でした。

その最初の立ち合いのときに県内の 10 団体が参加してくださって、それぞれから人を出して陸前高田市、大槌町のボランティアセンターに入りました。大船渡とか宮古とか釜石といった行政の主体が残っているところは、被害が大きくても復興が早いんです。陸前高田市、大槌町という行政機能がまひしたところは、なかなか進まないという状況した。そういったことも

あって、この2つの町に入ることにしました。3月から検討に入って、どうしても団体の数が多かったので調整に時間が掛かりましたけれども、5月16日から派遣が開始されています。当初は、避難所を回って避難所の方に何か困っていることはないかということを聞くんですが、一様に避難所の方たちが「自衛隊がいるから大丈夫」とおっしゃるんです。こんなに自衛隊が頼りにされたのかと思いましたけれども、きっと自衛隊がいるから大丈夫というのは、あくまでも物質的な面は大丈夫ということで、避難所の中で目に見えない支援が必要な方たちはどうなっているのかなというのを逆に不安になってきました。また大槌町では、避難所の把握をした後、在宅で暮らしてる方のお宅を全て回るという方針でしたので、そこに同行しました。そのときにいろいろお話を聞くんですけれども、例えばご主人を亡くされた方が、ご主人を亡くされて悲しいです、大変ですよ、つらいですよねと言っても、でもそれを人に話せないという。お隣の方はご主人と息子さんを亡くされてるから、自分がだんなが死んで悲しいという話をとても言えないとおっしゃってたんです。そういうつらい思いをしている、そのつらい思いを人に話せないという状況が、もし長く続いてしまったら相当危険な状況だなということを感じました。そういったことを現地のワーカーに報告しながら、継続して支援をしていきました。

次に避難所から仮設に移る時期に入り、ここで一番心配されるのが孤立の問題でした。阪神 淡路大震災のときにコミュニティーが崩壊したということがあったので、コミュニティーを維 持した状態で仮設住宅に移るのが望ましいということは誰もが知っていたんですけれども、実 際にはそうはならなかった。どうしてかというと、売る土地が少ないからで、仮設住宅そのも のの建設も遅れ、みんな早く移りたいという思いを募らせていた。早く移りたいときにコミュ ニティーを重視すると、どうしても不平不満が出てしまう。そうすると抽選という方式を取ら なきゃいけなくて、どうしても抽選という方法が公平な方法というふうになってしまったよう です。ただ県内で約 90 名の生活支援員を社協が採用して、その方たちが仮設を回るというこ とになりました。しかし生活支援員の中には福祉専門職ではない方も相当数いらっしゃるので、 その方たちに基本的な知識を身に付けてもらうということが重要な課題となりました。

避難所で生活するならば、いろいろ不自由なのは当たり前、我慢して当たり前というふうに考えられるんですけれども、そういう状況なったときに、それに耐えることができない方はそこからはじかれてしまう。避難所ですら生活できなくなってしまう方が、実際に何人かいらっしゃいます。そういう方たちを守るのが、私たちの仕事のはずです。そのように考えていたところ、福祉も災害直後から必要であるという考え方が出てきまして、福祉版の DMAT の必要性が指摘されるようになりました。そして DMAT が必要だということを県のほうに要望いたしました。県ではその要望を受けて、災害福祉広域支援に関する有識者懇談会というものを立ち上げまして、今後、災害があったときに福祉チームが入りますよということを確認し、今年に入って岩手県災害福祉広域支援推進機構を設置しました。さらに、全国で5カ所ぐらい熊本とか北海道とかが災害派遣福祉チームを検討しているようですけれども、岩手県は一番進んでいるだろうと言われています。どうして進んでるかというと、被災した県だからということはもちろんある。これからその福祉チームの内容を県内、何カ所かで説明して、チーム員の募集に入ります。応募してきた方に研修を受けていただいて登録というふうになります。チーム員は3年以上の経験がある方で、所属長の承認を得ているということが条件となり、ここがポイントです。本日、施設長さんも何名かいらしてますので、ぜひ所属長が積極的に市民のために協力

していただけると助かります。活動内容は福祉ニーズに対するコーディネート機能だと思っています。ソーシャルワークの一番の専門性はコーディネート機能かなというふうに私は感じているんです。研修プログラム、2日間、3日間、1日間というふうに書いてありますけれども、最低限これぐらいは必要だろうという日数です。

本部事務局は、県社協になります。本部長は知事です。県社協がチーム員の登録等を行います。日常的な研修等は県社協が中心に行うということになります。災害が起きたときには、その登録員の中から派遣するメンバーを要請します。それは県知事の依頼になります。本部長が派遣する形になります。市町村が災害対策本部を設置しますので、基本的には災害対策本部の要請に基づいて派遣することになると思いますが、実は東日本のときもそうだったんですが、市町村が要請できない、要請しない。要請がないけれども派遣が必要な場合というのは想定されると思うんです。そういう場合に、要請がなくても必要な場合には派遣できるようにしようということになっています。岩手県としては今年度じゅうに 10 チーム養成したいと考えております。実際に 40 から 60 名の方が登録していただけるようにしたいんですけれども、ぜひご協力ください。

シンポジスト 遠藤洋二氏 (関西福祉科学大学社会福祉学部)

関西福科学大学の遠藤でございます。私は、神戸市の福祉職として主に児童関係を中心に業務をしてまいりまして、阪神淡路大震災のとき、児童相談所に勤務をしておりました。このプロジェクトの入り口はその体験が大きかったというふうに思ってございます。1995年の1月17日、震度7のあの地震が起きまして、その直後から職場に行って仕事をしたんです。専門職の我々がしたことというと、水を運んだことと物資を運んだのと遺体を運んだことなんです。その中で私たちソーシャルワーカーは、こんなことしていいのかなというような思いが常に疑問として出てきたことをいまだに覚えております。今回の東北大震災の中でも、同じような話が出てまいりました。まさに今、DMATの議論もあるんですが、発生直後というのは緊急救命が一番なんだよ。生活支援のソーシャルワーカーというのは、その生命、身体が安全担保されてから機能を発揮するものですよという言い方をされました。それから、ワーカーというのは、支援をつなぐ役割なので、それが失われてしまったら本格的な援助ができないであるというとか、災害ソーシャルワークの機能というのは、継続をすることは困難であるというような議論がされています。

私はそれは違うと思ってました。そういう想いの中から、このプロジェクトが始まったと言っても過言ではないと思っています。このプロジェクトは、決して学生の教育でも調査、研究でもなくて、まさに災害が起こったときから私たちソーシャルワーカーが何ができるのかということを追及する。そしてそれを伝えていって、みんなで考えていこうということが一番の目的です。ですから、そうなると、まさに DMAT の議論というのは、このプロジェクトの根幹に当たる部分なのかなというふうに思ってございます。

私の経験でも、行政機関にいた医師は何をしていたかというと、いち早く、例えば病院に行く。それから、被災のど真ん中の、いわゆる緊急に設置した医療機関で準備をするということが起きていたのです。このように、彼らのミッションはクリアです。救急救命をするというミッションです。そうすると私たちソーシャルワーカーのミッションは何なのかということを共通認識して、さらには一般的に認知されているのかが疑問になってくるというところでございます。DMAT については、私は災害支援における非常に大事な機能だと思っておりますが、そうしたときにそのチームあるいはソーシャルワーカーがいち早く現地で何をするのか、何ができるのかという議論が出たんです。そういうものをしっかりと大学だけでなく、社会福祉に関連する我々がそれを明確化し、教員はそれをきっちりと学生に伝えて、そういうノウハウあるいは知識を持った学生を世に出していくということが求められる。もっと言えば、大学教員がそこの部分をサボっていたということは、明白だと思っています。

私の授業で学生に聞くんです。「災害直後に君たち何ができる」「今から東北、行って何ができる」。これを4月に聞きました。そうしたら「ボランティア」、あるいは「支援と人をつなぐ」、ということでしかないんです。果たしてそれで災害ソーシャルワークとして機能するのかどうかというのが大きな疑問になりました。

私たちが災害直後このプロジェクトを通じて、あるいは別個の研究の中でかなりの数のソーシャルワーカーの方のインタビューを行い、あるいは阪神淡路での資料など分析をした中で、 災害直後のソーシャルワーカーの行動に対するカテゴリーというのを考え、まとめました。こ れは私ども教員 3~4 名でまとめたものですが、そのカテゴリーの危機介入であるとか環境調整であるとか状況へのアプローチ、それから連絡、協働、相談、支援のような行動を主としたカテゴリーが出てきました。私はこの中でも状況へのアプローチということにかなり焦点を当ててございます。よくこの話をすると、災害時におけるソーシャルワークは、平常時のソーシャルワークと違うものなのかどうかという議論がございます。私は違うものではないというふうに思ってございます。ただ、状況が違います。例えば基本の組織というのは、崩壊あるいは機能不全に陥っています。通常であれば何か問題が生じたとき、職場のワーカーさんたちも同僚であるとか上司であるとかに相談をしながら手法を決定しますが、それができない場合もあります。それから、要援護者を発見場合は、私たちはその要援護者の状況をアセスメントして、必要な支援の方法を考える。そしてその必要な支援を提供する、サービスをつないでいくという役割を担っていますが、そのサービスも存在しない、あるいは使えないという状況があります。その中でソーシャルワーカーとして何ができるのかということが多分キーポイントになるのかなというふうに思っています。

平時におけるソーシャルワークの枠組みというのは、私たちはこんな形で考えていると思います。1 つは、分野。子ども、母子だとか生活困窮者であるとか障害者であるとか高齢者であるとか、そういう分野というチェックがあります。さらに、領域。ミクロ、メゾ、マクロという領域。この領域と分野の組み合わせの中で私たちは支援の対象というものを明確化しているという印象を持っています。ただいろんな状況、特に震災直後の状況を考えますと、こんなプロセスになって行くのかなというふうに思っています。これは先ほどお話をさせていただいたことなのですが、大規模災害が発生したときは、基本組織は機能不全に陥り、対象者自身が通常の支援の対象そのものといえるかどうかも分からない。生存しているかどうかも分からないということです。それから、周囲の状況がよく分からない。情報も不足している。もちろんこの背景に物資の不足という問題もあります。そういう中で、災害直後から活動したソーシャルワーカーの方々が、どのような視点で行動していたのかということを私は4つに分けています。いわゆる、崩壊、危機、混乱、葛藤。Collapse、Crisis、Confusion、Conflict。この4Cへの介入ということをしているのではないかというふうに私は今、仮説的に考えてございます。

こういうものに介入していきながら状況をアセスメントして、支援を行っている。いわゆる 私たちが日常的になじんでいるソーシャルワークが援助プロセスに基づいて丸ごと支援をしている。こういう枠組みが災害ソーシャルワークにあるのかなというふうに考えている次第です。状況への介入の中で若干この4つの支援への介入について少し実際例を挙げさせていただきます。例えば、ある施設ではほとんど崩壊した状況の中で、そこで働く職員の方々はそうした状況の中で懸命に支援しようとされていた。それをみた同じ系列法人のあるソーシャルワーカーは、いち早く全体状況をアセスメントして、無理だという判断をして、法人本部と相談し、利用者を移送した。これはまさに崩壊への介入あるいは危機介入ですね。また壊れた自宅で生活を続けようとしていた高齢者に対して危険性を感じて、近所の人に1日2日お願いをして、その間にサービスを探したソーシャルワーカーもいました。これは Crisis への介入というふうに位置づけました。次に混乱ですが、ある特別養護老人ホームでは空き部屋がなかったんですが、自主的な避難者が来ることで、状況的に避難所になってしまいました。そして入居者とそれから避難者との間にかなり混乱状況があったと思うんですね。それにワーカーが入って自

治組織あるいはリーダーを養成していくという共有のシステムをつくったという事例もございました。それから Conflict ですね。避難所でこれよく言われる話なんですが、特定の齢者の行動と、そのほかの避難者との間で Conflict が生じた。そこで避難所のデットスペースを利用して福祉避難所的な場所をつくったというようなことがありました。

今、私どもが考えているのは、まさに DMAT の議論と同じように、このようなことをソーシャルワークを勉強する学生にどのように教育をしていくのか、教えていくのかということが求められています。これを言葉で言っても、なかなか講義でしても伝わっていかないんです。ところが、このプロジェクトに参加をした学生は、この辺の話をすっと受け止めて理解をするということに気が付きました。それは彼らが実際に被害があった場所に行って、被害の状況を見て、そこを想像力と、さまざまな資料の中で補いながら、その場所に自分を置いて考えていたからだと思います。私が現地視察に行く学生に常に言っているのは、第三者として行かないでね。当事者として行ってほしい。そこで支援をしなければならないワーカーの立場でものごとを考えてほしいということをよく言ってございます。そして、その状況の中に入りながら私たちができることを考える。あるいはソーシャルワーカーの専門職としてできることを考える。そして実際にそういう支援をしてきたワーカーさんに話を聞いて、それを自分たちなりに分析をしていきながら、さまざまな視点とあわせて、行動の指針とするというようなプロセスが必要なのかなと思います。

最近よくアクティブラーニングとか、PBL、プロブレムベースドラーニングというそうですが、そういうものにも合致するような思いがございます。今後、私たちの考え方としては、学生に対して災害ソーシャルワークというものを知って、気づくことのできる場と機会を提供し、アクティブラーニングを通して体験と議論を融合させ、一般化していきたいと考えています。そしてこのプロセスの中で今、私たちができる範囲の中で災害ソーシャルワーク、もっといえば、先ほど DMAT の議論にあった災害直後に私たちは何をできるのか、何をすべきなのかというようなものを体系化して発信をする、あるいは学習することができると思っています。

災害ソーシャルワークに関する課題について、私は3つに分けてございます。まず固有性の問題があると思います。ソーシャルワークがもし専門職として認知されるということであれば、ほかの専門職とは違った固有性とは何かということが求められるということでございます。ただ、ここで考えなければならないのは、ソーシャルワークというのは社会福祉士を初めとしたソーシャルワーカーだけが活用するツールであるかどうかを考えることも一つ課題だと思っています。仮設住宅の中では非専門職のLSAが、まさにソーシャルワーク的な活動をしています。宮城県では、社会福祉士会がサポートセンター支援事務所というのをつくって、サポートセンターの教育などしています。緊急雇用で雇用された方たちが、まさに生活支援をしているということです。その中でソーシャルワーカー、非ソーシャルワーカーによるソーシャルワークの可能性ということも見据え、スーパービジョンを実施するということも専門職ソーシャルワーカーの役割なのかなというふうに思ってございます。それから、先ほど出たミッションの話です。被災直後から生活復興のために一貫したソーシャルワークの実践というのは、ほんとに大切なもの、なくてはならないものだというふうに思っております。当然その中には、DMATであるとか、そういう被災した真っただ中のワーカーさんのミッションみたいなことを、しっかり説明できるものとしてとらえていく必要があると思いますし、それを支援していく必要が

あるのかなというふうに思ってございます。そして、もう一つは、災害ソーシャルワークということの理論化、あるいは教育だと思っています。当然これは、多くのワーカーさんたちに見せてもらわなければならない、ツールとして考えるのであれば、これをテキスト化する、マニュアル化する。あるいは実践教育のカリキュラムであるとか、現任の訓練用プログラムに落とし込んでいく必要があるのかなというふうに思ってございます。実践教育のカリキュラムについては、福祉を教える我々教員の役割なのかなと思ってございます。

今、DMAT の議論が、非常に進んだというふうに認識してございます。我々、言うことは非常に小さいことなんですが、まだこういう活動、あるいは我々が今やっている教員として、あるいは研究者としてやっている部分を皆さま方と共有して、あるいは一緒に考えていきながら、このプロジェクト、あるいは私たちが今やっていることが少しでも皆さま方のお役に立てるものがあれば、ご提供させていただいたり、一緒に考えさせていただければありがたいかなと思ってございます。このプロジェクトは、先ほど言いましたように、私どものプロジェクトは数年続けていきたいと思っています。細く長く続けることが大事だなと思っています。皆さま方にはいろんな意味でご迷惑をお掛けすることもあるかと思いますが、ご協力いただければありがたいと思っています。ありがとうござました。

6-2. 意見交換会報告(宮城)

「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」意見交換会(宮城県)

2013 年 12 月 28 日(土) 14:00~17:00、宮城県社会福祉士会事務所にて、宮城県社会福祉士会および福祉系大学経営者協議会主催による「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」意見交換会が行われた。

【はじめに】宮城県社会福祉士会事務局長の高橋達男氏と福祉系大学経営者協議会復興支援委員長の遠藤洋二氏(関西福祉科学大学)から、開会の挨拶があった。本プロジェクトが、震災後のソーシャルワーカーの活動を記録に残していくという目的と、社会福祉士会での取り組みを後輩に伝えたいという思いが一致するかたちでスタートしたことが改めて確認された。

【概要説明】プロジェクトに参加した学生1名(関西福祉科学大学)から、プロジェクトの概要説明があった。本プロジェクトでは、災害時の被災者支援における福祉専門職(ソーシャルワーカー)の取り組みの重要性を示すため、2012年3月の第1次派遣~2013年8月の第4次派遣を通して、宮城県、岩手県、福島県でソーシャルワーカーにインタビュー調査を実施しており、2014年3月には第5次派遣を行う予定であること、これまでのインタビューで得たことを社会に発信する"語り部プロジェクト"も並行して進められていることが紹介された。

【成果報告】プロジェクトの参加学生 4 名から、プロジェクトの成果報告があった。まず、学生 2 名(中部学院大学)から、「ソーシャルワーカーだからこそできること~わたしたちが考える SW~」についての報告があった。

<以下、一部抜粋>

現地でのインタビューを通して、社会福祉士の専門性は、聴く、つなぐ、調整にあることがわかった。まず、今何が必要かを把握し、時間差のないかたちで、必要なときに必要なものと提供することが重要である。そのためには、"聴く"ことを通して、その人の心に寄り添い、思いを知ることが大切であり、そこにソーシャルワーカーの専門性がある。日々の何気ない会話が重要であり、人の話を聴くことがためには、普段からの信頼関係の形成が小さなニーズの気付きにつながっていく。真のニーズをつかむことができてこそ、真のニーズを察知し、必要な機関・資源につないでいくことができる。被災地のソーシャルワーカーは、つなぐだけではなく、その後も利用者に関わり続けていた。また、沿岸部と山間部のお互いの状況を理解し、受け入れ側と受け入れられる側のマッチングも図っていた。こうしたつながりの実現は、ソーシャルワーカーだからこそできたことであり、普段からのネットワークづくりが重要である。社会資源を知り、自分を知ることで、連携調整を図ることが可能となる。顔の見える関係づくりが連携につながっていくことから、日常からの関係づくり、そういう場に積極的に出かけていくことが重要であると感じた。

続いて、学生2名(関西福祉科学大学)から、「"語り部プロジェクト"」「ソーシャルワーカ

ーの"声"プロジェクト」についての報告があった。 <以下、一部抜粋>

"語り部プロジェクト"においては、現任のソーシャルワーカーを対象とした際、災害時におけるソーシャルワーカーの役割について考える良いきっかけになったとおっしゃっていただいた。大学生を対象とした際には、参加者からはソーシャルワーカーになり

たいという声が多く寄せられた。活動する中で、東北の方が避難してきていて、ソーシャルワーカーに助けられたという声もあった。現地で活動されているソーシャルワーカーにそのような声を伝えるとともに、被災地の状況や現地でのソーシャルワーカーの取り組みを今後も伝えていきたい。

ソーシャルワーカーの "声" プロジェクトにおいては、現地でのインタビューを通して、ソーシャルワーカーの専門性を次の4つのキーワードでとらえた。①初期的なアセスメントと気づき(現場を見て、何が必要か、何ができるかをイメージする)、②介入時に道具を活用する(さまざまな道具を用いて、介入するきっかけをつくる)、③アウトリーチによってニーズを見つける(さまざまな理由によりニーズを表出できない方々に対して、自ら出かけていきアウトリーチを行い、支援を展開する)、④支援、資源とつなぐ(必要な支援や資源を利用者につなぐ。社会資源が機能していない場合は、新たな社会資源をつくる)である。災害直後においては、主として、これらの4つのソーシャルワーカーの専門性が無意識のうちに発揮されていた。ソーシャルワーカーは、災害という平時と異なる状況に介入し、不特定多数の被災者を対象にニーズを把握して、必要な社会資源とつなぐとともに、生活再建に向けた支援において重要な役割を担っていると考えられる。

【座談会】プロジェクトの成果報告をふまえて、参加者全員による座談会が行われた。ソーシ ャルワーカーの方々からは、災害の発生後の状況をふり返り、「やることはたくさんあったが、 何もできなかったという無力感だけが残っていた。混乱した状況の中では、自分たちの専門性 を意識していたかというと、できてはいなかった。とにかく目の前のことをこなしていた状況 だった。またみんな死にもの狂いで支援を行ってきた」、「助かった命を大事にしたいという思 いで、二次災害を防ぎたいという思いがあった。ここにソーシャルワーカーの取り組みの意義 があった」など、体験を通じた思いや意見が述べられた。また、本プロジェクトについて、「イ ンタビュー当時は、忙しい中で、インタビューを受けることに若干の抵抗があったが、自分た ちの取り組みを語る中で、自分自身の取り組みについて直すきっかけにつながり、意味があっ たと感じている」、「ソーシャルワーカーのクライエント観でもあるが、カッコ悪く生きている 人もかっこいいと思えるのが我々の感覚。それが学生に伝わったと思えると我々にとって喜ば しいことである」などの声が寄せられた。また、プロジェクトに携わる教員からは、「本プロ ジェクトは、学生の教育を目的として実施しているものではないが、ソーシャルワーカーの 方々へのインタビューを通した学びが、学生にとってその後の学業の原動力になっている」、 「学生がソーシャルワーカーの方々をかっこいいと表現したのは、本物に近づいたことを意味 しているのではないか。学生たちがインタビューをすることによって、本当の自分たちの姿を 出してしまった。その事実がかっこいいと感じたのではないか」といった見解も示された。

本プロジェクトは、現地のソーシャルワーカーの方々に様々なご負担をおかけした中で、多大なご協力をいただいた。学生に伝えてくださったプロとしてのソーシャルワーカー像にあらためて敬意を表しつつ、震災後にソーシャルワーカーが果たしてきた重要な役割や機能をいかに示していくかが、今後のプロジェクトを展開していくうえでのさらなる検討課題となった。

宮城県意見交換会 <座談会>

【学生からの報告を受けてー"かっこいい"ソーシャルワーカーとは一】

司会: そうしましたら、先ほどの学生の発表をお聞きいただいたと思います。言葉の使い方であるとか失礼な段もあったと思いますが、ほんとに学生たちの生の思いです。この中にはインタビューでお願いした方もいらっしゃいますので、その辺も含めてご意見をまずいただければ、それにまた学生が、回答じゃないですがレスポンスさせていただけるかなと思うのですが、いかがでしょうか。

高橋事務局長: この卵たちというかひよこたちのフレームというか、あるいはリフレームというか、そういった枠で、かっこいいソーシャルワーカーとしてフィードバックしてもらったと思うのですが、僕らはかっこ悪いと思っていたよね。どうですか。というのは、茫然自失状態で、先が見えなくて、ただただ泥まみれ、汗まみれでいる自分は、福祉援助者としてかっこいいとは思ってなかったです、全然。スーパーとかスマートとかというのは全然なかったです。だから、これぞソーシャルワーカーだというのをお伝えはできないだろうと思って。でも後輩たちと会いたいという思いで始まったのです。

司会: 実はちょっと真面目な話をすると、このような内容を大阪府の社会福祉士会でプレゼンしました。ある大阪府の社会福祉士会の彼は東北にも支援に入ったワーカーですけれども、ワーカーがうちの学生に対して、ワーカーをヒーロー視するなといった言われ方をしたのです。それを言った、ここには来てないメンバーが何って言ったかというと、「別に私たちはソーシャルワーカーをヒーロー視していません」と。「彼らは苦悩しながら泥まみれになりながら、泣きながら支援していました。できなかったこともたくさんあるって涙流していました。でもその姿がかっこいいと思っています」ってはっきり言っていました。それが学生たちの思いかなというふうな気はしています。光り輝くところだけを見ているのではなくて、あまり学生たちは言語化してないですが、その後ろにあるしんどさとかつらさみたいなことを分かった上で「いいな」というふうに思ったということはお伝えしたいなと思います。

学生 A: 例えば中村俊輔という選手がいるのですが、フリーキックはとてもうまくて、きれいなゴールを決めるんです。そういうゴールも僕はかっこいいと思うんですが、でも僕が一番好きなのは、ゴン選手はそういうきれいなゴールっていうのは今まであんまり少なくて、なんかぐちゃぐちゃってやって、たまたま入ったみたいな、そういうなんか。気付いたら、すごく血が出ているみたいな。ヒーロー視しているのではないですが、そういう泥臭く頑張っている姿というか、プロとしての意識っていうのを持ちながら、今できることを一生懸命やるっていう姿が僕はかっこいいと思いました。

参加者 A: 私、今思い出したのですが、3月にインタビューを受けたとき、退職間際ですご く忙しくて、自分で何をしゃべったかよく覚えてなかったのですけど、今かっこいいというお 話で、あのとき確か「社福士ってかっこよくて私、社福士になろうと思ったの」って、確かお話しして、「そうですよね」ってなぜか妙に意気投合したのを思い出したんです。私も先輩の周りにいる社会福祉士の方がかっこいいと思ったので、なりたいと思ったほうです。

【インタビューを通して】

司会: このプロジェクトの、今日の発表のことも含めてプロジェクトの意義とか意味とかい うことについてもご助言とか感想とかいただければありがたいなと思うのですが。

参加者 B: プロジェクトそのもの受けるときには、実はとても現場の中でものすごく忙しい中だったので、受けることすらどうかなという感じだったのですが、受けてみたところ、自分の無意識にやってしまっていた部分というのが意識化されて、ソーシャルワーカーとしてどんな動きをしたのかについて、「ああ、そうなんだ」という気づきが自分自身の中にありました。避難所勤務だったのですけども、コミュニティーつくるのに心掛けたこととか、ほんとにつなぐだとか、一人一人の方のニーズをその方のとこに行って聞くだとか、そういうことをしたことを意識化されたとかそういうところがあって非常に良かったなというところがありました。あと、地元の大学生よりも遠くからいらっしゃってインタビューをしてくれた学生さんのほうが非常に我々をよくとらえていただいていて、それこそ「かっこいい」というふうに出てくるぐらい思っていただいたところがあるのですが、逆に地元の今、近くにいる学生さんとこんなに話をするだとか、こんな語りをしたことあるかなって思ったりもして。本当は地元の近い距離の学生さんとこういった機会があるといいのかなという思いがあります。

司会: 分かりました。文京学院の学生がインタビューでかなりインパクトを受けて帰ってきたのを覚えています。このプロジェクトはなかなか行政関係の方とお話をする機会もなかったのですが、実は私も阪神淡路のときは児童相談所にいまして。避難所にいる児童であるとか、かなりハイリスクな子どもたちというのが目に見えたんですが、やれと言われたのは、遺体の安置と、水を運ぶのと、15トンのロッテのエンゼルパイを運ぶという、この仕事しかしてなかったというので、かなりいろんな思いがあったので、その話と兼ね合わせて随分、文京の学生たちと話したのを覚えています。皆さま方もそうなのですが、家族を置いてとかいろんな思いで活動されていたということもあるので、私たちどもの学生のプロジェクトというのは学生主体といっているのですが、ワーカーの痛みとかしんどさみたいなことも分かった上で、それでもなおかつ、あなたたちはワーカーになるのですかというのをずっと問いかけながらやっているというのは感じています。その上で皆さんインタビューを受けていただいた方を1つのモデルとしてやっていきたいと学生が言ってくれていることは、まさに現場の力かなというのを改めて感じました。それが本当の1つのプロジェクトの意義なのかなと思っています。

参加者 C: 我々の社会福祉士の活動をこんなにも分かりやすくまとめていただいて、ありがとうという気持ちがあります。どうしても東北の気質かな、ぼくとつなところもあるのだろうと思うのですが、分かりやすいソーシャルワーカーの専門性というのが整理されているので本当にありがたいと思います。私が感じたところで、説明でもありましたけども、ソーシャルワ

ーカーの災害直後の必要性というところで、私自身が被災を受けた直後で感じたところは、本 心で、助かった命を、せっかく助かった命をずっと大事にしてもらいたいということで、二次 災害にはなってほしくないなという思いでがむしゃらに動いていた記憶があるので、そういっ た部分でも二次災害を防ぐという点ではソーシャルワーカーの活動の意義というのは大きい のだろうなというところがあります。かっこいいとかじゃなくて、なりふり構わず動いていた ところもありますし、避難所に行けなかった高齢者の人に代わって避難所に行って町内会長に 「ご飯、恵んでください」ということをお願いして歩いていたり、そういう活動をするのはソ ーシャルワーカーなのかとはあまり考えない、本当に人としてというか、そういう仕事のほう がどっちかというと強かったかなと思います。ソーシャルワーカーの専門性というの、人とし ての素養の上に成り立っているのかなとも思うのです。またどこかで話す機会があれば話した いと思います。あと、災害支援のほうでは、宮城県社会福祉士会のほうで平成 20 年に災害支 援委員会というのを組織しまして、宮城県のほうで、いつか来る、いつか来るよ、ということ で9割近く大地震が来るというふうに言われていたので、何かできないかという思いでやって、 その後3年で東日本大震災を迎えたわけですけども、振り返ると、できたこととなると、結局、 災害時こそソーシャルワーカーの力が必要という問題提起ぐらいしか結果としてはできなか ったのだろうと思います。今回の規模が、地震とか津波とか1地域で起こっただけでも大ニュ ースなのに、それは県を複数またいでのものなので、かなり想像を絶するところがありました。 ソーシャルワーカーの役割としては、つなぐとかコーディネートするというところがあると思 うのですが、災害のときだと社会資源が少なかったりします。つなぎ先がないとか、場合によ っては自分みずから社会資源になることもあるとかですね。例えば、どっかに手続きをしに移 動するけども移動手段がないとなった場合には、一緒に移動、連れていくとか、車に乗せてい くとか、そういう事実行為なんかも時には含まれるんだろうと思います。あと、今後の被災直 後のソーシャルワーカーの活動とか社会資源の準備というところは、今後、必要性が叫ばれて いる福島の DMAT の構築というのにつながっていくのだろうと思うのですが、今後、皆さまの まとめていただいたことを踏まえて、また頑張っていきたいなと思いました。本当にありがと うござました。

教員 A: この夏は学生に帯同して福島に行かせていただきました。福島は原発ということがありましたので、とりわけほかの地域とまた違う状況があるのですが。でも、ほかの地域でも津波ということがありましたので、ですから、いわゆる被災された方というのは、特に福島なんかも帰りたいけど帰れないというようなこととか、あるいは、帰れるようになったんだけれども帰らないとか、いろんなそれぞれの置かれた条件の立場の違いというようなところで、それぞれに被災者が分断されているというようなお話も福島に行って聞かせていただきました。こちらでも多分、津波というようなことでは、帰りたいけど帰れないというようなところもおありかと思います。そういう方たちに対してソーシャルワーカーさんが支援をされているようなところ、私はインタビューで聞かせていただいたのですが、非常に悩ましく、そういう被災者の方がほんとに自己決定をして、帰るか帰れないかみたいなことも悩みながら決定しているところを、とにかく寄り添って後押しをして、尊重して背中を押すというようなことをしておりますというようなことも言われていました。何もできなかったとか、あるいは目の前のこと

しかできなかったというお話もインタビューで聞かせていただきました。その中で、学生が報 告していましたように、何もできなかった中で、これまで培ってこられたソーシャルワーカー としての専門性みたいなものがその都度発揮されて、ネットワークなんかも破壊されているわ けですけれども、普段、培われていたネットワークの中で、今日も学生の報告にありましたけ れども、この人に頼めばこんな動きをしてくれるというようなところで、やはりソーシャルワ ーカーというのは何もなくても、あるいは被災直後でも、それぞれに活躍されていたのだなと いうことは、すごく私もこの夏の第4次派遣で感じさせていただきました。それと、さっきか らかっこいいという話も出ていましたけれども、私も大学で地域福祉などの授業をやっており まして、社協のソーシャルワーカーさんについて「黒子」という言い方もありますよね。ソー シャルワーカーさんはサポートするとか側面支援というようなことですので、よく黒子という 言葉も出して授業なんかをしていたりするのですが、それだけにどうしてもソーシャルワーカ ーというのが前面に出ないとか、あるいは住民主体であるとかっていうような言葉があります ので、もっとこれからはソーシャルワーカーの役割を発信していってですね。プロジェクトの 役割と重なると思うのですけど、もっともっとソーシャルワーカーの専門性とか役割とか、あ るいは、活躍しているところを発信していかないといけないなということをこのプロジェクト に参加させていただいて、改めて学生の動きを見まして思っているところですので、そういう 意味でも学生のこういう主体的なプロジェクトというのは非常に学生の学びについても意義 があるのではないかと思います。宮城の方たちもきょうはたくさんご参加いただいていますの で、とりわけ宮城の方たちは関心も高くやっておられるのかなというふうに感じております。

司会: ありがとうございました。このプロジェクトが教育活動ではないというのは、はっきり全面に出しています。ソーシャルワーカーの役割、機能というのをしっかり見据えて、それを社会に発信していく。このミッションを学生と私たちが、教員が共有してやっていくというのは、このプロジェクトの一番のコアな部分です。でも、やっていく中で学生の教育効果はすごいなというのも感じています。本当にいろんなことがありますが、みんな成長してやってくれるのを見ると、一教員としてはうれしく思いながらやっているところです。

参加者 D: 先ほどスライドを見させてもらって、DVD 見させてもらったときに、3 年ぐらい前のことなのですが、見ていていろいろなことを思い出すと涙が出そうになりました。本当にいろんなことがあったなって、今振り返れば思うんですけど。DVD にあったように、震災当初に思ったのと、震災直後 1~2 カ月間とか振り返ってみても、自分で無力感というか、そういうのがありました。やっぱりすごくそれは感じていて。行政職なので避難所の支援などいろんな仕事はあったんですけど、何をしたのかというと、何もしてないなという思いだけがすごく強く残った震災直後だったなと思っていて。行政の仕事だと、その後、避難所が徐々に縮小していって、制度などが出てくるので、災害の制度の申請といった仕事は入ってくるのですが、それ以外にも私は障害福祉の部署にいるので、障害者の方がどんどん来られて、支援をして。当時、何かにつなぐとかという意識は全くなくて、本当に申しわけない言い方ですけど、砂漠みたいなかたちになってしまうのです。話を聞いて、こうだね、こうだね、ああだねってやっているのですが。パワーポイントの最後のほうにあった、無意識のうちにソーシャルワークの専

門性という言葉がありましたけど、それを私が社会福祉士だからそれができたのかというと、 そうでもないのではないか。ただ来た人の話を聞いて、この制度が使えるよとか、こういった とこに行ったほうがいいよという話をしていただけで、それが社会福祉だからやったのかとい うと、人としてとか仕事だからというとこなのかなという思いを引きずりながら3年間、仕事 してきたなと思います。かっこいいなと皆さん口々に言ってくれましたが、本当は、もしかし たら、そんなのヒーローじゃないみたいな、ヒーロー視するなというようなお話がありました けど、ほんとはヒーローみたいになれたらよかったのかなと思ったりもするのですが、そんな 力もないし、直接、何かができるわけでもないし、医療職の人たちみたいにスポットが当たる わけでもないし。別にスポット当たってほしいとも思わないですけど。例えば、メディアのほ うにも、とありましたけど、ソーシャルワーカーに限らず福祉関係というのはメディアに当た りづらくて。本当にみんな死にもの狂いで仕事をしていて、人を救ったり生活、支えたりして きたんですけど、物すごいドラマを持っているのだけれど、ほとんど誰も知るよしもないとい うか、ところにスポットを当ててもらって発信してもらえるというの、すごくありがたいなと いうところと、自分が仕事をしていて誰かから、評価という言葉を使うべきなのか分かんない ですけど、ワーカーさんに相談してよかったねとか、あの人に相談してよかったねと聞く機会 というのがあまりないので、客観的にというか、ソーシャルワーカーの専門性だよねと今日言 ってもらえたというのは、私としてはすごくありがたいなというところがあります。

司会: ありがとうございました。ヒーローを目指しているわけではない。でも、学生たちが社会福祉の仕事って、楽しい仕事じゃなさそうだけど、でもいいよねって思ってくれるところに多分とっても意味があると私は思っています。私も30年以上、現場で仕事をしていました。だから学生には、現場、面白いよって。ソーシャルワークって魅力あるお仕事だよって。一生の仕事にしてもいいよねという話をずっとしています。そんなこともだまされたと思っていいからやってごらんって。見事に今回のプロジェクトを通じて魅力を伝えていただいたなと思っています。だからこそ、このプロジェクトもあんまり日の当たるところでアドバルーン挙げて「こんなことしてます」と新聞にも載りましたけど、そういうことを目指すのではなくて、地道にこそこそと長くやっていければいいのかなと。

【今後の課題と展望】

司会: 多くの人たちが「ワーカーっていいよね」というふうに感じてほしいと思っているし、これから社会福祉士を目指す、ソーシャルワークを目指す学生たちが、「この仕事っていいよね」と思えるようなものを私たちが教えていかなくてはいけないと思っているところです。それがこのプロジェクトの原点であると思っています。時間も参りましたので、またいろんな形でこの後もご議論させていただくと思うのですが、学生主体というので、学生一人一人に、このプロジェクトを通じて感じたことは先ほど言いましたけど、これから彼らはどういうふうに進んでいくのか、ここで一言ずつ言っていただきたいと思います。

学生 B: 私は就職も決まって、福祉事業団で相談職になれたらなとは思っています。これから自分はソーシャルワーカーという明確な目標があるので、そのために大阪でも災害が起こる

と思うので、このプロジェクトを通して学んだこと、日頃からのソーシャルワーカーの専門性が災害時にも生かされるということなので、一歩ずつですが、ソーシャルワーカーという夢に近づけるように頑張りたいと思います。あとプロジェクトとしては、後輩にどう引き継ぐのかとか、これからどう、このプロジェクトが発展していくのかというところ、課題はたくさんあると思うので、もう少し考えて進めていきたいと思います。

学生 A: 僕は、卒業してからあと 2 年大学院に行くので、このプロジェクトに関しても、主体は後輩たちになると思うのですが、僕もこの1年半ぐらいやってきたインタビューを行って、こういう機会で得た知識も後輩に引き継ぎながら、一緒にあと 2 年はこのプロジェクトを盛り上げていこうと思っています。僕たちはまだまだ若いですし、多少寝なくても全然大丈夫なので。被災され自らも傷ついている中で、今も頑張って支援している。そういう状況にあるということもこれから後輩たちに伝えたり、関西にいるほかの学生とか一般の人たちにも、「ソーシャルワーカーという人がいます」と伝えていきたいです。関西では震災が終わったように見えますが、まだ苦しみながらも必死で頑張っているソーシャルワーカーもいるのだということも、このプロジェクトを通して広めていきたいなと思っています。僕はあと 2 年間プロジェクトに携わり、自分の進路は一応、行政職、公務員試験を受けようと思っています。それも並行して両方を頑張っていこうと思います。

学生 C: 私も就職、決まっているので、信頼していただけるというか、そういうワーカーになりたいな、相談職になりたいなと思っています。またこのプロジェクトがほんとに身近な人に、1 対 1 でもいいから、会話の中に入れてみて伝えていくということもできればなと思っています。これからも個人的なプロジェクトは続けていきたいな、何かしらでかかわっていきたいなと思っています。ありがとうございます。

学生 D: 当たり前のことを当たり前にやっていくということは、日々の暮らしが災害時、緊急時でも大きくつながっていくのだなとすごく思いました。私の地元では海もないし災害に対する意識ってすごく低いと思うのですが、でもすごく大きな断層があって、30年以内に地震が起こる確率ってすごく高いと言われていて、意識が低い分こうやってお話を聞かせていただいて、どんなニーズが出てくるかということも想像できるだろうし、どういうことが足りなくて、どんなことが必要になってくるのかということも考えていけると思うんです。社会福祉士は説明するのが難しいように、これという仕事がないみたいに思われるけど、それだけ範囲が広い分、細かいところに気付ける部分というのもすごくたくさんある仕事だと思うので、これから私はあと1年間、大学での学びがあるので、それプラスいろんなところに出ていって活動できるものにいろいろ参加して、自分を高めつつ、自分の中でも日々の暮らしで一杯いっぱいになってしんどい時に、周りにうまく頼れることができなかったりする部分はあるので、自分の限界というか自分の力を知って、足りない時に助けてもらえる。「助けて」と言う仲間をつくっていくことも、連携とかつながりにつながっていくと思うので、自分の暮らしに気づき、このプロジェクトで学んだこと、これから生かしていきたいと思います。

学生 E: 今、社会福祉士と、あと精神保健福祉士を目指しています。この社会福祉士の勉強をしていく中で、実習も今3年生で終えて、実習の実習指導者さんのお話というのは、ああ、そうなのだなとか、その人すごいなって思ったりして、その人のざっくばらんな話を聞けば聞くほど、その人に惚れて、その人が持っているワーカーがすごいなって思うので。ソーシャルワーカーはかっこいいというのもあると思います。その人が持っているものがすごかったり、その人の性格とか優しさとかそういうのが、いいなと憧れるのかなと思います。そういう人になれるかどうか分かりませんが、自分を客観視してみたりとか、そういうようなこともできるようになったりとか、これから1年間、一生懸命、学んで、社会福祉士になれるように勉強していきたいと思います。ありがとうござました。

司会:ありがとうござました。今、学生が言ったことがすべてだと思っています。先ほど申しましたように、私たちはこのプロジェクトは細く長くやっていきたいと思います。関西弁で若い人が言うように、ぼちぼちやっていこうと思います。「かっこいい」がキーワードですが、ちょっと違うのですね。かっこええなぁ、というものなのですね、我々は。このニュアンスなかなか分からないかもしれませんが、そのような感じでやっていければなと思っています。もちろん皆さま方が日々の仕事の中で、あるいは3年前の出来事でいろんな思いをお持ちなっていることも分かっています。それをインタビューで聞かせていただくことが皆様に時間的にも、もっと言えば出費にもご負担を掛けることも分かっています。学生もそこで悩むのですよね、どうしようかなって。ただ私は、そこはプロとして乗り切っていただけると思うし、もしそれが厳しいような場合は、おっしゃっていただいたら、それに沿ってやる覚悟はありますというふうにお答えしようというふうに言っています。いろんな意味でご負担をお掛けする部分もあると思います。事務局長が「一緒にやろう」といつもおっしゃってくださっていることを励みにこれからもやっていきたいと思いますので、末永くお付き合いいただければありがたいかなと思っているということで、時間になりましたので、閉めさせていただいてよろしいですか。

高橋事務局長: 閉めの言葉としてなんですけども、どうでしょう。ソーシャルワーカーのクライエント観。つまり、失敗しながらぶざまに生きている人間でも、僕らはかっこいいねって思うのですよ。そのことが伝わったのではないでしょうか。どうでしょうか。

・・・だとすれば大成功ということですよね。ですから、そこは専門性なのか特別性なのか分かりませんけども、それは普通であるという感覚のセンスだと思うのです。そのセンスが伝わったとすれば最高です。これからも一緒にやっていきたいというふうに思います。

司会: ありがとうござました。長い時間でしたが、これで報告会、意見交換会を終わらせていただきたいと思います。

* 本稿は、座談会の内容を一部抜粋し、修正を加えたものです。

6-3. 意見交換会報告(福島)

「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」意見交換会 報告

以下の通り、意見交換会を開催した。

1. 目的

- ・福祉系大学経営者協議会が実施してきた東日本大震災復興支援プロジェクトである「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」の活動成果を福島県社会福祉士会に報告すること。
- ・今後のプロジェクトに関して意見を交換し、事業の効果的な運営に資すること。さらに、 社会福祉士の質の向上をはかること。

2. 主催

福島県社会福祉士会 福祉系大学経営者協議会

3. 日程·場所 平成 25 年 12 月 8 日 (日) 駅前大通会館 (郡山市)

タイムスケジュール

- 13:00 開会·挨拶 司会 関西福祉科学大学 斉藤千鶴 福島県社会福祉士会 会長 島野光正 福祉系大学経営者協議会復興支援委員会委員長 遠藤洋二
- 13:10 プロジェクト概要説明 復興支援委員会委員長 関西福祉科学大学 遠藤洋二
- 13:30プロジェクトの成果報告(参加学生)関西福祉科学大学中上裕菜(2年)文京学院大学木村恵理(4年)小野綾子(4年)
- 14:20 休憩
- 14:30 座談会「災害支援におけるソーシャルワーカーの機能、役割」 司会 文京学院大学 鳥羽美香
- 15:30 プロジェクトに対するコメント 評価委員 関西学院大学 池埜聡
- 15:50 質疑応答
- 16:00 閉会

4. 参加者 17名

5. 意見交換会の概略

まず福島県社会福祉士会会長島野光正氏と福祉系大学経営者協議会復興支援委員会委員長遠

藤洋二氏より挨拶があり、遠藤氏より、プロジェクトの概要説明、今までの経緯について説明 があった。

次に参加学生4名からの報告があった。関西福祉科学大学の中上裕菜氏、福井弥生氏からは、スライドを交えて、第4次派遣フィールドワークの内容と感想、今後の活動にどのようにつなげるか、等の報告があった。そこでは、災害時のソーシャルワーカーへのインタビューという貴重な経験を踏まえ、災害時のソーシャルワーカーの役割の重要性を理解することが出来た、また、平時からの連携の大切さ等も学ぶことが出来た、とプロジェクト参加の成果が述べられた。さらに、その経験により、大学内での報告会や高校生対象の授業などで、ソーシャルワーカーはどのような専門職か、災害時の役割について等伝えていく重要性を知り、また実践もしている、とのことであった。

文京学院大学の木村恵理氏、小野綾子氏からは、同じく第4次派遣フィールドワークの内容 について報告があった。特に福島県は他の被災県と異なり、原発事故の影響がいまだあり、復 興が困難になっている現状を学び、重要な経験になったとのことであった。

その上で、ソーシャルワーカーが施設再建に向けて尽力した姿や、支援物資が滞る中で、ネットワークを駆使した話をインタビューで聞くことが出来たことは大きな学びであり、自分たちが卒業して実践現場で働く上でも、役立っていく貴重な経験であると報告があった。

次に休憩を挟んで座談会「災害支援におけるソーシャルワーカーの機能、役割」に全員で参加し、ディスカッションを行った。そこでは、今回の第4次派遣で学んだことを中心に、プロジェクト参加者と調査協力者とで、意見を交換した。調査協力者としては、自分達の後に続くソーシャルワーカーの卵達を育てるという意識があってインタビュー等を引き受けたという経緯やその意義について話があり、また被災地への理解がすすむことは非常に大切なことである、とこうした取り組みの重要性について触れられた。また、災害時のニーズとは何か、という点に関してはソーシャルワーカーの目を通して現場レベルでニーズを発掘していくことが重要で、震災直後からもそれは実践出来ていたということであった。

さらに、災害時におけるソーシャルワーカーの役割については、災害時であろうとなかろうと、基本的な支援に対する姿勢、価値、スキル等は変わらないということが改めて確認された。 福島県は特に震災が過去のことではなく、現在もそれに対し取り組んでいる最中であるということ、それにはミクロの視点だけではなく、マクロの視点も重要で、既存の制度のみならず、必要なもの(ニーズ)に対し資源を新たに作り出していく姿勢も問われるという話があった。 続いて全体を通して評価委員の関西学院大学池埜聡氏よりコメントがあり、本プロジェクトの取り組みの重要性、自分達が学んだことを後輩に伝えて行くことが大切であるという指摘を頂き、今回のプロジェクトも語り部活動へとつなげていくことが確認された。

意見交換会報告:福島

関西福祉科学大学 2年 中上裕菜

12月8日、私たちは、郡山商工会議所会議室で開かれた福島県の意見交換会に参加させて頂いた。意見交換会は、福島県社会福祉士会の方々と、文京学院大学の方々、そして私たち関西福祉科学大学との共同で行った。前半の報告に続き後半の座談会では、社会福祉士会の方々から様々な意見をいただいた。

被災者の支援に関してはまだまだたくさんの課題が残っている。現在は、地区ごとに福島県からの委託を受けて相談事業が行われているが、だんだんとニーズや課題が変わってきているという。自主避難を行った人としなかった人との間で意識に差が出来てしまっていたり、自主避難者で法に阻まれ、補償金をもらえずに経済的に厳しい生活を強いられている人もいる。また、きちんとした証明がないと制度が利用できず、他県へ避難している人には制度が使えない場合もあり、それが支援のしづらさに繋がっているという。そして、かつての伊豆大島の噴火では、全島避難が行われ、現在島に戻って住んでいるのは高齢者ばかりという状態だが、今回の東日本大震災では、放射能の影響により広域で避難が行われている福島県でも、将来的に伊豆大島のようになってしまうのではないかという懸念もある。広域避難の問題については、福島だけでなく日本としてどうするのかということも考えていかねばならない。

被災者支援を行う支援者については、たとえ避難先から職場に復帰ができたとしても、自分が一度逃げてしまったという罪悪感から、職場でのわだかまりが出来てしまっている人もいると聞く。支援者もまた被災者であるため、職場や地域で被災者としての問題を抱えている。災害後、個人主体だった支援活動を組織化し、職場を維持するために職場内での支援活動も求められている。

また、被災直後の支援では、医師が避難していたり、市町村が丸ごと流されたりしたことで、 地域の障がい者の情報がないまま、また被災によって新たに障害を抱える人がいる可能性のある中で支援せねばならず、避難先での生活をどう支援するかが問題となったそうだ。避難所では女性用の生理用品が必要のない物資とされてしまったり、弱者とされる人の意見が通りづらく、権利擁護を行う必要があった。仮設住宅では、認知症の老人や障害者の方を排除しようとする傾向のある中で、ペットの入居の是非について話し合われるということもあったそうである。

さらに、市が新しく防災の計画を作成しているというのだが、県から福祉の分野に声がかか らない状態であるということだった。

今回、意見交換会へ参加させて頂き、震災から3年がたとうとしている今でも解決していないことがいかに多いかということを改めて認識することができた。被災地で今も活動しておられるソーシャルワーカーの方のお話は、被災地の今の声であると感じる。これからも活動を通して、被災地で今何が問題となっているのかを知り、そしてその課題はどのようにすれば解決できるのかを自分なりに考えていきたいと思う。

座談会(福島県意見交換会)

(1) ソーシャルワーカーとしての視点

ソーシャルワーカーは何かというと、1 つは、職場内としてのソーシャルワーカーの役割があって、もう一つは、専門職としてのソーシャルワーカーの、あるいは社会福祉士会という幾つかの立場がある。あるいは別のとこでは、職場を離れた中での専門職の団体の1人の活動としてのソーシャルワーカーの活動もあったという、幾つかの構造があると思いました。もう一つ、組織化という視点があって、直接支援ではなくて、その支援を継続するための組織化する活動。支援をするためのことを行い、職場内で支援を進めていくための職場を動かしていくという、そういう活動もあった。そんなところでいうと、重層的なのか、あるいは職場の業務を維持継続していく。

(2)福島県相談支援専門職チーム

組織化ということですと、福島県相談支援専門職チームを立ち上げたという話ですが、この専門職チームというのは、今、地区ごとに、大事な個別支援をどういうふうにしているかというのは、議論ではありました。県の委託事業で、活動を継続しているという形ではある。ただ、発生直後から見ると、人数が変わってきている中で、どれぐらいそれにかかわれるかと、ここで課題がある。いまだに仮設で生活している方がたくさんおられ、あるいは借り上げの方々がおられ、人数をつかむというと、そこは今、課題になっている。障害でいくと、被災障害者支意援センターは、副会長のほうで動き始めて、継続している。

普段、我々のかかわった障害を持たれた方々が、環境が崩れることによって、今まで障害ではなかった方々も障害になるわけです。自分自身も障害に、支援を受ける側になる可能性もあるので、そういう中で環境維持が非常に崩れた。それとともに、日本国が始まって以来だと思うが、町村が丸ごとなくなってしまうというか、移転を強いられてしまうということで、行政機能がまひ状態になる中で、障害を持たれた方々の情報というのはほとんどないままに支援をしなくちゃいけなかった。8 カ町村の機能がほとんど移転して失っているという現状の中で、そこをどう調整するかというので今、我々は調整中です。

(3)原発福島

つい先日、大熊町と中でしたか、実態調査で6割の方々が戻らないという意思表示をされちゃったのですね。戻りたいという人たちが、1割しかいないわけですね。双葉と大熊で、大熊の場合は1割もいってないですね。大熊の場合だと67%の方がもう戻らないと決めています。はっきりしている。というような報道がある中で、その人たちが今、避難している先でどういう生活をする、支援するかという。支援という部分を地元の住民とどうつないでいくかという辺りも、まだまだソーシャルワーカーとして当然、必要なことだと思うし、継続的にはいいかもしれないのかなと思いました。

大熊という福島第一原発があるところ、双葉と大熊というのは同じ。原発からそんなに遠くない地域になりますが。双葉郡の中の大熊町。大熊町と双葉町の調査が出まして、前回調査から比べて、双葉町だと戻らないというのが、倍以上に増えている。30%の方が戻らないと言っ

ているのが、今回の調査でも 24.7%が戻らないという意思表示をしている。まだ判断がつかないという方も 18%ぐらい。この辺が今後、福島にとってすごく大きな問題になるのではと思います。

「帰れます」と言っても、一斉に帰ってくれれば、町として機能も多分、少し取り戻すと思いますけど、少しずつ帰ったとしても、住人が100人では、コンビニも開かないし生活できない。どうするのかなと思って。例えば、何月何日を帰宅日にしようと決めてくれたら、そこから何かスタートできますけど、果たして、最初50人、入ってきました。でも、それじゃあ、そこの人たちって、商店も何もない中でどう暮らすんだみたいな話になりますよね。つまり行政機能も分断していますし、病院とか商店街とかがないと、生活できない。結局また病院は、こっちに避難先でもかかっていますから、わざわざまた病院に通うということになっちゃったら、帰った意味がないという。そういった余計、不安定な生活状況になってしまうのだったら、もう避難先の近くで生活を再建したほうがいいということ。そういったところが今の数字に表れている。

(4) ソーシャルワーカーの活動の特徴

ソーシャルワーカーをやるときに、自分の職場での仕事をどう維持していくかというだけでも、まず手いっぱいなところに、自分自身が被災者だったというようなプライベートな問題があって、その先に今度、相談支援チームみたいな、いわゆる社会活動としてのソーシャルワークのやり方。それは職場を離れた地域貢献ですよね。それと個人の問題と職場の問題と地域に対してというものを、ソーシャルワーカーとかにすごくバランスよくみんな考えるところがありまして。多分、自分の家のことだけとか職場のことだけ、じゃなくて、何でソーシャルワーカーの人たちは、もう一歩、踏み込んで社会貢献までというか、そういったボランティア団体、加入しながら活動していったっていうのは、結構多かったです。そういったところは、私は今回のソーシャルワーカーの活動の特徴的なところだったんじゃないかなというのが1つありました。

(5)避難するということ

震災直後には結構、医療機関でもかなり県外へ避難しているんですね。みんな若い女性なんで、本人もあるし家族が心配して一緒に避難するということで一時期、避難しちゃって、やっぱり職場が気になるんで戻って、1週間とか4~5日で戻ってくるんですが、その人たちもかわいそうなのが、1回、自分が逃げちゃったという精神的なものがあって。理事長からの言葉ということで、戻ってくる人はとがめないで、温かく迎えてあげて、また一緒に頑張りましょうということで迎えてあげなさいということを伝えて戻ってはきました。ただ、その職場内ではやっぱりわだかまりみたいなものが若干、残ってはいたのだろうなと。当時はね。今はもうないかなと思うのですが、そういうちょっとかわいそうなところがね。それがもとでやめてしまったり、あとは小学生ぐらいの子どもさん、親、お母さんで、震災直後、やっぱり水が怖くて大変だった。

自分の娘を避難させようと思った。だけど自分の職場で働く若い女性たちに「残れますか」 と聞かなきゃいけなかった。「残る」と言ったら「ありがとう」と言ったけども、自分の娘は 避難させようとして、預かっている職員たちに残ってほしいと思った。その自分の気持ちが非常に恐ろしかった。だから今も勤めてくれと言えないという思いも抱えているというのを聞いたので、本当に切実なところだと思う。

あるいは、自主避難して、中通り、郡山とか、もっと上の福島とか二本松とか自主避難者が 非常に多い。その方々の二重生活。旦那さんがこちらに残られて、小さい子どもさんと奥さん は新潟だ、山形だといって避難していった。大体いろんな経済的な状況だと、経済状況の変化 で戻ってこられるという中で、その地域住民とのあつれきがあり、家族が崩壊してしまう。旦 那さんのほうは戻っているのだが、奥さんたちはまだ危険だからというので、家庭が崩壊する というのが今、出てき始めている。戻ってきた側も今度、地域の中で「あの人は自主避難した」 という、職場と同じような状態で、その地域の中で孤立するというような、そういう現状が、 これは多分、宮城、岩手にはない現象なのかなと思うのです。これに対して我々ソーシャルワ ーカーはどうするのかといった場合に、私は子どもさんにかかわることも結構多いので、その 中で子どもさんに対してかかわりながら個別にやってはいくのですが、この辺が非常に大変で す。ほんとに専門的にやるところがない部分なのですね。

(6)補償金

いろんな法律が制定されてはいるのですが、狭間というかここに掛からない人たち。そういう人たちは全然お金ももらってなく避難しているので、経済的にも非常に苦しいという現実がまだあるのです。そういう中でやむを得ず避難、戻ってくるという現実。ここら辺も、もう一つの研究テーマではないかなと思うのです。

(7) 縦割行政の壁

市町村単位でやっている、縦割りで、もしくは非常に形式主義といいますか、こういった状況がなければ制度は使えない。そういった福祉制度の、いわゆる法律があるものと、もう一つ、東電からの賠償という、いわゆる損害賠償の問題もある。ほんとに分散して皆さん、家族も、おじいちゃん、おばあちゃんはここにいるけど、息子がこっちにいて、3世代に分かれているところは、住民票がどこにあるのか問題ですね。ばらばらな住民のありかに対して、市町村が把握していないような状況で。障害者の方たちに対する施策というのは、その障害者が今どこにいるのか、どこに避難しているのかということに対して、把握してないんですね。そこは我々ソーシャルワーカーが行くことによって、ここからまたつなげようと思うと、他県に行っちゃうと、制度が使えなくなっちゃうとか、きちんとしたアリバイみたいなものがないと使えないので、すごく支援が混乱している。福島県の避難の仕方も分散して避難している、市町村が分散している。それに対して、すごくやりにくいといいますか、課題が残っている。

行政の責任があいまいになっている。

国の施策が民主党から自民党に代わったということで、民主党が決めたことを全部継がせて 自民党もやっていくという、でも現実問題があるわけで、いろんな施策の中で。

一番大変なのは市町村の職員さんで、苦情とかに対応し切れない。目も配れないというところでは大変。市町村とかの問題ではなく、広域で。

首長選がここのところずっとあって、郡山からすべてですね。郡山、いわき、二本松、全部、

市長、変わります。現役全部。あと富岡。すべて現職はノーなのです。現職のもあれなんだけ ど、それ以上にあまり進んでないということに対して住民感情もそこに行くしかないというと こですかね。

もともとの制度にあわせようと思うと、二重住民票の問題があって、町村の制度って違いますよね。住民票があるのが前提になっていて、その二重住民票の件を、先週、岩田先生は難民問題と一緒だと言いました。住民票を移すと、もともといた町からいなくなったときに、賠償の件だとか、自分には来ないのではないかという不安がある。それに対する不安を、受け入れる側も、じゃあ地域のインフラ、住民票がない人たち、大きな壁なのだろうというふうには思います。

こんなに広範囲で広域に避難する、あるいは長期化するなんて誰も思っていなかった。これは福島の問題じゃなくて日本の問題なのですね。県の社会福祉課としても、住民票がなくても、その地域の住民としてほしい。国が復興予算で住民税、払うぐらい、お互いに税金を払った中でそれができるという風に、提案とか提言をしています。

(8)個人情報

個人情報について、これだけ行政が崩壊している世の中で、それぞれ避難されてきたその人 たちの情報がとれないということは、非常に支援ができないということ。例えば、薬を飲んで いる。その薬を飲んでいるということが分かって、変化があると、でもその薬がないという点 で、ではそれはどこで調べる。完全に個人情報である。レセプト返したかというとこまで進ま ないといけないことになって、個人情報保護法については、淡路地震からずっと中越から大き な災害があるにもかかわらず、この辺は全然進んでいない。薬は全部、避難しちゃった。医者 も避難しちゃった。さてどうしよう。それは DMAT ではわからない。精神科の人たちがどんな 薬なのか。それは DMAT では分からない。医療も分からないと、その 1 カ月半をどう対応する のかといったら、そこの情報をひとつもらえるようなシステム化をしていかないといけない。 極めてプライバシーが高い情報にかかわるというのも福祉の仕事です。ソーシャルワーカー が社会活動する上で個人、個人のいわゆる情報が降ってこないというのが一番ネックなのです。 どうしたらいいですかというふうに、例えば、頑張れば頑張るほど誰も答えてくれないのです。 では、親御さんに「どんな薬を飲んだのですか」と聞いたら、お父さん「粒」って言った。ど うしようもないとなって、一番具体的な、ほんとに必要な支援に対して、やっぱり最初ソーシ ャルワーク的なことをやろう、支援をしていこうと思えば思うほど、閉ざされてしまうところ があるというのは、今回、随分、見えました。ソーシャルワーク活動が阻害され、現場を見て 何が必要かというときに、動こうとしたときに壁になっているものがいっぱい今回、見えた。

(9) 権利擁護

避難所で、ペットを連れてきたいという話になったのです。ペットをどうしよう、というような話し合いをしていたことがあるのですが、そこで一番問題になったのは、認知症のお年寄りが失禁をしたりすることに対して何とかしてくれという苦情が多くて、あとは、例えばパニックになって「わー」と大きな声を出す子どもがいるから何とかしてほしいというような、そっちの苦情があると、いわゆる排除しようとするのです。ところがペットを入れようという話

は真剣なのです。優先順位が、ペットよりも障害者とか認知症のお年寄りのほうが。

避難所では、大きな声の人たちの意見ばかり吸い取られて、ほんとに物言わぬ弱者とか物言えない人たちの、女性の問題とか障害者とか高齢者とかは、抹殺されてしまうことになる。そういった面に対して物を言っていけるような立場というのは私たちソーシャルワーカーが担い手なのかなという話はあります。

(10)市町村防災計画

今ちょうど、次年度に向けて市町村が防災計画を策定しなくちゃいけないのです。にもかか わらず、一切、福祉には声は掛からないという状態。私、今、把握している限り、どこも声は 掛かってないですね。そういう中で、発信しているのだが。我々、発信していないはずはない のに、発信するところが違っているのかなと思って悩むのです。だって地域の防災計画する中 に、要援護者は必ず入ってくるが、その要援護者は誰なのか。今、要援護者台帳の整備をやっ ているのですが、それも手挙げ方式なのです。自分が災害時に避難支援が必要だからといって 手を挙げた方しか要援護者の登録にはならないという。今回のような形になった場合、それは 一部しか登録されていないが、それで結局つくるわけです。というようなことを考えたときに、 このようにしていろんな情報をきちんと整理されて発信するということを、ほかからやってい ただいたほうが、うちの県の人たちは聞くのかなと思います。非常にこういう活動というのは 地道にやっていただきながら、継続的に続けていってほしいなと思うのです。ずっと私自身、 言われたのは、福島県って発信が非常に下手だねって言われてきたのですが、発信するよりは 自分の足でやっちゃったほうが早いよねというのが福島県人の。これは最初に報告があった中 で、自分よりはほかの人のほうのことをしているという発表もありましたけど、ああいうこと で結構、発信する方法は下手な県民性なのですかね。なので、どうしてもそういう行政の施策 の場にうまく組み込めないというところは、これは学生さんを初め学校さんというか先生方に もぜひお願いしたいなと思っているところなのです。

国の災害救助法の中に福祉色をきちんとまず入れ込む。そうすると市町村の災害救助法が災害対策の中にソーシャルワーカー、社会福祉士というのが入ってくるのだろうな。社会福祉士法を変えないといけないというのと一緒だと思うのですけど。その辺あたり、やっぱりターゲットにしてやっていかないといけない。

(11) ソーシャルワーカーとして発信

福島県、特に東北の方々っていうのはそういう傾向、強いと思うのですが、社会福祉の世界っていうのは、アピール下手というか宣伝下手というか。そういう意味では、きちっとソーシャルワーカーとしてできることはたくさんあるのだよ。これができるのだよということを発信していくことが非常に大事なことなのかなという。我々の発信力というのはそれほど強いものではないので。ただ地道にこの活動をしていって、現場で深く静かに活動をしていきながら、というのが1つの方法論かなと僕は言うのです。

(12)体験の記録

「平時と災害直後の違い」ということで、平時から意識してという。もしこういうふうなことが起こったら、どう動けばいいのかという意識といいますか。確かに福島県の場合は大きな災害が起こって今も進行というわけなのですけども、振り返ってみると、過去に阪神大震災があって、中越地震があって、もっと古くは大島の全島。例えば大島の全島避難。あの経験から今も広域避難といいますか、学ぶことがすごくあるのかなと思うのだけれども。

大島の噴火は、かれこれ 20 数年。今さらにして、あのときどう行政とか福祉の専門、昔からどう動いたのかというふうなことを学びたい。もう一度ちょっと調べてみたいなと思っても、なかなか材料がないのです。過去のいろんな災害時の貴重な経験というのが、僕自身でいえば、学び取ってこなかったのかなって、今さらになって過去の資料をいろいろ調べたりします。やはり平時からこういった、大きなところでは阪神大震災ですけれども、よくよくくみ取って、今に生かしていって、1 つの講座とか何かでまとめておく必要があるのかなというふうな感じがするのです。

(13) ネットワーク (平時の備え)

今回のインタビューの中で、ネットワークですとか、実際、何もない中で、ある意味、平時からのワーカー同士のつながりですとか専門職同士のつながりを最大限、生かして、ネットワーク実践されたというのは、インタビューを通じて感じたのですけれども、その辺りの蓄積みたいなこと、平時からのやっぱり蓄積が今回、出されたという。私はすごくインタビューをして感じたのです。

ネットワークなんていう言葉で友人たちは、ネットワークを組もう、組み始めていますので、そういう意味では、地震のためではなくて、ソーシャルワーカーのもともとの仕事の中でつながってきたことが間違いじゃなかったなということは改めて実感したというところで、私は実は何もしていない。全国のネットワークの人に助けてもらった。助けた人たちが福島を見て、これはどうにかしなきゃいけないぞと新たなネットワークを意識して組み始めたというのを感じています。もともとみんな役員さんたちが仲良しだったというか、もともとつながりながら仕事をしていた。

私がよく聞く話では、例えば、一人暮らしの生活をしている人たちの安否確認が、神戸のときはなかなかできなかった。でも山古志というか中越のときには、すごい進んだというのは、どうしてそういう違いがあったのかといったら、介護保険制度だって言ってました。つまり個別的な支援を、要するにすごく介護保険のおかげで要援護者の人数を拾える。それでケアマネが動いた。ヘルパーさんが動いたことによって、すごくうまくできたということもある。

さまざまな地域関連の中での団体とか、そういったものが既にあったからこそ、後でプライベートな関係でも、あうんの呼吸みたいなものがあったので、非常にネットワークというか組織がしやすかったというのはあるでしょう。だから平時の課題というのは、常にきめ細かなネットワークをつくっておかなければ、震災のときに活動できないということなのです。そこを震災だからでなくて、常にそういうのができていることが一番重要。それをおろそかにすると、いざというときには全然、機能しなくなってしまうということです。

社会福祉士会によるプロジェクト評価 岩手県/宮城県/福島県

7-1. 社会福祉士会によるプロジェクト評価(岩手)

「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」に関する 岩手県での意見交換会レポート

岩手県社会福祉士会事務局長 菅原 隆浩

平成25年12月1日(日)、盛岡市内のホテル東日本盛岡、末廣の間にて意見交換会が行われた。当会からは、坂口副会長、前事務局長の佐々木相談役など盛岡ブロックの会員を中心に約30人が参加した。参加者全員が必ずしも沿岸被災地で直接支援してはいないが、このプロジェクトに興味を持ち、災害支援ソーシャルワークに取組希望がある会員が多い。

最初にプロジェクトの概要説明が学生自身により行われた。①災害支援におけるソーシャルワーカーの活動を『記録』し②その活動を『発信』することが、このプロジェクトの目的であることが説明された。具体的な教育プログラムは、1-①被災地の現状と課題などの事前学習、1-②ソーシャルワーカーへのインタビュー、1-③逐語録作成、内容分析、報告書作成である。目的の②については、学内外において広報活動を行うとしている。今後の展開については、要支援者への直接支援、ソーシャルワーカーへの後方支援、次代の人材育成などが考えられていることが説明された。

次に、インタビューを行った学生が「現地プロジェクトから学んだこと」として報告を行った。『福祉は生命を守る仕事である』『社会資源を利用するだけでなく創出すること』などの内容から、ソーシャルワーカーの仕事について再認識し将来に向けて意思をより強固にしたことが述べられた。二人目の学生は「語り部プロジェクトから学んだこと」として報告を行った。高校生や一般向けに活動を紹介したが、認知度についての課題や、災害支援ソーシャルワークの役割など今後の活動について気付きがあったこと。『助かりました』という声を『何もできなかった』と感じているソーシャルワーカーに伝えることができることなどが述べられた。

さらに、このプロジェクトに参加した学生と教員から、効果に関するアンケート結果についての説明が行われた。学生自身の自己評価でも、教員からの評価でも概ね学生のスキルは向上し、メンタル面でも成長が見られるとの高評価であった。一方、このプロジェクト自体の継続性についての課題も挙げられた。参加する学生や教員という「ヒト」の問題。交通費や宿泊費、印刷経費など「カネ」の問題。個人的には、震災から時間が過ぎ、風化していく「トキ」の問題も加えておく。

ここで、参加した会員と質疑応答があった。事前学習の必要性について、予断を与えるので、 重要視しなくても良いのではという意見が出された。

加えて、当会の地域活動委員会の山内二三男会員と、関西福祉科学大学の遠藤洋二先生をシンポジストに、シンポジウム「災害支援における SW の機能と役割」を行った。山内氏は、岩手県災害派遣福祉チームの創設の経緯や活動予定内容について説明を行った。同時に、チームの資機材(個人用リュック、防寒着、ユニフォーム、寝袋、ヘルメット等)の実物展示が行われ、チーム活動の具体像がわかりやすく説明をされた。遠藤氏は、阪神淡路大震災の経験から災害直後のソーシャルワーク支援の必要性を述べた。今後の展開と課題として、①災害支援ソ

ーシャルワークの体系化、②方法論(カリキュラム・マニュアル)の構築を挙げた。

最後の質疑応答・感想では、このプログラムへの謝辞が述べられると共に、継続性や伝播性 について強い期待が寄せられた。ソーシャルワーカーとしての自分の立ち位置・活動への刺激 にもなり、活動領域を拡張、後進の育成などより専門職としてのミッションを再認識すること ができた。などの声が寄せられた。

7-2. 社会福祉士会によるプロジェクト評価(宮城)

宮城県社会福祉士会によるプロジェクト評価

宮城県社会福祉士会 事務局長 高橋 達男

1. "声" プロジェクトの受け入れ経緯

当会は発災直後、茫然自失状態に浸る間もなく、自前の災害対策本部を設置して、被災地の地域包括支援センターの社会福祉士を対象として、他の社会福祉士がその業務を支援する方式を決定し、当会会員の動員と日本社会福祉士会会員の派遣受け入れ体制を急遽整備した。

その後は、遠地からの御用聞きへの対応に翻弄される日々が続き、ニーズ不明のところへも 押し突けられるお節介的な申し入れは、重ねて襲う津波そのものであった。中でも福祉系大学 の学生グループと被災地支援ボランティア活動の結び着けやその仲介には、相当に難儀した。

そんな最中、またかと思いつつ、勢いに気負されて会談に着いたのが、関西福祉科学大学の遠藤洋二先生であり、先生の持参したプロジェクト企画は、他とは真逆に、被災民への支援に非ず、被災地でのSWそのものに焦点を当てたもので、その意外性と斬新さは、当方の警戒感を見事に打ち消して、驚嘆をもって参画を快諾するに余りあったのである。

2. 受け入れ取組みの目的設定と実施経過

持参されたプロジェクト企画の趣旨は、かつての大災害時の SW の記録は断片的にしか残っておらず、災害時の SW 実践が弱く薄い存在に見られているが、さに非ず、二次災害防止とも言える生活再建場面での「まるごと支援」の中に SW の強い存在を垣間見た事実もあった。今般こそ埋もれている SW の掘り起こし作業に挑まなければならない、というものであった。

そしてプロジェクトの目的としては、派遣された学生が、被災地の SW から支援内容や課題等を聴き取ることで、①災害支援の中に SW が存在することを検証し、SW の行動を顕彰すること、②その検証と顕彰の記録を残し、社会に伝播し、次の災害時対応への活用に資する、との内容であった。これを受けての当会災害対策本部の対応は、①②の目的に賛同協力することは当然のこととし、加えて、これから社会福祉士を目指す後輩学生に対して、先輩社会福祉士の生の姿と動きを露す絶好機と把え、恥ずかしさを抑えて、③現場実習指導の一環としてフィールドを提供し、学生が自らの SW 像を描くことに資すること、を決定したのである。

訪問インタビューの実施に向けて、被支援社会福祉士と支援社会福祉士の両者から被聴取者を選任し、平成 24 年 3 月の第 1 次派遣対応に 8 人、同年 9 月の第 2 次に 4 人、平成 25 年 3 月の第 3 次に 6 人、計 18 人の SW が聴取に応じスケジュールをこなした。終わった直後の SW が口々に皆「どう受けとめられたか、役に立てたか不安だ」と本部に報告を寄せたものだった。

3. 学生の評価と当会の評価

宮城での意見交換会や東京でのシンポでの学生発表などで、学生の話を聞いたが、率直に感動した。「傾聴・受容・共感等の専門技術を活かして、無意識のうちに静かに SW が実践されていた」「アウトリーチでの関係づくりやネットづくりなど、つなぐことが支援になっていた」「全体の調整(コーディネイト)を目指していた」と点と線と面の SW を抽出し、また、災害時非常時だからこそ「平時の取組み」「日頃の連携」「日々のつながり」の大切さが見えてきたと観

察し、貴重な体験を通して成長した自己を認めつつ、絶大な評価を下したのである。

当会の面々は、茫然とした無為の中に SW の実践を抽出してもらったこと、非常時には平時の力が活きると指摘してもらったことは、最強のエンパワメントの享受でもあり、「SW という職業に魅力を感じた」「被災地の SW の姿――かっこいいと思った、私もなりたい、なってみせる」は学生から SW への、実習生から指導者への、後輩から先輩への最高の「お返し」であった。

7-2. 社会福祉士会によるプロジェクト評価(福島)

「ソーシャルワーカーの声プロジェクト」について

福島県社会福祉士会 会長 島野 光正

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所(以下『原発』)の事故により福島県沿岸部 及び直接津波による被害がない地域まで避難を強いられているのが福島県の現状である。さら に原発の被害は様々な問題を生み出している。この問題が福島県における災害と宮城県、岩手 県とはまた違った問題を引き起こしている。

私たち福島県社会福祉士会は未だかつてソーシャルワーカーが経験のしたことのないような災害に直面した。その活動の大半は被災地への支援ではなく、被災地から避難している、あるいは原発事故により避難せざるを得なくなった方々の遠隔地での支援であった。また原発事故は被災者、支援者という関係さえも曖昧にしている。福島県全体が被害者だという弁護士の意見もある。当会会員の中にも原発による避難を強いられている相双地域の会員がいる。今回は「ソーシャルワーカーの声プロジェクト」により県内の社会福祉士会会員の発災時からのソーシャルワーカーの活動につて丁寧にインタビューを行い、学生からの視点でまとめられた。その報告会に参加し、気がついた点を何点か述べる。

はじめに学生からの報告にもあるが、ソーシャルワーカーの支援とは様々な形があるということである。それは被災の状況や被災者の置かれている環境、ソーシャルワーカーが置かれている立場等々による違いからくるともみられると考えられる。ここから人を支援する方法や支援の内容には臨機応変な、まさに「地域に即した創意と工夫」により支援を行ったと考えられる。狭義のソーシャルワークはなく、今日的な「地域を基盤としたソーシャルワーク」が展開されていたのではないだろうか。

次に学生の報告でソーシャルワーカーは「道具をつかう」という点でまとめられていたが、人と環境の接点に介入するソーシャルワーカーの姿は、「人や環境に働きかける」ことや「環境面からのアプローチ」が人の生活にかかわる視点として大変重要であるということである。ここでいう「道具」とは環境からのアプローチで、様々な社会資源のこと、生活支援のための一つの手段であるではないだろうか。

もう一点あまりふれられていない点があった。それは被災者や避難者の直接支援ということではなく、支援のための組織化、ネットワーク化の視点である。ソーシャルワーカーが避難者の直接支援を行ったが、その一方で避難者支援の仕組みをつくるための地域の専門職の「組織化」を行った点である。後方支援的な意味合いもあったと思うが、継続した支援を行っていくためのネットワーク化や連携を図る活動を行った。またそれぞれの会員が所属する機関の機能を被災者支援に活用するなど施設機能の社会化ということも行ったのではないだろうか。

最後に様々な支援の一方で共通することは私たちの共有している「価値や倫理」だと感じられた。人権と社会正義を拠り所とするソーシャルワーカーはどこにいても共通の価値を持っていると報告から感じられた。しかし、その一方でジレンマも常に感じている。これだけ大きな災害と多くの被災者に対してソーシャルワーカーは何が出来たのだろうかということである。

ソーシャルワーカーの必要性と無力感の間で私たちは苦悩していた。その私たちを支えたのも 仲間のソーシャルワーカーや関係者、避難者の方々であった。学生の発表を聞きながら私たち の思いや声が次に繋がっていくこと、他の地域の方々に伝わっていくこと、それもまた私たち 被災地のソーシャルワーカーの支えになることを強く感じた次第である。

7. 社会福祉士会によるプロジェクト評価

外部評価委員による報告

8-1. 外部評価委員による報告

福祉系大学経営者協議会「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」評価報告

外部評価委員長 上野谷加代子(同志社大学教授)

本プロジェクトの評価は、困難である。というのも、災害支援とは何か、復興とは何か、に関する議論の集大成がまだなされていないなかで、また日本においては災害ソーシャルワークへの研究、実践の蓄積がいまだ少ないなかでの、先駆的・開拓的プロジェクトの評価であるからである。それゆえに、本プロジェクトの評価そのものが、プロジェクトの一環のようにも考えられる。

とはいうものの、外部評価委員でもある責務を果たさねばならない。評価は、本来、評価対象、評価の時期・プロセス、インプットからアウトプット、アウトカムまで視点を設定し丁寧に事業を概観しなければならないだろう。今回の場合は1年間の事業から評価できることのみ報告する。委員として、平成25年(2013年)9月、北海道(北星学院大学)、同年12月、宮城県(仙台)での報告会、あるいは報告書、本プロジェクト関係教職員との懇談などを通して得たデータおよびヒアリングから評価を実施した。

評価結果を4つの観点から述べる.

- 1. 支援の意義の明確化
- 2. 教育効果 (方法を含む)
- 3. 社会福祉領域、ソーシャルワーク分野への影響
- 4. 社会(地域)の人びとへの貢献

1. 支援の意義

復興支援を経営者協議会として、教員とともに、職員とともに、学生とともに、組織的に行うということの意義は大きい。誰が誰を支援するのか、ということを考えた場合、本プロジェクトは、双方が支援され支援するというまさに社会福祉的支援そのものである。現地のソーシャルワーカーが「学生に語る」ということ、学生にだから語れること、伝えたいこと、学んでほしいこと、後輩に託したいこと、などを全身全霊で思い出し、興し、伝え、省察・整理していくというプロセスをこの事業がもたらした効果は「支援」の域を出ているとも思われる。よって、復興支援の一つの形態として意義あるものであるといえよう。

2. 教育効果 (方法を含む)

学生たちが座学で学び、情報収集したうえで、現地踏査し、現地のソーシャルワーカーの 声を聴き、集め、討議し、分類まとめていくいわゆる質的調査が、研究論文執筆のために なされていないという効果が、教育的にみて優れていると思われる。ありのまま、すべて を受け止めることが、聞き取りという手法の中に、スーパービジョンとしては素人である 学生によっておこなわれた。 そのことによって、ソーシャルワーカーが、自分たちの持つ力を再生させ、まさにストレングスモデルにおけるソーシャルワークの展開過程がみられる。意図していなかった手法としての効果がみられたことは、今後のソーシャルワーク教育方法の確立への示唆を含んでいるといえよう。

また、学生たちも成長がみられた。報告の姿勢、報告内容、方法においても、会を増すご とに気づきや内省の深まりなど成熟している様子がみられた。ふりかえりを教育的に実施 している教員の功労がみられる。これがボランティアで現地支援に参加した学生との違い であろう。

3. 社会福祉領域、ソーシャルワーク分野への影響

さらに本プロジェクトのおもしろさは、社会福祉士会や社会福祉士養成校などを巻き込んで実施しているところに、今後の発展の兆しがみられる。とりわけ、被災、被害が甚大であった岩手県、宮城県、福島県の社会福祉士会との連携・協力のもと実施をしていることは、今後の災害復興・支援の方策やソーシャルワーク教育の在り方への生きた助言をいただけるとおもわれる。福祉系学会の災害復興・支援に関して様々な研究がなされ、シンポジウムなどが実施されているが、現地のソーシャルワーカーたちの生の声が活かされにくいということもある。そのような意味からも今後、積極的に社会福祉法人施設や研究機関・団体との交流、そして何よりも災害ソーシャルワーカー養成への示唆を提言する材料を得つつあるといえよう。

4. 社会(地域)の人びとへ何をもたらすか

資金を投入して研究や実践をした場合、最終的には社会へ何を還元できるかであろう。本プロジェクトの場合、参加した学生は毎年卒業していく。プロジェクトに参加したことによって大学院に進学を決意した者もいれば、社会福祉施設や社会福祉協議会でソーシャルワーカーとして夢を抱いて就職していく者もいる。その際、学生たちは、被災地のソーシャルワーカーの働きに触発され、単なる感動や感激を超え、悲壮なまでに必死で、しかし楽しく勉学にいそしみ、またフィールドワークに参加をしていくバイタリティーを得たと思われる。このような学生を全国に送り出す可能性をもった本プロジェクトは、資金投入および人的支援の価値と効果を十分生かしきったと評価できる。

課題

ただし、本プロジェクトにかかわる教職員の体力、気力が気になるところである。 教員個人の研究・教育や現在の福祉系大学の業務量の多さから、一部の教員への負担になっていないか、全体で配慮すべきであろう。継続していくための必須条件である。 また、加盟大学はもとより社養協、学校連盟等の理解、応援の必要性は言うまでもない。

8-2. 外部評価委員による報告

福祉系大学経営者協議会「東日本大震災復興支援プロジェクト」 評価報告書

外部評価委員 池埜 聡(関西学院大学人間福祉学部)

1. はじめに

本報告書は、福祉系大学経営者協議会復興支援委員会・東日本大震災復興支援プロジェクト評価委員の立場から、2013 年度活動の評価結果を示す。評価は、1)関係資料(事業計画案、実施用資料、成果報告資料など)、2)第4次派遣(福島県いわき市:8月22日~24日)への参加、3)福島県社会福祉士会との意見交換会への参加(2013年12月8日)、そして4)名古屋地区シンポジウムへの参加(2014年2月17日)といった情報源に基づく。以下、実施目的と理念、実施方法、結果の公表、そして今後の課題から評価をまとめる。

2. 実施目的と理念

災害時のソーシャルワーカーの役割と機能は、1995年1月発災の阪神淡路大震災後も精査されず、課題となった。被災3県の社会福祉士会の協力を得て、被災直後からのソーシャルワーカーの思い、動き、そして果たした役割を記録に残すプロジェクトは他に例を見ない。

本プロジェクトの特徴は、学生と教職員が協働体制をとり、学生の視点を織り交ぜた「学生によるインタビューの実施と結果の集約」にある。学生への教育ではなく、「被災地ソーシャルワーカーの経験の紡ぎ出しと社会への発信」という実施目的は、活動全般を通じて一貫していた。本プロジェクト参加は学生にとって卒業単位とはならない。被災者中心の理念によって被災地社会福祉士会との協働が可能になった点、推進者の目的・理念設定における英断が光る。

3. 実施方法

本プロジェクトは、実施前の準備段階(事前学習、インタビューガイド作成、インタビュー 予備練習)、半構造インタビューの実施、被災地訪問・見学の実施、逐語録の内容分析と結果 の抽出、結果の公表(被災地の社会福祉士会、シンポジウム、語り部としての活動)などフィ ールドワーク調査手順を網羅しており、プロジェクトとしての完成度は高い。

インタビュー及びデータ管理に関する倫理的配慮は、同意書のやりとり、任意参加や守秘義務などの説明等、担保されていた。当初、学生の限られたスキルによってインタビューの質が心配された。しかし、学習、練習(ロールプレイや阪神淡路大震災被災地ソーシャルワーカーとのインタビュー経験など)、そして教職員との連携によって経験不足は克服されていた。受け手のソーシャルワーカーは、若き学生たちの真摯な態度と準備されたインタビュープロセスゆえに、圧迫を感じず、リラックスした雰囲気の中、「教えてあげたい」という思いも加味されて、懸命に経験を紐解こうとしていた。

その他、インタビュー直後の学生と教職員によるブリーフィングの実施、被災地見学による イメージを備えてのインタビュー実施、学生の心理的負担に対する教職員のサポート(支持的 かかわり)などデータの質担保に向けた重層的な配慮がなされていた点は高く評価できる。

4. 結果の公表

インタビュー・データの集約から既に重要な示唆が抽出され、現場で生かされようとしている。内容分析から得られた被災に対するソーシャルワーカーの4つの特質、1) 初期的なアセスメントと気づき、2) 介入時に道具を使う、3) アウトリーチによってニーズを見つける、そして 4) 支援、資源とつなぐ、は岩手県社会福祉士会が中心となって考案中の DWAT 活動指針に盛り込まれようとしている。プロジェクトが被災後ソーシャルワークの実践モデル構築に貢献する可能性を示唆している。

結果の公表に関しては、協力者である被災地社会福祉会との意見交換会の実施(岩手、福島、宮城各1回)、専門家及び一般社会へのシンポジウム(東京、名古屋各1回)、そして学生の語り部として大学、高校、地域社会等に発信されている。意見交換会では、学生の結果報告に対する現場ワーカーのフィードバックが忌憚なく行われ、インタビュー結果の解釈のあり方や複眼的な視点による深い分析の可能性が示された。何よりも自身の援助経験が第三者によって外在化され、客観的な視点から評価されることでエンパワーされたという社会福祉士会側からの感謝の意は、学生及び教職員を勇気づける結果につながっていた。

フィールドワーク研究において、結果のフィールドへの貢献が可視化されることは少ない。 本プロジェクトの真髄は「結果を被災地のために」という理念の実現にある。当事者主体のソ ーシャルワーク理念を反映させた複合的な結果の公表への取り組みは高く評価される。

5. 今後の課題

以下、評価委員の立場から本プロジェクトに対する今後の課題についてまとめたい。

①災害ソーシャルワークの構築を目指すのか:「被災地ソーシャルワーカーの経験の紡ぎだし」と「語り部による発信」に加えて、「災害ソーシャルワークの構築」という目的も学生の報告から見え隠れする。被災地ソーシャルワーカーの経験から実践モデルを帰納的に構築することを本プロジェクトの目的に据えるかどうか。整理が必要であろう。サンプリングの問題に加え、現場ワーカーの経験から災害ソーシャルワークを語るリスク、すなわち被災者自身の痛みが間接的な情報として位置づけられてしまう点を憂慮する。災害ソーシャルワーク構築と本プロジェクトの整合性を再考し、デザインの明確化が求められる。

②被災者としての援助者の視点:被災地ソーシャルワーカーのほとんどは、被災者でもある。被災者であるゆえの苦悩、ジレンマ、アイデンティティの揺れなどは少なからずインタビューに盛り込まれていた。しかし、学生による結果報告には十分に反映されていない。分析段階で、被災者としての援助者を理解する枠組みが曖昧であったことに加え、既存のソーシャルワーク実践方法と比較することに重きが置かれてしまい、「方法論の抽出」というバイアスが分析過程に反映されたのではないかと推測する。ソーシャルワーカーの"声"であって"動き"だけではない。今後、自分の被災体験と折り合いをつけ、長期にわたって被災者やクライエントとかかわり続けていく生身の"声"の紡ぎだしを期待したい。

③学生のフォローアップとつながり: プロジェクトに参加した学生の長期的なフォローアップとつながりの保持を計画案に盛り込むことを期待したい。本プロジェクトの経験が学生の歩む道にいかに影響したのか、時間経過とともに学生はプロジェクト経験をいかに振り返り人生に生かしているのか。学生の変化や成長は、被災地ソーシャルワーカーにとって励みとなりエ

ンパワーされる機会になるだろう。

卒業生レポート

9-1. 卒業生レポート

ソーシャルワーカーの声プロジェクトに参加して

文京学院大学 人間学部 卒業生 松本歩未

私は本プロジェクトの第1派遣、第2次派遣で宮城県へ行きました。

テレビの報道ではなく、実際に自分の目で見た被災地は、震災から1年が経ったその時点でも その地域で暮らしていた人たちがいたことを生々しく感じさせました。第2次派遣では生々し さとはまた違った喪失感を感じたのを覚えています。

そんな中、実際に現地の方々や活躍されたソーシャルワーカーの方の声を聞きました。どの 方も不安や葛藤を抱きながら精一杯戦ったことを語ってくださいました。「ソーシャルワーカ ーとして自分に何ができたのか」「自分は何もできなかった」そんな思いを抱えながら語って くれたソーシャルワーカーの方々のお話はソーシャルワークそのものでした。

それまで、大学の授業でソーシャルワークの理論などをたくさん学んできましたが、改めて「ソーシャルワークとは何か」を考えたことはありませんでした。プロジェクトに参加し、ソーシャルワーカーの声を聞いたことで、捉える事の難しいソーシャルワークの印象が少しだけ自分の中に浮かんだように思います。

また、現地から戻り、見聞きしてきたことをまとめる中で、伝えることへの使命感も強く感じるようになりました。そして仲間と試行錯誤しながら発信する作業も行いました。一度現地を訪れて終わるのではなく、発信し、つないでいくことの重要性を感じました。

社会人となった今、振り返ると、このプロジェクトに参加できたことは私の中で非常に大きなステップの1つであったと感じます。現在、私は相談員として介護施設に勤務しています。働く中で、ソーシャルワーカーとしての視点やソーシャルワークとは何かということを考えます。しかし、プロジェクトに参加したことで「捉える事ができた」と感じたはずのソーシャルワークが、わからなくなることが多々あります。そんな時、ふとこのプロジェクトに参加したことやそこで聞いたソーシャルワーカーの方のことを思い出します。

先日このプロジェクトに参加した仲間と集まり意見を交わす場に参加しました。様々な意見を聞く中で、改めてプロジェクトに参加した経験を振り返ることができ、また自分の仕事についても少し立ち止まって考えることができました。

そして、このプロジェクトで自分や仲間たちが行ってきたことは、ソーシャルワークそのものだったのではないかと感じました。

現場に赴き、状況や人の思いを知ること。相手の言葉を理解し、その意味を汲み取ること。仲間と情報を共有し、話し合い、考えること。自分の見聞きしたことをどのように咀嚼して発信するか。伝える対象を捉え、適切に発信すること。自分たちの活動の意味を考えること。こういった一連の全てのことがソーシャルワークの大切な技術のひとつひとつだと感じます。このプロジェクトに参加し、様々な活動をさせていただけたことは今の私の自信にも繋がっています。

震災から3年が経ち、必要とされる支援も少しずつ変化していると思います。今後もますま

すソーシャルワークの必要性が高まる中で、何らかの形でこのプロジェクトに携わっていけた らと思います。そして今回の経験を活かし、私自身もさらに成長していきたいと思います。

9-2. 卒業生レポート

ソーシャルワーカーの声プロジェクトに参加して

文京学院大学 人間学部 卒業生 望月麻結

大学3年生の3月にはじめてこのプロジェクトに参加してもうすぐ2年が経過します。私は第一次、第二次派遣と2回宮城県に足を運びました。当時、プロジェクトに参加する前は不安と緊張感でいっぱいで「私たちになにができるのか」という気持ちしかありませんでしたが、二年経過した今は本当に良い経験をしたと思っています。プロのソーシャルワーカーに直接話を聞くことで、素直にソーシャルワーカーの仕事に憧れを抱きました。その反面、ソーシャルワーカーの仕事の奥深さに気付き、専門性について意識するきっかけとなりました。そして現在、福祉の現場で働いていますがこのプロジェクトで経験したひとつひとつ出来事が日々の業務に繋がっていると思います。

プロジェクトの最終日に、私たちにできることは「伝えていくこと」だと言われました。その日から言葉で伝えることの難しさについて日々考えています。特に、卒業して社会に出てからは、良くも悪くも伝える手段が言葉しかないことに悩まされ、相手にどう伝えようかを常に考えているような気がしています。そういうときに思い出すのが、このプロジェクトでの経験です。「伝える」ということは、授業だけでは学びきれないことだと思います。学びきれない反面、ソーシャルワーカーとして働くには重要な要素のひとつだと感じます。ですから、授業では学びきれない「伝えることの難しさ」に気付く大きな機会となり、それは今後も意識していかなければならないと思っています。

また、インタビューを通じてソーシャルワーカーの方々は皆「平時の大切さ」を口にしていました。その言葉が大変印象的で今でも心に残っています。それと同時に、現在は一職員として「平時を意識すること」を大切にしていきたいと思っています。そして、このことを職場で共有するために伝えていくことも私たちにできることだと思うので、ここでも伝えるということを意識していきたいと思っています。

このプロジェクトでは被災地に触れることで震災について学ぶことができたのと同時に、ソーシャルワーカーについての様々なことを考えるきっかけとなった経験だと感じています。ソーシャルワーカーの卵としてプロジェクトに参加し、現在はソーシャルワーカーのヒョコとして一歩踏み出すことができました。これからは、ソーシャルワーカーの「プロ」となれるよう経験したことを活かして様々なことを言葉で伝えていきたいです。

9-3. 卒業生レポート

震災プロジェクトを通じて…

関西福祉科学大学 社会福祉学部 卒業生 畑中 美里

震災プロジェクト(以下、本プロジェクトとする)第1次メンバーに入ったきっかけは、とても些細なものだった。阪神淡路大震災を大阪で2歳のとき経験したが、当時の記憶はなく、震災とはほぼ無関係な状態で約20年間を生きてきた。そこに3.11東日本大震災が起き、テレビで津波の映像を見ていたときには"うわぁ…大変やな…。津波のニュースばっかりやん"と正直他人事のように思っていた。時間の経過と共に私の気持ちは"ボランティアに行ってみたいな""物資はどんなものを送ればいいんかな"と、徐々に被災地への関心が出てきた。そして、大学で本プロジェクトについて教員から説明があり話を聞いた際、"この機会に被災地へ行ってみたい"と単純に思ったことがきっかけであった。今思い返すと、このときの私にとって本プロジェクトは被災地に行くことへの単なるきっかけであった思う。

そして、東北の地理的な把握やインタビューの方法と実践などを行った事前学習を終え、遂に宮城県入りのときがきた。被災している地域を実際に見て、テレビでは味わえない生々しさを感じた。匂いはなかったが、人が作った家やモノが自然の力で一瞬にして壊れてしまうことが、信じられなくて言葉にできなかった。ガレキの中で見つけたものは、そこに住んでいた1人ひとりのかけがえのない生活そのもののように感じた。

またインタビューでは、私たち学生の不慣れな進行とぎこちない雰囲気だったが、インタビューに答えてくださったソーシャルワーカーは質問に対し、丁寧に一つ一つ答えてくださった。そのインタビューの中でも「発災直後は避難所の設置などに明け暮れ、記憶がなく一生分の相談を受けた気がした」と言っていたことが、私にとって当時のソーシャルワーカーの様子や心労を感じられ、とても印象的だった。

更にインタビューでは複数の方々が、社会福祉士会の活動は、現地のワーカーにとってとて も心強いものだったと言っていた。それを聞いた私は、社会福祉士の資格に合格したときには、 必ず社会福祉士会に入会し、社会福祉士としてのネットワークを作り活動しようと決めた。

また、宮城県に入って 2、3 日目の夜、地震が起きた。私には震度 4 ぐらいに感じたが、実際は震度 2 程度であった。被災地での地震はとても怖く感じた。被災地の方にとっての地震は、私よりももっと怖いのだろうと思い、被災地で感じる地震の怖さを痛感できる貴重な経験ともなった。

宮城県から帰ってきてからは、語り部活動を行った。この活動においても学生主体が前提であったが、帰ってきた時点ではピンときていなく、ソーシャルワーカーの声をどのように発信すればよいのかわからなかった。

そうしているうちに、本プロジェクトの第2次派遣メンバーの1人から、「中之島祭り」というお祭りの中で東北のブースがあり、そこにパネル展示で出展してみてはどうかという提案があった。ミーティングの結果、これを実行することに決まった。

しかし、メンバー全員にとって語り部は未経験であり、どのようにして聴き取ってきた声を

発信しようかと手探りな状態であった。発信するために必要なインタビューの分析を進め、そこに私たちの気付きを中心にメンバーと話し合った。このような事後学習を深める中で、それぞれ印象に残っていることが大きく違うこと、共通して印象深かく記憶に残っていることがあり、改めてソーシャルワーカーの声を発信していくことの大切さを確認できた。

このように語り部活動のための下準備を進め、語り部を実際にしていくなかで、福祉のことを知らない人々にとって"ソーシャルワーカー"という言葉を聞いたことがない場合や、聞いたことはあるけど、何なのかわからないなどとソーシャルワーカーについて知っている人が少ないことへの課題意識が芽生えた。更には、ソーシャルワーカーと被災地のソーシャルワーカーの当時の活動について周知活動をしないといけないという使命感が湧き出てきた。

しかし、その使命感とは裏腹に、学びを深めていく程、どのような機会に、どのような伝え 方で発信すればよいのかなどの課題が出てきたのだった。その都度、メンバーで課題の共有を 行い、課題解決に励んだ。

そして、いよいよ私自身も就職先が決まり、ソーシャルワーカーとして働くことができる環境が近づいて来るにつれ、インタビューを行った直後より一層、自分が思う理想のソーシャルワーカー像を考えるようになった。インタビューを引き受けてくださったワーカーの方々を何度となく思い返し、卒業式を迎え社会人になった。

現在、日々の業務の中で、語り部活動で感じていた困難さを感じている。その困難さとは、ある一つのことに対して、自分の想いを他者へ発信することについて難しさである。私自身では、ソーシャルワーカーの必要性を感じていながらも、伝えたい他者にはその必要性というものは必要になったときに初めてわかるようなものなのである。しかし、必要になったときに伝えていくのではなく、日常的な発信をしていくことで少しずつ理解されていくものであると少しずつ実感するようになった。

また、就職するにあたり生まれ育った大阪から 20 年前の被災地であった神戸に生活の拠点を変え、そこでソーシャルワーカーとして勤務出来ていることに不思議な縁を感じる。特にインタビューでの学びとして、突然訪れた震災で窮地に追いやられてしまったソーシャルワーカーの体験を聴くことができたことにより、今の職場で震災が発生したらどのようになるのかを想定しながら勤務することができている。まだはっきりとした答えは見えていないが、まずはその地域の特性を知り、日頃から地域での横の繋がりやネットワークをしっかりともつことが大切であると思う。しかし言葉では簡単に横の繋がりなどと言えるものの、実際働いてみて横の繋がりができているのか、実感できることはまだ少ない。ただ今は、地域の中でのたくさんの方と出会い、その後のコンタクトを大切にしていきたいと思っている。

そしてこれからも学生の頃思い描いていた理想のソーシャルワーカー像に近づけるよう、と きには修正をしながら今後とも頑張っていきたい。

1 0

ソーシャルワーカーの "声" プロジェクト 第 4 次派遣 報告集

10. ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト 第4次派遣 報告集

1. 目 的

大規模災害時、ソーシャルワーカーが「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、災害支援活動に従事したシャルワーカーから学生が聴き取り、ソーシャルワーカーの"想い"も含めて記録として残すことを主な目的とする。

2. 概 要

学生4名(程度)と教員1名がチームを編成し、1週間程度被災地に入り、その現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。

また、フィールドワーク実施後、その成果を報告書・インタビュー記事にまとめる。

3. 期 間

事前学習 : 平成 25 年 8 月 下旬

フィールドワーク : 平成25年8月20日(火)~8月24日(土)

4. 参加校(参加チーム)

淑徳大学、関西福祉科学大学、文京学院大学

5. プログラム

- (1) 事前学習(各校が独自に実施)
- (2) フィールドワーク

①拠点(宿泊場所)

ホテルバーデン

〒963-0112

福島県郡山市安積町成田字島ノ前 2-3

TEL / 024-947-7777 FAX / 024-947-7007

HP : http://www.hotel-baden.com/

②スケジュール【福島県】

日	程	内 容	実施単位
8月20日 (火)	左纵	現地集合(宿舎)	各チーム
	午後	オリエンテーション:関西福祉科学大学 遠藤 洋二	合同
		夕食、休憩等	合同
	夜間	講義:福島県社会福祉士会会長 島野 光正 氏 「福島県社会福祉士会の取り組み」	各チーム
		交流会	合同
	宿泊	ホテルバーデン	
	朝	朝食等	各チーム
	午前・午後	激甚被災地訪問	合同
	夕方~夜間	宿舎 帰着	
8月21日		夕食、休憩等	各チーム
(水)	夜間	ミーティング	
	1义[印]	・グループ討議	合同
		・インタビュー方法の確認	
	宿泊	ホテルバーデン	
	朝	朝食等	
	午前・午後	被害状況視察・インタビュー	カイ.)
	夕方~夜間	宿舎 帰着	各チーム
8月22日		夕食、休憩等	
(木)	夜間	ミーティング	AE
		反省会	合同
	宿泊	ホテルバーデン	
	朝	朝食等	
	午前・午後	被害状況視察・インタビュー	各チーム
8月23日		宿舎 帰着	
(金)	2 23 (XIR)	夕食、休憩等	
(32)	** BB	ミーティング	∧ ⊟
	夜間	反省会	合同
	宿泊	ホテルバーデン	
8月24日 (土)	午前	朝食等	各チーム
		合同ミーティング	
	午前	・グループ討議	
		・フィールドワーク総括	合同
		・事後作業の確認	
	正午	解散	

作成者	関西福祉科学大学 齊藤由季
分類	座学
プログラム名	事前学習
日時・場所	7月10、24日 関西福祉科学大学

まず7月10日は、関西福祉科学大学1回生による活動報告を聞いた。そこでは、高校時代にボランティアとして岩手県大槌町に行った時の写真を紹介しながら、その時の様子が説明された。写真は町の風景が映されていたが、海岸部は地震に加え津波の被害による被害が非常に大きい。そして家屋や生活用品、子ども達が使用しているぬいぐるみ等が瓦礫として山積みにされていたり、墓地では墓石が倒れているところもあった。震災に遭ってから子ども達の笑顔が消えていたが、ボランティアの人と遊んでいる時、子ども達の笑顔が蘇ったという話を聞いて、災害の恐ろしさ、被害の大きさを感じた。



現地の方々は笑顔で前向きに災害当時の話をしていたということだった。特に関心を持った話は、復興のために使われる支援金である。支援金は本来町の再建のために使われる。しかし瓦礫の撤去というようにそこで働いている人達にお金を払っていたため支援金が本来の用途として使われていないという事実があった。1回生の報告の後、私達は福島

県内の地理を学んだ。震災で大きな被害を受けたいわき市や原発がある大熊町、その住民の避難先になった会津若松市等の地理の位置関係を学んだ。

24日は、インタビューの仕方を学んだ。インタビューをする時には、まず何をするかについて各自の考えを発表し、その内容に順番をつけた。その後、IC レコーダーを机の上に出すタイミングやインタビュー中のメモは最小限に留めること、話を聞く時はアイコンタクトをとり、相槌をうつというようなインタビューの心構えを学んだ。そしてインタビューガイドを元にインタビューを始めた。インタビューの相手は4回生が担い、「語り部」で説明している内容を語ってもらった。いきなりインタビューガイド通りに災害当時の話を聞くと唐突すぎるため、冒頭では普段の業務や職歴、持っている資格の話をするようにとアドバイスを頂いたり、インタビューは質問に行き詰まらないように、司会者だけでなく全員で質問をし合うことが大切であるというアドバイスを頂いた。

私達は初めてのインタビューということもあり、つまづきながらのインタビューであったが、 この失敗やアドバイスを生かして、神戸での事前インタビューやフィールドワークで致命的な 失敗のないようにインタビューを行いたいと感じた。

作成者(大学名・氏名)	淑徳大学 新保江吏万 森菜摘
分類	座学
プログラム名	事前学習
日時・場所	7月4日~8月17日 淑徳大学 埼玉キャンパス
講師・インタビュー対象者	山口光治先生

今回のプロジェクトの事前学習で主に行ったことをまとめた。

第1回 7月4日(木)PM14:40~PM16:10

関西福祉科学大学第1次派遣の報告DVDを視聴し、プロジェクトのイメージを具体化した。

第2回 7月18日(木) PM14:40~PM16:10

事前学習日程の調整し、全体スケジュール(事前学習、フィールドワーク、報告書及び逐語録の作成、事後学習)の説明を聞いた。そして、引率者の紹介を受け現地調査チームの編成を行った。

第3回 7月20日(土)PM13:00~PM16:00

東日本大震災と被害状況について把握するために、白地図を使い被災地の地理的な位置の明確化、DVD を視聴し被害状況を確認した。

第4回 7月21日(日)PM12:00~PM13:00

第3次派遣団の報告会を聞いてまとめる(見学者:友利仁美)。

第 5 回 7 月 25 日(木) PM14:40~PM16:10

21日の報告会のまとめを見学者が報告する。

第6回 8月2日AM9:00~PM15:00

9:00~12:00 までは、被災地に行く確認をしてからインタビュー実践を行った。初めにインタビュー要項を見ながら手順を全員で確認し、そのあと各ペアに分かれてインタビュー項目の打ち合わせを 45 分ほど行った。主に先生を相手に挨拶の仕方や座り方の配置などの確認し、インタビュー練習を始めた。12:00 から 1 時間ほどお昼をはさんで、午後 1:00 頃から事務局職員とキャンパス・ソーシャルワーカーの方を相手に、抜き打ちのインタビュー実践トレーニングを行った。このインタビュー実践でいろいろな反省点が出てきたので、そのあと改善策を考える時間を取った。最後にまとめでインタビューを行なって良かった点と反省点をそれぞれ書き、反省点を発表し先生からアドバイスをもらって終了した。

第7回 8月6日AM10:00~PM17:00

午前中はインタビューの方法の再確認とイレギュラーが起きたときの対応策を4人で話し合い、わからないことを先生に聞いた。そして、お昼を含み各ペアで1時間 30 分ほどインタビ

ュー訪問先の施設のことを調べ、発表をした。その後に震災時に求められるソーシャルワーカーの機能や役割を考えるため、被災地の映像(宮城県のドキュメント)を 90 分ほど見て、それぞれ感じたことを発表した。

第8回(最終回) 8月17日AM10:00~PM12:00

最終日は持ち物、服装、宿泊、調査時と現地滞在中の注意事項なども含めて、出発までの最 終確認を行った。

私たちは今年はじめてこのプロジェクトに参加した。東日本大震災があった日から約2年、 私たちはどのようなことができ、この震災によって何を知り、得ることができるのだろうか。 そのようなことを思いながら臨んだ事前学習だった。

最初、私たちはこのようなプロジェクトがあると知ったとき、実際になにをするのかなどよくわかっていなかった。しかし、事前学習を通してこのプロジェクトがどのよう意味を持ち、どのようなことをしていくのかなどを知ることができた。

1回目の事前学習では、このプロジェクトがどのようなものかを知るために第 1 次派遣後、関西福祉科学大学の学生が作った DVD をみた。そこには、私たちがニュースや新聞などで知っている以上の被害や人々の悲しみなどが映し出されていた。家や車などが流され、本当に人がここに住んでいたのか考えてしまい、しばらく私たちは何も言えなかった。そのあと、山口先生が被災地に行ったときに撮った写真をみた。それはテレビで映し出されていたところ、多くの家が津波によって流されたあとなどの写真だった。

事前学習の途中、千葉キャンパスの方で私たちの前に行った第3派遣の学生が高校生向けに 語り部をやるということがあり、私たちのチームの中から代表で1人出席した。そこではその 学生がどう思ったか、また現地のソーシャルワーカーはどのようなことをしたかなどを語って くれた。また、語り部が終わった後、その学生に話を聞きに行くことができ、このプロジェク トで大切なことなどを教えてもらうことができた。

次の事前学習では、インタビューの基礎や流れなどを教えてもらい、実際に大学職員にインタビューをした。現地のソーシャルワーカーの方にインタビューしたい内容などを2人1組で決め、実際に山口先生にみてもらいながら最初の流れなどを行い、2人でどのような役割分担をするかなどを考えた。そのあと、実際にインタビューという形でキャンパス・ソーシャルワーカーの方に30分ぐらいのインタビューをした。インタビューは難しいもので、自分が聞きたいことを聞いていたはずなのに、私の場合、話を掘り下げすぎたせいか、だんだん話がずれていってしまうことが多くあった。もう一人の仲間のフォローのおかげもあり、話を戻すことができた。30分という短い時間だったが、以前働いていた医療ソーシャルワーカー業務についての話やその病院での出来事など、様々なことを聞くことができた。

次の事前学習では自分たちがインタビューする人がどのようなところで働いているのかなどを調べた。私たちが今回インタビューする方たちは、どちらも障がい者施設で働いている方々で、1日目に行く「あだたら育成園」は知的障がい者の方を中心に支援していること、2日目に行く「いわき福音協会」は知的障がい者と身体障がい者の方などを支援しているところで、支援部門によって多くの取り組みを行っていることを知ることができた。

このような事前学習を通して、私たちはこのプロジェクトの目的などを知り、現地に行って何を知り、何を伝えていくのかなどを把握することができた。また、私たちが見た映像は1~2年前、震災直前のものが多く、私たちが行く時とはだいぶ状況が変わっている。2年経って被災地の人たちはどう震災と向きあっているのかなど、私たちは伝えていかなければいけないのではないかと思う。

	文京学院大学 小野綾子
分類	座学
プログラム名	事前学習
日時・場所	平成25年8月10日(土)・文京学院大学
講師・インタビュー対象者	文京学院大学 鳥羽美香先生

「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト in 福島」への参加にあたり、私たちはプロジェクトの概要やインタビュー対象者、インタビューの方法、被災地の状況について、その一例として東松島市で働く保健師の映像を見るなどして事前学習を行った。それに加えて各自で福島県の状況や、インタビュー先のいわき市、郡山市について調べた。

文京学院大学から参加する学生は私のみ初めての参加だったため、プロジェクトやインタビューの雰囲気が掴めずとても緊張した。しかし、足を引っ張らないように、またインタビュー対象者からより多くの体験や言葉を語っていただけるよう、自分なりに、精一杯頑張ろう、と思った。

今思うと、私たちはこの時、福島県の被災状況について少しも理解できていなかったと感じる。「東日本大震災の被害」ということから連想するのは、主に津波と原発事故であった。しかし震災後、宮城県へは1・2回訪れたことがあったが、福島県へは訪れたことが無かった、ということもあり自然と宮城県の被災状況の方が印象に残り、2人とも分かっているつもりでも、頭の中では震災の被害=津波、となっていたのではないかと思う。

福島県へ向かう際、私たちはやはり放射線のことが気になった。それは「無知」であったからだ。原発のことも分からず、そして地元の方々の「思い」も分からなかったためである。原発の「怖さ」や具体的な影響についてもまた分からなかった。しかし福島県社会福祉士会の方々へのインタビューや現地の視察等を通して、多くのことに気づき、知り、学ぶことができたと思う。



福島県放射能測定マップ http://fukushima-radioactivity.jp/

作成者作成者(大学名・氏名)作	関西福祉科学大学 福井 弥生
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション
日時・場所	平成 25年 8月20日 (火)
講師	関西福祉科学大学 遠藤洋二氏

8月20日から現地でのプロジェクトが本格的に始まり、関西福祉科学大学、淑徳大学、文京学院大学のチームが集まって座学中心の学習を行った。

午後の3時過ぎから関西福祉科学大学の遠藤洋二先生が本プロジェクトの目的と概要について話された。このプロジェクトは私たちが被災地に行ったときに何が出来るのか、ソーシャルワーカーが出来ること又はどういったことをやってきたのかをイン



タビューや被災地訪問を通じて確かめ、それを外部に向けて発信することが大切であり、これ は教員が主体となってやるのではなく、学生が主体となって新たな発見をし、教員と取り組む ことを目的としている。そして何よりも楽しむということが大切であると述べられた。

遠藤洋二先生自身も、阪神淡路大震災で被災され、現実とかけ離れた光景や人を助けようと 瓦礫をどけようとするのに動かない状況の中で、「圧倒的な無力感」を感じたと話されていた。

また棺桶を作ったり水を運ぶ仕事の中で本当にこれでいいのか?ソーシャルワーカーの仕事がしっかりと出来ているのだろうか?基本的な役割を見つめなおしたとも話されていた。

今回の東日本大震災では、阪神淡路大震災とは違い津波の被害がとても大きく、復興までの時間がとても長い。また、福島では原発被害を受け、各地で抱えている課題が異なっている。また今、被災地全体で言えることは、被災直後から時間が経過した現在、津波による行方不明者の家族が今なお苦悩する"あいまいな喪失"を抱えた状況が広がっているということだろう。それに伴い、ソーシャルワーカーが家族とはまた違ったケアや支援をしていかなければならない状況にある。

遠藤洋二先生の本プロジェクトの説明が終わった後、関西福祉科学大学4回生の植田さんから、前回の第3次派遣プロジェクトについてのプレゼンテーションが行われた。その中では、災害の時にソーシャルワーカーが取り組んだこと、そこから見える自分たちができることについて、4つの枠組みに分けて話された。

- 1.初歩的なアセスメントと気づき
- 2.介入時に道具を活用すること
- 3.アウトリーチによってニーズを見つけること
- 4.支援・資源へとつないでいく

これらの事で、私たちソーシャルワーカーの卵が出来ることは、被災地で何もできなかった

と言うソーシャルワーカーさんにインタビューをすること、そして共に考え新たな発見をする ことである、と自分の中で整理がつくのではないかと私は感じた。

作成者(大学名・氏名)	淑徳大学 岡田彩香 友利仁美
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション
日時・場所	8月20日(火) 14:00~17:00 ホテルバーデン
講師・インタビュー対象者	関西福祉科学大学 遠藤洋二先生 植田美悠さん

関西福祉科学大学の遠藤先生による、声プロジェクトの目的、災害時におけるソーシャルワーカーの話を聞いた。また、関西福祉科学大学4年生の植田美悠さんによる第3次派遣声プロジェクトの発表があった。その三つをまとめた。

1. このプロジェクトの概要・目的

私たちが災害時に出来ること、ソーシャルワーカーが災害時に出来ることを、インタビューや被災地訪問などを通じて確かめ、それを外に向けて発信していく。これは、学生が主体であり学生と教員が共同して取り組むことを目的としている。そして、とにかく楽しむことが大切である。学生がインタビューをすることによって、心を開いて話してくれる。上手くやろうとは思わずに、生のソーシャルワーカーの声を聴くということを大切にすること。

2. プレゼンテーション

関西福祉科学大学4年生 植田美悠さんによる、前回の声プロジェクトの発表。

災害の時にソーシャルワーカーが取り組んだこと。そこから見える自分たちに出来ることを 考えていく。

- 1. 初歩的なアセスメントと気付き
- 2. 介入時に道具を活用すること
- 3. アウトリーチによってニーズを見付けること
- 4. 支援、資源と繋いでいく

この4つのキーワードが重要である。このプレゼンは震災直後のものだが時間と共に変化していく。被災地の様子を目の当たりにして、何も出来ないという無力感を感じた。だが、そこで立ち止まってしまっては、本当に何も出来ないままで終わってしまう。その後のグループ討議では、普段から繋がりを持ち、そして関係を築いていき災害が起きた時は、インフォーマルな資源で対応することが大切であるという意見が出された。

3. 災害とソーシャルワーカー

1) 遠藤先生のお話

阪神淡路大震災が発生した当時、大阪の児童福祉司の仕事をしていた。車での移動は不可能 だったので、バイクで移動していた。道中、いたるところで火災が起きていた。その後、対策 本部へ移動し支援をしていた。

2) 東日本大震災と阪神淡路大震災

二つの震災の違いは「津波」があったこと。これは、死者の数にも影響を及ぼした。津波は何もかも奪っていき、遺骨を拾うことすら叶わなかった。

3) 東日本大震災

死亡宣告はされているが、遺体が見つからないので「まだどこかで生きているかもしれない」という気持ちを持っている。「曖昧な喪失」という。行方不明者を待つ家族のケアが必要である。また、仮設住宅が高齢者にとって終の棲家となっている。将来の希望を見出せない人に対して、「ソーシャルワーカーはなぜ必要なのか」を考える。

このプロジェクトは、直接支援ではなく間接支援である。ソーシャルワーカーも被災者であり「あの時こうすれば良かった」という後悔の気持ちを抱えている。そのことについても考えてみる。また、被災地のソーシャルワーカーの話を聞いてニーズを考えていって欲しい。



作成者(大学名・氏名)	文京学院大学 小野綾子
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション
日時・場所	平成25年8月20日(火)・ホテルバーデン
講師・インタビュー対象者	関西福祉科学大学 遠藤洋二先生、植田美悠氏

まず、このプロジェクトは「福祉系大学経営者協議会」におけるものであると、私たちは確認した。そして①将来の社会福祉を担う「人材育成」という福祉系大学のミッション ②福祉系大学が持つ「社会福祉に関する専門知識」 ③「全国各地の大学」が参加する全国的発信力等をコンセプトとし、その上で「災害支援における社会福祉専門職(ソーシャルワーカー)に焦点をあてたプロジェクト」ということを基本的な考え方として全員の共通認識とした。

このプロジェクトの目的は災害時にソーシャルワーカーがどのようにして災害支援を行っていたか、その経験を聴き取り、分析し、記録として残すこと、その後に学生自らが「語り部」となり他の学生等に発信する役割を持っている。

目的を再確認し、私は少し不安になった。被災された方の言葉を"学生の代表"のような立場となって聴き取り、そして発信する。この「発信」する力が自分にあるか、正しく、そして次の聞き手の心に少しでも響くように伝えられるか、と思うと自信がなく、不安になった。しかし先生方のお話で、学生が相手だからこそ語れることがある、それも社会福祉士を目指す学生だからこそそして震災発生から時間が経った今だからこそ被災された方も少しずつ自分の気持ち等を整理ができ、また相手に伝えるだけでなく自分自身でも「こんなことができた」のだと自他共に認めることができるのではないか。そして当事者の方も私たちも、今後に活かしていけるようにできないか、など自分だからこそ今回のプロジェクトに携わりできることがあるのだ、と少し不安も和らぎ、自信を持つことができた。また、植田さんの発表はスライドも効果的で、とてもうまくまとめられていると思ったが、今まで何度も苦戦しやっとここまできたという言葉もあったため、私はこの言葉から頑張ろう、という気持ちになった。加えて遠藤先生より、学生が主体的に、楽しく活動を行うことが大切だと教えていただいた。楽しく、ということには「被災地の方も暗い顔を見たくない」という意味が含まれている。これらのことから、やはり自分が今できることをできる範囲で努めよう、と考えるようになった。



作成者	関西福祉科学大学 植田美悠
分類	講義
プログラム名	福島県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	2013年8月20日 ホテルバーテン
講師	福島県社会福祉士会 会長 島野光正氏

福島県に着いて、最初のフィールドワークとして、福島県社会福祉士会の会長でもある島野 光正さんから福島県社会福祉士会の取り組みついて講義をして頂いた。

はじめに、福島県は他県の被害と異なる点である原発の放射線についての詳しい説明をして頂いた。被害は今現在も続いていて、人体の外部から被ばくする外部被ばくよりも食べ物などから体内に取り込まれる内部被ばくの方が懸念されている。そういった被害から逃れるために福島県内で避難する人、県外に避難する人を含め149,949人にも及んでいる(平成25年7月現在)。また、この原発被害では情報格差が問題になっている。SNSやインターネットによる情報提供も有効ではあったが、正確な情報か否かも明確ではなく、それらも使いこなせない高齢者や配慮が必要な方々には、情報とその方々をつなぐ役割の"人"の重要性がわかった。

震災後は、福島県社会福祉士会に対して、全国各地の様々な関係者の方から支援の申し出を 頂いたけれど、安全がまだ明確にされていない福島県に来て支援するよりも、福島県から避難 していった人たちにその各地で継続的に本来の業務で支援をしてほしいと"遠隔地支援"の重 要性を訴えていた。

社会福祉士会の活動として、介護支援専門員協会、医療ソーシャルワーカー協会、精神保健福祉士会、理学療法士会、作業療法士会が連携し、相談支援専門職チームが発足した。活動目的として、①避難所生活の方のニーズを把握し、総合相談としてのワンストップ機能を果たす。②生活再建のため介護保険・福祉サービスの利用調整、心のケアを含めた、具体的な相談支援を行う。③避難者支援を主体とし、市町村担当の加重な負担にならないよう、常に連携して支援する、といったことを意識して行った。ビックパレットふくしまという大きな避難所を活動拠点とし、実情に合った支援が出来るように地域別に相談窓口を作り、要援護者のニーズに適した連絡調整をチームで行っていった。現在は、郡山市内の仮設に"ソーシャルワーカー室"を設置したり、法テラスへの協力など他職種・他団体と連携を取りながら、継続的な支援を行っている。

私がこの講義を聞いて感じたことは、継続的な支援の重要性である。島野さんから"遠隔地支援"の話があり、平常時機能している社会資源が機能しなくなった災害直後、または避難を余儀なくされた原発被害の被災地では、支援をしようとも、それは一時的な支援にとどまってしまう。その支援を避難先の各地域で行うことで、地域の社会資源も活用することができ、通常業務の中で継続的な支援ができる。元の生活には戻ることは難しいけれど、避難先で被災者が新たな生活の第一歩を踏み出すには、継続的なソーシャルワーカーの専門的な支援が必要不可欠だと思う。

作成者(大学名・氏名)	淑徳大学 新保江吏万
分類	講義
プログラム名	福島県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	2013年8月20日(火)19:00~21:00 ホテルバーデン
講師・インタビュー対象者	福島県社会福祉士会 会長 島野光正氏

福島県社会福祉士会会長の島野さんの講義を聞き、以下の通りにまとめた。

1. 福島県民への支援→遠隔地支援

今回行った福島と他の被災地と違う点は原発があることであった。宮城や岩手は数多くのボランティアが入ったが福島はこの原発があるために入れず、加えて、放射能は人によって見方が違い、現状では正しい放射能データがわからないためボランティアを入れられなかったと話す。そのために避難した先で当たり前の生活を送れるように支援を依頼していた。つまり、福島への支援活動も大切だが、全国に避難した福島県民が当たり前の生活や避難先でサービスを受けられることができるように支援する遠隔地支援が必要であった。

2. 主な課題

今回の震災で広域災害としての課題は、原発事故と情報不足+情報格差が挙げられる。原発事故は終息が見えず続いていき、かなり広い範囲が避難をしなければならない。加えて、津波等の見える被災より、放射能問題の見えない被災の方が多くなっている。情報不足は個人情報がなければ医療支援をしたくても適切な診察ができない等の問題が起こり、情報格差ではインターネットやツイッターなどで情報提供し合うことができたが高齢者は使いこなせないといったことが起きた。避難上での課題は物流が止まることやガソリンが無いなど、他の被災地と同じ課題と、福島県のみの原発避難区域には立ち入り禁止となり救助に向かえないといったことがあった。

3. 災害支援の相談援助として必要なもの

受援力(援助方法を把握)やファシリテーター(人を引っ張っていくこと)、ネットワークの形成、マネジメント力とコーディネート力、コンサルテーション、スーパービジョン、臨機応変な対応、積極性…といったものが SW には必要になってくる。加えて、危機介入理論の必要性もある。例えば、相談の仕方も「何か困っていることがありますか」と聞いてしまうと、相手も話しづらくなってしまう。「~ができますから~いりますか」といった聞き方をすると相手も話しやすくなる。つまり、SW は見えているあるいは見えていない「道具」を使い、被災者が必要としているものを把握しなければならない。そして、被災者は力がないわけではないので、もともとあった資源や力を使い、何かをしてあげるではなく手助けをすることが大切である。

4. 相談支援専門職チーム→これからの SW の組織

相談支援専門職チームを組む理由はどんなに優秀な専門職も単体では、継続的・全体的な力を発揮することはできないためである。主に行ったことは地域の医療・福祉・介護のマネジメントや避難所の外と中をつなぐ役割である。この相談支援専門職チームの発足で当初、生活支援はその後に始まると判断したが、生活支援等の福祉支援はその人の周りの環境を整えつつ医

療支援と同時に行うことが必要だったと話していた。

災害時の必要優先順位ではどうしても医療に目が行きがちで生活的支援は二の次になってしまう。その後回しになってしまう生活的支援を SW が行う。つまり、DMAT (専門的な訓練を受け震災発生時に医師や看護師等がチームを組み素早く現場で支援ができる医療チーム)の SW 版を作るべきである。

以下は、福島県社会福祉士会の松本さんと和田さんの話をまとめた。

1. ジレンマを抱えての支援

自分の自己満足のためなのか被災者のためなのかというジレンマを抱えてしまう。解決するにはマニュアル通りにはいかないため、ある程度人を信じて行動したり自らで動いたりすることが大切と話す。被災者も表面上の心のケアや話を聞くだけというのはお断りという方が多い。つまり、SWは今、被災者が置かれている状況に気づかなくてはならない。そして、自分は良い事をやっていると思った瞬間に駄目になってしまう。しかし、忘れてはならないのが支援者も同時に被災者であるということである。そのため、支援者の支援が大切である。例えば、現場で働くスタッフの子供の日中預かりサービス、共感的な話をするグループ作りなどスタッフの家族を含めた支援をすることで支援者も安心して支援ができる。

2. 災害における線引き

避難した人と避難しなかった人、補償金の有無といった様々な線が引かれていき人間関係が壊れていくことが多い。他にも価値観や風評から福島だけではなく他の県の人々の間にわだかまりができてしまい避難や支援に各差が生じることとなってしまったそうだ。これをなくすためには微力と思うが話を聴くしかないと話す。しかし『微力だけれど無力ではない』ため支援を継続して行くことが必要になる。

作成者(大学名・氏名)	文京学院大学 小野綾子
分類	講義
プログラム名	福島県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	平成25年8月20日 (火)・ホテルバーデン
講師・インタビュー対象者	福島県社会福祉士会 会長 島野光正氏

プロジェクト初日、一般社団法人福島県社会福祉士会会長の島野氏より「福島県の現状とソーシャルワーカー」について講義をしていただいた。島野氏の職場は社団法人郡山医師会、郡山市医療介護病院・企画調整課長兼保健福祉等事業推進室長であるということで、福祉と医療の連携についても話を伺うことができた。

まず教えていただいたのは、「放射線について」であった。福島県が震災により受けた被害は 津波等もあるが、やはり放射線の被害であった。「原発」については現在日本各地で「反原発」 など唱えられている。「原発は良くない。だから今すぐ無くそう!」と言ってもすぐにできる ことではないし現在はデメリットばかりが目立っているが元はメリットもあったため福島県 に原子力発電所が存在しているのだろう。しかし原発の被害を受けていることもまた事実であ る。放射線は目に見えないため目に見えない恐怖から、震災発生後に支援物資等が届かなくな ってしまったそうだ。また、福島県内では津波の被害は少なかったため家屋など多数残ってい るが線量の高い地域では立ち入りが制限されている。そのため「家があっても帰れない」とい う状況で、支援は被災した場所でなく、「避難先」となる。避難先も県の内外とかなり点々と しており支援方法も様々となるが、島野氏は「避難先で当たり前の、普通の生活ができるよう に支援してほしい」と MSW 等にメッセージを出したそうだ。

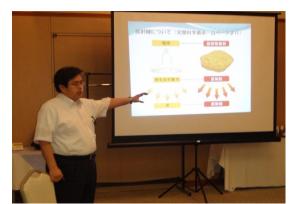
震災や原発事故で感じたこととしては「情報格差」があったことである。限られた情報源の中から情報を得ることは困難で、被災した当事者であっても何が起こったかはメディアから知ったという。

災害支援としては「相談支援専門職チーム」を発足し、福島県社会福祉士会の他に県内の介護支援専門員協会、医療ソーシャルワーカー協会、精神保健福祉士会、理学療法士会、作業療法士会と連携し、チームとして動き出した。開始が早かったことには日頃からの関係づくりも影響していたと知った。また、5月には福島県の委託を受けたということで、「県からの委託」という"道具"をもっていたことも知った。また「ビックパレット方式」を用い、要介護認定が申請したその日に出て、すぐにサービス利用が可能になるように制度を創ったことも分かっ

「支援者も被災者」ということで、支援にあたっている職員の子供も勤務先である病院に来て過ごすことなども行われていたことや、弁護士会との「生活と法律の合同相談」もビックパレットふくしまで行うなど、ソーシャルワーカーの目線を

もつからこそできる支援がたくさんあったこと が分かった。

た。



平時以上に対応の早さが求められ、福島県社会福祉士会の「会長」という立場で様々な「指示」等も求められ、そして「予測」も「支援」も行う。とても容易いことではないと感じたが、 日頃からの関係づくりが迅速な対応の土台となっていたことが島野氏のお話から分かった。

作成者	関西福祉科学大学 中上裕菜
分類	視察
プログラム名	激甚被災地訪問
日時・場所	平成 25 年 8月 22 日 (火) 10:00

8月21日、私たちは朝8時30分ごろ郡山を出発し、宮城県名取市の閖上地区へ向かった。 閖上中学校に着き車を降りると、先に到着していた淑徳大学のメンバーが校舎の裏から出て来た。駐車場から中学校の方へ歩き、改めて周りを見渡して、まず「何もない」と感じた。震災が起こる前は多くの住宅があったのだろうと推測される場所には、ポツリポツリと点在する家を除き、今は緑色の草が生い茂っているだけであった。閖上中学校へとつながる道にあるガードレールは、押し寄せる波と引き波の力で地面とほぼ平行になるまで左右に折れ曲がって、校旗を掲げていただろうポールは斜めに倒れており、閖上中学校の正面の階段に設置されていた時計の針は、2時46分を指したままだった。



瓦礫の撤去はすでに大方終えられている様子であったが、閖上中学校の周囲はまさにその時刻で止まったままのように感じられた。時計が設置されている階段の下に、犠牲になった子どもたちの名前が刻まれた石碑と、メッセージが書き込まれた机が置かれており、そして横浜の小学校から送られた色とりどの千羽鶴が校舎前に捧げられていた。

閖上中学校から車で1、2分のところにあるお寺へ行くと、そこには頭のないお地蔵さんや、 頭だけのお地蔵さんが数体集められていた。津波で流されたものを地元住民の方が見つけて持 ち寄ったものであるという。敷地内にある墓地には、墓石がないお墓が多数あった。墓石が津 波で流されたために骨壺が丸見えになっているお墓を目の当たりにし、まだ新しい花が供えら れていることに気づき、言いようもなく胸が締め付けられる思いがした。

その後、また車に乗り日和山へ向かった。閖上中学校の周囲と同じく草が生えた土地が広がっていたが、そこには小さな仮設の神社が出来ており、絵馬をかける場所の隣で、巫女さんがお守りを販売していた。小さな復興の兆しが見えた気がした。日和山の山頂へ上ると、周囲の様子がパッと視界いっぱいに広がった。この山頂へ避難した人は全員津波で流されてしまったが、隣に立っていたかまぼこ工場へ避難した人は助かったと聞いて、かまぼこ工場へ避難した人は、日和山に避難していた人が津波に飲まれるのを見てしまったのではないかと思い、その恐怖を想像してどうしていいか分からなくなった。

翌日、私たちは富岡町を視察した。震災直後の状況がまだそのまま残っていた。一階部分が削り取られた家に、流された車、二つに折れた電柱、平たくつぶれた自動販売機に津波の脅威を感じた。

富岡駅のホームの奥にはずっと草原が広がり、まるで海沿いの駅のようであった。その草原

にはかつて住宅が建っていたと聞き、そこに町があったようには見えない風景に信じられない 思いがした。

放射能の影響で戻れない地域や津波の被害を受けつつも徐々に人が戻りつつある地域、その両方について、被災者はどのように見つめているのだろうと感じた。かつてそこにあった景色、生活、それらが無くなってしまった地域もあれば、震災の影響を感じさせない地域もある。そこに芽生える人々の意識の違いはこれから解決していかなければならない問題の一つではないだろうか。

作成者(大学名・氏名)	淑徳大学 友利仁美 森菜摘
分類	視察
プログラム名	激甚被災地訪問
日時・場所	8月21日(水)9:00~19:00 宮城県名取市、亘理町 他

激甚被災地訪問で、宮城県名取市では閖上中学校、中学校にある慰霊碑を守っている閖上の 記憶 資料館、お寺や神社を訪ねた。また亘理町では住民の方にお話を伺った。それぞれの様 子をまとめた。

1. 閖上中学校と学校周辺

ここでは、14人の生徒が亡くなった。外にある時計は、地震発生時間 14時 46分で止まっていて、一階の窓ガラスは所々割れていた。二階以上の窓は、何ともなかったため津波は一階部分だけをのみ込んだことが分かる。校内は、人が入らないよう机が並べられていて中に入ることが出来なかったが、外から教室や体育館の様子を少しだけ見ることが出来た。中には、土や瓦礫は無く片付けられていて、物も散乱している様子はなかった。しかし、床は泥や土の跡が残っていて汚れていた。天井も壊れていて地震や津波の被害が伺えた。黒板には津波の後、生徒が書いたと思わるメッセージなどが多く書かれていた。

学校の周りの民家は一階部分が流され、二階部分が柱に支えられている状態だったり、家が残っていても家の中が散乱し住むことができなかったりする。津波がくる前の景色を見たが、沢山あった家が流され少なくなっていた。また、ガードレールは根元から曲がっていて本来の役目を無くしていた。

学校にある献花台には、沢山の花などがあり、慰霊碑には、津波よって亡くなった 14名 の生徒の名前があった。また横浜市立小雀小学校からは千羽鶴が送られていた。

2. 閖上の記憶資料館

ここでは、職員の話とビデオを見た。

宮城県名取市は 911 人の犠牲者を出し、閖上地区では死亡者 750 人、行方不明者 41 人がでて、中学校に 800 人、小学校に 1000 人が避難した。避難所は、段ボール一枚を仕切りしただけの場所であった。子ども達は、避難してきた当初、親に心配かけないよう笑顔で過ごしていたが日が経つにつれ、イライラしたり言葉遣いが悪くなってきて避難してから 2ヶ月後には災害当時のことをフラッシュバックしたり精神的に不安定になってきた。そこで、子ども達に安心感を持ってもらう為に、災害以外のことを表現させる取り組みを行い、自分の好きなことを表現させて安心感を与え 2011 年終わり頃に「災害前の街」・「憶えている災害の光景」・「未来の街」をテーマにジオラマを作製し津波などの災害を克服させた。

また、大人達は避難してからずっと不安を心の中に抱え閉ざしてしまい、自分の思いや心の 声を出せずにいた。そこで大人の為の心のケアとして閖上アミーズを作った。そこは、編み物 をしながら何気無い話や災害当時のことなど様々な話を語る場所となっていった。また、販売 部を作り自分達で全国に販売することで生き甲斐や夢を持てるようになった。また、閖上中学 校に通っていた子どもを亡くした家族の語る場所として、閖上中学校遺族会が作られた。職員 さんは、この資料館を作ることによって、災害の記憶が残り、それが次世代の遺産となるよう 世界に発信できると話してくれた。

3. お寺と閖上湊神社

資料館付近にあるお寺は、柱しかなく中が丸見えだった。周りにあるお墓は上の方の墓石が流され下の台しか残っていなかった。そのため、どこに誰のお墓があるのか分からない状態だった。また夏ということもあり、草が生え、どこにお墓があるのか分からないところが多くあった。そんな中でもお盆には自分の家のお墓にお墓参りしている姿があり、胸が痛くなった。

小高い閖上湊神社では、災害当時 1000 人近い人が避難したが、津波は予想をはるかに超えたため 800 人以上の人が犠牲になった。ここに来れば安全と思い避難したのに、津波が迫ってきて、そこにいた人たちはどんな思いだったのだろうか。神社には、人々の笑顔と復興を願う絵馬が飾ってあった。



4. 亘理町、農家の人のお話

亘理町では車での移動ではなく自分達の足で歩くことになり、見るだけではなく実際に被 災した方から話を聞くことにした。

1)1組目の住民の話

震災当時、自宅にいて津波がきた時は家の3階に避難。1階は津波により浸水してしまった。津波で流れてきた水が引かなかったため、2日半3階で過ごした。2日後自衛隊のヘリコプターで救助され市民センターへ行くも、地区が違う為小学校へ移動、そこから仮設住宅に行き、そこで過ごしたあとボランティアなどの手伝いもあり、自宅の1階をリフォームして戻ってきた。

2) 2組目の住民の話

災害当時、畑に出ていて夫が家族に津波が来ることを伝え、家の2階に避難。津波による 水が引かないため3日間3階で過ごしたあと自衛隊により救助され、大沼中学校に避難した。 避難所にある名簿や伝言板で奥さんのお兄さんが探し出してくれた。3ヶ月ほどお兄さんの 家にお世話になり、そのあと仮設住宅へ移動した。その間、知り合いの大工さんに家を直し てもらったあと自宅に戻ってきた。

話を聞いたときに、「私たちは家族全員無事だったけど、近所の人が・・・。」と話していた。自分たちも被害に遭っており大変な状況の中、「他の人達の方が」と言って自分達はまだいい方だと思う人達が多いと感じた。このような思いが強いため、ニーズを表に出す人が少なくなってきているのではないかと考えた。

作成者(大学名・氏名)	文京学院大学 木村恵理
分類	視察
プログラム名	激甚被災地訪問
日時・場所	2013年8月21日、22日 宮城県名取市、福島県相馬市・富岡町

8月21日に宮城県名取市閖上地区と福島県相馬市周辺。22日には、福島県富岡町を訪問した。この福島と宮城という二つの地域を訪問し、震災の被害というものにも違いがあることが分かった。今回で二度目の訪問となった宮城県の閖上地区は、昨年と比べ、変化のあったところは草木が覆い茂ってきたところぐらいであると感じた。しかし、街を歩いてみると、その中でも少しずつ変化が見られてきたことが分かった。それは神社が流された跡地でお守りを売る姿が見られたり、地元の特産物を売る場所などが設置されたということがあった。少しずつではあるが、復興が見えてきたように感じた。そして、福島県相馬周辺では、一見普段通りのような風景が広がっているように見えたが、よく見ていくとその普段通りと思えた家々の中には津波が押し寄せた傷跡があったり、人が住んでいたり、離れていったりとが混在していることが分かった。

相馬に向かう道の駅で地元の男性と出会った。震災時に撮られた映像を食い入るように見ていた私たちに、その方は「その映像は辛いでしょう?」と話しかけてくださった。その方は、暗い表情を出さないようになるべく笑顔で話されていたが、話してくださる内容は自分の家が流され、今は仮設で住んでいるがいつ帰れるかは分からない、というものであった。私たちが返す言葉も出なく黙っていると、男性は「でもうちは家族が無事だったけど、他の家では亡くなった人がいっぱいいて、その家のほうが辛いんだ」ということをおっしゃっていた。東北の人は、自分よりもっと辛い人がいるからと物資なども貰うのを遠慮する人がいると聞いていたが、この男性とのやり取りからそれを垣間見たように感じた。

そして 22 日には、インタビューの後福島県富岡町を訪れた。ここは原発 30 キロ圏内のところであり、現在は立ち入り禁止は解除されているが人が住んでいる様子は見られなかった。人が住まなくなった町は、震災の時から時間が止まったように感じた。しかし、街を歩いてみると確かに以前は人が住み、笑い声にあふれた街だったのではないかと想像ができた。目に見えない原発という恐怖から、また再びそこで生活することができずにいる、そこで以前は暮らし

ていた人々の苦しみを想像した。その苦しみは、原発という被害を直接経験していない私たちには計り知れないものだということを思った。そのような苦しみを考えたとき、私たちが目指すソーシャルワーカーは、どのような支援ができるのか考えていかなくてはならないと思った。福島県の震災は、目に見える被害の他に見えない被害というものもあり、支援の難しさを知ることとなった。



宫城県名取市閖上地区

作成者	関西福祉科学大学 中上裕菜
分類	インタビュー①
プログラム名	ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト
日時・場所	平成 25 年 8月 22 日 (火) 10:00
インタビュー対象者	渡邉明社会福祉士事務所 渡邉 明氏

私達は、独立型の社会福祉士事務所を開いておられる渡邉明さんにインタビューをした。渡邉さんは大学を卒業後、肢体不自由児施設で約 11 年間児童指導員として勤務し、その後、知的障害者更生施設に 10 年勤められた。現在は、福島県社会福祉士会権利擁護センターぱあとなあ福島の運営責任者と、障がい者の成年後見人や、いわき明星大学の非常勤講師などをされておられる方である。震災時は障がい者の権利擁護や法人後見を行っているNPO法人の職員をされていた。



震災直後の状況

渡邉さんは、1978年に発生した宮城県沖地震も経験しておられ、今回はあまり動転することはなかったが、揺れが異常に長かったと感じたという。その時は、いわき市総合保健福祉センター3階で持たれた会議に、NPO法人の同僚と参加していた。揺れがおさまり、安全を確認した後、会議は中止。それぞれが自分の事業所へ戻ることとなった。地震による道路への影響が

なかったようなので、車の中でラジオを聞き、情報を収集しながら、いわき駅方面に進んだ。 事業所が入っているビルは、地盤沈下をおこしたために、建物が一部壊れている状態であった。 ビルの前に公園があり、避難場所となっていたためそちらへ行き、携帯のワンセグ放送を見て、 津波の被害が相当なものであることを初めて知った。震災が起きた3月11日は金曜日で、土・ 日は休みだったため、ビルに入り、倒れたロッカーなどそのままで、事務所の戸締りだけを行い、職員はそれぞれ家に帰ることとなった。

震災直後の活動

震災直後の3月13日、個人で後見人を引き受けている利用者がいる施設に行き、安否確認や面接を行った。その頃には12日に起こった福島第一原子力発電所1号機が水素爆発を起こし、原発から20㎞圏内の住民に避難指示が出ていた。施設は原発から40~50㎞圏内の場所であったが、避難地域が拡大されることになるかもしれないため、施設長とその後の対応について相談を行った。施設の職員さんも大変な状況だったため、食事介助の手伝いをされた。その時、後見人をされていた利用者はとても怯えた様子であったという。余震がくるため、不安を覚える方が多く、そのような利用者には手を握って対応されたということであった。その後、NPO法人の活動に戻り、法人の職員や理事長を交えて今後の対応を相談され、法人が後見人

をしている方や財産管理を引き受けている知的障がい者の方がいる施設や、グループホームの 事業所の職員と電話で連絡を取りながら安否確認を行った。

14 日に起こった第一原発 3 号機の爆発を機に、避難する住民が多くなり、グループホームで生活をされている方も避難する可能性があるということで、銀行からお金を引き出し、グループホームや施設の責任職員へ配る作業を行った。その後、銀行が閉鎖し、ATMも作動しなくなるなど、現場では切迫した雰囲気が伝わってきたという。そして携帯やネットでグループホームや施設の職員と連絡を取りつつ、NPO法人としては22 日まで仕事が中断になった。

その間、県社会福祉士会の理事をされていたため、会員の安否確認を行ったり、避難所の手伝いなどもされていた。24 日からはグループホームにいる被後見人や、財産管理を引き受けていた方が長野や横浜へ避難することになり、長期間の避難となるため、グループホームの事業所から送られてくるグループごとの避難先の名簿を確認。再開し始めた銀行から、当座の生活費としてのお金を払い出し、一人 1~2 万円ごとに袋に仕分けし、渡し方を行った。さらに、関係する事業所と、その他の利用者がどこに避難しているか、家族と共に避難しているのかなどの情報交換を行っていた。

避難所の様子

自宅近くの小学校には、避難地域の特養や老健、救護施設の3つほどの施設が利用者と職員 共に施設ごと避難してきていた。一般の方も避難してきており、その方々が避難している場所 とは別に、教室を借り、床がタイルだったので段ボールと毛布を敷いて休まれていた。福祉辟 難所はいわき市にはなく、原発事故に至っては、こんなに多くの人が避難してくるということ は想定されていなかったという。施設ごと避難してきていたので施設の職員さんが一緒だった ため、そのような状況でも利用者への配慮を行うことができた。避難所での食事はおにぎり1 ケ、菓子パン、かまぼこがそのままという状態もあったという。渡邉さんはかまぼこを自宅に 持ち帰り、食べやすくするために切って避難所へ持って行ったり、食事介助、トイレ介助の手 伝いなどをされていた。避難所で一番大変だったことはトイレであり、水道もなく、教室の廊 下に置いたポータブルトイレを段ボールで囲って使っていた。一緒に来ていた施設の職員の方 も被災者であり、家族がバラバラに避難していた人もいつどうなるか分からない状況で、放射 能の心配もあり、全員精神的にギリギリの状態で、疲れきっていたという。天皇陛下のメッセ ージや、自衛隊のヘリが原発へ海水を投下する様子が特別放送でずっと放送されていたので教 室のテレビで皆それを見ていたということであった。津波の被害があった場所は、小学校・中 学校が避難所となっており、物資がうまく届かない、ガソリンが入手できないといった問題が あった。

地域コミュニティの崩壊

いわき市の人口は33万人だった。後にいわき市が行ったサンプリング調査では、約半数の15万人が市外へ避難したという。日常、回覧板を回したりしている自宅のある自治会の隣組は、近所の人がいなくなったため、市から連絡の仕組みが機能しなくなった。民生委員の方がいなくなった所もあり地域コミュニティが崩壊した感じがした。新興住宅地だったせいか、住民同士の関係も強くはなく、隣の住民に何も言わず避難する人がいた地域もあった。一方、

その中で、市内では、きちんと地域コミュニティが保たれていた地域もあり、普段から近所づきあいをしていないとこのような災害があった時、うまく協力しあえないことを実感したという。

これから先の支援について

災害直後はソーシャルワーカーだから何かするというのではなく、おかれた状況の中で何が 出来るかということ。そして、大事なのはそのことを記録に残すことであるという。福島県は 原発事故によって現在も 15 万人近くが避難しており、見通しが立たない不安や、住民票を移 していないので市民のサービスを受けられない人もいる。被災者のニーズは、家はあっても放 射能の汚染で住めない方、家が流されてしまった方がいたり、同じ市内でも、戻れる地域と戻 れない地域があったり、原発事故による賠償の差のことであったりと複雑多岐に渡る。地震に よる災害だけであれば、仮設住宅から復興住宅への流れがあり、その後の支援について考える ことが可能であるが、福島県ではこうした見通しがつかない状態である。高齢者であると、生 まれ育った故郷を離れ、これから先、戻ることはないかもしれず、生きる意欲を失くしてしま う。漁業をされていた方であったりすると就労意欲を失うこととなる。そのようなストレスや 不安などから、高齢者虐待や児童虐待のケースも増加傾向にあるという。また、福島県内でも どの地域に避難するかによって生活環境が全然違うということもあり、その地域での生活の仕 方についての支援も必要となる。例えば会津などでは冬は豪雪となるが、今まで雪があまり降 らない地域で暮らしていた高齢者の方は雪が降ることによって、転倒で骨折してしまったりす ることもある。これらのニーズを汲み上げ支援に繋げていくことが重要である。他にも「原子 力事故被災者支援法」という法律ができており、具体的な政策は今後整備していくということ だが動いておらず、制度へつなげるサポートも必要である。また、原発事故による賠償金を請 求できるにもかかわらず、請求していない人が1万人ほどいるという。障がいがあって一人で 暮らしている方や、高齢者の方、いろいろと書類を用意するのが面倒だという方を弁護士や司 法書士につなげるサポートも必要となってくる。

インタビューを通して

今回のインタビューを通して感じたことは、やはり復興はまだまだ進んでいないのだということだ。街並みや仮設住宅などの設置は進んでいても、心の問題や、街の住民の関係などはまだまだ修復されていない。テレビなどで仮設住宅の映像や片付いた瓦礫の映像を見ると復興は順調に進んでいるかのように感じる。しかしその実、原発事故による先の見えない不安や、そこから発生するストレスなど、新たな問題が浮かび上がってきている。また、渡邉さんのお話を伺い、NPO法人としての活動だけではなく、避難所の手伝いやグループホームの方との情報交換など、災害時にその時にできることは何でも行っておられ、社会福祉士はさまざまな状況に介入するのだと分かった。

作成者(大学名・氏名)	淑徳大学 新保江吏万 森菜摘
分類	インタビュー
プログラム名	ソーシャルワーカーへのインタビュー
日時・場所	8月22日(木)10:00~12:00 福島県あだち地域相談センターあだたら
講師・インタビュー対象者	渡邊中氏

福島県あだち地域相談センターあだたらの渡邊中氏からお話を伺った。

1. 渡邊氏のプロフィール

渡邊氏は、知的障がい児の入所施設へ入職し、長らく知的障がいの子ども等の支援に携ってこられた。その後、福島県から委託を受け、県南地域の障がい児(者)の地域生活するために必要な相談援助を行ってきた。現在は、福島県からこの事業所が委託を受け、県北圏域で主に二本松市、本宮市、大玉村で障がい児(者)の地域での生活支援行うためのアドバイザー兼相談支援専門員の業務を行っている。

2. 震災直後の様子と支援

ライフラインの被害状況は地域によって偏りがあり、停電した地域としない地域があった。 主に地震の影響は「中通り」、特に、郡山市、須賀川市等の建物被害が特にひどかった。また 水道などが止まってしまい、お風呂に何日も入れない日も続いていた。

情報収集すべき手段としての電話回線が利用できず、関係機関との連絡が取れなかった。 主な情報収集は、メールなどのネットワークのほうが動いていたため、メールを使って外部 との連絡をしていた。

渡邊氏は、1人暮らしの筋ジストロフィーの方の家を訪問していた時に被災した。その方の 安全確認が取れ次第、他のひとり暮らしの方の家々も回り安全の確認を行った。

被害が甚大であったこともあり、地域で支えていたホームヘルパーも避難し始めたため、 また支援する資源が乏しかった事もあり、病院を探して避難入院の依頼をしたこともあった。 渡邊氏が働いている施設は相談センターということで様々な相談が寄せられたが、どこから 手をつければよいのかわからなかったと話す。加えて、関係機関を含めた随所から様々な情報 が流れてくるため、しばらくは錯綜してしまい、情報の整理をすることに追われていた。

また、障がい者支援施設を利用している人は非常食が食べられない方が多く、知り合いの業者などにお願いして食料を買い、調理をしなければならなかった。非常食は便利だが、食べられないのなら多く持っていても意味がない。今回のことで災害備蓄用品のことも見直す必要があると感じた。

3. インタビュー内容

1)地域による支援のあり方

福島県は、「中通り」、「会津地方」、「浜通り」という地域に分けられる。今回の被災された 方々は、浜通りの双葉地方を中心とした地域の方々で、情報も不十分なまま、中通りや会津地 方へ避難してきた。

三地方のそれぞれの風土があり、なかなか馴染めない方々もいた。地域によっては福祉サー

ビスが不十分で、どのような対応して良いのかも、被災地行政も対応に苦慮していた。避難者を受け入れている行政もニーズに対応できず、また要援護者への対応に苦慮した。環境因子が変化する中で、個人の特性をどのように受け入れ対応するか悩んだ時期であった。

2) 心のケア

障がい者は特性によって避難所には入れなかった。健常者と同じ避難所にいっても理解を得られていないため、避難所へ行けなかった、入れなった障がい者がいたことも事実である。特に身体障がい者はバリアフリーとなっていないところがほとんどのため、避難所で暮らすことができず不平不満がたまり、それをどこにぶつけていいのかがわからないなどの不満が出てきてしまった。そのため、心のケア、これからのことを一緒に考えたりするというよりは、不満を聴くということが必要となっていたと渡邊氏は語った。その不満などを聴いていき、受け止めていくことで心のケアができるのではないだろうか。しかし、聴くことは誰でもできることであるため、ソーシャルワーカーは、今、何が必要なのかを考えて動く必要がある。

3) 見えない被害

福島は震災のほかに原発事故の影響で放射能汚染の見えない被害も受けている。そのため小さい子どもや妊娠している女性などは、放射能汚染から逃げるためにほかの県に避難していく人も多くみられた。渡邊氏は地元での生活を選択し、「私はここで暮らしていきたい。やはり自分が住んでいる地域が一番だから」と話してくれた。

今、原発問題で故郷に帰りたくても帰れない人たちが多くいる。しかも先が見えないためど うなるかまだ分からない。望郷の念を抱える被災者をいかに支援していくのかなど、想いを受 け止めた支援が大切になってくるのではないかと感じる。

4) 必要なもの

これから必要なのは長く、深く支援を続けていくことだろう。被害の少ない地域同士で情報の交換などを行い、そこから地域が連携し、支援の範囲を広げていくことが大切である。また、震災が起きた場合、自分の受け持っているフィールドの確認をし、何が使えて何が使えないなど社会資源を把握することや、物資のこと、ライフラインが止まった時などの連携も大切である。つねに家族と「地震が起きたときはどうするか」、また「近くに障がい者や高齢者がいた場合、誰が声をかけ一緒に避難するのか」などを話し合っておくと、もしもの時、一人で取り残されてしまう人や、逃げ遅れてしまう人がいなくなるかもしれない。そのためにも、地域のネットワークはこれからも欠かせないものになるといえる。

5) 災害時におけるソーシャルワーク

今回の震災は想定以上の被害だったため、ソーシャルワーカーも震災直後は「仕事だから」というわけではなく、「人として何をするべきなのか、何ができるのか」を自分たちで考え行動していた。そのため、目の前にあることへの対応で精一杯で、それに時間がかかってしまったという。さらに「被災者にとって必要なものは何なのか」など、自分が考えたものと相手の求めているものが違う場合が多いため、「相手が求めているのは何か」を考えていくことが大切であることがわかった。

震災から2年たった今、震災の混乱状態も落ち着いてきている。その中で、これからの生活 に不安を持っている人、心の整理ができずに前に進めない人が出てきている。そのような人に どう寄り添って一緒に歩んでいくのかなど、今後の課題であろう。また、地域のつながり、顔 の見える関係も必要だということが今回の震災を通して再確認することができた。ソーシャル ワーカーや福祉の人だけが動くのではなく、地域の人がどう助け合っていくかなども必要になってくるのかもしれない。また、今回、地域によるサービスの違いなどが目立ち、その人の情報が無く困ったことが多々あったという。これを機会に地域でサービスを変えるだけではなく、サービスを一から創っていくことも大切だということが分かった。



作成者(大学名・氏名)	文京学院大学 木村恵理
分類	インタビュー
プログラム名	ソーシャルワーカーへのインタビュー
日時・場所	平成 25 年 8 月 23 日 (金)・介護老人保健施設 楢葉ときわ苑
講師・インタビュー対象	介護老人保健施設 楢葉ときわ苑 施設長 渡辺 幸雄氏

楢葉ときわ苑の施設長である渡辺幸雄氏にインタビューをさせていただいた。

楢葉ときわ苑は、現在いわき市にて仮設の老健として運営されている。施設の表札には"仮設"楢葉ときわ苑と書かれていた。建物はとても立派で、一見仮設ということは想像できない。 現地に到着し、表札を見た時は、なぜ立派な門の表札に"仮設"と書いたのか疑問に思った。 その理由は、インタビューの中でお聞きすることができた。インタビューでは、老健の施設長として、そしてソーシャルワーカーとして震災時どのような活動をしたのかということを聞くことができた。

まず、震災時は利用者 88 名と職員 37 名で、「二時間」で避難しなくてはいけない状況であった。施設長としてどのように避難するかを考え、判断していく必要があったことを伺った。私たちは、混乱の中で、そのような重大な判断をするときにどのようなことを考えていたのかということをお聞きした。渡辺さんは、何よりもまず、命を守るということを最優先して何事も決めていたということを話してくださった。震災というような重大な時に判断しなくてはいけない時に、何を最優先していくかということを決めることのむずかしさと大切さを知ることができた。

そして、一次避難としていわき市の小学校へ集団避難した。集団避難を行う中で、老健の利用者の中にはまた新たな問題が発生していることが分かった。それは、避難先で食べ物を支給されても、嚥下機能が低下した高齢の利用者の中には、支給されたおにぎりやカップラーメンを、そのままの状態で召し上がることが難しい方もいた。そのような方へ食事を提供するため、おにぎりやカップラーメンなどの食形態の工夫なども行ったことが分かった。そのような避難所での生活から、健康被害が出てくることもあるなかで、職員の疲弊などもでてきた。

震災の中では、職員もまた同じ被災者であり、それぞれが苦しみを抱えながらも利用者を支えるという、ただそのことだけを考え介護していたそうだ。職員も一人の人であり、家族もいる。震災という状況のなかで共に避難してきた利用者の面倒をみたいという考えもある中で、家族と安全な場所まで避難したいという思いもあったと感じる。その二つの思いの中で、職員も大変思い悩んだのではないかということを伺った。

そのような職員の思いも汲み取って、これからも利用者の介護を行うという選択、あるいは 家族と共に避難する等、どちらを選んでもかまわないと職員におっしゃったそうだ。施設長の 渡辺さんは、一人一人を個別としてみるということは、この震災という状況の中では大切なこ とであったと感じたそうだ。このような個別化の考えは、ソーシャルワーカーの基本ともいえ る原則にもあるため、ソーシャルワーカーであったからこそ考えられたものなのではないかと 感じた。

そして、現在の仮設老健開設の話になった。避難をするなかで、まず第一に大切だと考えていくことは命を守るということであった。しかし、避難生活の中で利用者も職員も段々と疲弊していく中では、命を守ることも簡単ではない。そのために仮設老健の開設を行うことが始まった。しかし、国や県に開設の件で問い合わせをしても、初めての試みであるということから、答えが出るまでにも時間がかかりすぎてしまうという状態であった。

震災から復興に向けて立ち直っていかなくてはならない中では、公的な制度が機能せず、使 えない場合が多いことが分かった。

最初に疑問に思った、なぜ表札に"仮設"楢葉ときわ苑と表記したのかということに対して渡辺さんは、ここは仮設で、いつかは故郷に帰るという思いを持って生活していくことで希望をもって過ごすということを話してくださった。私は、利用者の中には認知症の方もおり、震災で避難生活が続くとパニックになったりしないのかということが気になっていた。このことをお聞きすると、意外にも利用者の方はパニックなどは起こさなかったということを聞いた。認知症ではない利用者も、仮設の老健で生活して故郷に戻りたいと話されることはないのかと思ったが、帰りたいと思っていったとしても口に出される事はないということをお聞きした。

最後に、"復興"ということをお伺いしたとき、まだ、「楢葉ときわ苑は復興を行う段階ではなくて今日、明日だけを見つめて今を生きるということだけです。」ということをきいた。震災だけでなく、それに加え原発という被害にもあった中では、復興を考えるよりも今をどう生きていくかといことを考えることが大切だということが分かった。





作成者	関西福祉科学大学 福井 弥生
分類	インタビュー②
プログラム名	ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト
日時・場所	平成 25年 8月 23日 (金)
インタビュー対象者	K市 T町仮役場 Aさん

・A さんのプロフィール

A さんは、東北福祉大学を卒業した後、高齢者福祉施設で平成 11 年まで働いておられた。 その後、介護保険法が出来ると、平成 12 年から 1 年ほど居宅のケアマネージャーとして勤務 された。平成 13 年から 17 年までは、在宅介護支援センターで働き、18 年から地域包括支援 センターで震災当時まで勤務し、震災後は、現在まで週 2~3 回ほどスクールソーシャルワー カーとして働いておられる。

・震災当時の状況

3月11日の地震が発生したとき A さんは、地域包括支援センターにおられ、スタッフと地域を区分けして、1 人暮らしのお年寄りの安否確認をすることにした。スタッフとは事前に、誰か病院へ行かないと行けない状況や、支援が必要な場合、お互いに電話をするか、なければそのまま自宅へ帰宅しようということで別れていた。

次の日の朝 5 時くらいに避難命令の放送が始まり、地域包括支援センターの職員はそれぞれ避難したが、たまたま A さんが所属されている法人の中には特別養護老人ホームがあるため、 A さんは特別養護老人ホームの利用者の方が避難するなら手伝わなければいけないと考え、朝に施設に向かった。そのときの施設の状況は、避難するかどうかまだ分からない状況だった。またこの施設は、要介護度 $4\sim5$ の重度の高齢者を対象とする施設で、入所者 80 人の内 48 人は胃瘻患者で、とりあえずは様子を見るということで、11 日から勤務していた職員がそのまま泊まりこみ、12 日はライフラインが全てダメになったので、非常食としてとってあった水で食べ物を練り状にして高齢者に食べさせていた。

同日、15 時半に福島第一原発において水素爆発が発生し、「とにかく西へ逃げろ!」と行政から言われたため、観光バス 6 台に 2~3 時間かけて高齢者を乗せ、座位を取れない患者はスタッフが後ろから立ったまま抱えていた。

郡山方面へ避難するにも、スタッフも含め 90 人以上という数の為、入れる避難場所がなかなか見つからなかった。深夜 2 時に宿を見つけるが一時的なものだったため、次の日に、病院が古くなり建て替えて新しくした病院の古いほうの一角を借りた。1 週間ほど生活し、高齢者が多いままではなかなか避難することが難しいため、他の特別養護老人ホームと交渉し高齢者を安全な場所へ避難させた。

A さんは、高齢者の避難に各施設と交渉したあと、一旦福島を離れ横浜へ行き、戻ってきたときに、自身が働いていた地域包括支援センターはビックパレットへ避難していたため、そこへ向かい 1 ヶ月ほど生活をされていた。その中であった様々なニーズは、まず寝たきりだとトイレへ行きたいのに行けない、和式を使用することが難しいなどがあり、子どもは学習スペースがなかったため避難場所の一角へ作ったり、子供のストレスを発散するための遊び場を作る

などの支援を行っていた。しかし、ビックパレットという場所は、多人数、他市町村からの被 災者が集まる場所だったため、各階のどこかの部屋を借りて行うという支援しか出来なかった。 また、そういう支援を続けていく中で、自治会が形成されその中でも連携して支援を行ってい た。

県の社会福祉士会も後に介入し、今まで動くことができたのに避難先で全く体が動かなくなった高齢者を再び元の生活に近い状態へ戻すために、4月半ばからAさんは福島県や他県のデイサービスに交渉し、サービスに繋げていった。避難場所では自衛隊が簡易の風呂を作ってくれたが、介護が必要な人は入れず、そういった中で必要とされてきたニーズは安全で、安心して衣食住が出来る場所が欲しいということであった。

・地域コミュニティが崩壊した中でソーシャルワーカーが出来ること

地域包括支援センターとは本来、地域形成をしていきながらコミュニティを形成したり、完成されたコミュニティの中で必要な支援を行っていくものであるが、震災が発生してからはそういったことは出来ない。地域コミュニティが崩壊した中で出来ることはないのかもしれないが、緊急事態だからこそソーシャルワーカーが行政等の役割をしていき、支援をつなげていくことが必要である。

・福島での今後の課題

震災直後は物質的支援、例えば歯ブラシ 1 本や服はとても有難いものだったが、復興へ向け時間が経過していく中で人のニーズは変わっていき、物質的支援の有難さに子どもたちは段々と慣れてきてしまっているのが現状である。物質的支援よりも"1 歩前へ踏み出せる支援"が必要である。それは、子どもや若い人たちがもらった支援をどう返すか、またその時に感じた有難さなどを、次に起きる災害へ生かせるような後押しであり、それを A さんは発信しつづけていかなければならないと仰っていた。

・Aさんが今後、被災地から伝えたいこと

東北大震災で津波被害や原発被害などがあり、日本中から支援してもらいその有難さが自分の身に染みたので、ぜひこれを今度何かあったときに、どんな形ででも支援したい、全国へお返し出来たら良いと言われていた。

• 所感

インタビューをさせて頂き私自身がまず初めに感じた事は、宮城と福島での復興のめどがどのくらい違うのか、ということだ。また自分の引き出しを沢山持っておくことによって、社会資源を有効に、かつ他との連携をはかり、素早い対応ができるということを感じた。またAさんは、震災時は何も出来なかったと言っていたが、行動している中で日ごろからの連携があるからこそ出来たことが沢山あるとわたしは考えた。

作成者(大学名・氏名)	淑徳大学 岡田彩香 友利仁美
分類	インタビュー②
プログラム名	ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト
日時・場所	8月23日(金) 10:00~12:00 いわき福音協会法人本部
講師・インタビュー対象者	藁谷健一氏

社会福祉法人 いわき福音協会法人本部の藁谷健一氏からお話を伺った。

1. 藁谷氏のプロフィール

藁谷氏は、知的障がい者に関する仕事に携わっており、昭和 49 年から約 10 年間、地域の中で暮らしていけるように畑仕事や内職など就業支援を行っていた。その後、事務職に異動して会計の仕事に携わっている。

「障がい者総合生活支援センターふくいん」を一つの事業として、現在は 33 ヶ所のグループホーム、またはケアホームで 140 名の利用者が生活している。その他にも福祉ホームがあり、そこでは 10 名の利用者が生活しているので、合計して 150 名の利用者の地域生活のお世話をしているということになる。被災後は通常業務に加え、支援物資の仕分け、ボランティアのコーディネートや情報を各施設・事業所に流すなど様々な仕事を行う。

2. インタビュー内容

1) 震災直後の様子

震災当時、藁谷氏は事業所内で職員の採用面接をしていた。最初は外へ避難し、揺れが収まってから施設内に戻り、その後、通所施設の様子を見に行った。この地震の影響で、電気は無事だったが、水道が止まってしまい、水と食料の確保が大変だった。

2) 支援の方法

すぐに救援物資が来なかったため、職員の自宅の井戸が使えるとか、少し離れたところの水道は使えるとか、どこの水道なら使えるのかという情報をかき集め、使える水道から水を運んだ。また、トイレの水は小さい川から職員が毎日運んで対応していた。そして、震災から2~3日後に救援物資が届くようになったので、1日に1人当たりペットボトルの水を朝と夕方で2本、おにぎり1つまたはパン1つを配ることが出来た。

3) 原発事故発生による避難

グループホーム利用者は長野県の「西駒郷」に 70 数名、神奈川県に 30 名ほど一時避難した。 職員も一緒に行ったが、長野県には 5~6 人、神奈川県には 4 人程しか行くことができず、避難先の施設でいろいろお世話になった。また、事務所近くにある障害児入所施設にいる重症心身障がい児は 18 歳以上の人もいたが、小さな子供は放射能の影響を受けやすいこともあり、県内・県外を含めて同じような施設、設備が整っていて、職員、看護師、医師が揃いお世話してもらえるところに避難した。入所施設のほうでは、原発の情報をテレビやラジオで聞いて、屋内退避区域が 30 キロ圏から 40 キロまで広がったらみんなで避難することを決めていた。グループホーム利用者は、4 月半ばに避難先から戻ってきた。

4) 連携・つながり

地震が起きた次の日から毎日会議を行い、各施設・事業所の状況報告を受け対応をしたり、キリスト教会とのつながりがあったため関係者が物を運んでくれたり、いろいろなところから支援物資が来たため、その仕分けをしてファックスで情報を流した。また、ガソリンの情報を共有し、交代でガソリンを入れに行き、職員同士で送り迎えをした。閉鎖状態だった通所施設の職員は、給水車を使い浄水場と施設の間を行ったり来たりして給水を行った。大きな法人だったからこそできた連携である。外部では、放射能を測定するガイガーカウンターの寄贈やいろいろなところから義捐金を頂く等の支援を受けた。支援を受けるだけではなく、職員が足りない施設に一人ずつくらい職員を派遣している。こうして支え合いながら連携を取っていった。

避難先を提供してくれた Y さんのつながりによって、NPO の理事長がボランティアに来たり、施設の畑で育てた作物を関西で売ってくれたりなど、関西からの支援が多く来て、今まで無かったつながりが出来た。そして今でもその支援は続いている。



5) これからの課題

今回、職員にかなりの負担がかかったので、人手不足の状態から抜け出すこと。情報収集や 状況の理解のために職員で何度か集まり会議をしたことから、平時から職員同士の連携を作り 「こうなったらどうする」ということを予め決めておく。食料の確保に時間がかかったことを 受けて、長期間もつようなものを備蓄しておくこと。寒さ対策のために、毛布などを保管して おくこと。

6) ソーシャルワーカーとして出来たこと

目の前のことに手いっぱいで、ソーシャルワーカーとしては何も出来なかった。そんな状態の中で、今出来ることを精一杯やった。しかし、藁谷氏は一職員のような立場ではなく職員全体をまとめて、いかに支援を円滑に進めていくかを考えていく立場だったため、その場から動くことが出来ないということもあった。

7) ニーズを満たすために必要な支援

まずは希望を吸い上げて、どう対処したらいいのかを聴き取る。施設を利用していた人や

入所施設にいる人からは、すぐに対応できて窓口もはっきりしている。しかし、サービスを利用して来なかった人や地域で生活している人については、相談支援事業のような窓口がしっかり聴き取りを行い、ニーズを把握して、どういうサービスがあるか紹介していくとか、つなげていくという役割が大事である。しかし、相談窓口の職員が少ないため相談を受け切れていない。そのため、職員を増やしたり、他の市や町との連携が必要となる。

作成者(大学名・氏名)	文京学院大学 小野綾子
分類	インタビュー
プログラム名	ソーシャルワーカーへのインタビュー
日時・場所	平成25年8月23日(金)郡山市医療介護病院
講師・インタビュー対象者	福島県社会福祉士会 事務局 和田由紀子さん

福島県社会福祉士会の事務局である和田由紀子さんにインタビューをさせていただいた。

和田さんは特別養護老人ホームで、相談員等を経験し、現在は一般社団法人の福島県社会福祉士会と福島県介護支援専門員協会の合同事務所で事務局として活動されている。震災後には、社会福祉士と介護支援専門員の両方の専門性を活かし、支援物資の"交通整理"等の役割を担われていた。

震災直後、和田さんは医療職の必要性・重要性を感じたそうだ。福祉職としての様々なケアは一段落してからと思い、初めはただ、事務所を頼りにしてくる人がいた時のために、待機されていた。寒さと静けさの中に救急車の音が響き度重なる余震にも恐怖を感じたという。「福島県社会福祉士会の事務局」ということで安否確認は行いたかったが、福祉の現場で働く会員の方を思うと、忙しく、混乱しているなかで電話による確認を行うべきではないと判断され、新聞で会員の名前がないか確認を行っていたとのことであった。

数日後からは全国の社会福祉士会の仲間と連絡を取り合い、物資の調達や配分を行っていた。その際、県内の社会福祉士会の方々に何が必要か電話で連絡し、すぐにそれを他県の仲間へ伝えたり、自らが近隣のお店に探しに行ったりと、なるべく翌日には必要とされている人々のもとへ物資を届けていた。また、避難所にも自ら足を運び、避難しているお年寄りの方等にも「何かお困りのことはありますか?」「何か必要なものはありますか?」と声を掛けていた。しかし東北の方特有の性格があるように、「私よりも困っている人がいるから」と援助を受けることを遠慮される方ばかりであった。このことから和田さんは自分の支援方法を見直し、物資の調達の際は自分で見たり感じたりしてニーズをつかみ、また声を掛ける際には「自分には~ができますけど」と相手への伝え方を工夫されていた。

もうひとつ、援助をするにあたり「支援者のための支援」もされていたそうだ。例えば高齢者入所施設の職員であれば、自分よりもまず利用者の方へ、と自分のことを後回しにしがちであり、バーンアウトしてしまう可能性も大いにあったと思う。しかし支援者も利用者の方と同じように被災者であり援助を受ける権利や必要性があるはずである。そのことに社会福祉士の視点を持っていたからこそ、気付くことができ、そこに目を向けて支援をすることができたのだと思う。それは支援物資に限らなかったと和田さんは言う。事務所へ直接足を運ぶ人はほとんどいなかったが、電話がたくさん入った。それは援助者からの相談で、震災以前にも関わりがあったか否かにかかわらず同じ福祉職や援助者として話をするだけでお互いに気持ちが楽になったそうだ。

様々な支援を通して和田さんは「人とのつながり」を感じたそうだ。まずはじめに「何が必要?」と声をかけてくれた他県の仲間とのつながりが大切であること。また人と人とを通じて北海道から沖縄まで日本全国から物資が調達されていたという。そして県内の仲間とのつながりとしてはやはり社会全体が混乱している中で、様々な不安を抱えつつも支援を続けなければならなかった立場として、互いの存在が互いの支えとなり、その関係は今も続いているそうだ。そして今、和田さんが震災を経験したソーシャルワーカーの方々と「自分は~ができなかった」ではなく「自分は~ができた」と、震災当時のことを振り返ることにしている。それは約2年半が経った今だからこそ自分自身が気持ちを整理することができて、後悔の念ばかりにならないよう、互いに認め、受け止めることができるのである。それは簡単なことでも、すぐにできることでもないが、自分自身のためにも今後に活かすためにも必要なことであると教えていただいた。

お話を伺って感じたことは、震災などで混乱しているなかにも、社会福祉士の専門性は活かされているということである。和田さんを含め多くの人が感じるように「医療職」の必要性は必ずある。しかしこれも和田さんに教えていただいたことであるが、「福祉職」の必要性も実は震災直後からあるのだとわかった。その一つとして、目に見えないニーズを汲み取る力がある。さらには、共感する力や受け止める力など、社会福祉士の専門性が必要とされていることがわかった。だからこのことを私はもっと多くの人に伝えたい、と感じるとともに「自分たちは何もしていない」という高齢者の方々と同様にとても謙虚な姿勢の「支援者」の方にも実際にはかなりの活躍をされていたのだ、と伝わってほしいと感じた。





作成者	関西福祉科学大学 齊藤由季
分類	座学
プログラム名	反省会グループ討議
日時・場所	平成 25 年 8 月 24 日 (土) 9:00~12:00 安積総合学習センター

グループ討議では、各大学が学んだ内容の発表と個人の感想を各自発表した。



関西福祉科学大学の意見である。1つ目は、震災直後は短時間で予測し、行動するということである。これは知的障害者の成年後見人をしていた方が、銀行やATMが使えなくなるかもしれないと予測し、そのクライアントの必要となる生活費をATMが止まる前に引き出したこともある。2つ目は、地域コミュニティーやネットワークの顔の見

える関係づくりの大切さである。事前にこれらのシステム作りをすることで、災害時にこれらが崩壊しても、顔見知りの関係であればその人脈や機関との繋がりを活かして、支援に繋げることができたことである。そのため、専門職は日頃から地域の繋がりや、ネットワーク、専門機関、ボランティア等の社会資源と関係を持ち、自分との繋がりを広くする必要があるということである。3つ目は、制度につなげていく仕事である。高齢者や障害者の中には自分で意志表示ができない人がいる。その人達に対して、制度の使用について弁護士に相談することを提案し、相談するときに弁護士に対してクライアントの障害特性に対する言葉の使い方や意志を代わりに代弁する等の仲介役になることである。4つ目は、住む場所の問題である。宮城県では津波の被害が大きかった場所に住み続けると決めた時、その土地をかさ上げすることで家を建てることができる。しかし福島県では、原発の影響で故郷に帰れるかが明確になっていないため、その地に住めるようになったら帰るか、県内の原発の影響のない所に住むか、県外に移住するかを決められない人が多い。そのため、今後の生活をどうするかを考えてもらい、自己決定してもらった事に対してSWが尊重し、前に一歩一歩進めることができるような後押しが必要等の意見があった。

次は文京学院大学である。1つ目は使える制度を一部改正するように働きかけ、他の市から 避難してきた人が制度を利用できるようにした。2つ目は、老健の職員も被災者であり、職員 は利用者を支援することが仕事であるが、自分の家庭があるため家族と避難したい人はその意 志を尊重するようにした。3つ目はSWの武器は「話す力」である。福島の人は自分の困って いることより、他人の困っていることを優先する傾向があるため、その武器や道具(例:お茶 会)を使うことでニーズを引き出すことや役割を見つけ出すことができた。4つ目はボランティア団体を一本化することで、福島県の公的な団体として活動してもらうことができた。5つ 目は遺体安置所に派遣されて仕事をしている方から精神的な相談を受けたが、SWとしてあるべき姿を伝えてしまい、その人の話を聞くことができなかった。6つ目は今のニーズは明日の命を左右することがあるため、ビッグパレット方式を使用し、できるだけ早くニーズを満たすことができるようにした等の意見があった。

次は淑徳大学である。1つ目は、原発の影響で避難する人のために、原発から遠い場所の避難所の確保である。2つ目は、支援者が行動しやすい環境づくりをしたこと。3つ目は、震災という状況下で支援者も被災者であるため相談援助ができなかった。相談援助を行うときは先を見据えた支援を行う必要があるが、震災の影響で先が見えないため、目の前のことに精一杯になっている状況である。4つ目は、障害者、健常者、住んでいる地域によりニーズが異なる。身体障害者では、バリアフリーのある生活ができないという不満がある。精神障害者の中には、一人でいるより集団の中にいたいという思いがある。しかし健常者は自分の事だけで精一杯であるため、避難所で障害者との生活がストレスになるというニーズがあった。他にも、住む地域では福島県内でも場所により気候が違い、原発により避難した方が環境の変化に順応できず、生活ができないため、地元に戻りたいという相談を受けていた。5つ目は、個人情報の開示問題である。特に薬を服用している人について、薬成分や分量などを教えてもらうことができない等があがった。

個人の感想の発表では、被災地視察の感想や今の被災地の現状、インタビューで学んだ事、 被災した方が笑顔で自分の経験を話しておられたこと等をふまえ、今後の課題や個人の感想や 考えや意気込み等を語った。

関西学院大学の池埜先生からは、「痛みは元来言葉にならないものである。それを言葉にすることは大きなストレスとなるが、それを言葉に出すということはとても素晴らしいことである。そこで涙が出たり体が震えたり言葉が出ないことは共感しているからであり、伝える言葉を考えたりすることはSWの第一歩である。被災者の人の大半は、元は自立していた人である。被災することにより被災者というレッテルを貼られることを望んでいるかどうかである。再生や支援をするときに、これまで生きてきた人生や誇りを尊重することが大切である。」という言葉をいただいた。

グループ討議を踏まえ、職種により、支援内容が異なること、SWは話すことが武器であり、コミュニケーションをとるきっかけとなる道具を使ってニーズを引き出していくことを学んだ。そのためには、専門職としてのコミュニケーション技術やフォーマル、インフォーマルな社会資源を活用できるように知識を広げる必要があると感じた。

作成者(大学名・氏名)	淑徳大学 岡田彩香
分類	座学
プログラム名	グループ討議
日時・場所	8月24日(土) 9:00~12:00 安積総合学習センター

1.2 日間のインタビューを通して感じた「ソーシャルワーカーとして出来たこと・出来なかったこと」「被災者のニーズは何か」という二つの問いについて各大学で意見をまとめて発表する。

1) 淑徳大学

ソーシャルワーカーとしては何も出来なかった。しかし、生活用品や食料がある程度はあったので、それを元に何かしらの支援をすることが出来た。震災当時、ライフラインがいくつか生きていたのでメールや電話を使い情報交換をすることが出来た。また、情報を上手く使うことで、早い段階から原発から遠い地区や県外などに避難所を確保するということが出来た。他にも、支援者が動きやすいような環境を作ることも出来た。しかし、先が見えず目の前のことに取り掛かることが精一杯であり、支援者も被災者であるといった状況から、相談援助の仕事を十分に行うことが出来なかった。

被災者のニーズについては、気候の変化などにより住んでいる地域によって違っており、健 常者と障がい者の間でも違いがある。また、被災者は正しい情報の開示を求めている。

2) 文京学院大学

ソーシャルワーカーとして出来たことは、前からある制度を上手く使っていけるように働きかけたこと。職員も一人の人間として見るというように、一人一人を個別化して見ること。目には見えない「話す力」を武器に被災者と接し、それは被災者のニーズを理解することにも繋がったということ。原発などの影響により人権がないような状態になったことから、人としての当り前の権利を整えていくこと。また、ボランティアの団体や支援物資などが沢山来たが、混乱してしまった。そこで、団体を少しずつ一本化していった。

遺体安置所で家族の遺体を見つけることが出来た遺族は笑っていて、家族の遺体を見つけることが出来なかった遺族は泣いていた。その状況を見て「感情は逆ではないか」「自分がおかしくなりそう」と語っていた職員に対して、適切な言葉をかけてあげることが出来なかった。被災者から、なかなかニーズを引き出すことが出来ないという難しさがある。そのため、話す技術などの「見えない道具」を上手に使って、被災者のニーズを引き出していく必要がある。

3) 関西福祉科学大学

ソーシャルワーカーとして出来たことは、ATM が止まる前に利用者などの生活費を必要な分だけを予想して引き出すなど、短時間で予測しながら動いたこと。普段から地域のコミュニティやネットワーク作りをしていて、震災でシステムが崩壊しても「顔の見える関係」が整っていたので、その人脈を通して支援に繋ぐ働きかけが出来た。また、ボランティアの団体や行政とも「顔の見える関係作り」を行うことが出来た。

スクールソーシャルワーカーは教育の中には関与することが出来ないので、何かあれば先生 方にお願いをすることしか出来ず、自分で支援することが出来なかった。

震災によって、支援物資を貰うのが当たり前だと思っている子どもが増えているため、

ソーシャルワーカーが当たり前ではないということを教えていく必要がある。また、障がい者 や高齢者は意志表示が曖昧なので、制度の利用を説明する時は弁護士と本人との仲介役をソー シャルワーカーが担い、分かりやすく伝えるということも必要である。このように、制度を利 用した継続的な支援をしていくことが大切である。

2. この5日間のプロジェクトを通して、 感じたことや考えたことを一人ずつ話す。 メモはとらず、心でみんなの思いを聴き、 受け止めること。

3. 池埜先生のお話

痛みは元来、言葉にはならないものである。よって、痛みを言葉で表現することは、とても難しいことである。今回のこのプロジェクトで感じた感情や共感



したことを、これから言葉でどうやって伝えていけばいいのかを、自分自身で見つけていくことが大切である。それと同時に、自分をケアしていくことも必要である。被災地と地元の違いにギャップを感じて戸惑ったら、それを自分の中で処理しようとせずに誰かに話をすること。それでも何か思うことがあったら、ノートにその思いを書いていくこと。それが「気付き」を伸ばすことにも繋がっていく。

今回のプロジェクトでインタビューしたソーシャルワーカーは、支援者であると同時に被災者である。そのことを踏まえて、今回のインタビューを振り返った時に、「被災者として語っているのか」「ソーシャルワーカーとして語っているのか」に注目しながら、その方はどう折り合いをつけているのか。また、被災しているからこそ見つけた、その方にとってのソーシャルワーカーのあり方や価値などを読み取っていくこと。自己決定をすることが出来ない人のために、「現在」をどのようにして生きていくかということについて支援していく、新しいソーシャルワーカーのあり方を見つけていくことが重要となっている。

作成者(大学名・氏名)	文京学院大学 木村恵理
分類	座学
プログラム名	グループ討議
日時・場所	平成 25 年 8 月 24 日 (土) 9:00~12:00 安積総合学習センター
講師・インタビュー対象者	関西福祉科学大学 池埜先生

5日間に及ぶ第4次派遣のソーシャルワーカーの声プロジェクトのまとめの場として、最終日にグループ討議が行われた。インタビューを通してわかったことや、震災時にソーシャルワーカーとしてできたこと、できなかったことなどを、各大学が話し合い発表した。

私たちは、ソーシャルワーカーとしてできたこととして、インタビューなどから次のことを 考えた。まず、ソーシャルワーカーは医者や看護師などのように目に見える道具を持っていな い。そのため、目に見えない道具を使っていく。その道具の一つに「言葉」がある。福島の地 域特性から避難されている被災者の中でも支援者が何か支援しようとしても、自分よりももっ と大変な人がいるからと言い、遠慮する人がいることがわかった。そのため、直接「なにか必 要なものはあるか」などのことを聞くのではなく、その方の表情などをみて感じとっていく、 また、話す内容が直接ニーズと結びついていなくても、このような話をされる背景には何かあ るのではないかと読みとることもソーシャルワーカーだからできたことなのではないかと感 じた。また、インタビュー中に、社会福祉協議会の事務長の和田さんが話していたエピソード の中で、ビックパレットに避難されている被災者を支援する中で「なにか、困っていることは ありますか」などのアプローチをするのではなく、身近な物を使い、「よかったらお茶を飲ん でいきませんか」などと話しかけて、その方と関わりその方の話を聞いていくというアプロー チをしていたということを聞いた。その中で、その方が以前喫茶店を営んでいたということを 知り、避難所内のお茶飲み場のなかでお茶を提供するという役割をしていただいたということ を知った。ソーシャルワーカーは、こちらがなにか支援するばかりではなく、その方がその方 らしく生活できる場所を提供し、その方の力を引き出すということも大切だということを学ん

また、逆に震災時は、環境が整わず活用できる制度もなかったため、ソーシャルワーカーだからこそという点では何もできなかったということを話されていた。この時、最低限の生活もできない状況ではまず人として考え、明日に命をつなぐためにどうするかを考えることが大切であるということを学んだ。

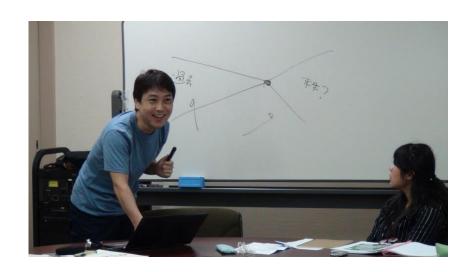
そして、今をどう生きるかということが大切な状況のなかでニーズとしては、すぐに使える制度などを整えることが大切だということがわかった。例えば、ビッグパレット方式のような申請してその日のうちに使うことができる制度など、震災時においてこれまで使っていたものが使えなくなった場合、その状況に合わせて創っていくことも大切であることを学んだ。

また、このグループ討議の中では関西福祉科学大学と淑徳大学の発表からも様々なことを学 んだ。 まず、関西福祉科学大学の話の中で、地域コミュニティを作り日頃から関係を築くことが大切である事を学んだ。また、その時の状況をみて今後を短時間で予測することも大切であり、例えば震災により ATM が使えなくなってしまうかもしれず、しかし今後お金が必要になるのではないかと考えて短時間でお金を引き出すことも大切であるということも知った。

そして、淑徳大学の話では、住んでいる地域によってニーズが違うということがわかった。 福島は会津、中通り、浜通りと三つの地域があり、それぞれで地域特性が異なり、その地域ご とにニーズはどのようなものがあるのかなどを考えていかなくてはならないことがわかった。

最後に池埜先生から総評としてお話を伺った。

福島という被災地を考えたとき、今後を支えるのではなく、今という生活を支えていかなくてはならないということがわかった。また、今回福島を訪問して自分自身が感じたこともあるが、そのなかで福島の人が今も大変な中にいるから自分も福島から戻った時に規則正しく生活しようと思うのではなく、自分のできるところから行っていくことも大切であるということを教えていただいた。



第4次派遣チーム学生メンバー

■(関西福祉科学大学 4年 植田美悠)

他県と異なる被害の福島県の現状に様々な思いが巡りました。見通しが見えない被災者の未来に寄り添うソーシャルワーカーの姿をもっと多くの人に知ってもらいたいと改めて思いました。



■(関西福祉科学大学 2年 斉藤由季)

このプロジェクトで、「人として何ができるのか」という言葉がありましたが、それが「SWとして何ができるのか」へと、一歩前進してつなげていきたいと思います。今回の体験で自分も被災したにもかかわらず、被災者の支援を行う人の底力、SWとしてのプライドや誇りを感じました。

今後も勉学に励み、SWとしての専門性を高めていこうと思います。



■(関西福祉科学大学 2年 福井弥生)

私は、被災地では一体何が現在必要とされているのか?という疑問をもち参加しました。また、このプロジェクトに参加してから被災地へ向ける視線が変わりました。これからもっと専門性などを勉強していき、被災地やそれ以外で私たちができる事は何のかを考えて行きたいと思っています。



■(関西福祉科学大学 2年 中上裕菜)

今回初めて声プロジェクトに参加させていただき、テレビなどを通してでは知ることのできない被災地の現状を知ることが出来ました。震災時、ソーシャルワーカーがどのような活動を行っていたのかを直接インタビューさせていただき、大変よい経験をさせていただくことが出来ました。これからこの活動を通して自分自身も成長できればと思います。



■(淑徳大学 2年 岡田彩香)

声プロジェクトを通して、初めて被災地を訪れました。だいぶ復興が進んでいるといっても見えない傷が沢山あるように感じました。そんな中、現地の人々の「頑張ろう」という気持ちが伝わってきて、私たちにはどんな支援が出来るのだろうと考えることが大切なんだと思いました。



■(淑徳大学 2年 友利仁美)

初めて声プロジェクトに参加して戸惑った部分もあるが、 支援者であり被災者でもある SW さんの思いや、今なお復興 に向けて歩み続けている人達の思いを少しでも感じることが 出来たかなと思います。今回のことを通して自分にできるこ とを探していきたいと思いました。また社会福祉士資格が取 れるよう努力していこうと思います。



■(淑徳大学 2年 新保江吏万)

今回のプロジェクトで支援者も同時に被災者であり、ワーカーもジレンマを抱えながら支援をしているということを知りました。そして、もっとソーシャルワーカーの存在を知ってほしいと感じました。これからは福祉に携わる者として深く学び、多くの人へこのソーシャルワーカーの声を伝えていきたいと思います。



■(淑徳大学 2年 森菜摘)

今回のプロジェクトを通して繋がり、ネットワークの大切さなどを改めて知ることができました。また、被災者の方と直接お話したことによって被災者の本音を聴くことができました。被災から2年経ったなか、これから私たちはどのように寄り添い、支援していくのかが課題になっているのかと思いました。



■(文京学院大学 4年 小野 綾子)

被災地に足を運ぶのは今回が3度目であった。そのたびに思うのは「遅すぎることはない」ということ。「もう1年経ったから」「もうすぐ3年経つから」と初めは思っていたが復興はまだまだ不十分で、特に福島の場合はまだ"始まっていない"ことも分かった。震災のことが風化してしまわないよう伝え、知り、自分にできることを探していきたいと感じた。



■ (文京学院大学 4年 木村 恵理)

自分たちが普段生活している中では、震災の記憶が段々と 風化しているように感じられる。しかし、被災地、福島では 未だ原発という被害から震災の記憶というものは色濃く残っ ている。そのような状況を今回見た私たちには出来ることは 限られるが、震災の記憶を風化させないために、周りに伝え ていかなくてはならないと感じた。



プロジェクト(第4次福島)を通じた学生の学び

関西福祉科学大学 斉藤 千鶴

今夏の日本列島を襲った猛暑が続く、夏真っ盛りの8月20日、本プロジェクトの任務を背負った大阪チームは、東北へ飛ぶことで、少しでも暑さが和らいでいてくれたら、という淡い期待を胸に福島に向かった。

しかし、若い学生たちは、暑さなんかおかまいなしで、未知の経験を前に、元気で意欲的な姿に私の目には映った。出発前の事前学習では、兵庫県神戸市のソーシャルワーカーへのインタビュー時から、学生の成長ぶりは早くもうかがえた。それに先立つ、大学で行ったインタビューのロールプレイ学習では、4年生の先輩を前に、ややつまづきながらのインタビュー学習であった。しかし、その失敗を糧に、神戸のソーシャルワーカーへの事前学習では、質問も途切れず、なかなか良い感触でインタビューの予行演習を終えることができた。

いよいよ福島に足を踏み入れると、事前の短期学習で十分に準備ができただろうか、という こちらの心配をよそに、各学生は機敏に動いていた。到着日の午後のオリエンテーションに始 まり、夜には現地の社会福祉士会の方の話を聞き終えると、いよいよ明日の被災地視察を前に、 各自が本プロジェクトの始動に、さまざまな思いで気持ちの高ぶりを感じていたはずである。

翌日の「激甚被災地訪問」では、震災から2年5ヶ月の月日が経っているにもかかわらず、瓦礫の撤去が終わらず、今なお復興が手つかずのまち、津波で何もかも流され、生々しさの残る荒地、これらを目にした学生たちは、一様に震災の大きさと自然の驚異に言葉を失っていたようだ。

原発事故で立ち入り禁止区域近くの富岡町を視察したときは、震災直後の時間が止まったままの惨状に、恐らく頭では理解しようとしているのだけれど、身体では十分にこの事態を受け止めるのが難しかったはずである。

「こんなことが起きていいはずがない!」と身体が反発するような激甚被災地視察の体験は、翌日から行った本プロジェクトのメインプログラムである、ソーシャルワーカーへのインタビュー時に、被災地の方々が受けた被害を少しでも共感しながら質問することができる助けになったと思われる。

インタビューそのものは練習の成果もあって順調に運んだが、ソーシャルワーカーの口から語られる言葉は、一つひとつが重いものであった。はっきりとした口調で被災後の行動を語られる一方、思うように支援ができなかったという苦悩の中から絞り出すように答えておられる場面もあった。

2日にわたる2人のソーシャルワーカーの方々へのインタビューから、学生は何を学び取ったであろうか。災害時にソーシャルワーカーは何ができるのか、という問いを抱えて福島に来たが、インタビューからは、ワーカーとしての働きが「語り」の随所に表現されていたのではないだろうか。

そのことは、プロジェクトの最終日、意見交換やグループ討議の場面で、学生がうまくまと

めて報告をしていた。実際のインタビュー時には、「災害時のソーシャルワーカーの役割は、何であると思われますか?」と問う学生に対して、ワーカーの方は「被災直後は、ワーカーとしては何もできなかった」、と苦悩した様子で胸中を語っておられた。しかし、その後のさまざまな場面での動きを語られるにつけ、支援活動のベースに、ソーシャルワーカーとしての専門性に裏打ちされた視点や判断が随所にあったのではないかということが強く印象づけられた。

また、一方では、プロジェクトに参加した学生が皆、順調に活動を終えることができたわけではない。事前に活動の趣旨に賛同してプロジェクトに参加した学生だが、活動の全容には到底想像が及ばないまま、プログラムに身を預けたわけである。参加してみると、激甚被災地視察を通して、現地の惨状は想像以上のものだった。また、インタビューを通して、被災者やソーシャルワーカーの方々が置かれている厳しい状況と苦悩に触れ、心を揺さぶられた学生も多いはずである。

20 年前後の人生経験しかもたない学生にとっては、被災地の人々が受けたあまりにも不条理な事態を、充分に受けとめることができなかったはずである。しかし、学生たちはこうした状況の中で、必死にソーシャルワーカーの一言ひとことを聞きもらさずひろうことに努めた。プロジェクト最終日のグループ討議の中では、学生が体当たりで受けとめてきた様子がひしひしと伝わってきた。

福島から帰阪すると、早速学生は、プロジェクトの報告書作成にとりかかった。まだ被災地訪問から日が浅い今は、とにかくプロジェクトで得たものを記録として残すことに精一杯である。しかし、4泊5日の激甚被災地訪問の旅は、各学生が全身で体験できた「学び」そのものであることは間違いない。

普段の学生が置かれた環境を考えると、学校では座学中心にならざるを得ない。しかし、こうしたプロジェクトは、「学び」に必要な要素を丸ごと提供してくれる。本プロジェクトによる「学び」の体験は、「学ぶ」おもしろさと楽しさを教えてくれる。

しかし、本プロジェクトの一番の収穫は、何といっても「かっこいいやん!ソーシャルワーカーって!」、「私もなりたいわ!あんなソーシャルワーカーに!」という、学生の口からこぼれる一言ひとことであったのではないだろうか。

福島県の現状と課題

淑徳大学 山口 光治

はじめに

第4次派遣は、8月20日(火)から24日(土)の間、福島県郡山市を拠点にソーシャルワーカーの声プロジェクトのフィールドワークを実施した。本プロジェクトは、これまでに宮城県と岩手県にて実施してきたが、福島県において取り組むのは初めてとなる。この5日間のなかでは、一般社団法人福島県社会福祉士会長の島野光正氏の講演、地域で実践している2名のソーシャルワーカーへのインタビュー調査、被災地を訪問し住民の方々からお話を伺うことなどを実施した。このように限られた期間に得られた情報ではあるが、それをもとに福島県における発災後の現状と課題について述べてみたい。

東北3県の被災状況の違い

被災した東北 3 県(岩手県、宮城県、福島県)では、地震による被害とその地震によって発生した津波による被害(主として沿岸部)が共通し、特に、人的被害や建物被害は圧倒的に宮城県で多く発生している。参考:平成 25 年 8 月 9 日付警察庁緊急災害警備本部発表の広報資料によると、宮城県:死者 9,537 人・行方不明者 1,299 人・全壊 82,889 戸・半壊 155,099 戸、岩手県:死者 4,673 人・行方不明者 1,145 人・全壊 18,370 戸・半壊 6,558 戸、福島県:死者 1,606 人・行方不明者 208 人・全壊 21,190 戸・半壊 73,022 戸となっている。

しかし、福島県においては、それに加えて東京電力福島第一原子力発電所(以下、「福島第一原発」という)の放射能漏れ事故が発生したために、平成 25 年 8 月 12 日現在の避難者数は 91,998 人となり、宮城県の 97,715 人に次いで多くなっている(平成 25 年 8 月 22 日付復興庁資料より)。また、その内、居住していた県以外に避難している人は、福島県 52,277 人、宮城県 7,538 人、岩手県 1,540 人となり、圧倒的に福島県民による県外避難が多いことも、原発事故の深刻な影響といえる。

発災後の福島県内の避難の状況

2011年3月11日の地震発生後、沿岸部への津波の被害、そして原発事故の被害により、福島県内の避難状況は、主に次のような傾向であったことをインタビュー調査より把握することができた。

福島県は南から北へつらなる阿武隈高地と奥羽山脈によって、福島市や郡山市など中部の「中通り」、西部の「会津」、太平洋沿岸の「浜通り」の3つの地方に分けられ、気候や文化が異なるといわれている。福島第一原発は、浜通りの中央付近、双葉郡大熊町・双葉町に立地している。原発事故後、大きく避難の流れが二つの傾向にあったという。一つは福島第一原発より北側や北西側に居住する人々が、郡山市や二本松市、福島市などの中通りへ避難している。そして、さらに会津や県外に二次避難した方もいる。もう一つは原発の南側に居住する人々が、それまで暮らしていた地域と同様の、太平洋に面した浜通りのいわき市などへ避難している。そのいわき市も発災当初はライフラインが停止していた。

原発周辺地域から避難した人々は、まず、一次避難所へ移動し、その後、応急仮設住宅、借

り上げ住宅などへ移り生活している。また、県内避難から、さらに県外へ避難している住民も多い。特に、放射能の影響を心配し、小さな子どもを抱える家族などの県外避難が多い傾向にあるという。このような避難により、発災前と発災後の家族の形が変わってきていることも指摘されている。

避難先での生活

福島第一原発の影響により避難した人々は、いつ終息するかも見通しを持てないまま、避難 先の自治体での生活を送っている。双葉町は、避難町民の集団移住先をいわき市や郡山市、南 相馬市などに整備する町外拠点(仮の町)構想を復興計画に盛り込み、町民の生活再建、町の 再興の見通しを立てている。移住先であるいわき市の人口は約33万人であるが、原発地域か ら避難してきた方が2万4千人程度いるという。

この「仮の町構想」とは、双葉町に限らず、福島第一原発周辺の放射線量が高く、その土地で生活できない住民に、また元に戻れるまで他の市町村へ集団移転してもらう構想であり、もともと住んでいた自治体の行政サービスも共に移転させるものである。国は 2012 年から、放射線量によって避難指示区域を「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」「帰還困難区域」の3つに分けているが、「帰還困難区域」にあたる自治体を中心に仮の町構想が計画されている。この構想にある、移住する前の自治体が移住後も行政サービスを提供することは、移住先の自治体との役割分担や調整を必要とする。例えば、住民税などの納税はどちらの自治体にするのか、保健サービスや福祉サービス、あるいは教育行政はどうなるのかなど調整が必要となる。さらに、移住してきた人々とその移住地の住民との間での、日常生活を送るうえでの摩擦も生じているという。避難してきた人々が、将来的なことを考えて、どこを居住地としていくのか、コミュニティをどう創造していくか、課題は大きいといえる。

障がい者福祉領域の支援

今回のインタビュー調査でお聞きした障がい領域のソーシャルワーカーの話から、障がい者福祉のあり方が、浜通りと中通りでは異なることを伺った。詳細な比較検討を行ったものではないが、浜通りの原発周辺地域は東京電力の補助金により、障がい者福祉はサービスがパッケージ化された施設が多く、しかも立派な施設が多いという。そのような施設福祉サービスを中心に利用していた障がい者の方々が中通りに避難してきて、今まで受けたことのないサービス、つまり、関係機関・団体とのネットワークを作り避難所や在宅で必要なサービスを調整していくケアマネジメントによる支援を受けることになったという。中通りはケアマネジメントによる障がい者支援が充実しているので、それを利用しながら暮らしていこうと考えている避難者も多いという。しかし、それらによって支援を充実させていっても、利用者はこれまで生活してきた土地への望郷の念を持ち続けているので、そのことを忘れずに支援していくことが大切であるとのことであった。故郷があるのに故郷を離れざるを得ない人々の想いを汲み取り、寄り添う支援が、今、求められている。

災害時のソーシャルワークの役割

文京学院大学 鳥羽 美香

今回「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト in 福島」に参加させて頂いた。今回はプロジェクト全体では第4派遣であるが、私自身は昨年の第2派遣の宮城県に続き2回目の参加となった。

東日本大震災から2年半が経っているが今回の福島では、津波被害に加え原発事故により、 まだ先の見えない生活を強いられている現地の被災者の方々の様子を少しでも知ることが出 来、貴重な経験であった。

今回文京学院大学がインタビューさせて頂いたのは、楢葉ときわ苑の施設長渡辺幸雄氏と、 福島県社会福祉士会事務局和田由紀子氏であった。

インタビューに同席させて頂いた中で印象に残ったエピソードを紹介しながら、災害時におけるソーシャルワークの役割について若干の考察を試みたい。

楢葉ときわ苑では、2011年3月12日に双葉郡楢葉町から避難指示が出て、88名のお年寄りと37名の職員がいわき市内の小学校へ避難した時から、床に段ボールと毛布を敷き、足の踏み場もない状況の中でお年寄りの世話をしていたという。職員も被災者・被害者であり、また、家族の安否もわからない状況の中、お年寄りのお世話をしていた。支給される食糧も限られた極限状態の中、「何もない中で、専門職といっても力を発揮出来ない」と渡辺施設長は感じたという。

介護職、ソーシャルワーカー、看護職、そういった職種を超えて助け合いながらお年寄りを守っていったという。渡辺施設長は、極限状態の中では、専門職の力というよりは人間力、応用力というものが試された、と語られた。避難所生活をしながら常に先々のことを考え、次の行動に移していった。2次避難先の確保、交渉。その時には、お年寄りは77名、職員に関しては一緒に行く職員を募り、他の職員は自宅待機をしてもらったという。その後いわき市内の他の老健施設に間借りをして一部事業再開。常に利用者の利益優先、アドボカシーを心掛け、「声なき声を代弁」していったと振り返られた。

社会福祉施設等災害復旧費補助金の対象となり、2013年3月に仮設老健としていわき市内に 楢葉ときわ苑を再開することが出来た。

渡辺施設長がおっしゃっていたのは、「ただ黙って行政の施策を待っていて復興できるのだろうか?」「一人一人が社会資源となりソーシャルアクションを展開していくことが地域の復興につながる」という言葉であり、これはまさにソーシャルワークであると思う。

いわき市内の施設はあくまで「仮設」であり、双葉郡に戻りたいというお年寄りの希望の灯を消してはならない、また双葉郡の住民のストレングスを信じてそれを支援すると語られた。 利用者の個別化、アドボカシー、ソーシャルアクション、ストレングス等、これらはソーシャルワーク実践の真髄であり、災害時に限定されるものではないが、極限状態で実践されたことに大きな意味があると思う。 もう一人のインタビューは、福島県社会福祉士会の事務局の和田さんであった。

和田さんは、事務局として、施設や事業所で物資不足の中、必要なものを必要な場所へ届ける調整を中心に活動されていた。

また、県の社会福祉士会と介護支援専門員協会の会長が中心となって県内の職能団体が集まり、福島県相談支援専門職チームを4月の初旬に立ち上げ、4月半ばには県の委託が決まって、全県内に活動が広がっていった。

和田さんをはじめ支援者が避難所や事業所を回って情報を集めそれを支援に活かす。ネットワークが作られていった。福島県社会福祉士会はそのコーディネート役であった。

和田さんは「それぞれバラバラに動いていると、ひとりの人に『何か手伝うことがありますか?』と1日に8回も同じ質問を別々の支援者がすることになる。それでは利用者支援にはならない」と語る。和田さんの活動は「一言でいえば交通整理をしていた」と振り返られた。これは施設ではない「事務局」だから出来たことである、と語られた。

また、日頃から培った専門職を始めとする人間関係が役にたったという。ビッグパレットふくしまにも和田さんの案内で行くことが出来た。ここは福島県内最大の避難所だった場所で、一時期は2500名が避難していたという。そこで相談支援チームはまず避難所のどこでどのようなニーズが発生しているのかを把握し、ニーズを支援につなげる活動を行ったという。多くの人がいまだ仮設住宅に住み、その先が見えない状況の中で、「震災は終わっていない」という思いが強いという。

ソーシャルワーカーは、医師や看護師のように「目にみえやすい」支援方法を持たない為、その重要性が一般に周知し難いという側面もある。今回お二人の貴重な実践をお聞きし、改めて災害・緊急時におけるソーシャルワークの重要性が理解出来たと思う。

アドボカシーやソーシャルアクション、ネットワーク等、日ごろの実践の積み重ねが災害時に 活かされたということを改めて知ることが出来た。

特にソーシャルアクションやネットワーク等は、緊急時に実践しようと思ってもその基盤形成がなされていないと難しいと思われる。和田さんがおっしゃっていたように日頃の実践、積み重ねた人間関係がものをいうのである。また、福島県社会福祉士会がコーディネート役となって、調整が出来たことも大きな成果であったと思われる。

さらに、渡辺施設長が老健施設再建を成し遂げたように、その推進力は、諦めずに信念を持ち続け、それを実践に移す実践者の強い思いであったこと思われる。

災害時にソーシャルワーカーがこれだけの活躍をしたという事実は学生にとっても、また私自 身にとっても非常に感銘深いものであった。

この貴重なソーシャルワーカーの声を語り継いで次世代に伝えていくことがこの場に立ち会 えた我々の使命(ミッション)なのだと思う。

第4次派遣報告集 あとがき

やっと、福島県に行くことができました。

これまで、学生・教員のチームを宮城県・岩手県に派遣し、東日本大震災による被害の凄まじさを目の当たりにし、そこで支援活動を行うソーシャルワーカーの活躍と苦悩を知り、学生だけではなく、教員にとっても大きな学びとなりました。阪神淡路大震災当時、神戸市職員として災害支援の実際を一定体験した私にとっても、津波被害と地震被害の違いは想像以上でした。

ましてや我が国ではかつて例をみない原子力発電所による放射能汚染事故は、私たちが想像することさえ許されない状況にあった(ある)のではないでしょうか。「福島には宮城・岩手とは全く違う福祉ニーズがある」、「福島の震災は過去の話ではなく、現在進行形である」といったことは抽象的には理解できても、その中で社会福祉専門職に何ができるかを具体的にイメージすることはできませんでした。

本プロジェクト関係者は、「福島抜きに今回の震災を語ることはできない」との思いを共通 して持っていましたが、「現在進行形」の被災地に私たちが入り、ワーカーの方々にお手を煩 わすことに躊躇いがありました。

それでも、時間が止まっているかのような原発周辺地域を歩き、これはソーシャルワーカーの "卵たち" に見せ、「私たちに何ができるのか」を考えさせなければならないと感じました。 その想いを福島県社会福祉士会にお伝えしたところ、本プロジェクトへの協力を快くお引き受けいただき、強風吹き荒れる冬の郡山も暖かく感じたことを思い出します。

実際のフィールドワークでは、6名のソーシャルワーカーの方々が真摯に、そして力強くお話いただき、学生たちは大きな刺激を受け帰ってきました。最終日には、涙ながらに「ソーシャルワーカーの"想い"を伝えていきたい」と語る学生の姿を見るにつけ、学生の言葉を借りれば「衝撃的で生涯忘れられない数日間」であったことでしょう。

今回で4回目になる本プロジェクトを振り返ると、「過酷な状況で展開された実践」が持つ力をまざまざと見せつけられたということです。そこで積み重ねられた実践は、「臨床の知」として、やがて日本のどこかで起きるであろう大規模災害において生かされなければならないと思います。その「臨床の知」は、これから福祉現場で専門職としてのキャリアを積み重ねていく"卵たち"に伝えていかなければなりません。災害支援において、ソーシャルワーカーは中核的な役割を発生直後から担っていることを多くの人々に知っていただく必要もあります。私たちはそのミッションを果たすため、小さい歩みながらも少しずつ前に進みたいと考えています。

本プロジェクトにご協力いただいた福島県社会福祉士会の皆様方、インタビューに応じていただいたワーカーの皆様に、改めて深い感謝を申しあげあとがきとさせていただきます。

福祉系大学経営者協議会復興支援委員長(関西福祉科学大学) 遠藤 洋二

1 1

参加メンバー一覧

11.参加メンバー一覧

ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト 第4次派遣 メンバー

	大学名	学年	氏 名	備考
	関西福祉科学大学	教員	遠藤 洋二	復興支援委員長
		教員	松宮 満	
		教員	斉藤 千鶴	
		4年	植田 美悠	
		2年	齊藤 由季	
		2年	中上 裕菜	
		2年	福井 弥生	
	淑徳大学	教員	山口 光治	
益		職員	金澤 好隆	
		2年	友利 仁美	
哩		2年	岡田 彩香	
		2年	新保 江吏万	
		2年	森 菜摘	
	文京学院大学	教員	鳥羽 美香	
		教員	茂井 万里絵	
		教員	中島 修	
		職員	加藤 弘美	
		4年	木村 恵理	
		4年	小野 綾子	

ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト 第5次派遣 メンバー

	大学名	学年	氏 名	備考
	関西福祉科学大学	教員	遠藤 洋二	復興支援委員長
		教員	松宮 満	
		教員	家髙 将明	
		教員	成清 敦子	
		4年	篠原 拓弥	
戼		3年	新城 悠	
		2年	松村 志織	
#		2年	土山 寛子	
	日本福祉大学	教員	野尻 紀恵	
		3年	大塚 日菜子	
		3年	鬼頭 真子	
		3年	中島 佐江子	
		3年	長尾 由香	
	中部学院大学	教員	大藪 元康	
		3年	大西 伶実	
		3年	小坂 彩奈	
福島		3年	野村 有美香	
		3年	山村 恵里	
	淑徳大学	教員	米村 美奈	
		2年	塚本 健太	
		2年	三村 千花	
		1年	岩下 仁	
		1年	鹿島 悠希	
	日本社会事業大学	教員	菱沼 幹男	
		3年	佐藤 茉奈	
		2年	名取 咲子	
		2年	小倉 歩美	
		2年	森 文香	

意見交換会(岩手・宮城・福島) メンバー

	大学名		氏 名	備考
関西	関西福祉科学大学		遠藤 洋二	復興支援委員長
(コ-	(コーディネーター)		松宮 満	
	関西福祉科学大学	教員	家髙 将明	
		学生	白鳥 実葉	
ДE		学生	寺田茉莉子	
#	淑徳大学	教員	伊藤 千尋	
		学生	大木 達也	
	岩手県社会福祉士会	事務局	菅原 隆浩	
	関西福祉科学大学	教員	成清 敦子	
		学生	篠原 拓弥	
		学生	黒住 香子	
卧		学生	植田 美悠	
挨	中部学院大学	教員	大薮 元康	
		学生	原 恵理菜	
		学生	古川 友子	
	宮城県社会福祉士会	事務局	高橋 達男	
	関西福祉科学大学	教員	斉藤 千鶴	
		学生	中上 裕菜	
		学生	福井 弥生	
益	文京学院大学	教員	鳥羽 美香	
哩		職員	加藤 弘美	
		学生	小野 綾子	
		学生	木村 恵理	
	福島県社会福祉士会	事務局	和田由紀子	

シンポジウム メンバー

大学名		区分	氏	名	備考
関西福祉科学大学 (全体コーディネーター)		教員	遠藤	洋二	復興支援委員長
	日本社会事業大学	教員	菱沼	幹男	
		卒業生	野澤	千明	
<u>#</u>	淑徳大学	教員	米村	美奈	
' '		学生	大藤	未来	
点	文京学院大学	教員	鳥羽	美香	
		学生	小野	綾子	
	宮城県社会福祉士会	事務局	高橋	達男	
	日本福祉大学	教員	原田	正樹	
		学生	上野	莉恵	
		学生	鈴木	秀明	
		学生	星野	真希	
		学生	竹倉	文恵	
名古屋	中部学院大学	教員	大薮	元康	
		学生	石川	智也	
		学生	小川	侑希	
		学生	廣野	美月	
		学生	古田	陽亮	
	関西福祉科学大学	学生	泉糸		
	岩手県社会福祉士会	相談役	佐々フ	卜裕彦	

外部評価委員

大学名	区分	氏 名	備考
同志社大学	委員長	上野谷加代子	
関西学院大学	委 員	池埜 聡	

福祉系大学経営者協議会 ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト 平成 25 年度事業報告書

平成 26 年 3 月 編集 関西福祉科学大学 〒582-0026 大阪府柏原市旭ヶ丘 3 丁目 11 番 1 号

TEL:072-978-0088(代) FAX:072-978-0377(代)